

徳島の剣道

特集：全国中学校剣道大会優勝
八段誕生

第24号



徳島県剣道連盟

ホームページができました！ご利用下さい！

徳島県剣道連盟 / TOP (HOT NEWS)

http://www.tokuspo.net/as/tokushimaken_kendo_renmei/

徳島県剣道連盟

[連盟紹介](#)

[スタッフ紹介](#)

[写真館](#)

[イベント](#)

[リンク](#)

[SHOWデートップ](#)

[トップページ](#)

[メール](#)

[大会結果・
ブログ](#)



HOT NEWS

2008/4/2

第1回剣道級位・初段審査会について

4月29日（火祝）実施の剣道昇級・昇段審査を受審希望者は4月15日（火）までに中部、南部、西部の責任者まで審査料を添えて申し込んで下さい。

審査申し込みは4月15日（火）で終了しました。

2008/3/31

第29回徳島県女子剣道大会並びに第25回全国家庭婦人剣道大会予選会

標記の大会要項を各支部長、各大学宛に発送しています。

参加希望者は各責任者を通じて剣道連盟事務局まで申し込んで下さい。

申し込み締め切りは4月22日（火）です。

copyright 徳島県剣道連盟 all rights reserved

表紙

題 字 堀 江 幸 夫
さし絵 村 嶋 恒 徳
写 真 久 保 隆 司

巻頭言

喜神を持つとう



徳島県剣道連盟会長 遠藤一美

今回の特集には、本県初の快挙となる

二度目の全国中学剣道大会団体女子の部優勝を成し遂げた那賀川中学校と、最難関の剣道八段審査に合格された近藤巨先生が取り上げられている。徳島県剣道連盟にとって、これほど喜ばしいことはない。

那賀川中学校が最初に全国優勝した際のメンバーには、本誌に特別寄稿していただいている内田さくらさん（旧姓・坪井）がおり、現在は結婚のため、静岡県在住であるが、先の世界選手権団体優勝メンバーであり、今回は全日本女子選手権大会で見事準優勝されている。その最初の全中優勝時の監督も斎浩市先生であった。徳島が誇る名監督である。

また、今回、近藤巨先生が剣道八段に昇段された訳であるが、徳島県剣道連盟としては、河田清実先生・米倉滋先生に続き、この四年間で三人の八段誕生となる。しかも、この三人は高校時代の同級生でもある。このこともまた、徳島が全国に誇れる快挙で

ある。

これらの先生方に共通して見られるのは、「喜神を自分の中を持つ」という生き方ではないかと拝察する。喜神（よるこびの神）とは、どのような状況にあってもいつも心の中に喜びの気持ちを持ち、誠心誠意をもって事にあたる姿勢である。この喜神を持つことでいつの間にか、上昇気流に乗り、高い所へ行かれていくように感じるのである。

徳島剣連の皆さんにおかれましても、これら先生方の（喜神を持つ）生き方を手本とし、大いに精進して参りましょう!!

『徳島の剣道第二十四号』目次

巻頭言……………遠藤 一美……………1

《特集 一 全国中学校剣道大会》

那賀川中学校剣道部女子の

全国中学校剣道大会優勝に寄せて……………福多 博史……………5

顕彰一覽……………6

第三十七回全国中学校剣道大会に優勝して……………齋 浩一……………8

一期一会……………岩原紗也香……………10

全中、山形を思う……………岩原 裕一……………12

山形全中に参加して……………岡内 拓未……………13

《特集 二 八段誕生》

剣道八段審査に合格して……………近藤 亘……………15

希望の星……………吉田 租……………17

祝 剣道八段昇段 近藤亘先生……………中尾 正輝……………19

近藤「無心」で剣道八段合格……………米倉 滋……………20

特別寄稿

第四十六回全日本女子剣道 選手権に出場して……………内田さくら……………21

徳島県高体連剣道専門部長に就任して……………小笠 泰史……………23

剣道有功賞

七十年をふりかえって……………高田 豊……………25

少年剣道教育奨励賞

少年剣道教育奨励賞を受賞して……………生田 浩章……………27

体育功労賞

体育功労者表彰を受けて……………高橋 憲司……………30

全日本剣道連盟講師認定

審判講師の指導講師に認定されて……………河田 清実……………32

平成十九年度徳島県中学校剣道優秀選手……………34

平成十九年度徳島県高等学校剣道優秀選手……………35

先生を偲ぶ

平岡竹雄先生を偲ぶ……………滝本 博文……………36

河野耀雄先生を偲ぶ……………木村 秀正……………38

河野耀雄先生を偲んで……………松永 貴史……………39

佐藤勇先生を偲ぶ……………菱田 晋……………41

出会 い……………元木 武……………43

馬場力先生ありがとう……………大澤 孝彰……………45

馬場先生を偲ぶ……………忠津 和憲……………47

右武館館長重井好高先生を偲んで……………加藤 泰男……………49

「謙・恕」の教えを宝に……………白木 修子……………51

全国講習会報告

第四十二回剣道中央講習会(西日本)……………高木 壽史……………52

居合道中央講習会に参加して……………吉岡 修一……………54

第四十五回中堅士講習会に参加して……………高木 壽史……………56

八段研修会に参加して……………近藤 亘……………58

平成十九年度全日本剣道連盟主催

徳島県剣道(剣道形・指導法)講習会記録 … 藤本 雅史 … 60

佐藤博信先生講習記録 … 手塚十三子 … 66

女子審判法研修会 … 手塚十三子 … 69

女子剣道審判講習会に参加して … 竹内佳代子 … 74

日本剣道形講習会に参加して … 大田紗耶加 … 76

徳島の剣道史

大聖中川古助先生 … 坂本 裕二 … 77

恩師 “山家雪斎” … 竹原実太郎 … 82

大会所感

平成十九年度男子五十三回女子四十一回

四国高等学校剣道選手権大会 … 本田 敦彦 … 84

みんなでつかんだ初優勝 … 岡田 直樹 … 89

大学連五周年を迎えて … 木原 資裕 … 90

各種大会に参加して

第二十九回全国スポーツ少年団

剣道交流大会に参加して … 猪野 和男 … 94

第五十五回全日本都道府県対抗

剣道優勝大会に出場して … 米倉 滋 … 97

第四十六回西日本勤労者剣道大会

久しぶりの快進撃 … 平野 誠司 … 98

第二十四回全国家庭婦人剣道大会に出場して … 平野 悦子 … 100

夢の全国大会 … 阿南工業高校 岡田 直樹 … 102

第十六回全国高校選抜大会に出場して

… 富岡東高校 横山依利加 … 103

第五十四回全国高等学校総合体育大会に出場して

… 文理高校 松本 明真 … 105

全国高等学校剣道大会に出場して

… 富岡東高校 中野 由貴 … 106

第三十七回全国中学校剣道大会に出場して

… 文理中学校 青木 大将 … 108

高専大会に出場して … 村田奈津季 … 110

第二回都道府県対抗少年優勝大会 … 本田 将大 … 112

第二回全日本都道府県対抗

少年剣道優勝大会に出場して … 松本 好史 … 113

全日本女子剣道選手権大会 … 吉岡 穰 … 114

第五十三回東西対抗剣道大会に出場して … 河田 清実 … 115

第五十三回全日本東西対抗

剣道大会に参加して … 近藤 亘 … 117

第六十二回国民体育大会剣道大会を終えて … 中尾 正輝 … 118

秋田国体 … 飯田 栄一 … 120

第四十二回全日本居合大会 … 高橋 憲司 … 121

夢の舞台 … 山名 信行 … 122

第五十回全日本実業団剣道大会に出場して … 呉羽 貴志 … 124

全国警察剣道大会を終えて … 山室 雅幹 … 125

平成十九年度徳島県高齢剣友会活動状況 … 笠井 勝 … 127

第十九回土佐生涯剣友会交流大会に参加して……………日野 利之……………130	高齡剣友会活動報告第二十九回……………三木 弘子……………132
--	----------------------------------

全日本高齡者武道大会に出場して……………松浦 政昭……………133	ねんりんピック茨城大会に参加して……………竹内佳代子……………135
-----------------------------------	------------------------------------

随 想

シベリア抑留記……………遠藤 一美……………137	ある一枚のスクラップから……………出葉 成一……………138
---------------------------	--------------------------------

剣道を楽しむ……………野間 義明……………141	まだまだ駆け出し……………中川 正……………146
--------------------------	---------------------------

剣道の魅力……………フィリップ・トゥリニイ……………147	恩師恵土幸吉先生、そして今……………桜井 一志……………149
-------------------------------	---------------------------------

称号・段位合格者

剣道七段に合格して……………佐賀 博史……………151	七段に合格して……………竹内佳代子……………154
-----------------------------	---------------------------

二刀での挑戦……………山名 信行……………155	六段に合格して……………林 洋行……………156
--------------------------	--------------------------

六段に合格して……………松田 久司……………158	称号・段位合格者一覧…………………………159
---------------------------	-------------------------

がんばろう徳島

部活だより

城ノ内中学校……………福田美知子……………163	穴吹中学校……………柴田 宗忠……………164
--------------------------	-------------------------

石井中学校……………白木 洋一……………167	富岡西高校……………小延 偉公……………169
-------------------------	-------------------------

協町高校……………藤川 正樹……………170	道場・教室だより…………………………172
------------------------	-----------------------

阿南少年剣道教室……………須藤 泰宏……………172	鴨島少年剣道教室……………三木 毅……………174
----------------------------	---------------------------

少年強化…………………………178	平成十九年度 大会記録…………………………185
-------------------	--------------------------

徳島新聞に見る戦いの跡…………………………210	平成二十年度 昇段審査学科試験問題・解答例……………230
--------------------------	-------------------------------

平成二十年度 徳島県剣道連盟行事予定表……………236	平成二十年度 審査実施計画表……………238
-----------------------------	------------------------

徳島県剣道連盟審査資格・審査料等……………239	編集後記…………………………239
--------------------------	-------------------

特集一 全国中学校剣道大会

那賀川中学校剣道部女子の 全国中学校剣道大会優勝に寄せて

中体連専門部長 福 多 博 史



第三十七回全国中学校剣道大会が山形県の酒田市を会場に、盛大に開催されました。その大会において那賀川中学校女子が団体戦において十五年ぶり二回目の優勝を見事成し遂げました。女子個人戦においても那賀川中学校の岡内選手が第三位という成績を残しました。これらの快挙は県内において共に汗を流し、中学生の剣道競技の発展に想いを寄せる一人としてたいへんうれしく感じます。

選手のみなさんをはじめ、斎先生、松葉先生そして保護者のみなさまに心からお慶びを申し上げます。また、中体連剣道専門部として今まで中学生の活動にご支援・ご指導を賜りました剣道連盟の先生方や関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

「夢求め！ 四国で輝く風となれ！」をスローガンに無事成功を収めた昨年度鳴門で行なわれた全国中学校剣道大会。早いもの

であれから一年が過ぎました。中学生の剣道技術のより一層の向上を目指しながらそれぞれの学校が切磋琢磨し、本大会においてすばらしい活躍を見せてくれました。那賀川中学校女子においては昨年度も団体戦ベスト十六と徳島県代表として立派な成績を残しました。

そして、今年度。先輩方の願いであり、昨年度全国大会を経験した選手たちの目標でもあった優勝という栄誉を勝ち取られました。日々の稽古や県外での合同錬成会などによる毎日の努力の賜物であったのではないのでしょうか。県内では圧倒的な強さを持ち、優勝候補として臨んだ全国大会ではプレッシャーもあったと思います。その中で実力をいかに発揮した監督の先生や選手のみなさんの強い精神力には頭が下がります。

今回の那賀川中学校女子の栄光は徳島県の中学校剣道において誇りであり、現在全国大会への出場を目指し、稽古に励んでいる中学生にとって大きな夢と目標になるものと感じています。今後那賀川中学校女子の活躍を刺激に県内の中学校の益々のレベルアップを目指し中体連剣道専門部として取り組んでいきたいと思えます。今後ともご指導・ご鞭撻の程よろしく願っています。

平成十九年度 顕彰一覽

第三十七回全国中学校剣道大会女子団体優勝

○那賀川中学校

監督 斎 浩一

岩原 紗也香

栗野 文那

西 柚衣

原 麻由香

岡内 拓未

市瀬 薫子

木村 奈々美

剣道八段 (全日本剣道連盟)

○近 藤 亘 (昭和三十年三月七日生れ)

平成十九年五月、京都市立体育館における昇段審査会において難関の剣道八段に合格する。受審者一三四〇名、合格者十六名、合格率一・二%であった。

剣道有功賞 (全日本剣道連盟)

○高 田 豊 (大正十四年二月二十一日生れ)

戦後、剣道解禁直後から徳島県警察剣道の選手として活躍した。昭和六十三年には徳島県剣道連盟の常任理事、平成三年には副会長、平成七年には相談役に就任し、現在に至っている。この間、徳島県剣道連盟の運営全般に情熱を傾注して、剣道連盟発展と剣道普及に多大な貢献があった。

少年剣道教育奨励賞 (全日本剣道連盟)

○徳島少年剣道教室

徳島の中心地、城の内にある県立中央武道館を活動場所として、昭和四十五年に設立された。設立当初より基本に忠実な剣道を徹底指導しており、卒業生が指導者となった今もその指導理念は継承されている。近年、指導陣も充実し、優秀な少年剣士の育成実績が上がっている。

○小松島少剣クラブ

昭和四十九年に設立され、礼儀正しく・正しい剣道を指導理念に現在に至る。クラブの伝統でもある少年・指導者・保護者の三位一体となった指導法により、成果が上がっている。中学・高校へ進学しても活躍している卒業生が多い。本年、全中大会で優勝

した那賀川中学にも本クラブ出身者が二名選手として出場している。

体育功労者表彰（徳島県体育協会）

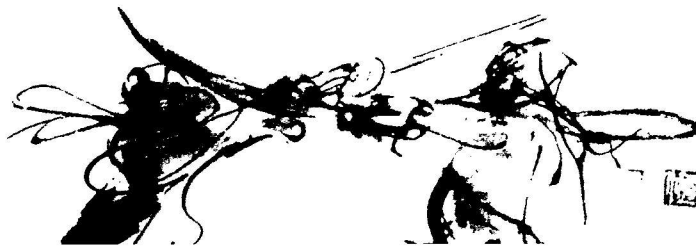
○高橋 憲 司（昭和十七年六月二十八日生れ）

昭和六十年より、徳島県剣道連盟の常任理事・居合道部理事・専門部部長として永きにわたり徳島県剣道連盟の発展に尽力している。昭和五十九年よりは自宅に洗心館道場を設立し、後進の居合道指導にあたりつつ、自ら居合道修練の実践を深めている。また、平成十四年から松茂町体育館、藍畑小学校体育館等でも後進の指導に当たっており、本県の居合道振興に尽力された功績は多大である。

全日本剣道連盟講師認定（全日本剣道連盟）

○河田 清 実（昭和二十九年六月二十五日生まれ）

平成十九年四月、各都道府県および各種剣道連盟が主催する講習会へ全日本剣道連盟が派遣する講師要員の認定を受ける。今回は全国で八名が認定されている。これまで、四回の認定がなされており、通算八十八名が講師要員となっている。徳島県では初めての認定者となる。



第三十七回全国中学校

剣道大会に優勝して

那賀川中学校剣道部監督 齋 浩 市

まず最初に、徳島県剣道連盟の諸先生方や阿南支部のみなさんをはじめ、少年剣道の先生方、学校剣道連盟や中体連の先生方、支えてくださった全ての方々にお礼申し上げます。お陰様で十五年ぶり二度目の全中優勝を果たすことができました。これまで出稽古や様々な機会を通じて、たくさんの方々にご指導いただきました。生徒とともに感謝申し上げます。

優勝した時まず、心に浮かんだのは「ありがたい」といった感謝の念でした。それと、十五年前優勝した年（平成四年）に生まれた子供達と一緒にまた、優勝できたことに不思議な縁（えにし）を感じました。前回の優勝はその前の年に準優勝していたこともあり、確かな手応えを感じて、狙って手にした優勝でした。若かったせいもあり、監督である私自身もずいぶん気負っていたように思います。今回は綿密な計画を立てての一年でしたが、試合当日はどちらかというと平常心に近い状態で臨みました。それは、自分自身のこの数年の心境の変化が原因ではないかと思っております。

二年前ふとしたことから甲状腺癌が見つかりました。検査の結果、のど全体に拡がっていて、気管も浸潤し、リンパ節にも転移

している状態だとわかり、甲状腺を全摘し気管も三節切ってつなぐという大きな手術になりました。幸い、主治医の適切な判断と手術のおかげで一命をとりとめ現在に至っております。ただ、現在も三ヶ月に一度の検査は欠かせませんし、右上半身はずっとしびれた状態で筋力もかなり落ちました。文字通り九死に一生を得たわけですが、この経験から「生きている」ことのありがたさと、「生かされている」ことの責任のようなものを漠然と考えるようになりました。

振り返ってみますと、以前は生徒に対して「稽古をつけてやっている」といったおごりが自分の中にあつたように思います。試合でも結果のみの評価で生徒をしっかりとつけることもあり、「できないこと」の原因が「教えきれていないこと」つまりは、監督自身にあることに気づいてなかったようにも反省しています。しかし、もう一度生きるチャンスをいただいた現在は、生徒と一緒に大声で笑い、悔しさの涙を流しながら生徒から「元氣」をもらって「生かされている」ことを実感しております。身体はとうに限界を超え毎日悲鳴を上げておりますが、生徒がいるお陰で忙しく飛び回り、まがりなりにも毎日面が付けられることに有り難さと喜びを感じております。以前剣道の雑誌の中で、伊藤元明先生が「剣道は、正中線上の攻防を通しての尋常の勝負であり、心・精神・靈性を求めていくなかで自らを生涯にわたり高め続けていく武道である。そして、人間とは死に向かって成長し、生を完結するものである。」と述べられていましたが、これからも自分の身

体や病気とうまくつき合いながら、元気に剣道を続けていきたいと考えております。

今回ベスト8以上に残ったチームのほとんどが、日頃から交流があり、互いに切磋琢磨してきた「交剣知愛」の仲間同士でした。一試合一試合がどちらかの引退試合になる状況の中で「勝利を盗まず堂々と試合をしよう」といった純粋な気持ちで試合できたことが、那賀川らしい剣道ができたことに繋がったのではないかと考えております。決勝戦は地元チームとの対戦であり、異様な雰囲気の中で試合でした。試合が終わって退場口で、応援をしていただいた白木先生や中山先生を握手を交わしたときも、まだ「優勝した」喜びは全く沸きませんでした。「試合が終わった」とだけが徐々に感じられ、同時に「もう二度とこのチームでは共に戦うことはないんだ」ということが、充実感と一抹の寂しさと一緒にぼんやりと感じられました。めったに生徒を褒めない私ですが、優勝が決まって控え室に引き上げたとき陣の中で心から生徒に「ありがとう」と声をかけました。優勝ももちろんうれしかったのですが、緊迫した状況の中で「自分の剣道」をやりきった生徒を誇らしく思う気持ちと、何よりもこんな監督を信じ、様々な苦しみ乗り越え、涙を流し反吐を吐きながらついてきてくれた生徒や物心両面で支えてくださった保護者に対する感謝の気持ちからの言葉であったように思えます。

最後になりますが、今回の優勝にあたりまして、たくさんの方々からお祝いの言葉等をいただきました。本当にありがとうございました。

おります。ただ、全中優勝は大きな目標の一つではありますが、決してゴールではありません。また、目的でもありません。「これから」こそが大切であり、生徒達も私自身も原点に戻り、コツコツと地道な精進を重ねていきたいと考えております。どうか今後ともご指導いただけますよう、心よりお願い申し上げます。どうか言葉に代えさせていただきたいと思っております。ありがとうございました。



一期一会

那賀川中学校三年 岩 原 紗也香



平成十九年八月二十日、私たちは山形で日本一になりました。

私は小学一年の時に徳島至誠館で剣道を始めました。小学生の時はまさか日本一になるなんて思ってもいませんでした。卒業するまでに、中山館長先生、副館長先生をはじめ、多くの先生方に基礎と礼儀を学びました。家族のみんなも、まだ小さい私のために熱心に支えてくれました。小学生の頃から、たくさんの人に支えられ、応援してもらっているんだと思いました。

中学校で剣道が続けようか悩んだ時期がありました。しかし、父も、母も、さらに私自身も剣道が大好きなので那賀川中学校に入学し、斎先生のもとで新しい仲間と剣道が続けることにしました。ですが私が入学してすぐに斎先生が病気にかかられました。私たちにはどうすることもできず、ただひたすら練習をして斎先生が帰ってくるのを待つだけでした。そして、また一緒に稽古できる日がきました。しかしその年は全国大会へ出場できませんでした。

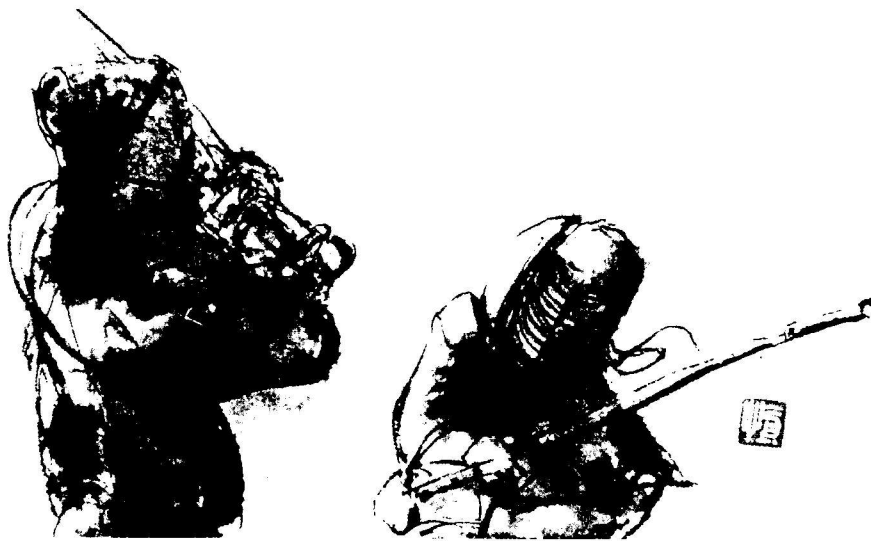
私が二年になると出場できる試合も増えてきました。それにつ

れて、ケガが多くなりました。父は毎晩、マッサージをしてくれました。母は毎日稽古がおわると遠い病院までつれていってくれました。市瀬先輩にもたくさん迷惑をかけました。でも嫌な顔をせずに私の悩みを聞いてくれ、一緒に考えてくれました。市瀬先輩は、私が一番尊敬できる先輩です。この年は全国ベスト十六でやぶれてしまい、先輩方が悔し涙を流しました。それから私がキャプテンになり、みんなをひっぱっていく立場になりました。

私が三年になると、意見のくいちがい喧嘩になることがふえてきました。チームワークを維持するのは、大変なことだと知りました。全国大会出場が決まり、しばらくすると私は剣道をするのが嫌になりました。自分でもどうして嫌になったのかわかりませんでした。先生、仲間、家族、たくさんの人に迷惑をかけました。山形へ出発する二、三週間ぐらい前から、まともに稽古をするようになりました。そして山形へ出発する日がやってきました。父は仕事で一緒に行けません。とても残念でしたが、その分まで頑張ろうと思いました。

山形の会場の雰囲気は、いつもの試合とあまりかわりませんでした。でも、いざ試合となると私も、みんなも緊張していつもの試合ができませんでした。予選リーグから決勝まで気の抜けない試合が続きました。いざ決勝戦。一本リードで私にまわってきました。いつものようにメンタルをきちんとし、楽しもうと思いがら試合に臨みました。試合終了の合図があった瞬間、なにがどうなったのかわからなくなり、ただ涙が出てくるだけでした。み

んな涙で顔をくしゃくしゃにしながら抱き合いました。閉会式が
終わり、母の顔を見た瞬間また涙が出てきました。父に一番に電
話をする、とても嬉しそうな声で「おめでとう」と言ってくれ
ました。今まで剣道をしてきた中で一番嬉しくて、一番涙を流し
て、一番思い出になった試合でした。もう二度とあの試合場で、
あのメンバーで試合をすることは無いと思います。これぞ「一期
一会」だと思います。私が日本一になれたのは、たくさんの方の
応援があったからだと思います。一人一人にお礼を言っていくと
きりがありませんが、私は感謝の気持ちでいっぱいです。いつま
でも感謝の気持ちを忘れてはいけないと思います。これからも、
たくさんの方に支えてもらいながら剣道を続けていくと思います。
一期一会の気持ちで、感謝の気持ちを忘れずに…。



全中、山形を思う

岩原裕一



平成十九年八月二十日午後、電話が鳴った。

「父さん、やったよ、優勝したー!」

泣きながらの娘の声に、私も胸に熱い物が込み上げて来るのを感じました。私は

仕事で山形へ行きませんでした。「閉会式が済むまで電話をして来るな。」と言っていましたから、式が終ってすぐの電話です。

娘・紗也香は平成四年生まれ、この年は、斎監督率いる、那賀川中学校女子剣道部が、全中で初優勝をした年です。この年に生まれ、小学一年生になり、何故か竹刀を手にして、「徳島至誠館」の門をたたき、中山啓男館長、中山繁輝副館長のもと、基本と技と粘り強さを学び、毎週木曜日には遠藤先生、河田先生を始め名だたる先生方との猛練習。そして那賀川中学校に入學しました。

この時の、剣道部の監督が、斎先生です。二年生になり、試合と稽古が厳しくなった時、紗也香は足を痛めてしまいました。家内は夕食を持って、練習が終れば病院に通い続けました。さらに、やさしい市瀬先輩に助けられて、やがて三年生になりました。キャプテン・大将と、大役を引継ぎ、徳島大会を制して、全中山形大会を決めた時から、プレッシャーを感じた様です。

私は、どうして良いかわかりませんでした。「ガンバレ紗也香!」の言葉しか言えませんでした。家内は影になり、日向になり、中学校の全試合に応援に行きました。本当によくやってくれたと思います。子供の心も少しは晴れたと思います。

そして山形大会、ビデオを見ました。決勝戦。対山形第三中学校、地元校との決勝戦でした。双方、一步も引かずの攻防戦、一本のリード、大きな声援出し合う技……やがて旗が上がり、試合終了、礼、歓喜の声、響きうごめき、泣声、肩を抱き合う親達、肩を振らす子供……今、ここに、指導者を信じ、仲間を信じ、チーム一丸となって結果を出した子供達があります。素晴らしい。御指導して下さいました斎先生、本当に有難うございました。徳島至誠館の先生方、本当に有難うございました。又、御声を掛けて下さった御父兄の方々、本当に有難うございました。そして、剣道を共にした仲間達、有難う。

最後になりましたが、これからも那賀川女子剣道部が末永く全国中学校剣道大会で御活躍されます事を確信して、御礼の言葉とさせて頂きます。皆様、本当に有難うございました。……「至誠通天」

山形全中に参加して（個人三位に入賞して）

那賀川中学校二年 岡 内 拓 未

昨年八月、私は山形県酒田市で開催された第三十七回全国中学校剣道大会に参加させていただきました。

平成十八年に徳島で全中が開催されました。その時私は先鋒で出場しましたが負けてしまい、チームも決勝トーナメントに残ったもののトーナメント一回戦で負けてしまいました。私は全中という大きな大会に圧倒され、それまで練習してきた成果の半分も出しきれませんでした。くやしい想いをした徳島全中が終わり新チームとなりました。そして山形全中を目指して必死で練習してきました。

二年生になり後輩ができ部内がいちだと明るくなりました。前より男子と一緒に練習する機会も多くなり部内全体のチームワークがよくなった気がします。そして総体の時期がきました。みんなで頑張ってきた成果が実り、市、県、四国総体で優勝することが出来ました。そしてついに全中がやってきました。先生や父兄の方が早めに連れて行ってくださったため下見することが出来ました。そして何よりレギュラー以外の部員で山形まで一緒に来てくれた人もいました。私にとってそれはとても心強かったです。一日目の開会式の後、個人戦が始まりました。一回戦目、九州大会個人三位の選手とあたりました。とても長い試合になりました。

たが、なんとか勝ちを決めることができ、緊張もだんだんほぐれ体が動くようになり、二回戦、三回戦とコマを進めることができました。そしてベスト8に残ることができました。

二日目は団体戦でした。私は副将で出場していました。前の三人が勝ってきてくれた試合が多く、私は自分のペースで試合ができました。全員で一つになり試合をしていけたという感じでした。

そして大会最終日。まず個人戦でした。大会三日目ということ体がだいぶ場の雰囲気になれてきていました。当日一回戦目はよく練成や試合をしたことのある選手でした。なかなか勝負がきまらず延長になりました。なんとか引き小手が一本になりましたが、とても危ない試合でした。次は準決勝で、初めて対戦する選手でした。自分のペースに持ちこむことができず、攻められる一方でした。延長戦にもちこむことができましたが、最後に面を決められました。改めて自分の気持ちの弱さを知りました。試合前に、先生に「もし負けても落ちこんでいるひまはない。団体があることをおぼえておきなさい。自分をコントロールすることが大切。」と言われていました。試合後、言われた事を思いだし涙をこらえました。この時はじめて自分をコントロールすることができました。

団体決勝トーナメントが始まりました。緊張していましたが、先生や先輩方が話しかけてくれ少しやわらげることができました。準決勝を勝ちあがり、ついに決勝です。相手は地元山形のチーム

です。試合前にみんなでメンタルをしました。一本リードでむかえた大将戦。つないできたものを大将が守ってくれました。大差の勝利よりすばらしい勝利だと思います。他のチームの人からも泣きながら「おめでとう」といってくれました。

そして三日間の大会が終わりました。私達が優勝するまで多くの人にお世話になりました。齋先生をはじめ、松葉先生、父兄の方、出稽古先の先生方、男子剣道部のみなさん。たくさんの人に支えられた私達は日本一という夢を叶えました。

私は今回の全中で「やればできる」ということと、感謝の気持ちをお忘れしないということを勉強できました。



特集二 八段誕生

剣道八段審査に合格して

近藤 亘

平成十九年五月に京都で行われました八段審査におきまして、十一回目の挑戦でやっと合格させて頂きました。

これもひとえに恩師（故）堀江幸夫先生（範士八段）をはじめ、これまでご指導頂きました先生方、そして、親身になってご支援下さった方々のお陰と感謝しております。

今回の審査は、前回までとは違い、立ち会いの時に集中することができて「無心の技」が出たように思います。そのため、一次審査、二次審査と立ち会いが終わった後、その内容を思い出そうとしてもほとんど思い出すことができませんでした。

私が八段に挑戦し始めたのは、平成十三年の五月からです。長年過ごした機動隊を出て、警察署に異動になり、警察署の勤務に慣れるのに懸命で、審査の日が近づいてきてもほとんど稽古もできない状況でした。また、八段審査に対する認識も欠けていたように思います。翌年再び異動となり、その年は、勤務の都合で受験できませんでした。

そうした中、平成十五年の十二月、誘われるまま京都の近畿高段者稽古会に参加しました。

ある八段の先生にお稽古をお願いすると、その先生の迫力に押されっぱなしで、気合い負けしないように必死で掛かっていくのですが、どうにも歯が立ちませんでした。

後でお話を伺うと、「懸かる稽古ができていない。」と一喝。

この時、恥ずかしながら自分の剣道に対する認識の甘さを痛感致しました。

その日以来、もう一度自分の剣道を見つめ直し、一歩ずつ目標に向かっていこうと決心した次第です。

まず、自分の欠点を自覚し、それを矯正していこうと考えました。

自分の欠点は、分かっているようで分かっていません。このような時に欠点を指摘して頂けるのは、本当に有り難いことだと思います。また、自分の映ったビデオを見るのも、客観的に自分の姿を見ることができて非常に参考になりました。

私は、警察で特練員（選手）を長く行ってきたせいか、勝負にこだわった剣道が身に付いているのでしょう。相手が動くとき直ぐに反応して動いてしまい、落ち着いた重厚な構えを必要とする審査にとって大きなマイナスでした。また、打たれたくないから「打とう、打とう」としてしまい、結局、溜めのない中途半端な打ちを出していました。

これら欠点を矯正するため、基本を重視した構え及び稽古に努

めました。特に左手、左足に重点を置き、溜めのある捨てきった打ちが出せるように、道場での稽古以外にも、歩行による左足の矯正、日本刀の素振りでの手の内の矯正等を行いました。

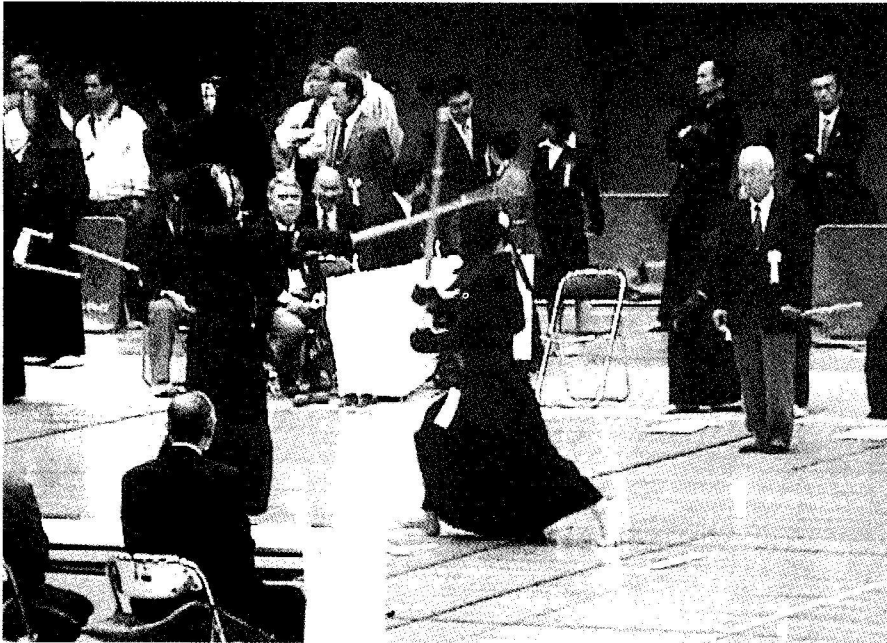
その結果、正しい構えでなければ正しい打ちが出ないと自覚しました。

また、県外に出稽古に出た折、ある八段の先生に稽古を頂き、その後のお話の中に「何を打つかより、いつ打つかを考えなさい。」という教えがありました。

「いつ打つかを考える」ということは、「打つ機会ができるまで打たない」ということであり、「打とう」とするより「攻める」ことが大切でないかと。「打つ」という結果よりも「攻める」という過程を重視することが、「相手の攻めに動じない心」を作るのに必要と自覚することができました。

今回、幸運にも八段審査に合格させて頂きましたが、未熟な自分を高めていくためには、「自分より上位の先生に懸かる」ことが大切と強く感じた次第です。私にとってこれからが本当の修行と心を新たにしております。

また、徳島の剣道発展のために、微力ではありますが貢献できればと考えていますので、今後ともご指導頂きますよう宜しくお願い申し上げます。



一次審査 小手すり上げ面決まる 筆者(左)

希望の星

吉田 租



近藤巨先生、剣道八段、昇段おめでと
うございます。心からお祝い申し上げます。

合格率一%前後の、日本で一番難しい
と云われる剣道八段審査の難関を突破し
て得た喜びは、天にも昇る喜びだったと存じます。

高校時代、県警特練時代に米倉先生と近藤先生は、「龍虎」
と言われて来ました。そのお二人が平成十七年、十九年と次々に
八段になりました。阿南工業高等学校にとっても県警機動隊に
とっても、こよなき喜びの事と思われます。今亡き清原栄先生、
堀江幸夫先生の喜びの様子が見えるようです。

十数年前近藤先生が故郷の驚敷中学校へ機動隊の若い剣道特練
生を引率し剣道の指導にいられたことがありました。その剣の美
しさ、動作のさわやかさに皆目を見張りました。また毎年四月の
山家旗剣道大会前夜祭の稽古、当日の朝稽古の真摯なお姿を見て
中学生は「希望の星」と言うようになりました。その希望の星が
八段となり喜ぶと共に、真面目、素直、努力、反省工夫のたゆま
ぬ積み重ねによっての事と改めて知り、その生き方を眩しく仰い
でいます。青少年に人生のよき無言の教えとなりました。

近藤先生の試合歴は、国民体育大会、都道府県剣道大会、全日
本東西対抗剣道大会、全国警察大会、その他大小の剣道大会に数
えきれない程出場し、名勝負をされています。中でも燦然と輝い
ているのが二つあります。一つは平成九年九月第四十三回全日本
東西対抗剣道大会で、名高き警視庁の西川清紀七段との試合に近
藤先生が面の二本勝し「優秀選手賞」を全日本剣道連盟会長名で
もらったこと、もう一つは昭和六十年全日本選手権大会に優勝戦
を戦ったこと、善戦したが惜しくも準優勝でしたがここ迄勝ち進
んだのは徳島県では近藤先生ただ一人です。小さい県が全国に万
丈の気を吐いた思いがしました。

希望の星はまたたき輝きました。

先生の長い選手生活の中で恩師堀江幸夫先生との師弟の交流は
横目に見る奥様でも涙ぐむ程でした。師は弟子を温かく包みつつ
厳しく鍛え、弟子は師を恋慕の情で従っていました。師は弟子の
今日あるを一日千秋の思いで待っていましたの……

近藤先生が警官時代、銃を持った殺人犯が山に逃げ込み、県警
機動隊が出動し、山を包囲しての大捕物がありました。その折、
近藤先生は銃を持った犯人を一人で逮捕しました。誰しもがその
豪胆さに舌を巻き、その胆力、笑顔でありながら犯人を射^いすめる
眼力、犯人との間の取り方、みな剣の極意、加えて人がなつく雰
囲気をと感心しました。剣道修練が对人的極意を無意識に出し逮
捕となったのでしょうか。

徳島県剣道連盟の役職を長年され、連盟になくはならぬ一人

となられています。現在は副理事長の要職で、また徳島県警剣道師範としてご活躍中の折に、八段となり輝きが一層増しました。健康に留意され、後輩を引き上げ、徳島県の剣道が尚一層向上させていただくようお願いして祝辞と致します。



祝 剣道八段昇段 近藤巨先生

中 尾 正 輝



近藤巨先生剣道八段ご昇段本当におめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

恩師である亡き堀江幸夫先生もさぞかしお慶びのことと思います。

ご昇段は、徳島県剣道連盟はもとより本県警察にとっても誠に喜ばしい限りであります。

さて、近藤先生は昭和四十八年四月徳島県警察官を拝命され、翌昭和四十九年四月から、本県警察剣道特別訓練生として、故堀江先生ご指導のもと日々激しい稽古に励まれ、現役中には非常に立派な戦歴を残されました。

私と近藤先生との出会いは、丁度この頃でした。それから三十三年間お互いに切磋琢磨してまいりました。

特練に入部してこられた頃は、ひ弱な青年警察官でした。しかし、人の何倍もの稽古に励む一方、早朝そして夜も一人で走り込みめきめきと実力を付けてきました。

とにかく「心が素直」で努力家、何事においても真っ向勝負の性格でした。

また、剣道だけでなく、文武両道警察官としてもよく勉強し、

警部昇任試験に合格され、警察大学校警部任用科を修了されました。平成十六年四月からは、私の後任として戦後第六代目の本県警察剣道師範として、県下警察官に対する術科指導、剣道特練生の指導等大変多忙な日々を過ごされているところです。

現役中特に印象に残るのは、昭和六十年全日本剣道選手権大会準優勝、監督として、平成十三年度全国警察剣道大会優勝（第三部）です。

時は移り、平成十九年九月二十四日徳島市内のホテルにおいて、警察支部主催の「剣道八段昇段祝賀会」が催されました。席上、全日本剣道連盟審議員剣道範士八段佐藤博信先生から、近藤先生に対して段位証書が伝達されました。

近藤先生はもちろん、奥様のお喜びはひとしおであったと思います。

今後、本県剣道界発展のため更なるご尽力をお願いするとともに、近藤先生の益々のご発展とご活躍をご祈念申し上げます次第であります。

近藤「無心」で剣道八段合格

米倉 滋

剣道八段、合格率僅か1%の難関を突破するには、「技倆円熟」だけではならず、七段取得後十年以上修行した四十六歳以上の「成熟」した剣士で、何より「剣道の奥義」つまり「心」に通暁しなければなりません。このことから審査は、打ったとか打たれたといった技術でなく、受験者の「心」の在り方、一生懸命に無心で審査に臨む姿が評価されるものではないでしょうか。

さて、平成十九年五月二日、京都市立体育館において行われた剣道八段審査に臨んだ近藤君、最も難しいと言われる実技二次審査の立ち合いは、見事なものでした。一人目は、相手の攻めに動じない、打突を見切り、居ついた所へ捨て身の面を打ち込む。二人目は、立ち上がり小手すり上げ面を打たれるも動揺せず、中盤面を打ち込み、その後、相手を引き出して面返し胴を決める。審査後、私が「立派な立ち合だった。」と話したところ、近藤君から「無心で臨んだため、審査の内容を覚えていない。」とのこと、剣道の修行を一生懸命積み重ね、自己の限界に挑戦していくうちに、審査で無心の境地にたどり着き、審査員はその「心」を評価されたのだと思いました。

剣道範士持田盛二先生は遺訓で、「私の剣道は五十を過ぎてから本当の修行に入った。心で剣道をしようとしたからである。」

と述べられました。近藤君も私も五十を過ぎたばかり、剣道の修行はこれからです。互いに切磋琢磨して修行に励み、徳島県剣道連盟発展のため尽くしたいと思います。



合格発表後 佐藤博信先生（中央）と握手する近藤恒君 右端は筆者

特別寄稿

第四十六回全日本女子剣道 選手権に出場して

静岡県代表

内田 さくら

(旧姓・坪井)

* 試合結果 *

一回戦	内田 コ	—	加藤 (秋田)
二回戦	内田 メメ	—	本多 (佐賀)
三回戦	内田 コメ	—	庄島 (東京)
準々決勝	内田 メコ	—	古室 (千葉)
準決勝	内田 ココ	—	坪田 (岡山)
決 勝	内田	—	村山 (埼玉)

今回は昨年の三位入賞に続き、準優勝という結果に、私自身が一番驚いております。昨年のことを振り返ると、世界選手権代表に選ばれていたこともあり、大学卒業以降、最も稽古を積んで臨んだ大会でした。今思うと三位入賞の結果にはそれを裏付けるものが確かにありました。

今年四月から本格的に学校で働くことになり、昨年より稽古量は確実に減っていました。しかし、その分、一回一回の稽古を

大事にしてきました。また県予選が終わった時点で全日本女子選手権十回出場という目標が達成されていましたし、昨年ほどの勝負に対するプレッシャーはありませんでした。一戦一戦悔いの残らないようにやるだけでした。そのうえ開会式で記念の胴をいただいた時、さらに楽な気持ちで試合に臨めました。以上のことから考えると、昨年よりも精神的にゆとりがある状態で試合ができました。それが今回の結果につながったと思います。それでも、準優勝というのはあくまで結果であり、まさか決勝の舞台に上られるとは夢にも思っていませんでした。

決勝戦は埼玉代表の村山選手でした。村山選手は筑波大学の先輩で私の尊敬する選手の一人です。その先輩と決勝戦で試合をさせてもらえることは、たいへん光栄でした。何も考えず、必死に試合をするだけしか頭にありませんでした。結果は負けてしまいましたが、十分間精一杯試合ができたことに満足しています。

そして昨年同様、「応援だけなら日本一!!」そう自負していました。会場から聞える拍手や声援はとても心強く、励みになりました。静岡県剣道連盟の先生方をはじめ、学校の先生方、生徒、そして地元の剣道仲間など、会場のどこを見渡しても私が知っている人の顔が見えました。大会後は、徳島の先生方をはじめ、先輩、後輩、友人など多くの関係者からお祝いのお言葉をいただきました。

静岡に来て三年が経ちました。静岡に来てよかったという気持ちはもちろんあります。しかし、徳島からたくさんのお祝いの

言葉をいただけたことに、故郷の温かさ、ありがたさを身に沁みて感じました。遠く離れた徳島から応援してくださり、本当にありがとうございます。これからも感謝する心を忘れず稽古に努め、剣道を通じて成長できるように精進していきたいです。

最後に昨年八月、那賀川中学校剣道部が二度目の全国優勝を果たしたというニュースを耳にしたとき、母校の後輩の活躍に、喜びでいっぱいでした。年に数回しか里帰りできないのですが、その少ない時間の中、何度か中学生と稽古をさせていただきました。そこで見た中学生の必死に稽古に取り組む姿に、私自身の中学時代を懐かしく感じてなりませんでした。泣きながら苦しい稽古に耐え、仲間と励ましあった日々は、最高の思い出のひとつです。那賀川中学校の全国での活躍は静岡県の生徒たちにも大変よい刺激となっています。

「あ的那賀川中学校は内田先生の母校なのですね！」
そう声をかけていただけることが、私の密かな自慢になっています。

今後も、郷土の後輩の活躍を期待し、遠く静岡から応援させていただきます。



徳島県高体連剣道専門部長に就任して

富岡東高校 校長 小笠 泰 史



「エイ」「ヤー」、掛け声と竹刀のはじけ合う音が響きわたり、何とも言えない緊張した空気の中に、凜としたさわやかさが漂っています。このような場面は、県下各地で剣道を愛する人たちに見られる光景ではないでしょうか。

最近、読んだ本ですが、「仏像には四つの徳目がある。『精進（しょうじん・こつこつと努力をすること）』『禪定（ぜんじょう・集中力を保つこと）』『正語（しょうご・正直であること）』『忍辱（にんにく・辱めに耐えること）』である。この四つの徳目を得られれば立派に生きていける」と著者（梅原猛・哲学者）は述べています。私は当然のように「剣道」とその内容を結びつけて考えさせられました。『こつこつと努力する・集中力を保つ』はそのまま剣道であり、『正直であること』も稽古の場面ではよく耳にすることです。

そう言えば、ここ数年来、『切れる』という言葉に代表されるように、児童虐待やいじめ等、弱者に対する暴力的行為が社会問題化しており、人としての思いやりや優しさが失われがちです。このような状況だからこそ、「心豊かな人づくり」がより求めら

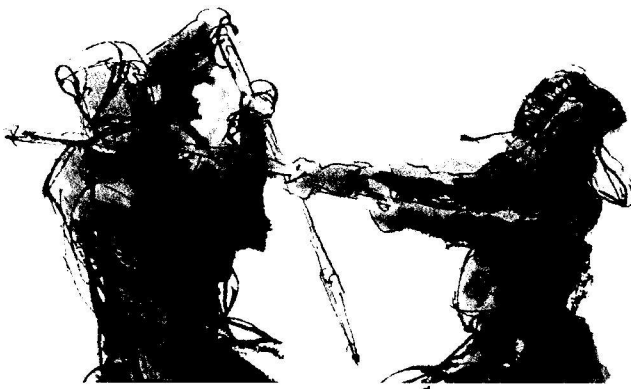
れています。「剣道の理念」にありますように、剣道は、礼節を尊び、信義を重んじ、誠を尽くして、常に自己の修養に努め、人間形成を目指すものであります。このことから、剣道を通して学びとるもの大切さ、果たす役割はますます重要になっております。

「剣道は技能・技術だけではない。人として必要な人間性を学ぶものである」ということは剣道人なら誰でも知っています。しかし、実際に役立つ知恵として実践できる人は少ないのではないのでしょうか。四つの徳目を含めた人間性を知恵として身に付けたいものです。

このような中で、本連盟では諸先生方が一致団結して、これまでに築いて来られた良き伝統を継承しておられます。特に稽古を手段と位置づけ、日々の鍛錬を通して、肉体を鍛えるだけでなく、相手を尊重し、思いやりの心を育てるなど、子どもから高齢者まで「人間力を高める文化」であると理解し、実践されている姿に敬意を表します。また、何よりも学校関係はいうまでもなく、あらゆる場所、あらゆる場面において協力し合い、お互いに切磋琢磨し、剣道の理念を実践し、活動されていることにも感動すら覚える次第です。私が出会った、剣道人は異口同音に「生涯にわたり、剣道に親しみたいし、現在も現役である」ということから、そのことが伺われます。今後とも剣道を愛し、今、述べたような「心」を共に持ち続けたいものです。

最後になりましたが、剣道に対する県民の関心と理解を一層深

めるとともに、剣道の普及・奨励に寄与する「徳島県剣道連盟」
のますますのご発展と連盟の皆様方のご健勝ご活躍を祈念して、
あいさつに代えさせていただきます。



剣道有功賞

七十年をふりかえって

高田 豊



私はこのたび平成十九年度剣道有功賞を拝受致しました。これはひとえに剣道連盟の諸先生をはじめ、剣友の皆様のご厚情によるものでありまして、ここに心からお礼を申し上げます。ふり返ってみますと竹刀を握ってはや七十年の歳月が過ぎていることに今更ながら驚いております。この受賞を機にその道程を整理してみましたところ、四期に大別出来ます。

・一期（昭和十二年～昭和十九年）

中学校（現在の北朝鮮の清津公立商業学校）に入学し、初めて竹刀を握り、以後軍隊に入営するまでの八年間みっちり稽古に励み、参段位を与えられました。

・二期（昭和二十七年～昭和三十二年）

終戦となり、一応本籍地の徳島の復員はしたものの、両親兄弟は外地に在り、生死不明の状況下で苦しい日々をしのぎ、昭和二十四年に県警察に奉職しました。昭和二十七年、県警剣道選手に

選ばれ、剣道再開となりました。昭和三十二年に五段位を与えられました。公務多忙となり次第に稽古から遠のくこととなりました。

・三期（昭和五十年～平成十五年）

昭和五十年三月、県警教養課長を拝命し、堀江先生と職場を同じくしたことが私の剣道の人生を大きく変えることとなりました。絶好のチャンスとばかり押しかけ弟子となり、旧武道館での稽古に参加させて頂き、本格的に剣道に取組んだのであります。昭和五十五年県警退職後も引き続きご指導を頂き、同年五月に六段位、昭和六十年に七段位を与えられ、最高に幸せな剣道人生でありました。その間県剣道連盟の役員を勤め、地元少年剣道教室の指導などにも励み、充実した日々を送らせて頂きました。ところが、平成十五年（七十八才）胃癌を患い、胃の全摘出手術を受け、以後約一年余の間、入院の繰り返しで一端は死を覚悟しました。

・四期（平成十七年～現在）

長期にわたる療養生活をようやく乗り切って稽古が再開出来たときの喜びは、筆舌につくし難い程でした。入院中ベットの中で夢中でイメージトレーニングしたことが再開後大いに役立つこととは思わぬ収穫でありました。心身共に不満足な条件下でも剣道を楽しむ幸せをかみしめながら現在も稽古に励んでおります。日々心身の衰えてゆくのを感じながらも、高齢者剣友会の諸先生方や剣友の皆様方のご芳情のもとに楽しい剣道にいそしめることが生涯剣道の姿だ／＼と実感しております。この受賞を機に更に気

持ちを改めて精進したいと決意をしております。どうか今後共よ
ろしくご指導ご鞭撻を賜りますようお願い致します。

合掌



少年剣道教育奨励賞

少年剣道教育奨励賞を受賞して

徳島少年剣道教室 生 田 浩 章

この度、徳島少年剣道教室が全日本剣道連盟より、「少年剣道教育奨励賞」を頂きましたことは、本当に名誉なことで、指導者、生徒、保護者、OB一同心よりお礼申し上げます。これもひとえに徳島県剣道連盟会長ならびに関係者各位のおかげと心より感謝申し上げます。

徳島少年剣道教室は、昭和四十四年ごろに徳島支部の有志が集まり始められたと聞いております。

(故) 稲木先生より私自身がこの教室の一期生だとよく聞かされました。そのころは、旧武道館が子供たちであふれるほどの活気があったと記憶しております。

私が指導するようになって今年で十年がたちました。この十年間でも年々子供たちの数が減少しております。いろいろ先生方から話を聞くと、団体(五人)が組めなくなっている道場、教室、クラブがあると聞いております。

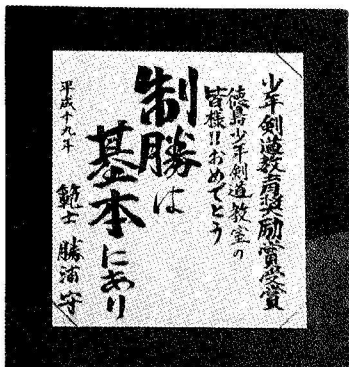
剣道の普及、将来の発展を図るためには、少年剣道の奨励、指導の充実が強く求められていると思います。「少年剣道教室奨励

賞」は、少年剣道の指導面で大会などの成績とは関係なく草の根的に目立たぬ活動を通じて剣道の底辺を支えている団体に対して表彰するものであるとされています。

そのような名誉ある賞に恥じないように、また、歴代の指導者の先生方に負けないよう、剣道の理念をより深く認識し、高い水準の剣道を目指すため、基本を中心とし、目先の勝負だけでなく、息長く続けられる剣道、生涯剣道を目指し、また将来において徳島県剣道連盟で活躍できる一人になってもらえるよう、全身全霊指導者全員でがんばりたいと思います。

師弟同行と言います。私自身もまだまだ修業の身であります。また、指導者としてもまだまだ未熟でありますので、これからもどうか、従来にまして、諸先生方の指導、ご鞭撻をいただければようお願ひ申し上げます。前任指導者の勝浦守範士よりありがたいお言葉を色紙に頂きました。その言葉に恥じないようこれからも精進してまいります。

最後になりましたが受賞にあたり推薦いただいた徳島県剣道連盟ならびに諸先生方に厚くお礼申し上げます。あいつつといたします。



少年剣道教育奨励賞を受賞して

小松島少剣クラブ 藤 川 和 秋



この度、小松島少剣クラブが全剣連から「少年剣道教育奨励賞」を受賞致しました。これまでの小松島少剣クラブの活動を全国的に評価して頂いたことに感謝するとともに、受賞に際しご支援頂いた

関係者の皆様に心から厚くお礼を申し上げます。

小松島少剣クラブは発足から平成二十年で三十四年を迎え、この間、先の代表指導者であった故掘金實先生が、生涯剣道を目指にあくまでも基本技術を中心に子供達を指導された二十二年間が、まさに今回の受賞につながったものと思います。その歴史と重みを最近特に痛感しているところがあります。先生が逝去されて平成二十年三月十六日で七回忌を迎えますが、この時期に受賞できたのは、先生との深い縁と導きがあったものと有り難く感じています。

今回の受賞に際し、小松島少剣クラブ三十四年の歴史とともに歩み、少剣を裏方から支えて頂いた小松島少剣クラブ後援会副会長、西山明廣氏は是非ご紹介したいと思えます。

西山副会長は昭和四十九年十二月一日に、現在の小松島少剣クラブの前身である小松島剣道愛好会が発足した時、自分の子供

(現在小松島中学校教員、西山伸二(錬士六段)を少剣の第一期生として入会させるとともに、後援会を結成し少剣クラブの諸行事に誠心誠意取り組んで頂いたほか、稽古日には必ず道場の片隅で、子供達の竹刀の点検や手入れを行い、子供達の事故防止に努めて頂きました。現在も続けてお世話を頂いており、小松島少剣クラブ三十四年の歴史とともに歩んでこられたその姿に、衷心より感謝と敬意を表する次第であります。今後ともお体にご留意され、お元気で少剣クラブの活動にご尽力頂きますようお願い申し上げます。

平成二十年一月七日に、小松島少剣クラブの出身者に声を掛け、子供達との合同稽古会を開催致しました。この趣旨の一つは、少剣クラブOBが古里の道場に帰り、少剣時代に自分が先生から指導を受けたように、今度は指導者として子供達を指導する機会を持たせるのが狙いです。すでに社会人となった少剣出身者の有松伸也(剣道四段)は、多忙な仕事の合い間に道場に足を運び子供達の指導に当たってくれています。これは故掘金實先生が、生前夢に描いていた事であり、後継者育成と次世代への剣道文化の伝承という大きな意義があるものと思っています。

そして、この合同稽古会のもう一つの趣旨は、少剣を卒業すると中学校では遠征等の試合中心の稽古となり、心身の発達する大事な時期に、十分な基本練習の機会がないことから、合同稽古会で基本練習の重要性をもう一度再認識してもらい、自分の剣道に生かしてほしいのです。合同稽古会は、そういう意味から、まず



クラブの立役者 西山明廣 副会長

切り返しを少剣、中学生を中心にしっかりと練習をした後、お互いの稽古を行いました。子供達が挫折をしながらでも剣道を続けていけるのは、基本をしっかり習得させることが大切な要件と思っています。今後機会あるごとに基本を中心とした合同稽古会を開催したいと思っています。

全国的にも少年剣道の在り方、指導法及び少年剣道の振興方策など、いろんな課題が山積していますが、この受賞を機会にその重要性や課題を再認識し、これからは少年剣士、後援会、そして指導者が三位一体となって、生涯剣道という大きな目標を持ち、一歩一歩少剣の指導運営に取り組んで行きたいと思っています。

剣友の皆様には、今後とも小松島少剣クラブへの温かいご支援とご協力をお願い申し上げ、少剣の活動状況のご報告を兼ね、受賞に際してのお礼とさせていただきます。



体育功勞賞

体育功勞者表彰を受けて

居合道部 高橋 憲 司

居合道との出会いは昭和四十五年のことです題名は忘れましたが、時代劇の映画の中で俳優の内田朝夫が演じる剣客が居合を使うのを観まして、「自分も居合をやってみたい」と思い立ちました。居合を教えてもらえる所を探していましたが、徳島錬心館で教えてもらえると聞いて訪ねて行き、大澤善一郎先生にお目にかかりました。後になって判ったのですが、大澤先生にお会いしたのはこの時が初めてではありませんでした。中学生の頃に竹原常雄先生が主宰されておられた親道館に剣道を習いに行っていたのですが、その折、竹原先生が「今日は山から先生が来るから」と言われ、来られていたのが大澤先生でした。厳しい稽古で当時怖かったことを憶えています。

教育者であった大澤先生は実生活と武道を両立させるのが大事であるとの信念から大和錬心館に続いて徳島錬心館を創設されて、門人に常にその関りを諭していました。未熟な私にも優しく時に厳しく接して下さい、それが私の居合道との関りの原点となりました。

大澤先生とお稽古させていただく内に、当時県下の第一人者でありました下村富夫先生にも教えを受ける機会を与えていただき、下村先生から「居合からも剣道連盟の役員に参加していただくが良い」と推薦してくださり、昭和六十年にその末席に加えていただくことになりました。以後、今日まで微力ではありますが、その責務を務めて参りました。

一方、居合のお稽古は大澤先生に教えていただきましたが、先生が昭和四十七年頃から体調を崩されて、下村先生にご指導をお願いしたのですが「今は公務に専念したいので教えられない」とのお返事でありました。大澤先生に相談申し上げると「英信流は高知が発祥の地であり、山本晴介という立派な先生が居るので行ってみてはどうか」と勧められて、宛名のない紹介状を書いて下さったのでした。

それを持って当時高知で稽古場になっていました城の内の致道館を訪ねました。山本先生は来ておられなかったのですが、そのお弟子の澤田友信先生が居られ、居合を教えていただけじゃないかとお伺いしますと「高知へ通って来るのであれば稽古をみてやってもよい」とのお返事でありました。それから居合道の技と業また心構え等を教えていただくことになりました。昭和五十年五月に大澤先生が亡くなられ、同年七月に澤田先生から門人になることを許されました。その後、先生が病を得て平成六年に亡くなられるまで野市町へお稽古に通うことになりました。現在は私のような者にも居合を教えてもらいたいとの方達がいて、共に稽古に勤

しんでおります。

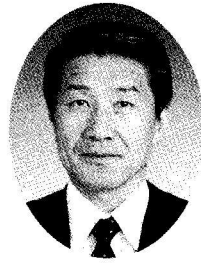
此度このように表彰をいただきましたのは、物故となられた代々の県剣道連盟役員の先生方また現役員の先生方のご教示・ご理解とご支援に加えて、居合道部員の方々のお力添えがあつての賜物と深く感謝申し上げますと共に厚くお礼申し上げます次第でございます。



全剣連講師認定

審判講師の指導講師に認定されて

教士八段 河田清実



平成十九年四月一日付けで、審判講師要員を養成するための指導講師として、私を含め八名が全剣連より第四次認定者として認定書を交付されました。これまでの認定者八十名とあわせ、全国で八十八名の方が認定されたこととなります。四国地区では、香川県の村上範士と私だけだそうです。

前年度の「徳島の剣道第二十三号」に研修会の内容を詳しく報告させていただきましたが、私は、年間二回（女子の研修会が始まるまでは三回）実施される研修会に、四回委嘱されて参加し、講師役・審判実技・筆記試験と二日間厳しく指導されました。五回目があるのではと心配しながら、四月の「剣窓」を心待ちにしておりました。十九年度の認定者の欄に自分の名前を見つけたときは、安堵感と喜びを感じると共に、その使命と責任の重さを強く自覚させられました。

認定を受けてから、講習会の講師として指導にあたったことは

ありませんが、昨年から、高校の大会の昼休み時に、短時間で審判員の研修会を実施していますが、その折りに審判長として参加し、指導助言をさせていただいております。また、審判員として七月に全国家庭婦人大会、八月に佐賀インターハイに審判副主任として参加し、担当の試合場の先生方を指導しながら、共に勉強させていただき、男子団体戦の決勝戦の主審を務めさせていただきました。また、十月に秋田で行われた国体に審判員として三年連続で委嘱され、福本専務理事、田原審判長、根岸審判主任の指導を受けながら、四日間必死で審判を務めました。特に四日間同じ組で審判した、埼玉県の山中先生、和歌山県の鈴木先生からアドバイスを頂き、大変勉強になりました。

審判は実際にやってみると、とても難しいことは皆様方も常に感じておられると思います。特に、大きな大会や決勝戦など緊迫した中での審判は、プレッシャーがかかり大変です。だからこそ、審判員は良い審判を見て学び、常に研修・実践を積み重ねなければなりません。

良い審判をするための要件はたくさんありますが、私が審判に立ったときに特に心がけていることは、①次回審判席に座しているときから審判を終えて帰ってくるまでの所作を正しく正確に行うこと。②意識を高め、大きな声で宣告すること。③主審がリーダーシップをとり、主審を中心にして二等辺三角形になる位置取りに三人が協調して素早く動くことです。特に③は三人の協調性が大変重要になります。そのためには、担当の審判を終えた後、

三人で確認をしたり、時には、主任の意見を聞いて指導を受けることも大切だと思います。そして、この位置取りこそが有効打突を判定するために最も重要なことだと思います。

「審判が良くなれば試合が良くなる、試合が良くなれば剣道が良くなる」とよく言われます。正しい剣道を継承させるために、稽古に励み、自ら審判技術の研鑽に努め、すばらしい審判が出来るように心がけたいと思っています。そして、指導講師として少しでも皆様方のお役に立てるよう努力したいと思っていますので、よろしく願います。



平成19年度 徳島県中学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名
1	白 木 恒二郎	石 井
2	青 木 大 将	文 理
3	松 本 好 史	文 理
4	田 中 宏 明	文 理
5	福 田 純 大	文 理
6	安 部 晃太郎	阿南一
7	土 井 翔 吾	阿南一
8	近 藤 祐 希	阿南一
9	上 田 義 弘	羽ノ浦
10	高 瀬 悟 志	鳴門一
11	福 居 壮 太	鳴門一
12	小 濱 紘 通	那賀川
13	上 野 恭 生	那賀川
14	田 中 湧 大	北 島
15	木 下 裕 貴	入 田
16	笠 井 栄 一	鴨島一
17	立 石 啓 悟	鴨島一
18	上 田 勇 輝	坂 野
19	東 川 宏 樹	徳 島
20	尾 花 佳 彦	阿 波
21	岡 田 恭 平	木 頭

No.	女 子	学 校 名
1	原 麻由香	那賀川
2	岩 原 紗也香	那賀川
3	栗 野 文 那	那賀川
4	市 瀬 薫 子	那賀川
5	木 村 奈々美	那賀川
6	品 川 里 穂	阿南一
7	井 上 愛 理	北井上
8	迎 美 榛	鴨島一
9	盛 嘉 恵	鴨島一
10	酒 卷 志 穂	阿 波
11	谷 脇 湧 水	城 西
12	中 山 美 紀	穴 吹
13	村 上 遥 香	穴 吹
14	藤 井 瑛 万	牟 岐
15	福 井 美 咲	木 頭
16	松 寄 智 佳	小松島
17	森 崎 祐 希	新 野
18	井 上 彩	相 生
19	福 崎 友 菜	坂 野

平成19年度 徳島県高等学校剣道優秀選手

No.	男 子	学 校 名
1	谷 口 真 央	阿南工業
2	岡 田 直 樹	阿南工業
3	小 松 祐 樹	阿南工業
4	久 米 洋 佑	阿南工業
5	谷 澤 勇	阿南工業
6	高 松 朋 輝	城 北
7	林 明 史	城 北
8	濱 航 介	城 北
9	山 本 敬 太	城 北
10	野 田 祥 希	川 島
11	滝 本 耕 造	川 島
12	鈴 木 達 也	川 島
13	峰 本 直 季	川 島
14	中 山 大 地	川 島
15	西 本 浩 章	徳島市立
16	松 本 明 真	徳島文理
17	久 保 宏 和	徳島文理
18	鎌 田 憲 資	徳島文理
19	西 田 義 玄	那 賀
20	元 木 龍 太	富 岡 西
21	那 佐 翔 太	富 岡 西

No.	女 子	学 校 名
1	宮 内 理 恵	城 北
2	鴻 野 賀 穂 里	川 島
3	新 居 春 菜	川 島
4	市 瀬 綾 香	富 岡 西
5	星 野 知 世	富 岡 西
6	奥 村 仁 視	富 岡 西
7	中 野 由 貴	富 岡 東
8	横 山 依 利 加	富 岡 東
9	河 井 優 里	富 岡 東
10	藤 井 玲 名	富 岡 東
11	三 木 み どり	富 岡 東
12	平 野 千 尋	鳴 門

先生を偲ぶ

平岡竹雄先生を偲ぶ

海部支部長 滝 本 博 文



「声が小さい／遊んでいる時のような大きな声が出せ／切り返しは大きく振りかぶって打て／遠い間合から走り込んで打ってはいかん／もの打ちで左右の面をしっかりと打て、そしてすり抜け、残心をしろ／打った後は休むな／」いつも剣道の指導には、大きな声で元氣いっばいでした。剣道教士七段、平岡先生の剣道姿が浮んで来ます。

先生は大正三年、阿南市桑野町にお生まれになりました。桑野小学校から旧制富岡中学校に入学され、すぐに剣道部に入られました。生まれて初めて竹刀を握り、連日稽古されたそうです。教師の指導、先輩達のアドバイスを受け、厳しく、苦しい稽古の中でだんだん上達され、剣道大会にも選手として出場されています。試合は勝もあったが、負の方が多かったそうです。負けてその内容を真剣に反省し、打たれて学ぶ剣道の姿勢を会得されたようです。

当時の中学校では有段者は四年、五年生が数人で、中学校で有段者になることは大変であり、平岡先生も懸命の努力をされ、有段者となられています。

中学校卒業後は向学心に燃え、大阪池田師範学校に進学されています。剣道も続けられ、さらに厳しい理合にあった稽古の連続であり、中学校の剣道と異なりほんとうに厳しかったそうです。剣道を真剣に学び、師範学校を卒業されました。同期は軍人に志願者も多かったそうですが、先生は迷わず教育者となられました。大阪池田師範学校附属小学校の教師として教壇に立たれ、その後、故郷徳島県で教師を勤められ、木岐小・出羽島小・日和佐小学校長を歴任されました。

退職後は日和佐スポーツ少年団の結成に先頭に立ち尽力されました。結成当時は小学生五年、六年を対象に、剣道部・野球部・卓球部からなり団員六十五名、指導者六名、活発に活動を始めました。昭和四十八年から五十一年まではスポーツ少年団の団長としてスポーツを通じ青少年の健全育成に尽力され、その功績は大きいものがあります。現在も日和佐スポーツ少年団は積極的に活動しており、先生は確固たる信念と情熱を常に持ち、いつも誠心誠意の指導にあたられ、児童・生徒の成長する姿に喜びを感じておられました。

剣道連盟海部支部長としても地域剣道の進展、剣道を通じて仲間づくり、住みよい郷土づくりに尽力されました。一般の剣道指導では「稽古の前後の礼はただお辞儀をすればいいと考えてはい



ありし日の平岡先生

けない。剣道においては真剣に練習する心、稽古をつけてもらう心が大切だ。」と常々言われておられました。また、先生は歴史に精通しておられ、「五輪書」を通して剣道のあり方を工夫されていきました。「剣道では出るところ、相手が出てくる初っ端が大切である。肉眼に映ったところ、観の目で見える。気配を感じたとき、観の目でみるということ。心の目の動きである。観の目ができるとようになってはじめて修行の成果が出てくる。そのためにも普段の稽古が最も大切である。」と指導されておられました。

ほんとうにすばらしい教育者でありました。

平成十三年体調を崩し、介護施設に入所していましたが、平成十九年二月十三日（享年九十三才）生涯をとじられました。

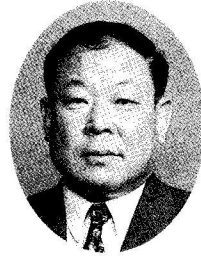
ご冥福をお祈りいたします。



京都大会での平岡先生

河野耀雄先生を偲ぶ

阿波支部長 木村 秀正



本年年始め、お正月早々阿波支部長河野耀雄先生は少年剣道教室の指導途中、体調が悪い為早く切り上げて帰宅されました。そして翌日早朝帰らぬ人となりました。御家族はもちろんのこと当支部におきましても、大事な先生を失い、誠に残念でなりません。河野先生は農業のかたわら市場少年剣道教室の室長並びに剣道連盟阿波支部長、その上旧市場町教育委員長も歴任され、大変忙しい人でした。

今思えば、まじめでファイトがあるあまり、仕事量が多くストレスがたまったのが原因ではと思います。剣道一筋六十四歳の人生はあまりにも若すぎます。急逝でしたので残された支部役員は何もわからず大変でした。先生の使っておられたパソコンから支部役員で仕事を読み解き、先生の剣道に掛ける思いをしみじみと感じました。そして、阿波支部は皆さんのご協力で何とか今日までやってまいりました。先生は自分が息を抜くこともなく、ただ毎日仕事で明け暮れたのではないかと思えます。また、先生は少年剣士に大変人気があり子供の心をつかむのが上手でした。剣道の練習は厳しかったですが一旦面をとると優しく、ユーモアがあ

り皆に慕われていました。

今まで阿波支部はたくさん立派な先生を生み出してあります。今後におきましても河野先生の遺志をつぎ、阿波支部一丸となって剣道発展の為に邁進したいと存じますので、今後とも宜しくお願い致します。



河野耀雄先生を偲んで

阿波支部 松 永 貴 史



昭和五十八年春、私は阿波郡市場中学校に入学いたしました。入学してまもなく、「何の部活動に入ろうか」と期待に胸をふくらませていろいろな活動の見学にいきました。最初は柔道にしようかと考えていましたが、友人の強いすすめもあり、剣道部の門をたくくことになりました。当時、市場少年剣道教室からの経験者がほとんどで、私のように中学校から剣道始める生徒は三人と少なく不安でいっぱいでしたが、厳しい稽古を繰り返し、充実した毎日でした。

市場中学校剣道部は、市場少年剣道教室との交流が盛んで、休日には、体育館を貸し切り合同で稽古を行いました。また、少年自然の家での合宿がたびたび実施されていました。私が河野先生と出会ったのはこの頃です。多くの少年剣道教室の指導者の中で、若手の中心として小学生たちに稽古をつけていました。また、小中学生のかかり稽古では、時には厳しく、時には優しく元立ちをしていただき、我々初心者にも熱心に指導していただき、思い切って稽古にかかることができました。いつも、河野先生の所には長蛇の列ができていたことを覚えています。

さらに、お世話になったのは、大学を卒業し、阿波支部に加えていただいたこととです。その当時の阿波支部長が河野先生でした。まだ、二十代前半だった私たちは、「試合がしたい・出場したい」という気持ちが強い時期でした。河野先生は、そんな私たちを高知県や岡山県で開催される大会や県内の大会等に参加させてくれました。そして、県社会人大会では、チームの大将を何度もつとめてくださり、私たちは安心して試合することができました。試合前には、市場町武道館で度々稽古をつけていただきました。背筋が伸び、しっかりと中心をとった構えからの変幻自在の剣風や技にいつも圧倒されていました。また、私たち若手との勝負をいつも楽しんでいたかのように、真剣に一本勝負をしていただきました。さらに、河野先生は、上段や二刀をされることがあり、当時あまりなじみのなかった二刀にふれることができ、私たちはその二刀を攻略すべく必死かつ楽しく稽古をさせていただきます。貴重な体験をさせていただいたことに気づきました。市場少年剣道教室の室長として、現在の市場町の剣道にご尽力いただいたことに深く感謝するとともに、少年指導を難しさを痛感しています。

市場少年剣道教室は、今も元気な子どもたちの声でいっぱいです。ご自身の仕事以外の市場少年剣道教室の指導、阿波支部長としての活動、また、旧市場町教育委員としても活躍され、多くの後輩や教え子を輩出されました。河野先生が中心となって支えてこられた市場町や阿波支部を我々後輩や教え子がしっかりと引き

継ぎ、盛り上げていくことがこれからの使命であると考えています。

これからも市場町、阿波支部の剣道発展と少年たちの成長を天国から見守っていただけるようお願い申し上げます。私たちががんばります。

慎んでご冥福をお祈り申し上げます。



佐藤勇先生を偲ぶ

菱 田 晋



戦後の混乱期に、予科練より帰還された佐藤勇先生は、好きな相撲や剣道に熱中していましたが、「人生一番大切なのは生活じゃ」と一念発起、仕事に精を出し身を粉にして働き、佐藤建設を立ち上げました。順調に業績を伸ばし、昭和五十年頃には長男に仕事を任せる様になりました。

昭和五十五年春、孫さん二人が鳴門少年剣道教室（現、光武館）へ通う様になり「爺ちゃんも行くわ」と五十三才で剣道を再開されました。同年輩の私が、初めて先生にお会いしたのが此の頃でした。先生の人柄に引かれ次第に親交を深め、人生の後半を互に竹刀を交じえ、苦楽を共に剣の道を歩みました。

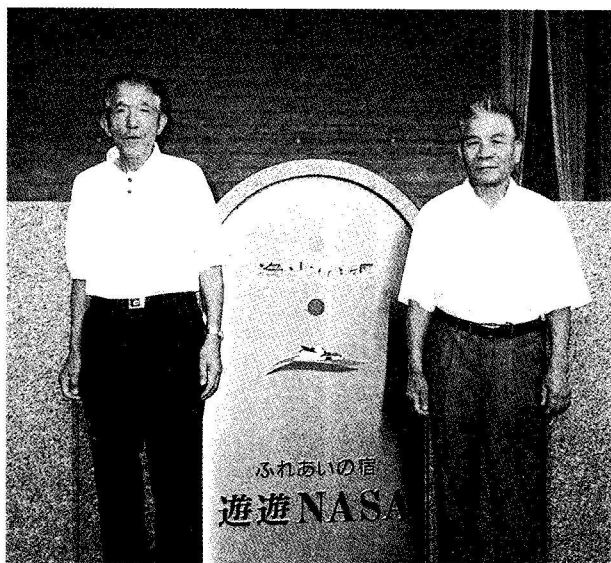
先生は、常に切磋琢磨され剣の理法の修練に心血を注がれました。旧武道館の朝稽古に通われ稽古に励み、特に堀江先生の講話に耳を傾け「堀江語録」と銘打って、一冊の本に書き留め、修業の糧とされてきました。

先生は、剣道の発展に幾多のご功績を残されました。平成元年より県剣道連盟評議員を四年間、続いて鳴門支部長を四年間務められました。又永年高齢剣友会の理事を務められ、全国ねんりん

ピック剣道大会に、びわこ・愛知名古屋・徳島と三回出場され、活躍されました。

昭和五十七年、鳴門運動公園に少年剣道教室が開設されるや、指導員に招かれ、責任者として、青少年の指導育成に情熱を注がれました。平成十七年十月三日、全日本剣道連盟より少年剣道教育奨励賞を授与されています。

先生は、長兄が戦死された為、佐藤家を継がれました。近郷の人望篤く、推されて鳴門市戦没者遺族会会長並びに徳島県遺族会副会長の要職につかれ、永年にわたり後援事業に貢献されました。其の功績が認められ、平成十七年十月二十九日、厚生大臣より表



平成10年9月12日 高齢剣友会海南地方巡回指導
宿舎悠悠館にて 佐藤勇先生(右)と私

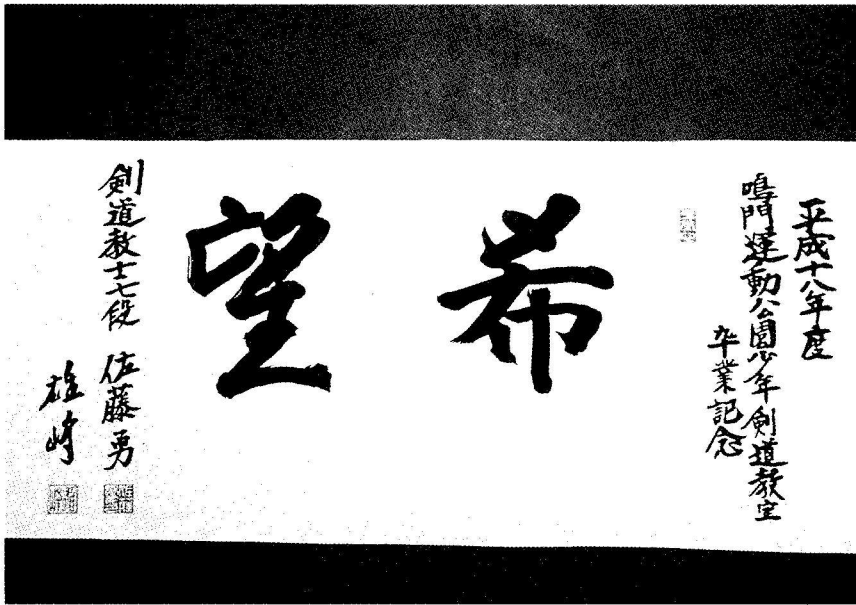
彰を受けられています。

平成六年、剣道七段に合格され、さらに、目標を高く持って、八段を目指し真剣に稽古をされていました。

平成十八年十月十四日、徳島県健康福祉祭剣道大会に出場予定の先生が、「体調が悪いくん代ってくれへんで」との事で、私が

出場しました。先生の病状を知る私としては「元氣にならなあかんぜー」としか言えず、只回復を神に祈るばかりでした。しかし病には勝てず、翌平成十九年六月二十六日、永眠されました。享年七十九歳。

故佐藤勇先生のご遺徳を偲び、心よりご冥福をお祈り致します。



佐藤勇先生揮毫の記念タオル（最後の書）



「出会い」

鳴門支部 元 木 武

今回、徳島の剣道「佐藤勇先生を偲んで」の寄稿の機会をいただき、振り返ってみますと奇縁というか先生には本当にお世話を戴いたなという思いでいっぱいです。

先生と初めてお会いしたのは昭和六十年頃、旧武道館で堀江幸夫先生、県警察特練生を中心に行われていた朝稽古会でした。五十歳を過ぎて剣道を再開されたそうでしたが、若い人に混じり意欲的に稽古されていました。稽古後の堀江先生の講話を記録され、

疑問な点があれば質問されるという謹直なお人柄で、几帳面で強い向上心をお持ちでした。

それから、審査前の稽古会、講習会等でよく拝見するようになりました。その真摯な姿勢が幸いしたのでしよう、あれよあれよという間に七段に昇段されましたことは皆さんのご存知の通りです。その後、武道館移転改築のため、

朝稽古会が中止になり、お逢いする機会が少なくなりました。

しかし、平成十年頃、現鳴門ソイジョイ武道館でお逢いした時「おい元木、鳴門に居るのに何で子供の指導にこんのや」のお叱りを受け、鳴門運動公園少年剣道教室に足を踏込んでしまいました。佐藤先生と菱田晋・浅野精一両先生を中心に、指導方針は礼儀・基本を重視するというお考えでした。稽古中厳しかった先生が、稽古が終わった後の子供に対しにこやかに笑い愛情を持って接しておられました。本当に子供たちに対して誠心誠意指導しておられました。

また遠来より南充美・糸田川三千男・糸谷文雄・橋本武各先生が時々足を運んでご指導頂き先生の交剣知愛(友)を見せていただきました。

一昨年四月頃から体調を崩され治療入院を繰返していましたが、本当に剣道と子供が好きだったのでしよう教室には度々足を運ばれていました。しかし、昨年六月家族の手当てもかいなく七十九歳の生涯をとじられました。先生の御遺徳また石村行範先生という新しい指導者を得て、子供たちも少しずつ成果を上げていきます。先生の「和」を大切にするという心をこれから伝えていきたいと思えます。

佐藤先生、これからの子供達の成長・活躍を見守って下さい。



昭和16年

16才 海軍飛行科練習生 212.
三重海軍航空隊に入隊。

4年国終戦 帰還

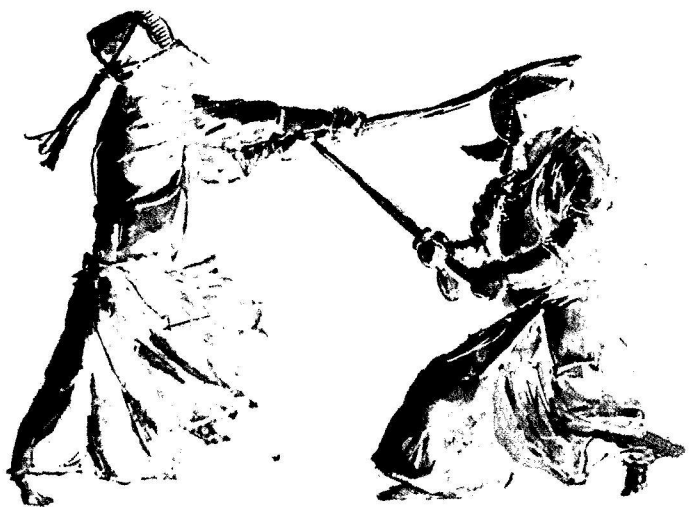
昭和40

種々職業を経て 建設委員会正
記=す。

如才五品より准尉 本格的に格闘
に始め。
昭和45年 海軍運動公園 少年剣道
教室 塾生と共に指導員になる。
全国本会剣道連盟刊。少年剣道教育
奨励賞を授与される。
以後 高台剣道会にて稽古に日々
兼五八段 堀江幸夫先生の柳指手
を習中。H.16年 若狭七段を叩く
又長年、鳴門中 淡島道場 全道
を福め、後援事業に貢献し続け



ご家族に書いていただいた履歴、御写真
(昭和16年 入隊時)



馬場力先生ありがとう

徳島錬心館館長 大澤孝彰



去る平成十九年十月十五日、徳島県剣

道連盟徳島支部長で徳島錬心館道場の師範代剣道教士七段馬場力先生が逝去されました。お通夜に出席し、冷たくなった頬に手をあて話しかけしばらく安らかな

お顔を拝見した後、涙をこらえ奥様に「話しかけたけど、もの言うてくれん。」と申しましたら「最後まで剣道、剣道と言うてばかり居りました。」と奥様が言われました。

馬場先生は中年になってから徳島錬心館に入門されました。剣道の経験は全く無かったので勿論素振りから始まったのですが、運動神経も良くとにかく寝ても覚めても剣道ばかりの生活に入られ、旺盛な研究熱心と相まって、急速に上達されました。

時期は前後しますが、思い出すままに馬場先生のほんの一部の精励ぶりを書いてみます。

助任橋の所の旧武道館（現在公園）での朝稽古で県警機動隊の剣道部員等に混じって来る日も来る日も「ハーフーハーフー」と大汗をかきながら故堀江先生に面打ちばかりの指導を受けていたのを横目に見ながら大丈夫かなあと心配していました。馬場先生が運転して私と二人で方々へ武者修行しました。香川県の故範士

八段谷川猛美先生の修猷館道場、愛媛県の今治剣友会、道後の松山武道館等々どこに行っても段は低くてもお客様として元立をやらされるのでこんな苦しい事は無いと言っていました。又滋賀県故範士八段八木謙一先生にも大津の武道館できびしい御指導を受けていました。

水戸の東武館々長・故小沢武先生が少年の四国大会時に何回も来県され、その都度私に替って四国八十八ヶ所を案内して貰いました。車の中で剣道の極意、剣道の面白さ、人生の機微まで面白可笑しくユーモアたっぷりに分り易く話してくれたそうです。そして一人で水戸東武館に一週間入門し、少年達と一緒に道場のふき掃除をやり、稽古は小沢先生の門下生の一流剣士にもすごい指導を受けて来たのです。

まだ海外への遠征は少なかった頃、当時台湾の剣道連盟の会長故謝徳仁先生の道場で、馬場先生と東内道場館長・教士七段東内勉先生と私と三人で「コンクリート」の道場で運動靴をはいて稽古して来ました。二十人余の剣士の中に相当実力のある二刀流の剣士がいました（京都大会に出場した事があるとのことでした）。私が二刀流にどう対応するのか充分拝見しましたと帰路飛行機の中で話してくれました。

非常に気さくで優しい性格なので道場の門弟少年達等に尊敬され慕われました。私が多忙な時（試合・審判・審査等で県外出張）は少年の指導等全て馬場先生が完璧に全うしてくれました。午後六時から少年の稽古が始まる場合、もう時間前の五時には道場に

来て準備をすると言う徹底した気の使いようでした。私が何の心配も無く県外出張等で頑張る事が出来たのは馬場先生のお蔭です。人には言えない厳しい努力の賜で中年から始められた剣道を全うされたと思います。ほんとうにすばらしい事です。私と同じ年ですが、人生経験豊富な馬場先生には公私共にほんとうにお世話になりました。

大きな声で道場で育った少年達と一緒に

馬場先生ありがとう!!

人の世のせんない事と知りつつも

剣友の逝去に涙あふれる

私事で恐縮ですが、私は剣道七段を受領した翌年の昭和四十五年六十六回京都大会から平成十八年一〇二回大会まで一年も欠席する事無く三十七回連続で参加出場しています。今年平成十九年も頑張ろうと思っていた二月始め、私自身の不注意により大病にかかり約二ヶ月間余も大病院に入院し、皆様に大変御迷惑をお掛けしました事深くおわび致します。と共に剣道連盟始め皆様から御心配とお見舞を頂きました事この紙面をかり心から御礼申し上げます。



練心館道場にて

馬場先生を偲ぶ

徳島支部長 忠 津 和 憲



五月にお会いした時はお元気なご様子でしたのに、訃報の連絡を聞いたときは、本当に驚きました。身体強健で病も寄せ付けない方だと思っておりましただけに、こんなに早く逝ってしまったわれるとは……。

残念でなりません。
お若い頃より徳島練心館での稽古、又各地各県で武者修行をされ、昭和六十二年五月教士号授与、平成二年五月に剣道七段に合格されています。奥様のお話によりますと毎日仕事そっちのけで、少年の指導、自分の稽古にと道場に足を運んでおられたそうです。又剣道の合間には、書道を学ばれ（書道七段）七峰という名も持っておられたと聞いて居ります。地元町内の世話役、お寺の総代、防犯の役員等、多忙で体が幾つあっても足りない毎日を過ごされておられました。

徳島支部長として平成三年より十七年間という長きに亘り、支部発展の為に多大なご尽力をされた事は言うに及ばず、徳島練心館副館長、徳大医学部コーチとして、数多くの剣士を育成され、これらの功績に対し徳島県体育功労賞を授与されておられます。支部長在任中は支部主催の祝賀会を八回、更に全国七・八段審査

に十九名の先生方が合格され、その中には八段、女性七段誕生と支部発足以来の祝事に、支部員も大いに活気付きました。これも先生のご指導はもとより、先生のお人柄ご人徳の賜物だと思えます。少年剣道大会には、大勢の豆剣士ご父兄に慕われ、何時もニコニコしたお顔が忘れられません。

私事ですが、七段審査を受ける時に『打つ、当たただけではあかんですよ。打つ前の姿勢態度、充実した氣勢で小細工なしで、こぞと思ったら捨身でいきなよ。』この言葉が今も鮮明に残っております。

最後になりましたが、先生のご冥福を心よりお祈り致します。



ありし日の馬場先生

馬場先生の書

文武両道を願う



剣道連盟徳島支部 支部長

剣道教士・七段 馬場 力

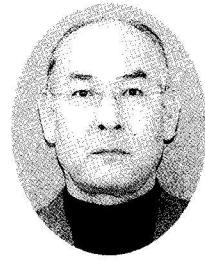
〒77018081

徳島市八万町二丈四一の一

TEL 088(668)0220

右武館館長重井好高先生を偲んで

徳島右武館道場 加藤泰男



今年の十二月十九日、重井先生の訃報を聞く、思いがけない連絡に動揺を隠せなかった。八月に道場でお会いした後、稽古に参加できなかった我が身が悔まれない。

思えば、重井先生に始めてお会いしたのは、右武館開館五周年の父兄合同の祝いの席でのことでした。

高齢でも剣道が出来る、その様なお話で剣道をするように進められたのがきっかけで、子供共々お世話になることになりました。私が三十六歳のときでした。初めて面を被り、稽古をつけて頂いた日のことは今も脳裏に焼きついています。飛び込み面も幾度となく貰いました、その都度頭がジンとするような衝撃があったのが新鮮な驚きでした。すり上げ面、小手面、胴打ち、と多彩に技を出されて最後は雑巾掛けと称して道場に何度も転がされました、今思えば楽しく思い出されることばかりです。

重井先生は寡黙なお人柄で言葉では詳細に説明はされませんでした、見て覚える、それに徹していた様に思われます、そして、子供達にも淡々としたお姿で教えられていたように思います。

道場の壁には五つの誓いと斎唱訓が貼られて子供達の成長の為

に最後の最後まで尽力されていたことは、晩年の重井先生のお姿を見るにつけ、感謝で頭の下がる思いです。

晩年は膝を痛めて大人との稽古は出来なくなりましたが、それでも子供達とは稽古を続けておられました。それも過ぎて子供達と竹刀を合わすことが出来なくなっても、指導者としての心構えを、身をもって示してくださいました。防具を着装していつも見ておられました、そのお姿を見るにつけ指導者の心を教えてもらっているような気持ちに為ったのは私だけではなかったように思います。

最近奥様とお話しする機会がありました、その折のお話を少し書かせていただきます。重井先生がなくなる数日前に点滴を打ちながらも、空いている片手で竹刀を振っていたそうです。そのお話を聞きまして剣道一筋に生きてこられた重井先生的情熱を知りたいがいたしました。そして、また平成十八年の正月から、白寿までと、一日一巻の写経を実践計画され、家族団らんと心身の精進を心がけて「心身一如」の境涯に邁進されていたそうです。

それは、始めて知る重井先生の心のお姿でした、老いても道を求めて歩みをあきらめない姿に弟子として尊敬の念にたえません。最後に奥様が重井先生を偲んで詠まれたお歌をご紹介します。

剣道の道一筋に貫きて

意思の強さに感無量なり

亡き夫の愛用せし腕時計

主なくとも刻をきざみて

何もかも置きて帰らぬ人となり

見る物全て感謝の心

ダイヤモンド婚も迎えられての矢先の出来事になりましたが、奥様のお話を聞くにつけて、天寿を全うした大往生だったそうです。

幾多の子供達が右武館を卒業し、先生の御意志をついで社会に貢献する立場にも成長しています。

何人かは警察官になり、地域社会の為に日々頑張っています。



そんな姿を見るにつけ、重井先生の剣道を通しての「五つの誓い」「齋唱訓」の教えが、子供達の成長に寄与して頂いた事に対して、感謝の念で一杯です。

享年満八十六歳で亡くなりました、重井好高先生に対して感謝とご冥福をお祈り申し上げます。

写真は随分前の写真ですが、小学三年生の時の甥子さんとの写真です。お元気な時の重井先生を思い浮かべていただきましたら嬉しく思います。



「謙・恕」の教えを宝に

白木修子

「わし、やっぱり九十(数え年)まであと五年頑張るけんもう!」と、重井館長は、幸せそうな笑顔を見せて下さいました。私が徳島右武館で指導のお手伝いを始めて四年目、三年前のことです。六十歳から始められた道場。週三回の稽古日は欠かさず、先生の農業舎屋の二階道場へ階段を昇降された二十六年でした。

私事ですが、二十一歳の長男が小学校四年生、二歳下の娘と一緒に入門以来、次男を含め三人の子供が重井館長の門弟となり、右武館道場から巣立ちました。重井館長・阿部全司先生・遠藤英雄先生が指導して下さい、送迎だけで精一杯の私はお願ひする一方でした。遠藤先生が倒れられた後、八〇才を間近にされたお二人の先生のお手伝いをしようと決心した直後、突然阿部先生が他界されました。お二人は、旧制麻植中学校(現川島高校)の同級生で、昭和五十七年の創立以来二十二年間、二人三脚で指導に当たられていました。早朝、館長先生は自転車で訃報を伝えるに来て下さり、居ても立ってもいられない心中をお察しすると、言葉が出ませんでした。

重井先生との出会いは三十二年前、私が名西高校剣道部に入部して間もない頃でした。先生が自衛隊を定年退職後五十才で徳島

に帰られ、稽古に来て下さるようになったのは、剣道部顧問の乾寿夫先生とも旧制麻植中学の同級生だったからです。先生は大きく強かった。豪快に中心を突き破るような面は今でも私の憧れです。

高校時代も色々なお話を伺っていましたが、先生の歩んで来られた道程を、自ら執筆されている「徳島の剣道第十九号」で改めて知りました。

帰県後は、名西支部長・県剣道連盟副会長・審議員など務められ、平成十四年の剣道有効章(日本剣道連盟)受賞記念の手拭いに書かれた「謙・恕」の教えと温かい笑顔は私の生涯の宝となりました。

昨年十月半ば緊急入院されましたが、ご本人の強い希望で退院されたと伺っています。退院後は口増しに回復なさり、お誕生日を迎えられたところでしたが急変されて、十二月十九日未明旅立たれました。どんな時も子供達を案じて下さる館長先生でした。

全国講習会報告

第四十二回剣道中央講習会(西日本)

小松島支部 高木壽史

平成十九年三月三十一日から四月一日の二日間神戸市立中央体育館を会場として西日本から五十二人の講習生が集まりました。

徳島県より米倉滋先生(教士八段)と私に参加しました。

今回の講習会の役員ならび講師

役員

全日本剣道連盟会長

武安義光

全日本剣道連盟副会長

奥園国義

全日本剣道連盟専務理事

大谷正俊

全日本剣道連盟常任理事

福本修二

講師

日本剣道形

範士 熊本 正

審判法

範士 田口栄治

指導法

範士 太田友康

一、日本剣道形

熊本正先生

太刀小太刀の理合を理解し「剣道講習会資料」に基づき日本

剣道形を正しく指導をしていただきました。

二、審判法

田口栄治先生

審判に当たっての重点事項説明により審判能力の向上を図るとともに審判の資質を高める指導をしていただきました。

資料 ① (重点事項)

② 剣道試合審判規則細則の一部改訂

三、指導法

太田友康先生

【講義概要】

○現代剣道の課題

。試合・稽古に於ける問題点

。基本指導の重要性

。指導者の心構え

○剣道理念

。理法

。人間形成

○指導者のあり方

。指導計画 } 到達目標(ねらい)

。 } 段階的指導

。教育的作用

【実技】

。到達目標(ねらい)

一足一刀の間合からの一拍子の打突

最後に全剣連の講師の先生方には大変お世話になりました。また徳島県剣道連盟に心から感謝いたします。

審 判 法

審判法講習における

[重点事項]

審判員は、剣道試合・審判規則の理解のもとに、下記の事項に留意して、適正な試合運営に努め、試合の活性化を図る。

記

- 1 試合内容を正しく判定する。
- 2 有効打突を正しく見極める能力を養う。
 - (1) 有効打突の条件と諸要素の理解
 - (2) 技の違いと鈍度に応じた打突の見極め
- 3 禁止行為の厳正な判断と処置をする。
 - (1) 行為の原因と結果の正しい見極め
 - (2) 禁止行為に対する的確な処置

剣道試合・審判規則、細則の一部改訂

(平成19年3月14日改訂)

1 【改訂規則】

規則第3章 禁止行為 第1節 禁止行為事項

(禁止薬物の使用・保持)

第15条 禁止薬物を使用または保持すること。

2 【改訂細則】

細則第24条 規則第27条(有効打突の取り消し) 不適切な行為とは、打突後、必要以上の余勢や有効を誇示した場合などとする。

剣道試合・審判・運営要領の手引きの見直しについて

(平成19年3月14日 加筆・修正)

1. 手引き14頁【3 例外的な現象(4)の修正】

(4) あってはならないが、片側(表又は裏の一方)に三人の審判員が寄り集まり停止したような場合には、主審は直ちに「止め」をかけることが賢明である。

2. 手引き15頁【4 その他(1)の修正】

4 その他

(1) 試合の開始と終了の際に副審が定位置に移動する場合、副審は開始線の内側を通り定位置まで移動する。

3. 手引き17頁【①の次に②③を加筆】

二 審判

② 審判員の総合判断の後、時間の計測を開始する。

③ 第30条1項は、被害者救済のため医師および審判員等の判断、処理により、その後の試合に出場できるように設定されたものである。

4. 手引き17頁【二刀について①の修正】

① 小刀での打突が有効打突になるには、大刀で相手の大刀を制している場合で、打った方の肘がよく伸び、充分な打ちで条件を満たしていることを必要要件とする。但し、つば競り合いでの小刀の打突は原則として有効としない。

5. 手引き25頁【事例5解説の修正】

<解説> ① 打突後の体当たりや相手を崩して打突するなど、打突に結びつく行為でなければ不当な押し出しになる。

② 打突の意志がなく、押し出す目的であったのか否かを見極める。

③ 堪えられる程度の接触なのか否かを見極める。

6. 手引き33頁【事例11解説の加筆】

② ただし、錯誤の疑念や表示の不明瞭などがあった場合、判定をより正確にするために合議をかける場合もありうる。

居合道中央講習会に参加して

居合道部 吉 岡 修 一

平成十九年九月十五日(土)と十六日(日)に京都市武道センターにて全日本剣道連盟主催の平成十九年度(第三十四回)居合道中央講習会が開催されました。全国から一〇二名、東京四名・埼玉・千葉・神奈川・愛知・大阪・福岡三名その他の道府県から二名が召集されました。伝達講習実施を条件とし、各都道府県剣道連盟の中核となる指導的立場の者を対象に全剣連居合審判実技の講習を重点に行い、技能の向上を図ることを目的に開催されました。徳島県からは居合道教士八段原田勝先生と私が派遣されました。

一日目は午前九時より開講式が行われ、今回より全剣連居合道委員長になられました岸本範士の講話がありました。その中で「居合道人としての立居振舞ができていなければ、講師がきびしく注意するので、緊張して受講するように!」「全剣連居合は教本どおりで変わったところはなく、教本を熟読するように!」とのことでありました。次に武田範士の解説、河口範士の模範演武で礼法一本目から十二本目までくりかえし懇切丁寧なる説明を受け、午前は終わりました。午後は各班に分かれて実技講習が行われ、私は山崎誉範士の班で午前中の礼法一本目から十二本目まで熱心なる指導を受け、受講生も真剣そのものであり、一日目は終わりました。二日目は午前九時より審判実技講習が行なわれ、十月二十日

に岡山市で開催されます第四十二回全日本居合道大会で審判をさせます先生が審判員で受講生が選手となって本番さながらの審判実技が行われました。その後、受講生が交代で審判実技を行ない、発声・旗の持ち方上げ下し等々の指導を受け午前は終わりました。午後は古流の研究で神伝流五十八名、英信流三十一名、その他の流派十五名、この三つに分かれました。私は英信流で武田・山崎正両範士の指導でいつも道場で教わったとおりに抜いて下さいとのことと八段の先生とその他の人とが交互抜きで正座の部、立膝の部、奥居合まで行い、「道場によって多少異なるところはありますが、大差はあり



平成19年度（第34回）居合道中央講習会 日程表

平成19年9月15日（土）～16日（日）

（於・京都市武道センター）

財団法人 全日本剣道連盟

	9月15日（土）	9月16日（日）	
9:00	開 講 式 全 剣 連 居 合	審 判 実 技	9:00
		質 疑 応 答	11:30
12:00	昼 食	昼 食	12:00
13:00	全 剣 連 居 合	古 流 の 研 究 閉 講 式	13:00
17:00			16:00

役 員

全日本剣道連盟 会 長 武 安 義 光
" 専務理事 福 本 修 二

役員兼講師

" 居合道委員会委員長 岸 本 千 尋

講 師

居 合 道 範 士 武 田 清 房
" " " 山 崎 正 博
" " " 河 口 正 彦
" " " 安 山 永 毅
" " " 小 倉 崎 蒼 昇

「ませんので教わったとおり稽古して下さい」とのことでありました。想定した敵に居て急に合わすということで敵の動き、合せ方も色々あると言う古流の奥の深さを知りました。最後にまとめて質疑応答があり、閉講式は午後四時に散会となりました。受講中

講師先生の懇切丁寧なる指導受講生の謙虚な取組には感心いたしました。受講内容は九月二十三日、松茂第二体育館において原田先生とともに伝達講習を実施しました。

第四十五回中堅士講習会に参加して

小松島支部 高 木 壽 史

平成十九年五月二十三日～二十七日、全国から五十八名の剣士が奈良市立中央武道館に集まり、五日間の講習会がおこなわれた。講師の先生方は、大久保和政・熊本正・加藤浩二・小林英雄・田口栄治・太田友康・林邦夫・鈴木康功・松井明先生、地元から西田照夫・松田勇人先生、スポーツ医学講師長野拓三先生、そして役員の武安会長・奥園副会長・大谷専務理事・福本常任理事・島野常任理事、全剣連の錚々たる顔触れである。

(一) 剣道講話 講師 大久保和政先生

「指導者の基本的心構え」についての講話で講習会が始まる。

(二) 日本剣道形 講師 熊本正・松井明先生

形では太刀一本目から小太刀三本までの講習（重要点）が行なわれ、特に形の始まり前と形の終わり後の所作事に時間をかけて指導を受けました。

(三) 木刀による剣道基本技稽古法 講師 西田照夫・松田勇人先生

私は徳島剣連の講習会に出席できなかったので初めて木刀による剣道基本技稽古法を受けました。初めてなのでとても不安でしたが、西田・松田先生が一本目から先にお手本を見せていただいたので良く理解ができました。木刀による基本技稽古法も日本剣道形と同様に深いと思いました。

四審判法 講師 田口栄治・林邦夫先生

試合の中での審判員の重要性を再認識しました。特に有効打突の見極め「有効打突は充実した姿勢・氣勢で竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする」を厳しく指導を受けました。また審判員の所作事であるコート内の入退場・審判員の立つ位置・二等辺三角形を崩さないこと・審判員の立姿等について徹底されました。最後に審判実技として、講習生が試合と審判を全員で行いました。

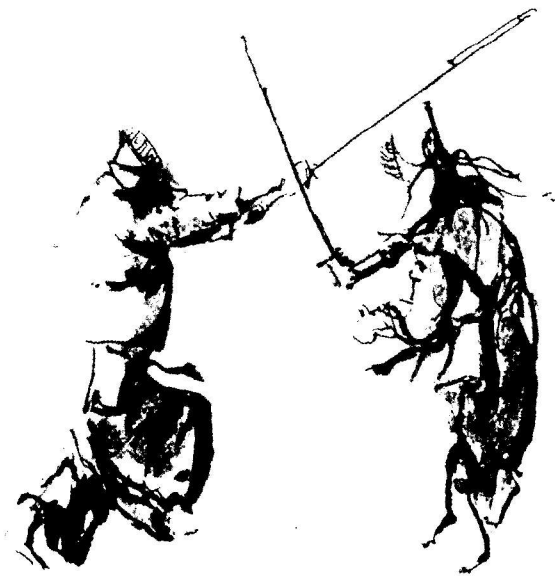
(四) 指導法 講師 加藤浩二・小林英雄・太田友康・鈴木康功先生

講習会の中で一番講義回数が多かつともきつく厳しい講習会でした。特に、切り返し・打ち込み・掛け稽古の繰り返しでした。極めつけは、私も初めて耳にした。「区分稽古」です。その内容は、まず地稽古、笛が鳴ると掛け稽古、笛が鳴ると打ち込み、笛が鳴ると切り返し、笛が鳴ると同じ相手と地稽古、笛が鳴ると相手が掛け稽古、打ち込み、切り返し、相手交代……と続く。最後の講習で基本打打ちが自分なりに大変良くなってきたと思います。

(五) スポーツ医学 講師 長野拓三先生

アトピー性皮膚炎についての講義がありました。以上が五日間の講習会の概要です。最後にこの講習会の出席者の中から多くの八段が生まれると聞いていましたが、平成十九年十一月東京審査会で今回の講習生の中から新生八段が二人も生まれました。

このようなすばらしい講習会に出席させていただき誠に有難う
ございます。また、徳島県出身である講師の松井明先生には大変
お世話になりました。心からお礼申し上げます。



八段研修会に参加して

近 藤 亘

平成十九年度(第十六回) 剣道八段研修会が五月三十一日(木)から六月三日(日)までの四日間、全日本少年剣道錬成会館(東京都日野市)において行われました。

この研修会は、「剣道八段合格者を対象とし、必要な教養と技術の修得」を目的とし、平成十八年五月・十一月、及び平成十九年五月に八段審査に合格した二十七名が参加し、次の役員・講師及び日程で行われました。

〔役員〕

会長 武安義光

副会長 加賀谷誠一

専務理事 大谷正俊

常任理事兼講師 福本修二

〔特別講師〕

医学博士 佐々木健

〔講師〕

剣道範士 奥島快男・太田忠徳

田口榮治

○一日目(五月三十一日・木)

一三時三〇分 開講式

一三時四五分～一四時四五分

武安会長による講話

一四時四五分～一六時

奥島講師による審査法

一六時～一七時

稽古(二・三日目も同様)

○二日目(六月一日・金)

九時三〇分～一一時

上野講師による刀の操法含む居合

一一時～一二時

加賀谷副会長による一般教養

一三時～一六時

福本講師による指導法

○三日目(六月二日・土)

九時三〇分～一二時

田口講師による審判法

一三時～一六時

太田講師による剣道形実技

○四日目(六月三日・日)

九時三〇分～一〇時三〇分

佐々木講師によるスポーツ医学

一〇時三〇分～一二時

補講及び質疑応答

一二時 閉講式

三泊四日の合宿形式で行われた当研修会は、前記日程のとおり指導法、審判法、日本剣道形等多くのカリキュラムの詰まった充実した内容でした。

特に指導法実技では、素振り（股割り）に始まり、基本打ち、面体当り、連続技、区分稽古と、かなりハードな内容でした。また、指導の中で講師から「あなた達は、八段として見られているんだ。責任を持った剣道をしなさい。見せなさい。」といった厳しい叱咤激励が飛ぶなど、緊張感の漂う研修会となりました。

四日間の研修が無事終了し、八段としての自覚、及び責任を植え付けられたように思います。

今後は、八段として本当の実力を身に付けるよう一層修練に励んで参りますので、今後ともご指導の程宜しくお願い申し上げます。



平成十九年度全日本剣道連盟主催 徳島県剣道(剣道形・指導法)講習会記録

事務局長 藤 本 雅 史

鈴木康生先生(和歌山・教士八段)をお迎えして、標記講習会が平成十九年十月二十一日(日)鳴門市立鳴門工業高校において開催されました。以下にその概要を列記します。

平成19年度 剣道(剣道形・指導法)講習会日程表

平成19年10月21日(日)於 鳴門市立鳴門工業高等学校体育館

講師 教士 八段 鈴木康生 先生

内 容	時 間	備 考
開 講 式	9:30 ~ 9:40	
剣 道 形 講 義	9:40 ~ 10:10	
剣 道 形 実 技	10:10 ~ 12:00	
昼 食	12:00 ~ 13:00	
剣 道 形 実 技	13:00 ~ 14:00	
指 導 法	14:10 ~ 15:20	
合 同 稽 古	15:20 ~ 16:00	
閉 講 式	16:00 ~ 16:10	

日本剣道形について

一・日本剣道形の経緯

日本剣道形は武徳会が大正元年に(大日本帝国剣道形)として制定した。大正六年加注、さらに昭和八年に増補加注したものを原本とする。昭和二十七年全日本剣道連盟結成以後「日本剣道形」と改称して実施した。昭和五十六年に全日本剣道連盟の統一見解として日本剣道形解説書を制定した。

二・日本剣道形の意義・目的

日本剣道形は先人が長い年月とその叡智を傾け各流派の中からすぐれた技を集め統合統一したものであり、いわば祖先が残した文化遺産である。しかも日本剣道形は長い歴史を持ち、理合及び精神面に深い内容を持つまでに発達したものである。この伝統的文化遺産である日本剣道形を正しく継承し、次代に伝えることは大きな意義がある。

その目的は、技術力の向上を大きなねらいとするのであるが、剣道形を繰り返し修練することによって、剣道の基礎的な礼法や技術、剣の理合を修得することができる。さらに内面的な気の働きや気位といった剣道の原理原則を会得でき、剣道の規範となるものである。日本剣道形を剣道修業の段階にに応じて、これに親しみ剣

の理法の真髄に触れて格調高い剣道を体得してもらいたい。

三、日本剣道界の効果

高野佐三郎著『剣道』では「斯道の練習法三様あり、第一形の練習、第二仕合、第三打ち込み稽古、是なり」と形修練の重要性を説いている・剣道形の修練により以下の効果が得られる。

- ① 礼儀作法や落ち着いた態度が身に付く。
- ② 姿勢が正しく、動作も機敏になる。
- ③ 相手の気持ちや動作を観察する観の目が養われる。
- ④ 技術上の悪癖をなおすことができる。
- ⑤ 呼吸や正しい太刀筋を会得できる。
- ⑥ 間合や打突の機会を修得できる。
- ⑦ 打突が正確になり残心が会得できる。
- ⑧ 気が練れて、気迫・気合いや発声が充実してくる。
- ⑨ 心と技の理合が会得できる。
- ⑩ 気位が高まり、気品や風格が備わる。

形練習上の共通留意点

1. 形は大きく雄大に行うように心掛けること。
2. 呼吸を整えること。(一本の形をせめて二呼吸で行うよう努めること、精神を集中させる「一呼吸が本質」)
3. 目付を誤らないようにすること。(相手の目を注視し、いわゆる遠山の目付で行う)
4. 木刀を持ちかえるとき身体の中心で持ちかえる。
5. 帯刀の姿勢は木刀の場合、柄頭が正中線になるようにする。

刀の場合は、鰐が正中線にくるようにする。

6. 太刀のときの中段の構えは剣先の延長は、両眼の中央または左目とする。小太刀もこれに準ずる。(一足一刀の間合を前提とする)
7. 五つの構え、小太刀の形における半身の構え、入身の所作を正しく行う。(構えるときにアクセントをつけない)
 - ・ 左諸手上段 半身にならない。(自然体)
 - ・ 八相の構え ひじをはらない、とじない、刃筋を前に向ける。(後のかかをつけない)
 - ・ 脇構え 刃をかくす。(足を大きく開かない、後のかかをつけない)
 - ・ 下段の構え 膝下三〜六センチメートル下とする。
8. 構えを解くとき、剣先は相手の体からわずかに外れるくらいに下げ、刃先は左斜め下に向ける。小太刀もこれに準ずる。
9. 前進後進の時に上半身を腰に据えて動作し、肩を振らないこと。
10. 足さばきはすり足で音を立てないこと。
11. 太刀の形においては「機を見て」小太刀の形においては、「入身になろうとするとところ」を打つ。
12. 充分な気位で残心を示すこと。
 - イ. 打太刀は仕太刀に充分な残心を示させる。
 - ロ. 仕太刀は残心を示した後、打太刀の動作に従うこと。
13. 打突は約束の部位を正確に打突すること。特に小太刀は片手

打ちのため正確でなければならない。

(振りかぶり過ぎて剣先が両拳の高さより下がってはいけない。)

14. 各本ごとの理合を熟知し、技に応じた打突の度合い、緩急強弱を心得一拍子で打突する。(発声は腹から大きく)

15. 形は打太刀、仕太刀の二人で作り上げる創作である。

◎気当りとは、相手を「打つぞ」「突くぞ」という気持で攻め相手の心の反応を見たり、動きを予知したりすることである。

◎位詰とは、相手に対して優位な体勢を整え充実した気位で相手を攻め寄ることである。

◎人身とは、氣勢が充実して相手の手元にとび込んでいく状態。

◎機とは、相手の心と体と術の変わりぎわに起こる時の「きざし」である。この場合、打太刀が仕太刀に勝つ機会を教えているので、したがって打太刀は仕太刀の充分になったところを見て打つ。

◎昔の教えとして「ヤー」の中に「トー」がある。仕太刀は打太刀が仕掛ける出鼻か、途中か、尽きたところに生じる隙を間髪を容れず打つ。ここに真剣味が生まれてくる。

◎稽古は形の如く、形は稽古の如しの教えがある。

日本剣道形 太刀の形七本 留意点

一本目

・打太刀は打ちおろすとき、反動をつけて剣先をさげて、打ち

おろさないようにさせる。

・仕太刀は、剣先がさがらないように剣先の方向に抜かせ、抜

きと打ちとを一拍子に行わせる。

・打太刀は、柄もろとも大技で下段の高さ程度まで打ち下ろす。(その余勢で下段よりやや低くなることもある。)

・仕太刀は、打太刀の顔の中心を突き刺すような氣勢で押しながら、諸手左上段に振りかぶり、残心を示す。↓(両眼の間)

二本目

・仕太刀は、打太刀の刀の下で剣先を下げて左後方に開くので自然に弧を描くこととなる。(こと更に回して半円を描かない。)

・打太刀は下まで打ち下ろさず、右小手の位置よりわずかに低く打たせる。

・仕太刀の残心は、形に表さないで、特に十分な気位を示させる。

三本目

・打太刀は、的確に水月(みずおち)を突き、手元があがらないようにさせる。

・入れ突きとは、相手の太刀を手元に引き込んで、すかさず突き返すことをいう。萎やす時、左拳が正中線から外れないようにする。↓(この時に、縁が切れないようにする。)

・仕太刀は突き返したら、さらに突きの氣勢で位詰めに進む。

位詰めは突くのではないから剣先を突き出さぬようにさせる。

◎位詰とは、相手に対して優位な体勢を整え、充実した気位で相手を攻め寄せることである。

・ 仕太刀は位詰めに進み、剣先は胸部から次第に上げていって顔の中心につける。

四本目

・ 双方とも十分な氣勢を込め斜め打ちにならないようにまっすぐに振りかぶって、正しく正面を一拍子で打ち、切り結び相打ちとなる。

・ 双方同じ気位で互いの刀身が鎧を削るようにする。

・ 打太刀は、物打の左鎧で巻き押さえすり込みながら、右肺を突く。(仕太刀は突くはなを巻き返すので、打太刀の上半はやや前かがりとなる。)

・ 巻き返すと打ちは、一拍子で行わせる。

・ 仕太刀は、両腕の間から相手の体が見えるぐらい振りかぶり、真っ直ぐに面を打ち込む。

・ 八相の構え——右拳を右肩、鐔を口の高さにし、口からほぼ拳一つ離す。刃先は相手に向ける。

・ 脇構え——左拳は「へそ」の右斜め下約ひと握りのところにおく、刀身が相手から見えないように構える。剣先は下段の構えより少し下げた位置、刃先は相手に向ける。足先はやや外側を向く。

五本目

・ 打太刀の諸手左上段に対し、仕太刀は手元をやや前に移行して構え、剣先は打太刀の左拳につける。↓左拳につけるので、自然に刃は下でなくてほんの少し左斜め下になる。

・ 打太刀は、あごまで切り下げる心持ちで打つ。すり上げられた時、打太刀の刀は死に太刀となり、構えを解いた程度まで落ちる。

・ 仕太刀は、すり上げた剣先がさがらないようにして、一拍子で正面を打つ。

※すり上げは、払いにならないようにさせる。

六本目

・ 打太刀が引いて諸手左上段に振りかぶる時、仕太刀は、すかさず剣先を打太刀の上段の左拳につけながら攻め進む。

・ 仕太刀は、右の鎧をつかい小技ですり上げ、一拍子で正しく右足を踏み出して小手を打つ。すり上げが、払いにならないようにさせる。

・ 残心のとき打太刀は仕太刀に正体しない。

七本目

・ 打太刀は機を見て、両手で仕太刀の胸部を正しく突く(気当り)

※気当りとは、相手を、「打つぞ」「突くぞ」という気持ちで攻め相手の心の反応を見たり動きを予知したりすることである。

・ 仕太刀も相突ききの氣勢で支える。交差した物打の高さはおおむね肩の高さである。

・ 相中段になる時の氣勢は、双方五分と五分である。

・ すれ違いの胴を打ち終わってから、節度をつけて、残心に移る。(刀はほぼ右腕の延長とする。)

日本剣道形 小太刀の形三本 留意点

一本目

・ 仕太刀は受け流す時、鎧の使い方、体の開き方に注意させる。その際、特に体が開き過ぎないように注意する。(刃先の方は自然に少し右下)

・ 仕太刀は拳を頭より高くあげ、刃を後ろにして左鎧で受け流し易いように、手の内を柔軟にして正しく行う。

・ 仕太刀は正面を打って残心をとるとき反射的に上段にとらないようにさせる。

※入身——氣勢を充実して相手の手元に飛び込んでゆく状態をいう。

二本目

・ 仕太刀が再び中段で入身に攻め込む時の剣先は咽喉の高さである。(入身になるときは、剣先は斜め右から下へと変化)

・ 打太刀は一拍子で、剣先をすばやく脇にとり正しく上段に振りかぶり真っすぐに打ち下ろし斜め打ちにならないように注意する。(両腕の間から相手の体が見えるくらい)

・ 仕太刀は残心をとる時に、ことさらに体を進めて相手に接近しないようにする。

三本目

・ 仕太刀は、すり上げすり落とし、すり流し、すり込み。

・ 仕太刀がすり落としした後すり流す時は、手首を柔らかくして、右拳をすり落とした位置からは横一文字に腹部の前を移行し

て(高く上がらぬように)右に運び、すり流す。

・ 仕太刀はすり込み終わる時、手首を起こして仕太刀の「はばき」が打太刀の「はばき」に直角にすり込む。

剣道指導法

剣道指導法の目的

全日本剣道連盟は「剣の理法の修練による人間形成の道である」という「剣道の理念」を掲げ、剣道の方向性を示している。指導者はこれを常に念頭に置きよく理解し、わが国の伝統文化に培われた剣道を正しく伝承してその発展を図り、高い水準の剣道を目指すことを目的とする。

※理法：先人の生命をかけたぎりぎりの刀剣の攻防から剣の法則が生まれ合理性が培われ理法は存在する。

「理論」1. 指導の在り方について

(1) 剣道の指導者の在り方について

① 指導者は常に良好な精神状態である事が望ましい。子供(対象者)は鏡、対象者は指導者の全てを受け入れようとしているから、指導者の精神状態を鏡のように写すものである。

② 剣道技術及び精神面の向上を図ることに努力する。常に「師弟同行」を実践すること。

③ 社会人としてのマナー、エチケットなどの道徳的なことを身につける。

④ 小学生などについては、保護者の支援を求めたい。

⑤ 指導法を研究する。特に「形」の指導は正しい剣道伝承のた

めに必要。

⑥健康の維持・増進を念頭に置く。

⑦剣道を通じての講話に努め、技術の幅と道徳的価値観の育成につとめる。

(2) 剣道指導の在り方について

(ア) 技能区分

・初級（三段以下）

①正しい着装と礼法

②適正な姿勢

③基本に則した打突

④充実した氣勢

・中級（四段及び五段）

①応用技の練熟度

②鍛錬度

③勝負の歩合

・上級（六段以上）

①理合

②風格・品位

(イ) その他の区分（年齢・性別・国別）

幼年、少年…礼法・基本打突

青年…正しい有効打突の習得

高齢者…加齢に応じた技の習得

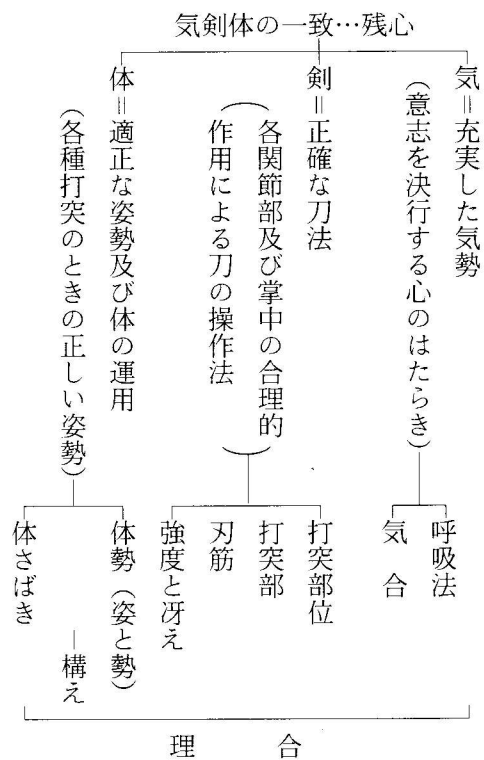
女子…女性の特性に応じた技の習得

外国人の剣道指導…剣道の伝統的・特性的理解

剣道の指導

「実技」 1. 技術実習の指導法

(1) 打突の基本的理解



(2) 具体的指導要領

1. 礼法

2. 基本動作

①姿勢：（自然体）②構えと目付け ③構え方と納め方と蹲踞 ④足さばき ⑤素振り ⑥掛け声（発声） ⑦間合い

⑧基本の打ち方、打たせ方、受け方 ⑨切り返し ⑩体当たり、鏝競り合い、残心

3. 対人的技能（しかけ技と応じ技）

4. 稽古法

佐藤博信先生講習記録

事務局次長 手塚 十三子



の概要を報告します。

第一日 八月二十五日(土)

於 松茂町立第二体育館 午後二時

遠藤会長の挨拶に続き、佐藤先生から激励の挨拶をいただく。少年男子・女子・成年男子の順に、一試合終了後ご指導を仰ぐ。

少年男子 ・ 少年女子

- ・ まだまだ、剣道は序の口、スピードと調子でやっている。先輩達は機会をねらっている。いつ打つかを考えている。
- ・ 技のほとんどが引き面、なぜ引き面か？動きが速くて必ず決まるから、それを出て打つ技にしないとダメ、たくさん打っている間に間違っただったということになりかねない。
- ・ 打つ時は一生懸命打つこと、相手が来た時によけている、相手が来た時に決めないとダメ。

・ 足捌きが先輩達はなめらか、足が速いというだけでなく、相手が来た時に対応すること。

・ 当てっこではない、どうすればよいか

基本技の時、前に出て決める。相手が来たなら逃げてはダメ、見ている方があくびをするような剣道ではダメ、前に出て合わせで決める、そうすれば勝率も倍になる。相手が打ってきた時、すり上げ、抜き、返すなどをする。

・ 右足が浮き足立ってはいけない、両足に重心を。

・ 相手から目を離さないこと。

・ 息は溜めておくこと、息切れしないように。

・ 構えた時の剣先の威力を感じるように。

・ 基本打ちは身体の中心に向かって確実に打つこと。

・ しっかりと技を自分のものにする。

・ 構えて打つ。

・ 怖がって逃げない。

・ 手元を上げない。

成年男子

- ・ 見事な技づかい。人がやっている時、見取り稽古をする、すると疑問がわく。そうすると、先生に質問をする。そのことにより、人の三倍、五倍強くなる。
- ・ 自分自身を信用すること。
- 【閉会式において】
- ・ まっすぐに打つことを心がけてください。

・心をまっすぐに、なぜまっすぐにならないか―当ててやろうと
思うからです。

第二日 八月二十六日(日) 九時三十分

成年男子

【基本錬成において】

- ・構えている時、打つ時、調子を取っている、静かに滑らかに。
- ・隙のないところから詰めて打つ、よけいなことをしない。
- ・基本はねらったところへ確実に打つことが大切。
- ・起こりを見せない。

・両足のバネ、緩み、腰を伸ばす、左足で押し出す。

・よけいな動きをしないこと―角が立っている、それではうまく
いくはずがない。

・いつでも出られる足の幅、広すぎず、狭すぎず。

・目を離さないこと、よくわかるのは胴打ちの時、目線が外れる。

・打ちは確実に、素振りが大切、基本打ちはこれでよいのか、こ
れでよいのかとよく考えながら。

・受けてはダメ、合わせる工夫をする。

・相手が打って来た時が一番のチャンス。相手が打ってきた時、

防ぎはダメ。気後れしない、引かないで出る、そうしないと絶

対に勝てない。応じ技の練習をしつかりと。

【試合において】(個人への評)

六条洋……動きがぎこちない、足元を立てている。

近藤・金野……上下動が目立つ。腰が据わっていない。本体そ

のものが安定していない。足を滑らかに、スーッ
と来ると見えない。

山室……裏からの面、よくつかってください。

前田……受けっぱなし、気持ちが切れている。攻め合い

の線を切らないこと、惜しい。試合中に目線を
外さないこと。そうすると、勝つ機会は倍化す
る。

平野……小手二本、決め方の研究を、何か物足りない。

もう少し溜めるとよい、打つ機会、タイミング。

攻撃が始まった時は六・七本は続けて打つ。打

ち出したら決まるまで止めない。相手の動きに

気持ちをお合わせる。寝ている時も神経を緊張

させるほどに。※私は寝ている時よく動くので

いつも家内から、何をしているのか?と、言われ

ます、「剣道をしているんだ」と答えます。(笑)

【閉会式において】

①手打ちにならない。

・我慢して、溜めて、腰を入れること。

・身体を寄せていく(入る)、攻めること。

・確実に届くところまで手を伸ばすこと。

②合気になること。

特にこの二点について、入念なご指導をいただいた。

8月25日（土）★国体三次予選

成年男子	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
国体選手	六條洋	近藤	平野	福多	西谷
徳島選抜	六條勝	川添	山室	近藤	鈴木
	⊗ ⊙ 	Ⓛ 一本勝	⊙ Ⓛ 	X	⊗ ⊗

8月26日（日）

成年男子	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
国体選手	六條洋	近藤	山室	平野	西谷
徳島選抜	六條勝	金野	前田	鳴川	近藤
	⊗ ⊗ 	⊗ ⊙ 	⊗ 一本勝	Ⓛ 一本勝	⊗ 一本勝

8月25日（土）

少年男子	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
国体選手	西田	鎌田	峰本	松本	福川
徳島選抜	櫻木	福井	鈴木	湯浅	谷口
	⊗ ⊗ ▲ ⊗	Ⓛ ⊗ ⊗	X	⊗ 一本勝	⊗ ⊗ ⊗

8月25日（土）

少年女子	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
国体選手	中川	細川	中野	新居	平野
徳島選抜	仁木	賀上	壺内	近藤	湊
	⊗ ⊗ ⊗	⊙ ⊗ 	X	⊗ ⊗ ⊗	⊙ ⊙ ⊗

女子審判法研修会

女子部 手塚 十三子



期日 五月十九日(土)～二十日(日)
 会場 日本武道館研修センター
 (千葉県勝浦市)
 主催 (財)全日本剣道連盟

全日本剣道連盟の事業計画の重点事項(審判)に掲げられている「女子審判の能力・技術の向上を図り、質の高い審判員を養成

第2回 女子審判法研修会 日程表

【平成19年5月19日(土)～20日(日) 於・日本武道館勝浦研修センター】
 財団法人 全日本剣道連盟

5月19日(土)		5月20日(日)	
		7:30	朝食
9:00	受付	9:00	審判としての 認識度の確認
9:30	開講式	10:00	
9:45	審判員の心得	10:10	審判法実技
10:50			
11:00	試合審判規則の要点	12:00	昼食
12:00	昼食	13:00	審判法実技
13:00	審判法の理解	14:00	
14:00	審判法実技		閉講式
16:00			
16:10	稽古		
17:00	入浴		
18:00	夕食		
20:00			
22:00	消灯		

することを目的として、今年度第二回目の講習会が実施され、全国から二十四名の研修生が参加して二日間にわたる研修を受けました。

第一日目

審判員の心得

田口栄治講師

審判とは、審判者自身の心・技・体を総結集したもので、また、今後の在り方を決定づけるものである。試合者にとっても同様である。「審判がよくなれば剣道もよくなる」とはよくいわれていること、活気喚起、正しいか否かを自覚させ、さらにより剣道に向かうように。剣道をよりよい方向へ善導する、そこに審判の意義がある。

①公平無私―持田先生はさわやかな心根、「光風霽月のごとし」とおっしゃっておられる。

②剣道試合・審判規則、細則、試合・審判運営要領を熟知し、正しく運用すること―励行する、法制力をもっている。

規則は人間の自然の摂理、社会通念を網羅してできている常識に富んでいるもの。

③剣理に精通していること―他のスポーツはルールを知っておればよい。剣道は複雑、精神的なものが含まれている。理合、理法、技術、精神面など。試合者より一つ上の段階で審判にあたること、技の熟知も重要。

④審判技術に熟達していること―複雑、対の技、絶対性がない。内面的要素、あらゆる事実を判断すること。

⑤ 自然体でかつ活動的であること。

審判員の任務

① 有効打突を正しく見極める。

② 禁止行為の適正な判断と正しい処置。

しかしながら、グレーゾーンもある。だがそれは、試合審判規則には載っていない。そこで、試合・審判規則の第一条(目的)に照らし合わせて処置をする。

審判員の使命

それは、善導。剣道の発展、普及に寄与すること。

重点事項

① 内容を正しく判断する―目的、内容、規模など。競技性や錬度を考えて判断する。高齢者が試合中に倒れた場合、一呼吸置いて「止め」をかけるのでなく、早めにかける。子供の試合においては反則の内容を説明するなど。

② 有効打突を正しく見極める能力を養う―規則を正しく理解し、妥当性や客観性に富んだ判断を行う。

・ 有効打突の要件と諸要素の理解(間合、機会、体捌、手の内の作用、強さと冴えなど)
・ 技の違いと錬度に応じた技の見極め(大会の内容、錬度、玄妙な技など)

③ 禁止行為の厳正な判断と処置について(規則第十五条・十六条・

十七条)

・ 行為の原因と結果の正しい見極め

・ 禁止行為に対する的確な処置(厳正な判断、勇気ある処置)

試合審判規則の要点

大切な条文は規則第一条、「剣の理法を全うしつつ、公明正大に試合をし、適正公平に審判する」特にグレーの部分判断する際に役立つ―基本的な概念、判断基準となる。試合規則とは、試合者が同じ条件になるように。審判規則とは、試合者の行為が正しいか否かの判断。規則の中では、全てを表現していない、経験なども大切になる。そのための手引書といえる。

審判法の理解

林 邦夫講師

① 自己の稽古を高めて、審判技術の向上を高めるしかないことを実感する。

② 昨夏の全国家庭婦人大会の審判は大変よかった。(本研修の成果ともいえる)

③ 「始め」「止め」など大きな声で。宣告は試合の活性化に繋がる。女子の審判は声が小さいようだ。

④ 全日本女子選手権大会における女性の審判は、男性の審判に追随した感がある。自分だけが有効打突の旗を上げて後の二人は上げていない、これではまずい、三人の呼吸が合うような判定を。また、自分だけが先に上げていつまでも旗を上げて誇示しているのは見苦しい。そこは一呼吸置いてから上げる。玉竜旗は消化試合の感が否めない。

審判法実技

(入退場において)

- ・他の人と接触しないこと——我々は周囲から見られているので、気配りを、「審判です」という意識をしっかりとす。
- ・座っている時に、今の審判はよいのか、どうかをよく意識して見ることが大切。

- ・コート of の広さを把握しておく必要がある。通常は八歩（個人差あり）入れば主審はそこで止まる。自分の距離を作る。
- ・定位置につく時の目線はまっすぐに、開始線すれすれの所を通る。

- ・旗は下に突き刺すように、胸を張って背筋を伸ばす。
- ・旗の表示を確実にする。（赤、白、止め、分かれなど）

- ・切り込みについて。
- ・前の審判が礼をして戻る時、次の審判が入る。審判の交替をスムーズに行う。

（審判実技）

- ・「相互に」「お互いに」（礼）は言わなくてもよい。
- ・小手の紐がブラブラ、目印がついているかどうかなど、近くの審判が見極める。

- ・抜き胴に対して、有効判定を下した時、試合者を見ながらもとの位置に戻る。（試合者から目を離さない）
- ・当たっただけで旗を上げるのは早すぎる。見極めて、一拍子置いてから。

- ・打突した部位が見えなかった……しかし、気を合わせた審判も重要。（一番見えるところに位置を取ることが最も大切）

- ・旗を持って立っている時、胸を張って重みのある動きをする。試合者に対して、正対して。有効打突だけではない、常に動きが散漫にならないように。

- ・試合者だけ（左右）を見るのではなく、全体を見るほうがよい。
- ・試合者が動いたらすぐつられて動くのではダメ。

- ・審判は自分のことは自分でよくわからない。お互いに言い合うことが大切、自分を高めるために。

- ・一〇〇パーセントの有効打突と六〇〜七〇パーセントの有効打突がある、評価範囲内の一本もある。何かが足りない、気、剣、体の不一致ともいえる。

- ・自分の行動や歩き方にも品が備わるように、休憩している時にもそのことを十分意識して。

〔審判実技前半を終了しての評価〕

- ・全体的にはCかDの判定。
- ・審判員としての意識が足りない。
- ・足のかかとをつけること。

〔審判実技後半を終了しての評価〕

- ・差し違えがある。
- ・主審がよく動くのは一見よいように思われるが、試合者につられて、もっと試合者の動きを読むこと。

- ・無駄な動きが多すぎる、その要因は相手の動きが読めていないこと。相手の癖を見抜くこと。（有効打突、打つ前、その人の特徴を読む）

・背筋をピッと伸ばす。

・宣告は区切りをつけて。(決めつけるような宣告の仕方)

【総括】 田口講師

・ずいぶん多いのがかかと開き。

・姿勢が悪い。(顎が出て緊張の意識が足りない)

・有効打突の表示の後、目が離れている。

・宣告の声が小さい。

・動きを先取りすること。(選手が動く前に動く)

・最初の歩幅は大きく、そして小さくまとめること。(訓練する)

・感覚で表示(独善)している人がいる、見極めと表示を正確に行う。

・ハッと旗を上げない、逆に手を締める。(力を入れる)

第二日目

〔朝稽古・・・折角の機会を得て八名が参加〕

審判としての認識度の確認

一、有効打突の要件と要素について述べなさい。

二、規則第十七条(諸禁止行為)と細則第十六条(規則第十七条

七号の禁止行為)について説明しなさい。

審判法実技

林 講師

・コートの広さをまず確認しておくこと。

・上段の試合審判をする時は二等辺三角形の形をもう少し小さく。

・審判の服装は端整に、ズボンの長さが長すぎないこと。(靴を

履いて歩く時と床に立つ時の長さは当然違う)

・試合者のお尻を見る位置に立たないこと。

・試合が始まった時、審判は二人の試合者に合わせてすぐに動いてしまうが、これはいけない。二人はどう動くか、立ち上がった時「突き技」の見える位置が大切。

・大きい会場での宣告は大きい声で行う。

・主審が、当たっただけで旗を上げる、すると副審が遅れて上げ、さらに取り消す、これが一番悪いケース、そう簡単に旗を上げるなよ、の精神が要る。

・旗を持ったとき、体側に旗をつける、時々意識してみる。(そう簡単には上げないよ)

・旗の柄頭を余して握らない。

・有効打突を見落とすのは審判として一番まずい、審判の資格なし。

・有効か無効か、研修生の意見が半分半分に分かれた……それは見る角度にもよる。

総評 田口講師

(昨日に比べると格段によいが……)

①旗が体側についていない人がいる、いかにもたるんでいる感じがする。

②選手の動きを読んで動くこと。

③宣告の声が小さい、張りのある大きな声で。

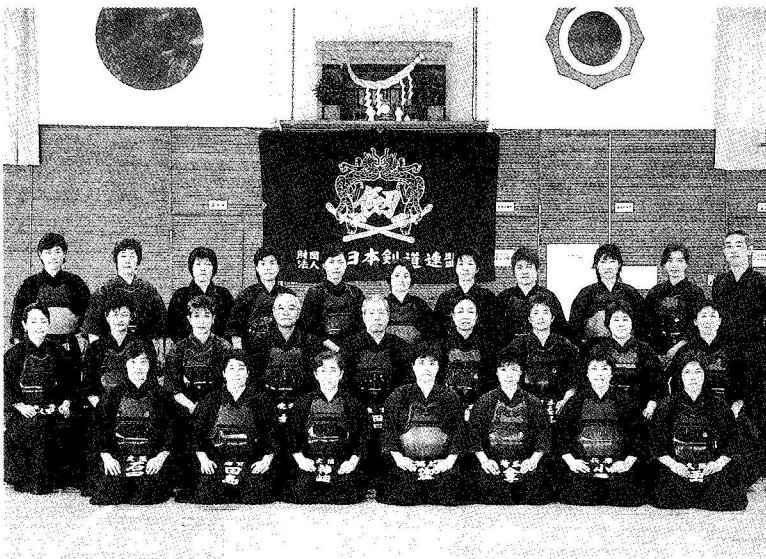
④表示の仕方 「止め一(頭上)」「引き分け」(頭上前で交差)

「反則」(概ね四十五度……細則に記してはいないが。)

- ⑤ 歩く時、昔の武士は物を持った時、物を振らない。
 - ⑥ 主審は選手を中心にキープすること、それをしないから副審がどこに行けばよいかわからない。
 - ⑦ 宣告の仕方、間延びしないこと、大きく強く。
 - ⑧ 副審の位置取りについて、もう一人の副審が手を上げていのが見えない、必ず他の審判が見えるところにいること。
 - ⑨ 定位位置につく時、主審が「それではお願いします」と小声で言う、それは運営を掌るものとなる。
 - ⑩ 有効か否かの見極めを感覚で挙げて人が多い、充実した氣勢、妥当性、客観性などしっかりと判断する。
 - ⑪ 有効打突後、選手から目を離さない。
 - ⑫ 相打ちの判断、しっかりと見極める。審判に立っていると、どちらかが速い、相打ちはないという感覚で瞬時に判断する。
 - ⑬ まだ、かかとを開いている人がいる、試合者や観客に、審判が一生懸命しているなど思わせる姿勢、態度が欠けている。
 - ⑭ 上段の試合者がいる時には、副審は少し幅を狭めて「突き技」が見える位置に立つ。
- 「この研修を経た皆さんの中から、全国家庭婦人大会及び、全日本女子選手権大会の審判員を任命します。研修会の主旨をよく理解して、今後ともしっかりと研鑽に努めてください。」とのお言葉をいただき、昨年に続いて二度目の研修の機会をいただくことができた。二日間にわたる講習の内容は、審判員としての基礎的・基本的な事項が繰り返し指導される中、時に厳しい喚起の言

葉が各講師から発せられた。審判の責務を全うするその覚悟と実践力は、自身の日々の稽古に取り組む姿勢に他ならないことを随所で痛感させられた。閉校式が再度開校式であるような緊張感と焦燥感を覚えた。

今後とも女性としての特性を活かした品性と味わいのある剣道を目指して、その本質の理解と深化に努めるべく、懸命に修練に励みたいと思う。



女子剣道審判講習会に参加して

竹内 佳代子

平成十九年五月十九日、二十日と、兵庫県立武道館で行われた女子剣道審判講習会に平野悦子さんと二人で参加させていただきました。

太田友康先生、村上済先生のご指導のもと、次のような日程で講習会が行われました。

平成19年5月19日(土)～20日(日)
第12回 女子剣道審判講習会 日程表
(於・兵庫県立武道館)
財団法人 全日本剣道連盟

5月19日(土)		5月20日(日)	
			9:30
		審判実技師 全講	
		昼食	12:00
13:00	— 集 合 —		13:00
13:30	開講式	審判実技師 全講	
	試合・審判規則 要点説明 審判実技師 全講		15:00
18:00	稽古	閉講式	
18:30			

○計画の都合により変更の場合もあります。

試合・審判規則の要点説明では、特に審判員の立つ位置、審判旗を扱う所作を細かくていねいに教えていただきました。普段わ

かっているつもりになっていたことを、改めて確認でき、見直すことができました。以下要点をまとめておきます。

①立ち姿……かかとをつける
すり足で移動

②反則……目線がかわらないようにし、背筋、首筋を伸ばす
特につばぜりあいの見極め

③主審……選手の着装、竹刀のチェック、宣告の声ははざれよく。

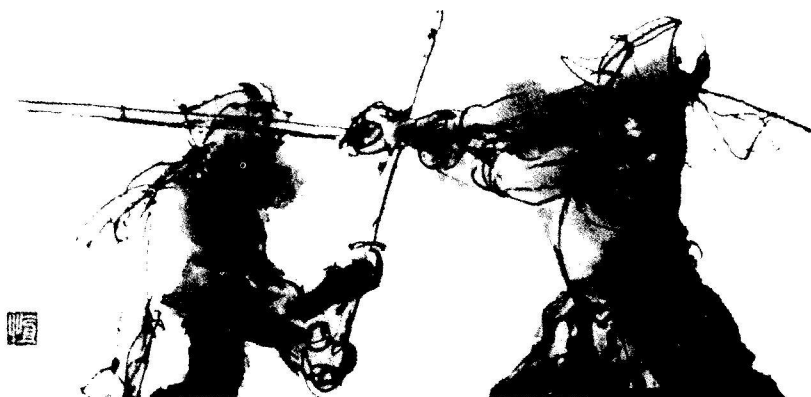
④副審……互いに旗の表示が見える位置取りをする。

審判実技では、有効打突の見極めについて、厳しく指導をうけました。白でもない黒でもない、いわゆる「グレイゾーン」の判定。お二人の講師先生のご意見も分かれ、改めて有効打突の判断の難しさを感じました。実際の試合においては、審判の判定一つで勝敗が分かります。選手たちは、その日の試合を一つの目標に練習に取り組んできています。どんなに渾身の思いを込めて一本打ったとしても、審判の旗が上がらなければ勝負に勝つことはできません。逆に、不十分な技だとしても、審判が旗を上げれば一本になってしまいます。本講習会に参加されている女性は、みなさん六段、七段を取得し、地域の大会で中心となって審判をされている方ばかりです。しかし、三人の気持ちすべて一致することとは、なかなかありませんでした。自分自身も、先生方から厳しい指導をうけ、「なぜ今のが一本でないのか」という問いに、有効打突の条件である五つの要素・要件の何が足りないのかを、き

ちんと説明することができませんでした。それゆえに、反省と落ち込みの二日間でした。

試合というのは、大きな大会であれ小さな大会であれ、選手にとっては、一生の中で一度きりのものです。「有効打突を見落した」などという、失敗は許されません。「審判がよくなれば試合がよくなる。すると剣道がよくなる。」と村上先生も言われていました。「正しい審判をすることが、正しい剣道を育てる。剣道の発展に審判の力量がかかっている。」そう思うと責任重大です。「だから審判をする時は、体調も整え、心身共にベストの状態で臨まなければならない。」と言われた講師先生の教えが胸に響きます。

この講習会に参加させていただき、今まで以上に審判の重要性がわかり、大変勉強になりました。そして、このような講習会に積極的に参加することの大切さがよくわかりました。これからも、どんどん講習会に参加し、審判員としての実力をつけていきたいと思えます。また、たくさんの熱心な女性剣士の方々と出会え、大変刺激になりました。このような機会をあたえてくださり、本当にありがとうございました。



日本剣道形講習会に参加して

(徳島県剣道連盟主催)

応神中学校 大田 紗耶加



私は、平成十九年八月三日、四日にわたりソイジョイ武道館で行われた日本剣道形講習会に参加させて頂きました。三日は登校日だったので、講習会に間に合うよう早退し、なんとか開始の間に合わせる事ができました。

講習会では、二級以下、一級、初段以上の三グループに分かれ、私は初段以上のグループで、主に中村先生や坂下先生に指導して頂きました。

私が剣道形を練習したのは初段を受けて以来だったので、まったくと言っていい程覚えておりませんでした。しかし、実際練習してみると、身体は大体の形は覚えており、少し驚きました。私が特に指導を受けたのは、突きです。三本目の打太刀は水月を、任太刀は胸部を、四本目の打太刀は右肺を、そして七本目の仕太刀は胸部を突くのだと熱く指導して下さい、私は突く所がどこなのか理解することができました。他にも、すり上げ技や七本目の任太刀の胴打ちが苦手な私を、優しく細かく指導して下さいました。

同年九月十六日に実施された審査会では、指導を頂いた先生方のお蔭で、なんとか二段に合段することができました。合格が分かった時、嬉しさで涙が出そうになりました。応援してくれていた、先生方、家族、友人達に合格を報告すると、みんな笑顔で「おめでとう。」と、言って下さいました。その一言で、より一層嬉しさが込み上げてきました。

日本剣道形講習会は、二日間という短い期間でしたが、とても充実した二日間でした。あの真剣で緊迫した空気は今でも忘れることができません。私は、二日間で沢山の事を学びました。その学んだ事を忘れず胸に刻み、これからの剣道へ生かしていきたいと思えます。最後になりましたが、ご指導して下さいました先生方、応援して下さい皆さん、本当にありがとうございます。そして、今まで私には厳しく、時には優しく指導して下さいました岡田洋典先生、本当にありがとうございます。これからも宜しくお願いします。



徳島の剣道史

大聖中川古助先生

剣道史担当 坂本裕二



中川古助概要

脇町はかつて国主蜂須賀侯の家老稲田家が居住して、文武を奨励した。従って有名な関口流神全塾武田家の尺龍、呼応

龍、龍山、同流派の伊勢伝左衛門、磯村進、工藤剛太郎。中川一刀流の創始者の中川古助等の石碑や墳墓がある。

本稿では此処に古助の生家の系統や古助の行跡を記述する。

中川古助は号を南国と言ひ、享和三年（一八〇四）、現美馬市脇町字西赤谷四三八笠井永治氏の家で生まれた。

古助の遠祖は桓武天皇の後胤の葛西清重と言われ、中世、清兼の代で葛西を笠井と改め、五世の高清は讃州香川郡香西にある香西城主となった。天正の頃（一五七五―）土州長曾我部元親の進攻を逃れ、阿波国美馬郡曾江に移住し、阿波の国家老稲田修理之助に仕えた。稲田家は国主が小田原の陣、高麗陣、大坂陣に出陣したので、笠井氏一族もこれに従って出陣したが、高き清は朝鮮

の役（慶長の役）で討死にされたと言われる。

古助は幼少より武を好み、脇町猪尻の武田氏の神全塾に入門して武田旨助に親炙した。更に奥義を極めるべく江戸の一刀流中西塾に入門して中西忠太に親炙、ここで八年間修練して帰郷し、幼少より共に稽古した近所の佐藤二三太と試合した。しかし江戸で八年間修練したといえども佐藤に散々に大敗した。古助は之に奮起し、直ちに江戸修練に出発、今度は一層切磋琢磨し、十三年間師匠の薫陶を受けた。その間、文武両道の奥義を得るに至り、古人の未発の説を「天朝義学」として現わし一家を立て、また兵法書を草し「合武帰真の法」と名付け世に発表した。その他、諸芸にも通じ希代の英聖と呼ばれるようになった。帰郷するや、道場を開き、門人に文武両道を教授した。後年、藩に召出され、拝原村の大荘官となり、住民は、皆彼の恩恵に浴した。しかし、吏員の中には、これを恨み、邪計を企てる者があって、古助はこれをきらって長子に職を譲り任を辞した。

一方剣術では徳島郡代三間勝造（三間勝造 三間家の九代、文政三年六月七日生―明治五年没。高 一五〇石、海部・美馬・三好・名西・名東各郡代を歴任。）の依囑を享けて、吉野川筋の教授師範となった。古助は阿淡両州の試合剣術の開基と言ってもよく、南海道（紀州、淡路、阿波、讃岐、伊予、土佐の六国）における中西派一刀流の家本になった。

安政五年（一八五八）七月二十四日、辞世（別添墓碑銘・辞世語句参照）を残し五十六歳で没している。法号は、文藻院月鑿水

應居士。

吉野川中流の武術は貫心流や関口流が主流であったが、古助の墳墓には師範代二名、高弟十名、皆伝八名、免許三十八名、弟子一三三名と大勢の姓名が彫られている。これは古助が江戸一刀流師範中西忠太より剣の蘊奥を極め帰郷するや一刀流の家本となり、今迄のような形稽古を主体とせず、竹刀打ち込み稽古、試合、更に他流試合を積極的に行なったことが一刀流剣術の大きな魅力となり、画期的に門弟が増加したと考えられる。

中川古助と中西派一刀流

中川姓の由来については、次のようないきさつがあるので特記する。師匠一刀流中西忠太は古助が入門して前八年後十三年間修行して帰郷する時、中西の一字「中」を与え四国唯一の大河吉野川の「川」の一字を取り、「中川」の姓を創作して笠井古助に授与した、これより笠井を中川に改姓したという。

以下、中川古助の墓碑銘及び関係資料・写真を掲載する。

○ 中川古助の墳墓 場所 古助の生家の東の山麓

墓碑名

向かって右横 当家二代中川古助子範立

正面 大聖中川先生墓

左横

先生遠祖 桓武天皇后胤 葛西清重裔也 中世清兼改氏笠

井此五世高清為讚香城主天正頃避土州兵来阿北事国君此十世

先而阿州笠井氏祖也先生東遊受劍業於中西氏後廻諸州其名轟海内終達文武両道発見古人未発之説自立天朝義学之

一家又改兵書謂合武帰真之法此他諸芸無不適実希代英聖

誰有争其德者中年徴为大荘官国民化其德無奸謀之訴雖然奸吏恨之為邪計故先生使長子辞其官安政戊午初秋二十四日書辞

世詩卒

詩曰註1乘上紫雲還自疑曉得風身註2転位時註3撤去人間無限苦

月涼西土萬峯註4

先生「阿淡兩州試合劍術開基南海六州一刀流家本也」

西師範代 北条太郎兵衛 東師範代笠井秀之進

花立 (正面) 藤川小平太 緒方友一郎 五嶋真之丞

横 細川晋 武内理右衛門

花立 (正面) 小原富太郎 都築和三郎 三上達助

横 伊澤莊太郎 三肥市十郎

皆伝 (正面) 吉田卯七 平尾英蔵 中沢由助

都築和太蔵 外山平助 酒巻與惣

野村弥四郎 清水繁之丞

免状

石井道之助 笠井茂兵衛 吉田兵平 佐藤純蔵

森 喜藤太 富本五郎 米岡三大夫 八十川長左衛門

吉村亀太 岩島種吉 森住武蔵 幸田利八郎

井形豊三郎 佐藤金平 佐藤仲太 佐藤膳治

免状

松尾長三郎 小野善三良 笠井林太 三宅宇兵衛

佐藤虎五郎 谷友八 □田長九郎 佐藤永之助
三宅勝三良 高尾莊十郎 佐藤清次良 青山由岐之進
杉原新三郎 津田儀兵衛 佐藤治平 細川多平
仲尾彦吉

上段

住友長三郎 同源三郎 同利三朗 同民三 同〇三
同市三 佐藤貞三 同岩三 同八重太 同哲五郎 同永五郎
同安左衛門 同市〇 真鍋安二丈 笠井仙二丈 同惠美太
同〇一 同〇〇 同善太 同李太 石川〇一 笹島春太郎
藤川喜平 古林万平 大久保藤助 長尾〇三郎

下段

佐山官三 馬場〇 酒卷〇三 中尾茂吉 〇田吉三
吉田原十郎 三宅伊三郎 竹岡木助 〇田伊作 石川要平
〇〇川久吉 大野田右衛門 同〇十郎 〇豆成鹿之助
山尾新十郎 原為十郎 犬伏〇十郎 〇田〇太 土肥正平
古山甚右衛門 古林〇右衛門 林孝太郎 小川安平 西川勝三
〇〇〇吉 柏尾〇三 米田秀右衛門 米田〇之助 篠原〇之助

上段

兼松磯大夫 大内茂吉 吉村佐五郎 同弥三 岩本〇〇太
野々村多吉 同嘉四郎 中内増助 蓮池貞之助 〇山房吉
〇田政右衛門 長田〇一郎 国見〇〇 浅尾政三
三木六右衛門 〇崎宗三 三宅忠三郎 伊澤寛三郎
森田〇〇〇 吉岡栄三 平尾〇之助 同五郎 吉岡多左衛門

藤井源太郎 河野徳三郎 赤沢茂平 須藤忠右衛門 同利平
篠原嘉八郎 遠藤〇一郎 同弥三郎 安友〇八郎 森弥三郎
松永恒三 片山午平 細川平八郎 幸原源左衛門
兼松益郎 赤池新五郎 吉岡与市 同与惣兵衛
西〇高之助 杉原勇作 工藤〇右衛門 中沢甚之助
都築亀平 同角三 狗井文吉 小川竜吉 同禮三 田中嘉平
平嶋〇之助 秋山〇三 坂東金三 三宅虎〇 亀井善太郎
吉田喜八

下段

辞世語句
注1 乗上紫雲 臨終に際し阿弥陀は紫の雲に乗り死者を迎え
に來ること。
注2 転位時 死者の靈を数えるのに使う言葉、「英靈百位」、
死者として数えられる時が來た。愈々死んだ。
注3 人間 じんげん 無限苦撤去ス人間社会の無限の苦勞から解き
放されること。
注4 岫嶷 岫は山の重なり、深い山。嶷はけわしい。

〇一刀流の略系譜

伊藤一刀斎景久——小野次郎右衛門忠明——
天文十九(一五五〇)八月五日生、生国伊豆、近江、加賀、
金沢、越前敦賀説があり詳ならず

小野次郎右衛門忠常（小野派） 中西忠太子定

同忠蔵子武 同忠太子啓 同忠兵衛子正

浅利又七郎義信 千葉周作成政（北辰一刀流）

安政二、十二、十（六一）

浅利又七郎義明 山岡鉄太郎高歩

明治十七、四、十六（一刀正伝無刀流）

（七二）

明治廿一、七、

十九（五二）

○中川古助関係写真



→ 中川古助の墓
向って右側当家二代中川古助子範立
向って左側中川家の来歴台石に門人名

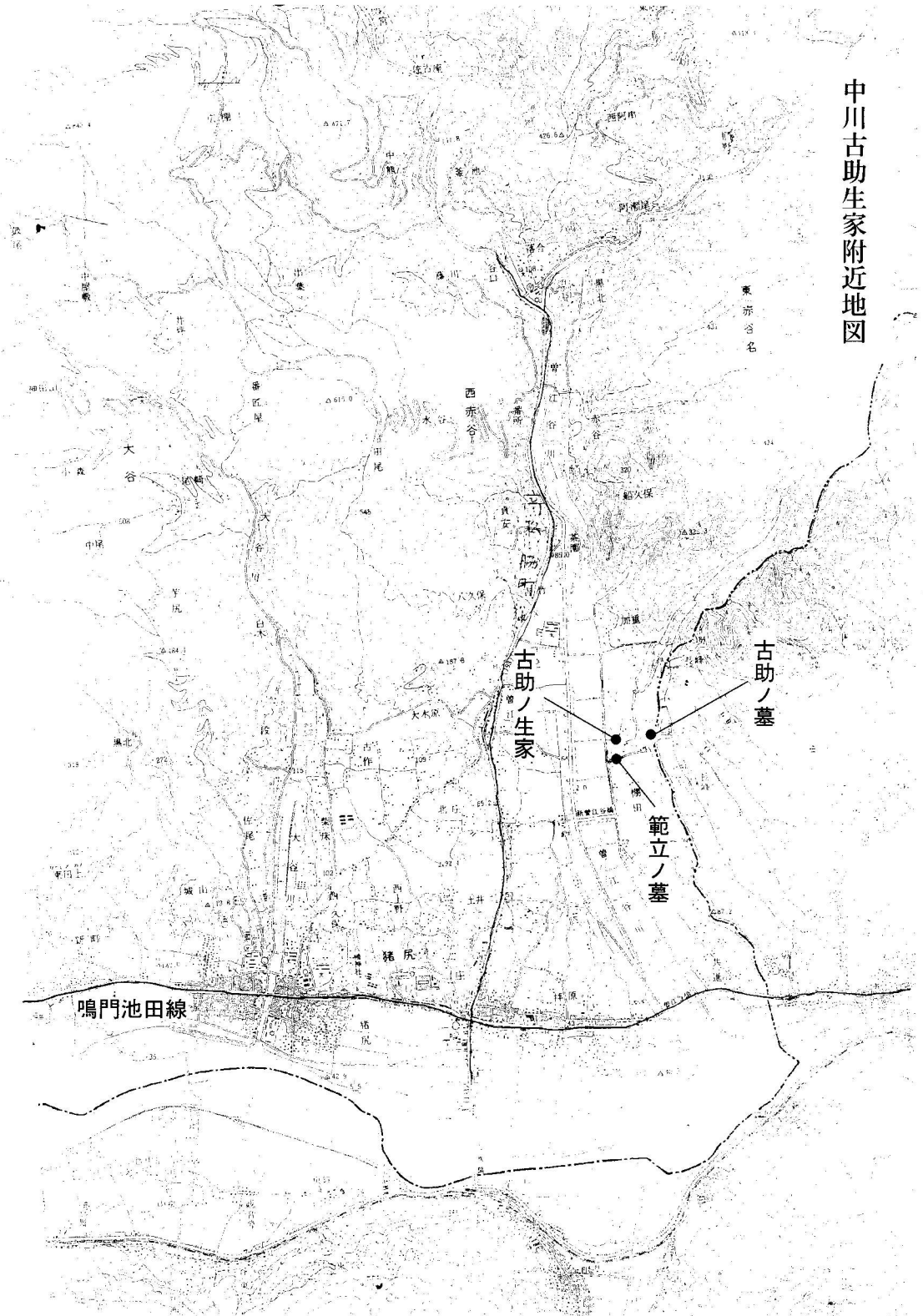


→ 中川古助子範立の墓
明治十九年（一八八六）十月廿四日没
場所 生家の西南の共同墓地



↑ 現在の中川古助の生家跡 古助当時八十二間の桁の母家。前に長屋門有り
現在の納屋の拠に稽古場があったと言う。

中川古助生家附近地図



恩師 “山家雪齋”

竹原 実太郎



「武徳殿は公式の演武場である」皆がそう思っている時代に自ら私的に思いどおりになる道場が欲しかった。剣道を通して人間としての人格を創造したい、思い込んだらすぐ実行に移す、取るものも

とり敢えず最も手近なところで文字どおりアツと言う間に急造道場が出来上がった。その名を手づくりの振武館と言った。戦災であと形もなく焼失してから既に六十余年、今となっては宝物のよくな初代の「振武館」を「まぼろし」に終らせたくない。筆者の切実な願望を恩顧の先生方に是非とも人生の日記帳に書き留めていただくようお願いしたい。

徳島市をよくご存じない方でも富田橋と言えば古くから有名な橋で、南から北へ渡るとすぐ左側にキリスト教会がある。道をへだててすぐ前に「ドイツ軒」というその頃有名なパン屋さんがあった。映画「バルトの楽園」でもお馴染みの板東俘虜収容所にパン工場があり、そこで技術を学んだと噂に聴いたが、詳細不明、でも絶好の目印だった。何故かと言えば目印がなければ通り過ぎてしまう。そのすぐ横の露地ともおぼしき小路を入ると左側に山家家の家作があった。そのうちの二戸をブチ抜いて道場をつくった。

二階だてだったので天井の高い採光快適の道場が出来上がった。今のように地震には敏感でなく、新しいとか古いとかが基準で物を考える時代でなかったことが幸いした。ちなみに戦後になってこの辺りを幸町と言った。

筆者は十三、四才頃から日記を付けている。振武館道場が出来たのは何時ごろか？時代の風化が進んでいる上に戦災で焼失したので詳細不明だが、おそらく昭和十五年頃だったと思われる。筆者と山家先生との出会いは昭和十二年以来七十年になる。最初に教わったことは「打突の瞬間にあたかもタオルを絞るようなつもりで両手に力を入れる」だった。もとより目の相手に居る素早く面が欲しい時、瞬時に先生の教えどおり出来るか？永遠の課題を背負ったまま久しい。

その頃は家事についてすぐ不器用な先生を永年支えてきた。奥さんが突然お亡くなりになった。悲嘆にくれる先生のお顔を見るのがつらかったが、何事もなかったように泰然とご挨拶されていた。人の世話は買ってでもするが、身内のことで同情されるのを極端に嫌う物凄い負けぎらいの一面を見た思いで何とも言えない感動を覚えたことを今も忘れない。

人の世話と言えば自ら剣道研究会という名の会を立ち上げ会費を集めた。実はその頃武専に合格した前途有為の学生に生活費を送った。筆者の父から聴いた話では山家先生ほどの類まれな義挙を知る人はいない。無類の負けず嫌いを絵に書いたような硬骨、頑固で融通のきかない話は数限りない。シナイは生涯を通じて



竹刀^{ちくとう}。サラリーマンのようなスーツはお似合いに非ず、いつも茶系統の和服を召されて袴を付けられた正装。戦争たけなわの頃、内外で有名になった軍国主義校長が居た「皇国即我、我即皇国の信仰」に徹せよと生徒に訓示して意気盛んだった。先生はウマが合わなかったようで一年生と五年生を同時に授業するよう厳命されたので黙って辞表を書いて学校を去った。誰が何と言っても後戻りはしない。その頃故あって学校事務局を手伝っていた筆者の学友から相談があったので覚えていますが、先生は御自分の個人的なことは誰にも言わないのでその間の経緯を承知しているのは筆者だけになった。

剣道界はまさしく少子高齢化、入門する子どもの数は極めて少ない。然し他に趣味を持たず、剣道を教える為に生まれてきたような存在は恩師を措いてほかに見当らない。しいて言えば彫刻の仕事が趣味と言えるもので、生業にもかかわらず気に入らぬ仕事は一切手

を付けなかった。

先生が若い時から師事したのは剣聖山根正雄範士であった。忌部神社の参道右側に観潮院という禅寺がありその前庭最も良い場所に山根範士の顕彰碑が建っている。建立に当って最も力を尽さなかったのが、恩師山家先生で時代の風化と共に早や知る人は殆んどない。山根先生は九段の玄武館道場で千葉周作と試合をしてコテを一本取ったと伝えられ、戊辰戦争に従軍した時警備についていたが戦争が終ってヒマだったので京都市中の道場を片っパシからたずね歩いて、猛烈な稽古をしたと言う。この人こそ剣道の申し子のような存在で幕末の剣道の形（カタチ）を今に伝えるのに大層功労のあった偉大な言うならば神様のような人だったらしいが、紙数が足りないので詳述できない。山家先生の身体は決して大きくないが上から下へ打ち下ろす基本に忠実な豪剣は師匠山根先生ゆずりのものだと言われている。ともあれ振武館のおかげで数限りない教訓を得た。真の意味で先生が教えたものは社会正義であり、世の為人の為に尽す報恩の精神と言うべく剣道はそこまでの道程であり単なる手段に過ぎない。

あとがき

私ごとで恐縮だが、筆者は競技としての剣道が大好きで打突の瞬間勝負の醍醐味は何とも形容しがたく身ぶるいするほどの魅力あふれるものだと言われている。いづれ機会を得たならば師匠恩顧の先生方に教えを請いたいと思う。

大会所感

平成十九年度

男子五十三回女子四十一回

四国高等学校剣道選手権大会

徳島県高体連剣道専門部

委員長 本 田 敦 彦



初優勝が決まりました。

一年前の五月、阿南工業の佐々木先生と二人で、試合の競技委員長と総務委員長として、阿南市スポーツ総合センターに下見を兼ね挨拶に来了ました。当時センターの職員だった金久先生と、試合場の方向から会議場や更衣場所までをシュミレーションしながら、こんな素晴らしい会場で四国

の代表が集えることに喜びを感じていました。

三月までに宿泊場所は旅行会社を通じて押さえてありました。こんなに早く動いたのは、徳島での四国大会の開催が例年になく多く、試合会場や宿泊場所の確保が困難になるおそれがあったからでした。幸いなことに、阿南の地で大会を開催したのは剣道競技だけでした。

位の阿南工業の福川君と富岡西高校の松本君、彼らの胸には会場の準備を手伝った高校生の代表として、誇らしく光るメダルがありました。

中堅のキャプテン谷口が小手の一本をとり、試合終了の電子音が鳴ったとき阿南工業の

試合当日、他の四国三県の専門委員長は、広々とした試合会場や施設のすばらしさを讃えていました。私は謙遜しながらも、会場だけではなく試合での徳島の活躍も確信していました。前日の準備が終了した時点で、手伝ってくれた出場校の剣道部員を集めて、「明日からの試合は、四国の剣道選手を迎え、お世話するとともに、試合に勝つことを目標にして下さい。」と話をしました。一生懸命手伝ってくれた高校生に、是非とも活躍してもらいたかったのです。

閉会式。男子団体優勝の阿南工業高校、女子団体三位の富岡東高校と富岡西高校、男子個人準優勝の那賀高校の西田君、同三



2007四国剣道大会 男子団体リーグ

A	徳島文理	丸 亀	松 山 北	高知学芸	勝 点	勝者数	取得本数	順 位
徳島文理		$\frac{3}{1}$	$\frac{4}{2}$	$\frac{5}{3}$	2	6	12	3
丸 亀	$\frac{5}{3}$		$\frac{2}{1}$	$\frac{4}{3}$	2	7	11	2
松 山 北	$\frac{3}{1}$	$\frac{3}{2}$		$\frac{6}{4}$	2	7	12	1
高知学芸	$\frac{1}{0}$	$\frac{3}{2}$	$\frac{2}{0}$		0	2	6	4

B	明德義塾	帝京第五	尽誠学園	川 島	勝 点	勝者数	取得本数	順 位
明德義塾		$\frac{2}{1}$	$\frac{5}{3}$	$\frac{3}{2}$	2	6	10	2
帝京第五	$\frac{3}{1}$		$\frac{4}{3}$	$\frac{4}{3}$	3	7	11	1
尽誠学園	$\frac{2}{1}$	$\frac{1}{1}$		$\frac{4}{2}$	1	4	7	3
川 島	$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$	$\frac{2}{1}$		0	2	3	4

C	丹 原	阿南工業	高知工業	高松南	勝 点	勝者数	取得本数	順 位
丹 原		$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	1	3	3	3
阿南工業	$\frac{1}{1}$		$\frac{1}{1}$	$\frac{4}{3}$	2.5	5	6	1
高知工業	$\frac{2}{2}$	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{1}$	1	3	3	3
高松南	$\frac{1}{1}$	$\frac{3}{1}$	$\frac{5}{3}$		1.5	5	9	2

D	琴 平	高 知	城 北	新 田	勝 点	勝者数	取得本数	順 位
琴 平		$\frac{3}{3}$	$\frac{4}{2}$	$\frac{5}{3}$	2	8	12	1
高 知	$\frac{1}{1}$		$\frac{2}{2}$	$\frac{1}{1}$	1.5	4	4	3
城 北	$\frac{6}{3}$	$\frac{1}{1}$		$\frac{3}{2}$	1.5	6	10	2
新 田	$\frac{4}{2}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{3}{2}$		1	5	8	4

2007四国剣道大会 女子団体リーグ

A	高松桜井	富岡西	松山南	高知小津	勝点	勝者数	取得本数	順位
高松桜井		$\frac{2}{2}$	$\frac{3}{2}$	$\frac{2}{2}$	2.5	6	7	2
富岡西	$\frac{2}{2}$		$\frac{3}{3}$	$\frac{3}{3}$	2.5	8	8	1
松山南	$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{1}$	0.5	2	2	3
高知小津	$\frac{0}{0}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$		0.5	2	2	3

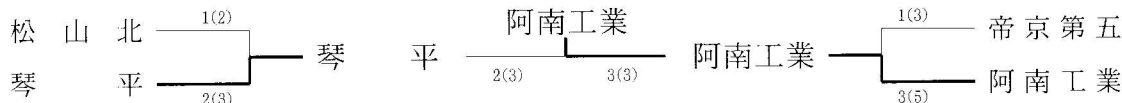
B	高知	丹原	川島	丸亀	勝点	勝者数	取得本数	順位
高知		$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$	$\frac{4}{2}$	2	4	6	2
丹原	$\frac{4}{3}$		$\frac{2}{2}$	$\frac{7}{5}$	3	10	13	1
川島	$\frac{0}{0}$	$\frac{0}{0}$		$\frac{7}{4}$	1	4	7	3
丸亀	$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$	$\frac{1}{0}$		0	1	2	4

C	帝京第五	高松商業	嶺北	城北	勝点	勝者数	取得本数	順位
帝京第五		$\frac{8}{4}$	$\frac{7}{4}$	$\frac{7}{5}$	3	13	22	1
高松商業	$\frac{0}{0}$		$\frac{5}{3}$	$\frac{4}{3}$	2	6	9	2
嶺北	$\frac{1}{1}$	$\frac{1}{1}$		$\frac{6}{4}$	1	6	8	3
城北	$\frac{0}{0}$	$\frac{2}{1}$	$\frac{3}{1}$		0	2	5	4

D	富岡東	高知商業	観音寺中央	松山北	勝点	勝者数	取得本数	順位
富岡東		$\frac{3}{3}$	$\frac{8}{5}$	$\frac{3}{2}$	3	10	14	1
高知商業	$\frac{2}{1}$		$\frac{5}{3}$	$\frac{4}{3}$	2	7	11	2
観音寺中央	$\frac{0}{0}$	$\frac{1}{1}$		$\frac{2}{1}$	0	2	3	4
松山北	$\frac{2}{1}$	$\frac{2}{1}$	$\frac{5}{3}$		1	5	9	3

団体戦決勝トーナメント

〈男子〉



準決勝

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表戦	勝者数	得本数
松山北	上野	佐藤亮	近藤	内藤	岩下		1	2
	メ	▲メ一本勝	▲	▲				
琴平	中西	志村	片岡	香川	細川		2	3
	▲	メ	▲	▲	メ一本勝			

準決勝

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表戦	勝者数	得本数
帝京第五	尾川	山内	近藤	鴨宮	桑原		1	3
	▲	▲	▲	▲メ	▲			
阿南工業	櫻木	湯浅	谷口	岡田	福川		3	5
	▲	メ	▲メ	▲メ	メ			

決勝

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表戦	勝者数	得本数
琴平	中西	志村	片岡	香川	細川		2	3
	▲			メ	メ一本勝			
阿南工業	▲	一本勝	一本勝	一本勝	▲		3	3
	▲メ	メ	コ	▲	福川			

〈女子〉



準決勝

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表戦	勝者数	得本数
富岡西	西田	奥村	永浦	市瀬	星野		1	2
	延長	メ一本勝			メ			
丹原	メ		コメ	一本勝	メ		3	5
	▲	▲	▲	▲	▲			

準決勝

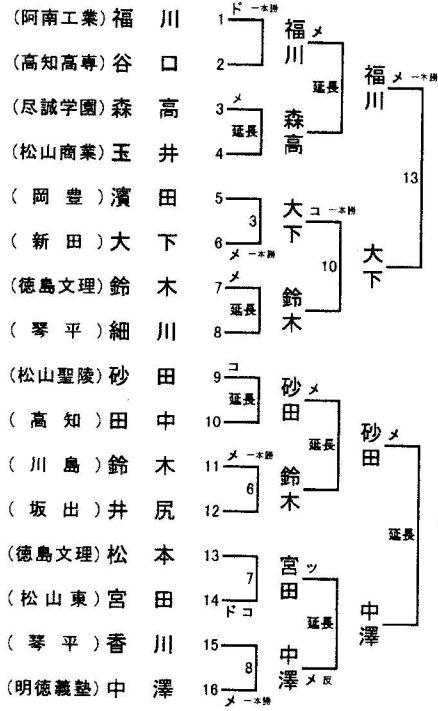
学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表戦	勝者数	得本数
帝京第五	朝倉	島本	湯浅	鴨宮	市川	鴨宮	1代	1
	延長	メ一本勝	▲	▲	▲	▲		
富岡東	横山	湊	細川	河井	中野	中野	1	1
	▲	▲	▲	▲	▲	▲		

決勝

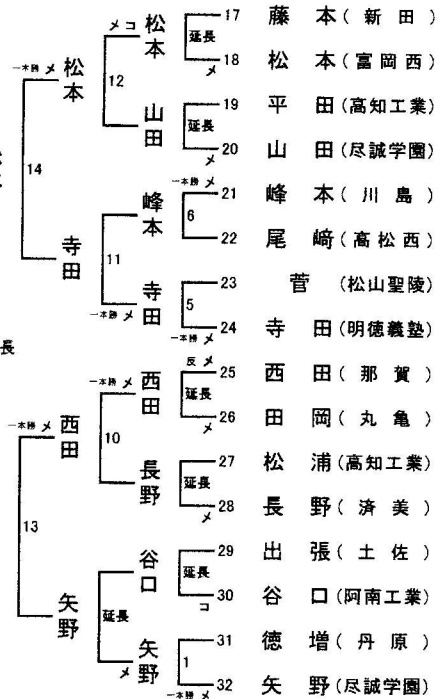
学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表戦	勝者数	得本数
丹原	谷口	黒河	目見田	宮川	玉井	玉井	2代	3
	メ	メ		▲	コ	コ		
帝京第五	▲	延長	一本勝	一本勝	▲		2	3
	▲	▲	▲	▲	▲	▲		

男子個人戦組合せ

第一試合場

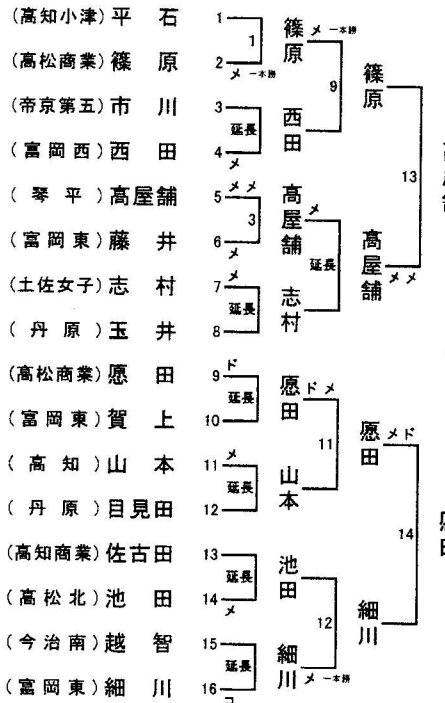


第三試合場

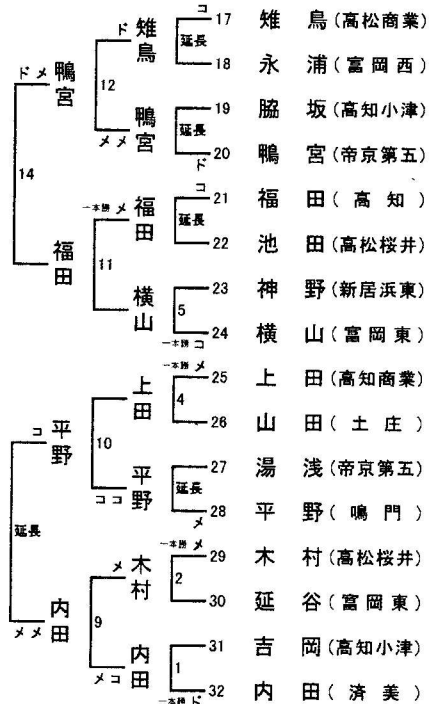


女子個人戦組合せ

第二試合場



第四試合場



みんなでつかんだ初優勝

阿南工業高校 岡 田 直 樹



今年、四国高校総体が阿南の地で開催された。地元開催ということで開催ということでも何か私たち阿南工業を後押ししてくれているような思いもあつたが、その反面、徳島の代表として恥ずかしい試合は見せられないとのプレッシャーもあつた。

四国大会が始まった。予選リーグは緊張からか全員の動きが悪く、不安な立ち上がりとなった。これまで何度も決勝を戦ってきたメンバーなのに、なかなか勝てない。厳しい戦いが続いた末、何とか勝ち、翌日の決勝リーグ進出を決めた。

「メンバーを変えるか」私たち三年生が自分でもわかるほど弱気で逃げ腰になっているのを、やはり監督に見抜かれていた。しかしこの言葉で、とにかく焦らず落ち着いて

て試合をしようと話し合った。準決勝の相手は帝京第五高校。練習試合では何度も対戦していたが一度も勝っていなかった。そのうえ、リーグ戦で優勝候補の筆頭であった高知明徳に勝利し自身をつけのりにのっているように見えた。対してようやく勝ち上がっていた私たちはもう挑戦者の気持ちで全力で戦うしかなかった。

しかし、この試合を投げ出したら、これまで自分たちがやってきたことを全部捨てることになるかもしれないと思うと負ける訳にはいかなかった。とてもきつい毎日の練習、繰り返しした遠征、合宿、そして厳しいけれど丁寧にご指導下さった佐々木先生、曾根先生、OBや今までお世話になった先生方を思い出した。大将戦までつなげば、勝てる可能性がある、何をしても福川までつなごうという思いでメンバーの気持ちの一つになった。決して楽には勝たせてくれなかったが、なんとか大将戦に持ち込んだ。大将戦は、二本勝ち。決勝進出を決めた。決勝戦は地元の多くの方の応援を頂いたことで「会場の皆が味方だ、楽しんでいこ

う」という気持ちも出てきた。櫻木・湯浅と勝ち、前日粘り強い戦いをした谷口が勝利。みんなの夢だった初優勝を果たした。キツく辛かった練習には意味があったということを実感した瞬間だった。これまで支えて頂いた多くのみなさま感謝しています本当にありがとうございます。部活動を通して学んだ多くのことを今後に生かしていきたいと思えます。

準 決 勝

校 名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
帝 京 第 五	尾川	山内	近藤	鴨宮	桑原	3-1
	▲	▲	▲	⊗	⊗	
阿 南 工	延長	延長	延長	⊗	⊗	5-3
	▲	⊗	▲	▲	福川	
	櫻木	湯浅	谷口	岡田		

決 勝

校 名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表
琴 平	中西	志村	片岡	香川	細川	3
	▲			⊗ ⊖	⊗ 一本勝	2
阿 南 工	⊗ 一本勝 ▲ 櫻木	⊗ 一本勝 湯浅	⊖ 一本勝 谷口	▲ 岡田		3
					福川	3

大学連五周年を迎えて

大学連担当理事 木原資裕



大学連設立記念の眉山杯剣道大会を鳴門教育大学の体育館で開催して

きたことになる。その設立の経緯等については、『徳島の剣道』第二十号に掲載している。重複をさけたいが、今回で二十六回を迎えた眉山杯剣道大会が今日あるのも、勝沼信彦先生（剣連副会長・徳島文理大学名誉学長）の物心にわたる御支援の賜である。勝沼先生が優勝杯を寄贈するにあたって、周囲の方々より「大会設立に最も貢献され、杯を寄贈された先生の名前をつけて、『勝沼杯』とされた方がよいのではないですか。」と進言があったそうであるが、勝沼先生より「私の名前をつけるよりも、徳島のシンボルである眉山が見える大学が集う剣道大会という趣旨で『眉山杯』にし

よう。」との提案で『眉山杯剣道大会』となり、今日に至っている。

もちろん、この大会は徳島県での大学剣道のナンバーワンを決める大会であり、過去のプログラムをみると『眉山杯剣道大会』と『徳島県大学剣道選手権大会』の二つ大会名が連記されているものもある。ここ十年では『徳島県大学剣道選手権大会』が消え、『眉山杯剣道大会』のみのプログラム名となっている。参加している学生間においては、ネーミングのよさと言いやすから「眉山杯」が一般化しており、そのことがプログラムにも反映しているものと思われる。しかしながら、学生の就職や進学に際して、履歴書等に記載される大会名称がもう少し第三者にもすぐ理解できる『徳島県大学剣道選手権大会』にしてはどうかとの声が、大会準備会の席上あった。しかし、これまで親しんだ名称「眉山杯」への愛着も多く、協議の結果、正式名称を『徳島県大学剣道選手権眉山杯大会』としてはどうかとの結論になった。

大会会長である勝沼先生にも、その旨報

告したところ、勝沼先生より、「『眉山杯』は関係者内での愛称でよいのではないか、

大会としての位置づけを明確にし、対外的な評価を得るためにも『徳島県大学剣道選手権』の文字を入れることはよい判断である。」とお話をいただいた。よって、次回大会よりは大会正式名称を『徳島県大学剣道選手権眉山杯大会』することとした。

また、二年前の第二十五回大会より、男女それぞれ東西対抗試合を行っている。男女とも一本勝負の勝ち抜き戦、試合時間三分、勝敗の決しない場合は引き分け、東西どちらかの側に試合をしない選手がでた場合、その選手は対戦相手側に移り、すべての選手が試合を行うという試合方法をとっている。大学生らしい盛り上がりが見事な一本が出現しており、選手および審判・役員からも好評である。

大会期日もこれまで、十一月終わりの日曜日であったり、十二月初旬であったりと、主管大学の都合でまちまちであったが、三年前の第二十四回大会より十一月二十三日の勤労感謝の日（祝日）に固定し、会場も

一番使い心地がよい徳島文理大学体育館で継続的にお願いすることとした。

このように大学連として五年を経る中で、徐々にはあるが、学生間の交流や稽古会の実施、大阪体育大学の神崎浩先生を迎えての年一回の講習会等々、より充実した剣道を求める息吹が出てきているように思える。これまでの眉山杯剣道大会の入賞者一覧をここに提示してみると、現在、中体連で活躍されている西山伸二先生の名前が第三回と第六大会に見られる。また、県警機動隊で活躍中の敦賀晋平選手も第十八回・第二十回・第二十一回大会で優勝と三位になっておられる。

願わくは将来、この大学連出身者から徳島県剣道連盟を担う人材が陸続と輩出されることを心から期待したい。



栄光の記録(男子)

	優勝	準優勝	3位	
第1回	達富賢二(徳大)	楠本貴司(徳大)	吉栖修輔(医)	倉都滋之(医)
第2回	倉都滋之(医)	二宮啓朗(医)	栗飯原(徳大)	楠本貴司(徳大)
第3回	倉都滋之(医)	吉田雅彦(医)	萩原勉(医)	西山伸二(徳大)
第4回	久保宣明(医)	渡省吾(徳大)	二川 健(医)	十亀 徳(医)
第5回	久保宣明(医)	栗飯原(徳大)	宮川亜希(医)	十亀 徳(医)
第6回	久保宣明(医)	西山伸二(徳大)	川崎伸二(徳大)	喜多裕一(文理)
第7回	兼近伸己(文理)	合田(徳大)	藤野克也(医)	泰安(徳大)
第8回	岩野忠介(徳大)	月下(徳大)	泰安(徳大)	国上和彦(文理)
第9回	瀬良信一(徳大)	土居貴之(徳大)	岩野忠介(徳大)	農地(徳大)
第10回	月下(徳大)	川本(徳大)	瀬良信一(徳大)	高地(徳大)
第11回	川上泉(徳大)	瀬良信一(徳大)	土居貴之(徳大)	三谷英二(徳大)
第12回	山本健吾(医)	三谷英二(徳大)	宮本賢作(鳴教)	商科(徳大)
第13回	川上 泉(徳大)	小笠真弘(文理)	三谷英二(徳大)	桑岡(文理)
第14回	川上 泉(徳大)	岸上孝司(徳大)	松田裕昭(文理)	桑岡(文理)
第15回	森本春輝(文理)	筈井(徳大)	律上(徳大)	天野一志(医)
第16回	新藤和範(文理)	岸上孝司(徳大)	玉井啓文(徳大)	天野一志(医)
第17回	大場博史(医)	松尾昌洋(徳大)	畑野篤郎(徳大)	大久保邦彦(文理)
第18回	敦賀晋平(文理)	高山吉昭(文理)	大場博史(医)	矢野俊夫(医)
第19回	矢野俊夫(医)	國安直樹(文理)	田中貴之(医)	山内(文理)
第20回	三枚岳(鳴教)	國安直樹(文理)	河村知志(徳大)	敦賀晋平(文理)
第21回	敦賀晋平(文理)	大場博史(医)	河村知志(徳大)	大石哲生(徳大)
第22回	大場博史(医)	竹亭賢一(文理)	積山貴仁(文理)	田中貴之(医)
第23回	森田琢磨(文理)	江口大祐(鳴教)	河村知志(徳大)	宮本靖之(四国)
第24回	森田琢磨(文理)	河村知志(徳大)	田頭秀章(文理)	村上嘉浩(鳴教)
第25回	森田琢磨(文理)	佐伯隆仁(文理)	大場博史(医)	宮本靖之(四国)
第26回	森田琢磨(文理)	佐伯隆仁(文理)	岸野哲也(徳大)	田頭秀章(文理)

東西対抗試合 優秀選手一覧(男子)

第1回 h18.11.23	湯村義喬(蔵本) 6人抜き	森田拓磨(文理) 3人抜き	大西啓介(四国) 3人抜き	河村知志(常三島) 2人抜き	井上匡則(蔵本) 2人抜き
第2回 h19.11.23	湯村義喬(蔵本) 9人抜き	森田拓磨(文理) 大将・3人抜き	岸野哲也(徳大) 6人抜き	横山雄太(文理) 4人抜き	横手隆介(文理) 5人抜き

栄光の記録(女子)

	優勝	準優勝	3位	
第1回	林久恵(徳大)	西岡ゆう子(徳大)	増尾浩美(徳大)	富田小百合(医)
第2回	富田小百合(医)	林久恵(徳大)	谷本雅子(医)	長江稔美(徳大)
第3回	吉田(医)	森田美佐(医)	長江稔美(徳大)	沖幸子(徳大)
第4回	近藤(医)	中本亜希(徳大)	藤沢香織(医)	小出(医)
第5回	森田美佐(医)	中本亜希(徳大)	宮川美保(徳大)	吉岡美千代(徳大)
第6回	住友真理(文理)	森田美佐(医)	近藤(医)	阿部貴代(文理)
第7回	阿部(文理)	住友真理(文理)	中本亜希(徳大)	延 山加里(鳴教)
第8回	藤井美香(文理)	福池テル美(四国)	真田千賀子(文理)	延 由加里(鳴教)
第9回	八幡美貴(文理)	大井美香(文理)	桁上恭子(四国)	山本美佐江(四国)
第10回	八幡美貴(文理)	山本美佐江(四国)	藤井美香(文理)	佐藤寛子(鳴教)
第11回	糀谷直美(医)	福池(四国)	細田絵美(文理)	守谷(徳大)
第12回	山崎沙織(文理)	木下文江(文理)	森 山香(文理)	市 菜穂美(文理)
第13回	森 由香(文理)	市 菜穂美(文理)	森 (文理)	土橋麻理(医)
第14回	松下奈生(文理)	橋本裕子(文理)	妹尾かずみ(文理)	渋谷瑞江(文理)
第15回	橋本裕子(文理)	村田(文理)	川瀬八重(文理)	森 ひろみ(鳴教)
第16回	井若絵美(文理)	鎌倉 梢(文理)	妹尾かずみ(文理)	前田恵利子(医)
第17回	鎌倉 梢(文理)	川瀬八重(文理)	村田(文理)	佐々木信江(文理)
第18回	平尾奈海(文理)	豊田史子(文理)	位田夏子(医)	渥美 彩(医)
第19回	平尾奈海(文理)	岡本恭子(文理)	杉浦良子(医)	近藤多恵(文理)
第20回	岡本恭子(文理)	山崎 舞(四国)	屋代依里(四国)	山崎恵理子(文理)
第21回	小宇佐郎子(鳴教)	石川智子(医)	屋代依里(四国)	山崎 舞(四国)
第22回	石川智子(医)	山崎恵理子(文理)	山本美智子(四国)	屋代依里(四国)
第23回	住友香織(文理)	安原麻美(文理)	山本美智子(四国)	朝田百合奈(文理)
第24回	住友香織(文理)	軸原千恵(鳴教)	山本美智子(四国)	渡辺裕子(四国)
第25回	軸原千恵(鳴教)	住友香織(文理)	北井実香(医)	菊池弥生(文理)
第26回	住友香織(文理)	酒井奈々(文理)	岡本知子(文理)	菊池弥生(文理)

東西対抗試合 優秀選手一覧(女子)

第1回 h18.11.23	菊池弥生(文理) 5人抜き	溝辺真帆(鳴教) 4人抜き	秀島千晴(蔵本) 1人抜き
第2回 h18.11.23	岡本知子(文理) 6人抜き	濱野 薫(文理) 3人抜き	片岡奈穂(四国) 2人抜き

各種大会に参加して

第二十九回

全国スポーツ少年団

剣道交流大会に参加して

監督 猪野 和 夫

平成十九年三月二十七日～二十九日、岡山県体育館《桃太郎アリーナ》にて、全国スポーツ少年団剣道交流大会が開催された。昨年十二月に行なわれた徳島県予選会から約三カ月間、初めて代表選手団の監督を任され、とても光栄な事である反面、責任と不安という重圧に苛まれ、勝負に対するこだわりを拭いきれなかった。

代表選手が決まってからは、小学生を中心に月に一、二回の合同強化練習を川島に集合してもらい、その時には、各選手の道場や、香川県代表チーム等との練習試合をし、毎回有意義な練習会を実施することができた。

最初は、代表選手五名が、それぞれ違う道場であるということもあり、私を含め選手達も何かさこちない様子で少々心配でした。

しかし、そこはさすがに代表選手、試合稽古と二戦、三戦としていくうちに選手一人一人が県代表であるという自覚に目覚め、いつの間にかチームが一丸となっていくのを感じた。

ただ監督としては、中学生個人の松本選手と女子個人代表の長谷川選手の稽古をそれぞれの学校の監督に御願いしたので、もっとコミュニケーションの時間を取れば良かったと思った。

さて、大会初日は開会式、選手団の基本練習、交歓会等があり、入場行進ではさすがに全国大会ということもあり、選手同様に私も胸の鼓動が高まり、感無量の感激を覚えた。

指導者研修においては、剣道の指導方法や考え方等について講話していただき、私にとっては、今後の指導方法等にとっても役立つものとなった。

大会二日目、いよいよ大会本番、予選リーグが始まった。予選リーグ初戦の相手は山形県。緊張の中、先鋒の庄村、四年生ということもあるのか緊張のせいなのか、本来の動きを取り戻すことなく時間になり、引き分けた。次鋒の片岡選手、気迫十分の攻めで相手を攻め続けたが、先鋒同様引き分けた。中堅黒木選手、焦ることなく見事な出小手を二本連取し、チームの重い空気を吹き飛ばし、士気を高めた。副将岡田選手、剣先を活かし、中心を攻め相手を寄せつけず、引き胴、面返し胴と会心に二本勝ち、この時点でチームの勝利が決まった。大将久保選手、積極果敢に攻め面に飛び込んだところを出小手を取られたが、その後も積極的に攻め続け、見事な引き面を取り返し、そのまま引き分けた。

予選リーグ二回戦、地元岡山県Bとの対戦ということもあり、選手達の顔に緊張が見えたので、「君達の剣道は、十分に全国で通用する、何も考えずに思いっきり試合をして来い。」と指示した。

先鋒庄村選手、一回戦同様、本来の動き

が無く、出小手、面で二本を取られ負けた。次鋒片岡選手、積極的に攻め続けたが、面を二本取られ負けた。惜しい技が数本あったが、すべて旗は一本しか上がらなかった。

中堅黒木選手、「たのむぞ」と声を掛け試合に送り出すと、開始早々に面に飛び込み、見事一本先取その後も果敢に攻め続けるも旗が上がらず一本勝ち。副将岡田選手、持ち前の中心を攻める剣道で積極的に攻め続けたが、これも旗が上がらず引き分け、実質この時点でチームの負けが決まった。大将久保選手、出小手を先取されるも、面返し胴で直ぐ取り返す。果敢に攻め続けたが惜しくも終了間際に出小手を取られ負けた。

試合終了後、予選突破ができなかった事及び旗が上がらなかったことが悔しくて、選手達全員が涙した。私自身も、試合には負けたが勝負には勝っていたと思う。

中学生個人の松本選手、予選リーグは危な気無く、静岡県、山形県の選手に面のオー

ル二本勝ちで予選を突破した。中学生個人女子の長谷川選手、予選リーグ一回戦、相手は北海道の選手、面をとる

が小手を取られ引き分け。二回戦、相手は神奈川県の選手、この相手に勝てば予選を突破できると思わず肩に力が入り、積極的に攻めたが胴と面をとられ二本負け、惜しくも予選突破はならなかった。

中学生個人松本選手、リーグ突破した後の一試合目、相手は群馬県の選手、延長の末に見事な小手を取り一本勝ち。続く二試合目、相手は広島県の選手、これに勝てばベスト4入りということで力が入り、惜しくも小手と面を取られ二本負け、ベスト8となった。

今大会を終了して私自身、他の道場の大切な選手を預かり、選手達のために何か役に立てたのであろうか、また、日頃の稽古により力を十分に発揮させてやる事等色々な点で難しさというものを改めて思い知らされた気がした。

大会の結果としては、団体予選敗退《一勝一敗》、中学生個人は、松本選手がベスト8入賞、長谷川選手が予選リーグ敗退という結果であったが、七名の選手全員が徳島県の代表として、最後まで自信と誇りを

持ち、正々堂々と戦ってくれたことに感謝したい。

最後に、大会出場の準備にあたって、出場選手が所属する各道場の先生方、また合同練習、練習試合等でお世話になった光武館の寺西先生や保護者の方々、川島剣道スポーツ少年団の保護者の方々には、本当您にご協力をいただき、ありがとうございます。

今大会の経験を生かし、七名の選手達は、一步一步前進し、あの感動、悔しさを忘れることなく、益々活躍し活躍してくれることを信じ祈念し、大会の報告とさせていただきます。

出場選手

監督 猪野 和男 《川島》

先鋒 庄村 莉緒 四年 《川島》

次鋒 片岡 茉莉 六年 《鴨島》

中堅 黒木 景太 六年 《光武館》

副将 岡田 春希 五年 《木頭》

大将 久保 公緒 六年 《至誠館》

〇団体戦《小学校》

〇団体戦《小学校》

〇団体戦《小学校》

〇団体戦《小学校》

〇団体戦《小学校》

○個人戦《中学校》

男子 松本 好史 二年《徳島文理》
 女子 長谷川 愛美 一年《那賀川》



○試合結果

団体戦予選リーグ 第一試合

徳島県 山梨県

先鋒 庄村 * 井上

次鋒 片岡 * 深澤

中堅 黒木 ③⑦ 古宿

副将 岡田 ①① 有賀

大将 久保 メー ② 梶原

団体戦予選リーグ 第二試合

徳島県 岡山県B

先鋒 庄村 ③⑧ 嶋村

次鋒 片岡 ①⑧ 井伊

中堅 黒木 ④ 寺田

副将 岡田 * 米倉

大将 久保 ド ③② 上岡

○男子個人予選リーグ

松本(徳島) ⑧⑧ 植松(静岡)

松本(徳島) ⑧⑧ 飯澤(山形)

○女子個人予選リーグ

長谷川(徳島) ⑧ ①③ 中野(北海道)

長谷川(徳島) ①⑧⑧ 阿部(神奈川)

○男子個人決勝トーナメント

松本(徳島) ③延長 川田(群馬)

松本(徳島) ①③⑧ 畠村(広島)

(松本選手ベスト8敢闘賞受賞)



第五十五回全日本都道府県 対抗剣道優勝大会に出場して

監督 米 倉 滋

第五十五回全日本都道府県対抗剣道優勝大会は、平成十九年四月二十九日、大阪市中央体育館に於いて開催されました。同大会は、昭和二十七年に発足した全剣連が初めての全国大会として企画し、翌年五月に京都武徳殿で開催され、全剣連主催の全国大会として最も歴史ある大会となつています。その後会場を大阪に移して続けられ、本年度で五十五回を迎えました。大会のチーム構成は、段、年齢別、職業別の代表、男子五名・女子二名の計七名の組み合わせで、各都道府県の総合力を競う大会となっております。本県の代表選手は、

先鋒 美馬真奈美

23歳 四段 臨時職員

次鋒 日和田慈海

28歳 五段 地方公務員

五将 山崎 砂織

中堅 福多 博史
36歳 六段 教員

三将 敦賀 晋平

27歳 四段 警察官

副将 山本 泰史

32歳 六段 会社員

大将 平野 誠司

43歳 教士七段 警察官

で大会に臨みました。

試合は一回戦がシードとなっており、宮崎を二対二の代表戦で下した秋田と二回戦で対戦、本年の国体開催で士気が上がる秋田に対し、本県チームはよく善戦、先鋒・美馬、面を先取されるも見事な出頭面、出小手を連取し逆転勝ち。続く、次鋒・日和田、勝ちを焦ったのかよく攻めるも溜めがなく、有効打突を奪えず引き分け、五将・山崎、久し振りの全国大会で固くなったのか、二本連取され敗れる。中堅・福多、年齢差十三歳をもとせせず、よく攻めるも引き分け。三将・敦賀、相手は世界大会の強化選手に指名されている秋田県警の土田、

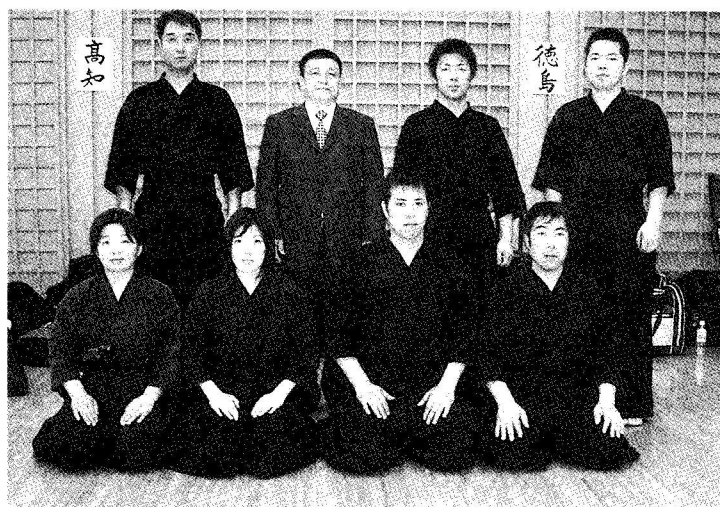
強化選手に指名されている秋田県警の土田、

本大会最大の山場となった。敦賀が引き分けると、続く山本、平野で逆転の可能性があるだけに踏ん張って欲しいところ、敦賀相手の攻めをよくしのいで引き分け。副将・山本、互いに有効打なく引き分け、いよいよチームの勝敗は大将戦にもつれ込む、大将・平野、一本勝ち以上で勝ち、引き分け以下で負けとなる。平野さい先よく面を先取、このまま時間切れ一本勝と思われたとき、秋田・寺田に捨て身の面を時間切れ五秒前に決められ、痛恨の引き分けとなり本県チームは敗れた。結局七名の対戦で、対戦成績一対一、得本数秋田四本徳島三本となり僅か一本差で涙をのみました。

本大会で反省すべきは、本県の取得有効打突数が三本と少なかったことです。「稽古は試合のように、試合は稽古のように。」といわれますが、日頃の稽古では有効打突である「一本」を実現するために、基本動作の繰り返しや対人技能の熟練度を向上させなければなりません。こうした稽古の延長線上にその成果を発揮する試合が存在することを認識し、有効打突の「一本」を

長線上にその成果を発揮する試合が存在することを認識し、有効打突の「一本」を

現するため、今後一層稽古に励んで頂きたいとおもいます。



第四十六回西日本

勤労者剣道大会

久しぶりの快進撃

警察支部 平野 誠 司

平成十九年六月十日、高知県民体育館において第四十六回西日本勤労者剣道大会が開催されました。徳島県警ではここ数年の入賞はなく、選手達の意気込みには相当なものがありました。

ご存じの通りこの大会は年齢・性別・職種に関係なく、三人一組のチーム構成により争われ、今年も西日本各地から三四三チームが参加しました。我が徳島県警も三チームをエントリーしました。布陣は次のとおりです。

徳島県警A……佐藤、川添、山室

徳島県警B……六條、近藤、山名

徳島県警C……隅田、敦賀、横手

県警Aチームは、予選トーナメントを勝ち上がるも、決勝トーナメント一回戦で高知県警Aと対戦し一対〇で惜敗、ベスト十

六。

県警Cチームは、予選トーナメント一回戦で三年前の覇者である「松下電工本社A」と対戦。今年も昨年の全日本学生準優勝の勝見選手を先鋒に起用して補強は完璧です。結果は一対〇の接戦の末での敗退でしたが、内容的にも全く互角の戦いでありました。

そして、県警Bチームの戦いです。予選トーナメントは五試合ありましたが、特に危ぶまれた試合もなく、三人がいい流れを作りながら勝ちを収めていきました。

いよいよベスト十六からの決勝トーナメント。一回戦の相手である「善通寺陸自」に快勝、続く対戦は県警Cチームが敗れた優勝候補の「松下電工本社A」です。

先鋒戦は勝見対六條。この勝負がすべてでした。立ち上がりからお互いに技の応酬となりますが決め手なく、中盤に差しかかったところで六條が鏢迫り合いからの逆引き胴を見事に決めます。そして更に止めとばかり、飛び込み面も決めて二本勝ち。これで完全に流れができ、続く近藤、山名も勝ちを収めて三対〇の快勝となります。まさ

しく三人戦を象徴するかのような先鋒の戦いであり、先をとり流れを作ることによって優位に展開できるという正に見本のような一戦でありました。

続く準決勝では、またしても「松下電工本社」と当たり、今度はBチームでしたが接戦ながら一対〇で退け、いよいよ決勝へと駒を進めていきます。

優勝すれば、徳島県勢として昭和五十七年の「富西」、平成八年の「徳島県警A」に続く、十一年ぶり三度目の快挙となります。四十五回の歴史の中に名誉を刻もうと選手達は必死の形相でした。

相手は、地元「高知教員A」が勝ち上がっていました。先鋒・六條、中堅・近藤が互角の引き分け、いよいよ大将・山名の登場です。山名の二刀が強豪・森選手に炸裂するか、勝利の瞬間を食い入るように見守りましたが、一瞬の隙を付かれ引き胴を奪取されてしまいます。後はうまく逃げ切られ、残念ながら涙をのむことになりました。

「勝負に勝ちなし、負けなし、勝負あり。」
如何に自分たちの剣道を出し切ることがで

きるか、日々葛藤の稽古を続けておりますが、ここ一番となるとどうしても勝ち負けを意識してしまい、打ちたい打たれたくないという気持ちが前面に出過ぎてしまう傾向があります。

窮屈になり捨て切れない、また姑息な剣道に成り下がってしまったては剣道修業に反するどころか、逆に勝負にも勝てるはずがありません。

「勝負は勝とうと思わなければ勝てないし、また、勝とうと思っても勝てるものでもない。」

この心境を超越した偏りのない心によって、身体を動かすことができる真理を体得しなければ、先に進めないという感じがしています。

大きな試合、そして負けない試合になればなるほど深い集中力と冷静な観察力、そして瞬発的な決断力が必要です。

相手との闘いの前にまずは自己の心身を最高の状態に制御すること、そして自我ではなく無我の状態で放たれる真の打突を求めていくしかないのです。

「たかが剣道、されど剣道」まだまだ剣行は奥深く、分け入っても分け入っても続く永遠の道でしょう。

県警特練員が徳島県剣道の先頭に立ち、はら澁刺として活気ある組織づくりに貢献できますように、今後とも先生方のご指導ご支援をよろしくお願い申し上げ、ご報告いたします。



第二十四回全国家庭婦人

剣道大会に出場して

鳴門支部 平野悦子

平成十九年七月十六日(初)日本武道館にて、第二十四回全国家庭婦人剣道大会が行われました。今回は、前々日から西日本地方に台風の影響が出はじめ、空の便は徐々に欠航、予定の出発日は全便欠航かという状況でした。各県とも上京する手段に思案しながらその決断が迫っています。徳島県チームも例外ではなく、結局例年より一日早く出発することに決めて急ぎよ出発することになりました。

各県の代表選手は家庭の主婦です。一泊二日の大会でも家を留守にするには家族の理解と協力がないと決して出場できません。今回はそれぞれ予定を繰り上げての行動を何の支障なく決行できた事に大変感謝しております。

こうして大会前の台風パニックはどうか解除されましたが、選手の気持ちは東京

での一日分の余裕のおかげで、家族への感謝の気持ちとともに大会での予選突破の思いへと高まっていきました。

今大会のメンバーは、監督に平野誠司、選手は先鋒・前田奈々枝、次鋒・山崎砂織、中堅・美馬敦子、副将・岩木淳子、大将・平野悦子であり、前田選手と美馬選手は家

庭婦人大会初出場でした。

先鋒・前田選手は主婦となり、母となり、待ちに待ったこの大会で気合はもう十分。次鋒・山崎選手も久々の家庭婦人大会と張り切って臨んでいました。中堅・美馬選手は、緊張の中にも出場できた喜びを身体全体で表現し、副将・岩木選手は三位入賞メンバーで貫禄十分。大将の私は、今回は一本に拘り、有効打突にすることを課題としていました。

予選リーグは富山県と鹿児島県。

〈一回戦〉

徳島	富山	
前田	メ	古金
山崎	メ	田中
美馬	×	山田
岩木	×	尾塩
平野	×	尾山
1(1)	1(1)	

〈二回戦〉

徳島	鹿児島	
前田	ココ	西
山崎	メ	立森



主権 剣全日本剣道連盟 謝日本武道館・読売新聞社
 主催 剣全東京剣道連盟
 後援 文部科学省・東京都 日本テレビ放送網・報知新聞社
 協賛 ハナマルチ株式会社

第24回全国家庭婦人剣道大会

美馬 × メ 谷山

岩木 × 中水

平野 × 外園

1(2)

2(2)

結局、一敗一分でリーグ二位となり予選突破の夢は叶いませんでした。先鋒の前田選手が絶好調だっただけに、そのリードを生かすことができなかつたのが非常に残念でなりません。前田選手の活躍ぶりには目を見張るものがあり、特に二試合目の鹿児島戦。強豪西選手との対戦は、日本武道館を一人占めするくらいの注目を浴びながら、上段からの小手を二本連取します。

結果は二試合とも「一本」差でその重みを思い知らされる大会でありましたが、個々の反省も有効打突に「ならない」「できない」ということが一番多く、稽古の場でもご指導していただいていることを、そのまま試合の場において思い知った内容であったように思います。

主婦として、家庭の中において剣道を続ける意味を理解しながら、「剣道を楽しむ」ことを忘れずに頑張っていきたいと考えて

おりますので、今後ともご指導をよろしく
お願いいたします。

最後になりますが、連盟の先生方には今
回の日程変更に際しての対応に、選手一同
大変感謝しております。ありがとうございます
ました。



夢の全国大会

阿南工業高校剣道部

岡田直樹

剣道を始めたのは小学校三年生の頃でした。中学生になり厳しい練習を続けるうちに剣道で全国大会に出場することが自分の夢になっていました。

剣道を続けている高校生ならば誰もが目標にしている大会の一つが全国選抜大会です。県予選、決勝の相手は富岡西高校でした。準決勝が苦しい戦いで、なんとか勝つことができたので皆のモチベーションは高く、決勝戦が終わってみると5対0という、思いがけない大差で勝ち全国大会の切符を手にすることができました。しかしこの時は、全くといっていい程実感がありませんでした。

全国大会は、三月に愛知県の春日井市総合体育館で開催されました。まず三校で予選リーグを行うのですが、阿南工業の相手は、全国の強豪校である皇学館とこれまで

に全国制覇を成し遂げている高輪高校でした。対戦相手と戦うことよりもまず会場に立つだけで身ぶるいがするような、張りつめた雰囲気のみ込まれそうになっていました。一試合目は高輪戦でした。緊張と重圧からか、皆思うように動けず引き分けとなりました。高輪と皇学館も引き分けだったため、阿南工業・皇学館のいずれか勝った方が決勝トーナメント進出という状況になりました。試合はまさにシーソーゲームでした。先鋒が取られ、次鋒が取り返し、中堅が取られ、副将が取り返すといった息もつけない大接戦で勝負は大将戦にもつれこみましました。見ている私も身体の震えが止まらなくなっていました。このような試合に大将の福川は二本勝ちを収め、予選リーグを突破することができました。決勝トーナメントでは敗れたものの、全国ベスト16といった成績を残すことができました。

今までキツく苦しかったこと、辞めたくなったこともたくさんありましたが、先生や仲間を支えられて頑張ることができました。今まで剣道を通してかぞえきれない程

多くの方々にお世話になり、私の夢であった全国大会出場を果たすことができました。剣道を通して学んだ多くのことを今後の人生に生かしていきたいです。



〈予選リーグ〉

高輪 1×1 阿南工

○錦野 ⊗コーコ 櫻木

鈴木 × 谷澤

勝沼 ⊕ 谷口○

丸家 ⊕×コ 岡田

安川 × 福川

阿南工 3-2 皇学館

櫻木 ⊕×メ 田中○

○谷澤 ⊕メー 前田

谷口 ⊕×コ 北川

○岡田 ⊗コーメ 清水

○福川 ⊕コー 小嶋

和歌山東 4-1 阿南工

○大窪 ⊗メー 櫻木

○野口 ⊗コー 谷澤

○前 ⊗ドー 谷口

住澤 ⊕ 岡田○

○高松 ⊕メー 福川

第十六回全国高校選抜

大会に出場して

富岡東高校三年 横山 依利加

平成十九年三月二十七日〜二十八日に愛知県春日井市総合体育館で第十六回全国高等学校剣道選抜大会が開催された。

新チームになって初めての全国大会であり、不安もあったが、チームの雰囲気はとも良く「みんなの気持ちを一つにし、自分たちの力を出し切り、一試合目から勢いに乗り勝ちすることができれば、必ず予選リーグを突破できる」と信じ、強い気持ちで大会に臨んだ。

予選リーグ初戦は岡山県の津山東高校だった。先鋒の私は絶対に勝ってチームを勢いづかせたいと思い、立ち上がりから強気で攻め二本勝ち。次鋒も良い流れのまま後ろへつながら一本勝ち。中堅は一本先に取ったが、一瞬気が抜けたところとどびこみ小手をとられてしまった。しかし、気持ちを入れ直して一本取り返した。副将は引き分

け。大将は一本負けに終わったが三対一の快勝であった。

次は青森山田高校との対戦だった。前の試合で勢いに乗ることができ、私は先に一本を取った。その後取り返されてしまったが最後まで粘り、一本取り返すことができた。次鋒・中堅と二本勝ち。この瞬間、決勝トーナメント進出が決まった。目標であった決勝トーナメントへ進出することができ、抱き合って喜んだ。

ベスト8をかけたトーナメント初戦の相手は群馬県の健大高崎高校だった。私は得意の面で一本勝ち。次鋒は一本負け。中堅は気迫十分で相手に向かったが引き分けに終わった。副将は冷静に二本勝ちし大将につなげた。大将もこの流れに乗って二本奪った。選手が個々の役割をきっちり果たし三対一で、富岡東高校五年ぶりのベスト8入りが決まった。

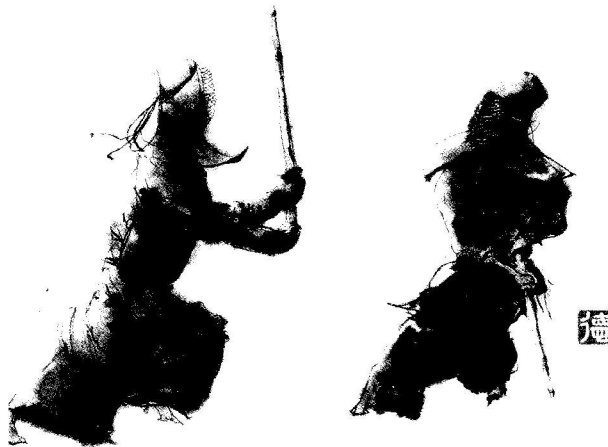
準々決勝は山形県の左沢高校との対戦だった。強豪チームではあるが、メダルを取るためには左沢に勝たなければならない。弱気にならず、強気で自分達の力を信じ、仲

間を信じチャレンジ精神で試合に臨んだ。私は最後まで攻め続けたが、一本を取る事ができず引き分け。次鋒二本負け。二本を奪われる苦しい展開であったが、その流れを中堅の細川が止めた。強気で攻め二本勝ちし、一対一の振り出しへと戻した。しかしここから相手も粘り強く攻めてきて、副将・大将共に一本を奪われ、一対三で敗れた。全国の壁は厚く、ベスト8という結果に終わった。

悔しさが残る大会であったが、全国の強豪校と剣を交えることで自分達に足りない所や課題をたくさん得られた大会でもあった。

このような結果を残せたのも、熱心に指導してくださった先生方、OB・OGの先輩方、いつも陰ながら支えてくださった保護者の方々、そして今まで苦楽を共にしてきた仲間本当に感謝している。試合に勝った喜びも負けた悔しさもたくさん支えがあったからこそ経験することができたと思う。この経験を無駄にしないように大切に、これからの人生に活かしていきたい

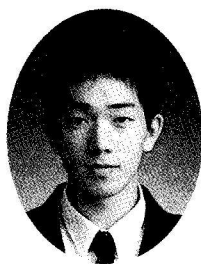
いと思う。



第五十四回全国高等学校 総合体育大会に出場して

徳島文理高等学校

松本 明 真



平成十九年八月
七日から九日にか
けて、佐賀市総合
体育館において開
催された全国高等

学校総合体育大会に本校剣道部が四年ぶり
二回目の出場を果たした。

六月に行われた県予選では、一回戦から
決勝戦まで一つも気の抜けない緊迫した試
合の連続であった。決勝戦では、相手にリー
ドをゆるしたが最後まであきらめず戦った
結果、本数差で逆転し、念願の全国大会の
出場権を得た。しかし、二週間後の四国大
会では、二連覇を目指したが、予選リーグ
敗退に終わり、全国大会に向けて課題を残
す結果となった。夏休みに入り、実践的な
力を付けるため、九州遠征を行い、全国の



強豪校の胸を借りた。そして、佐賀に入っ
てからは、本番で力を出し切るための気力
を養うため、非常に暑い体育館で必死になっ
て練習し、いよいよ試合当日を迎えた。

予選リーグ一回戦の相手は春の全国選抜
大会で三位に入賞した、北海道代表、東海
大四校である。全員がこの試合に勝つこと

を目標に練習を重ねてきた。試合が始まり、
弱気になることなく積極的に技を仕掛けた
が、さすがに鍛え上げられたチームであり
簡単には打たせてはもらえなかった。逆に、
こちらが一瞬抜けたところを打たれ、副将
戦で勝負がついてしまった。大将戦となり
私の出番となったが、ここで気落ちするこ
とは許されず、次の試合につなげるために
も、気力を振り絞って攻め続けた結果、何
とか勝つことができた。結局、リーグ一回
戦は二対二で敗れた。

予選リーグ二回戦の相手は沖縄県代表、
那覇高校である。先鋒は敗れたが、次鋒が
一本勝ちを収め、続く中堅も二本勝ち。完
全に流れはこちらのものとなった。副将が
引き分けて、二対一とリードして私に回っ
てきた。受けにならず、攻めることを意識
してコートに入ったが、自分から攻めても
相手は全く動じず、気持ちがあ回りしてい
るところを攻められ、無理に出ようとした
ところを面に乗られ一本を取られた。二本
目となり、今度は取り返そうと焦ってしま
い、引き出されたところを返し胴を打たれ、

この二本で逆転されチームは敗れた。

結局、予選リーグで一勝もできず敗退という非常に悔しい結果となり、全国で勝つことの厳しさを改めて痛感した。しかし、ここまでやってきたことに悔いはないし、この経験を今後の人生に生かしていきたい。全国大会で上位入賞という夢の実現は後輩達に託したい。

最後になりましたが、今まで熱心にご指導して下さいました先生方、苦楽を共にしたチームメイト、常に私達を支えて下さった保護者の方々、本当にありがとうございます。

全国高等学校

剣道大会に出場して

富岡東高校三年 中野 由貴



平成十九年八月

六日～九日、佐賀

県総合体育館で、

「この夏佐賀に君

色の風が吹く」の

スローガンのもと、第五十四回全国高等学校剣道大会が開催されました。

県総体では苦しい戦いをチーム一丸となって乗り越え、涙と笑顔で掴んだ全国総体への切符でした。出場が決まった瞬間、私たちの目標は「全国で勝つ」へと即座に切り替わりました。それからの私たちは、全国総体に向け、仲間と支え合い、一心不乱に稽古に励みました。

大会初日の女子団体予選リーグ。

初戦の相手は岐阜県麗澤瑞浪高校でした。春の全国選抜三位の中京高校を破ってきた強豪校です。「必ず初戦を制して勢いをつ

け、予選リーグを突破する」と、何度もみんなで口ずさみました。試合前、円陣を組み、横山主将を中心に気持ちを一つにしてから試合場に整列しました。あの時の胸の高まりは今でも忘れません。先鋒戦は東高の切り込み隊長である横山が見事な面で一本を先取し、チームに勢いが出ました。続く次鋒は惜しくも一本負けをしましたが、中堅・細川が素晴らしい二本勝ちをおさめ、富東ベースの試合展開となり、副将・河井が引き分け、大将の私も一本勝ちを収めることができ、最高のスタートをきることができました。

しかし、本当の勝負はここからです。予選リーグ二戦目の相手は、既に麗澤瑞浪高校を一对三で破っている地元・佐賀県の龍谷高校です。実力のある地元校で応援団の人数も多く、会場も独特の雰囲気でした。でも、私たちにも苦しい時、嬉しい時、悔しい時、楽しい時を共に過ごし支え合ってきた仲間や、支え見守り続けてくれた保護者の方々が応援してくれていると思うと、とても心強かったです。感謝の気持ちをパ

ワーに変え、絶対に勝つぞという強い気持ちと最高潮の気合いで試合に臨みました。

先鋒が気合いの一本勝ちで幸先良くスタートが切りました。龍谷高校の次鋒はポイントゲッターです。一年生の湊は臆することなく攻撃していききましたが、一本負け。中堅が引き分けに終わり、後半勝負の副将・河井へと試合は流れていきました。果敢に

攻めていきましたが相引き面で一本負け。スコアは「対一」。私が最低一本勝ちし、チームを引き分けに持ち込まなければならぬ展開でした。試合場に入る前、飯田先生や

仲間の顔を見ると、「絶対に勝つぞ」という気持ちが高まると共に、肩の力が抜けました。無我夢中に一本を取りに攻めました

が相手大将にしのがれ、大将としての役割を果たすことができず引き分けに終わってしまいました。その瞬間、私たちの予選リーグ敗退が決まりました。みんなが繋いで

てくれた襷を予選突破というゴールに結びつけることができず、悔しい思いで一杯です。

でも今、振り返ってみると、結果にはつ

ながらなかったですが、試合を楽しめていたと思っています。一人はみんなのため、みんなは一人のために尽くした試合だったと感じています。仲間や、支えてくれた家族や先輩方・友達がいるからこそ頑張れるのだと改めて実感しました。

富岡東生としては最後の試合でしたが、生涯「剣道を続けたい」と思える大会でした。今まで熱心に指導して下さった監督や先生方、色々な遠征・大会でお世話をして下さり、応援して下さいました保護者の方々、本当にありがとうございます。感謝の気持ちを常に忘れず、これからも日々精進したいと思っています。

「この夏佐賀に富東色の風が吹いた」と私は思っています。私たちは、最強のチームではなかったかもしれませんが、最高のチームでした。

「この夏佐賀に富東色の風が吹いた」と私は思っています。私たちは、最強のチームではなかったかもしれませんが、最高のチームでした。



第三十七回全国中学校 剣道大会に出場して

徳島文理中学校三年

青木 大将



平成十九年八月
十八日から二十日
までの三日間、山
形県酒田市営国体
記念体育館で全国

中学校剣道大会が開催されました。

県総体では、いつも苦戦している阿南第一中学校に快勝し、また、個人戦でも準優勝することができ、団体・個人ともに全国大会への切符を手に入れることができました。

昨年の全国準優勝という偉業に少しでも近づけるように、県予選が終わってから、まずは予選リーグ突破を目標に、チーム一丸となって一生懸命練習に取り組みました。特に剣道部で毎日書いている剣道日誌を通して、課題を意識して稽古することや積

極的に求めて稽古することに努めました。そして大会当日、自分たちの力が試される日が出てきました。不安を抱えつつ徳島県代表としての自信を持って、会場に足を踏み入れました。会場に入ると、今までの大会とは違った緊張感があり、初体験の私にはとても胸が躍りました。

迎える予選リーグ第一試合目は、群馬県代表の笠懸中学校でした。このチームは前の試合で、強豪の大阪府代表の上宮中学校を二対一で破ったチームです。試合前は上宮中学が勝つと思っていたので、予想外の展開に少し戸惑いました。笠懸中戦では私が一本負けし、先鋒としての役目を果たすことができず一対〇で負けてしまいました。これで笠懸中の予選リーグ突破が決まってしまいました。

そして第二試合目は、上宮中学校でした。このチームは非常に攻めの強いチームで、練習試合をしたことがあるので、自分の相手がどんな剣道をするかはそれぞれ分かっています。しかし、会場の雰囲気吞まれて自分の剣道ができず、四対一で負けて

しまいました。個人戦でも善戦したものの力を出し切れず、結果を出すことはできませんでした。どんな状況においても普段通りの力を出すことができなかったことが残念でなりません。



大会を通して、自分の力不足を知り、全国のを乗り越えることは、並の努力では成し遂げることができないことを知りました。十分な結果を出すことはできませんでしたが、この全国の舞台で得たものは、私の今後の剣道人生に大きな影響を与えるものばかりでした。「また全国の舞台に立ちたい。今度こそ結果を残したい」と言う気持ちになりました。

今回の全国大会に出場できたのも、沢山の大会や遠征に連れて行ってくださったたり、稽古をつけて頂いた中山先生や玉田先生のお陰です。ありがとうございます。

また、私たちの為に熱心にご指導頂いた先輩方、ご協力いただいた保護者の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

高校に入学しても、部訓「文武不岐」の志をもって、素直さと努力と感謝の気持ちを忘れず頑張りたいと思います。



高専大会に出場して

阿南高専 村田 奈津季



私にとって、平成十九年の夏休みは思い出深いものになりました。まず、七月中旬の四

国高専体育大会は台風の影響で一週間遅れの開催というハプニングに見舞われました。新居浜高専体育館で行われた女子個人戦において、阿南同士の決勝となりましたが、運良く私が優勝、市瀬さんが準優勝となりました。

八月二十四日、愛媛県武道館で第六回全国高等専門学校女子剣道大会が行われました。私にとっては二度目の全国大会です。全国の高専剣道部には女子部員が少ないので、団体戦はオープン競技で三人制の団体戦です。三チームによる予選リーグでは、まず神戸市立高専と対戦です。勝負は一对一となりましたが、大将佐藤先輩の執念のメン

が効いて本数勝ちをしました。そして、次の北陸選抜にも勝って念願の準決勝戦ですが、相手は今大会で六連覇を達成した鈴鹿高専です。激しい攻防の試合を繰り返したのですが、惜しくも一対二で負けて三位になりました。中堅の私が足を引っ張り、負けてしまった大変悔しくて申し訳ありません。しかしチームの中では、とくに先鋒の市瀬さんが一年生ながら三戦全勝でチームを盛り上げてくれてありがたかったです。阿南高専は今までに二回全国大会に出場しましたが、まだ一回も勝てていなかったのです。今回三位になったことは、私達にとってはとても嬉しく部員みんなで喜びました。

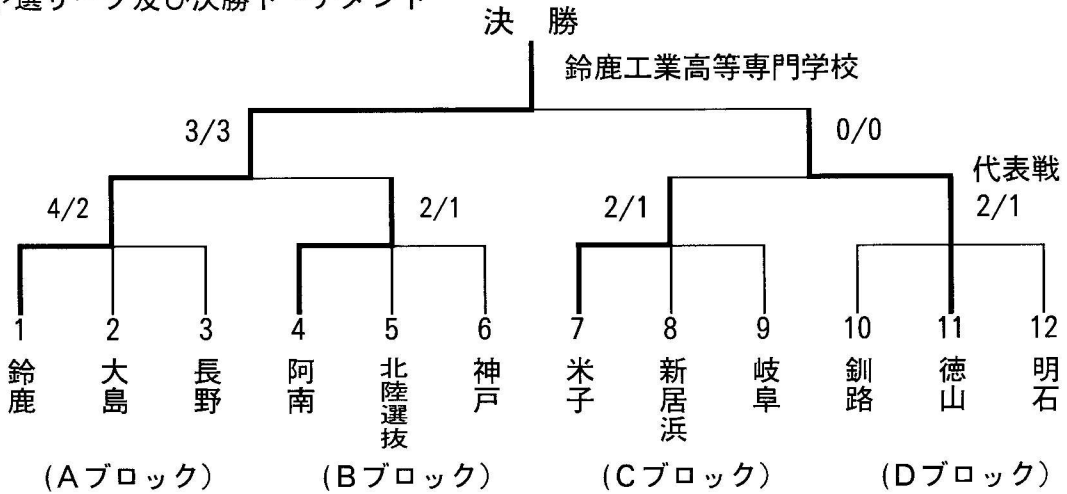
翌日に行われた個人戦では、私はなぜか緊張して思い切った剣道が出来てなかったように思います。一回戦では、先に1本面を取られて焦りましたが、調子の良かった引きドウ、メンで二本取り返して何とか二回戦へ進みました。試合を見た顧問の先生は、私に「相手を見て、思い切りいきなさい」と声をかけてくださり、そのお陰で緊張も取れて二回戦から気持ち切り替えることができました。試合は進んで準決勝戦では、団体戦で負けた鈴鹿高専の松岡選手と試合を行いました。絶対に負けたくない試合でした。早めに勝負に出た私のドウは、審判旗が1本上がりましたが、惜しくも決まらず。その気の緩んだ瞬間に松岡選手にメンを決められ、取り返せずにそのまま負けてしまいました。三位という結果に終わり、昨年のベストエイトより成績は上がったものの、また昨年とは違う形で当然悔いが残りました。別のゾーンに出た市瀬さんは、クジ運の悪さでしょうか、優勝した選手に負けてベストエイトになりました。今回の全国高専大会では、多くの高レベルな選手と試合をしたり、見ることができ、改めて多くの事を学ぶことができ自分の剣道に対する課題がさらに増えました。

今思えば、昨年阿南高専剣道部に女子一人が入部して不安で一杯でしたが、先輩方が優しく迎えてくださりました。女子は佐藤先輩と二人だけでなので試合に出られず辛い日もありました。今年度は新入部員として四人もの先輩が入ってきてくれ、今で

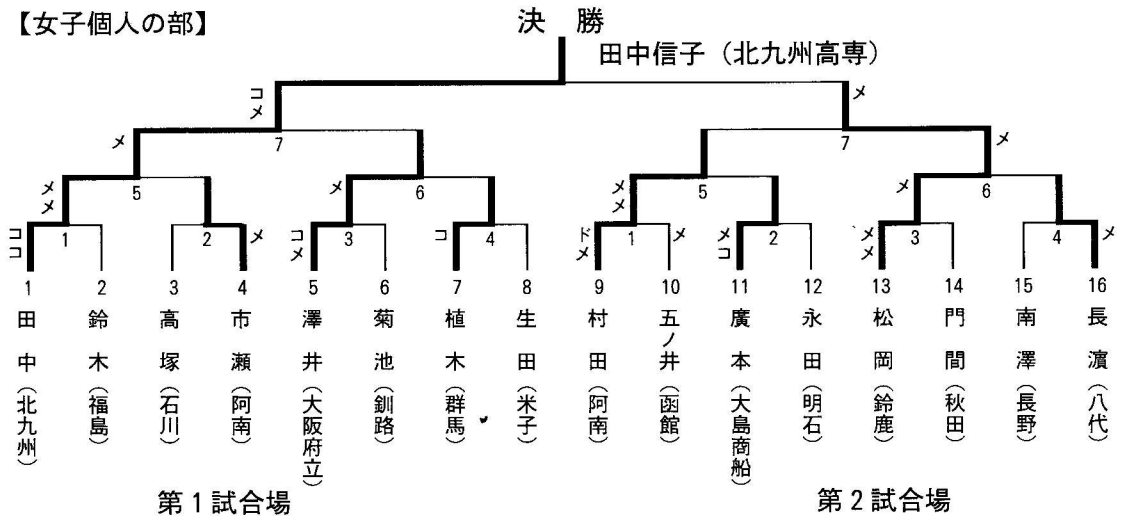


は後輩達や先輩方に大変感謝しています。これからも阿南高専で過ごす残り三年間を部員とともに日々精進し、少しでも前進して行けたらと思います。来年の四国高専大会、全国高専大会に向けさらに気を引きしめ、剣道が出来ることに感謝し、練習に励みたいと思います。来年の全国大会は北海道釧路市で開催されます。北の大地で頑張りたいです。

予選リーグ及び決勝トーナメント



【女子個人の部】



第二回都道府県対抗

少年優勝大会

本田 将 大

道場の代表として五月から始まった県強化訓練に参加し、八月四日に村松先生から大会に出場するメンバー五名が発表されました。名前を呼ばれた瞬間すごく嬉しい気持ちでいっぱいになり、早速その夜にあった道場の稽古で先生方に報告しました。良かったなと今まで以上に頑張るようにと励まされ、試合まで残り一ヶ月一生懸命稽古をしました。試合出発二日前には、昨年出場した道場の先輩である新居先輩も練習相手に駆けつけてくれ、動きや気持ちにおいても最高の状態で送り出してもらえました。

大会前日の九月十五日に松村先生と中山先生率いる中学生チームといっしょに会場である舞州アリーナに出発しました。先に宿舎に入り昼食を食ったあと会場に移動し、鳥取県と大阪府Bと練習試合をしました。中堅という初めてのポジションでしたが、

チームのみんなと試合のリズムがとれ、良い試合が出来ました。

夕方には宿舎に入りチームメイトと中学生と夕食を食べました。夕食後は先輩の部屋に行き、剣道をはじめいろんな話が出来て大変楽しかったです。

九月十六日、ぐっすり眠ることができ目覚めもよく先輩に誘われて宿舎周辺を散歩しました。全国トップレベルともなれば朝から余裕やなって思ったと同時に、自分も一員として仲間入り出来た充実感もありました。

会場に到着すると各県が正面玄関で扉を開くのを待っていました。開場後にアップを行い、緊張感の中プログラムは進行し、いよいよ試合です。

僕たち徳島県チームは、奈良県と北海道の二チームのリーグ戦で戦いました。奈良県には、三〇で勝ち、北海道には一三で負け、結果は予選リーグ敗退となりました。個人の戦績は一勝一分でしたが、北海道戦は中堅の僕がもっと攻め続けて勝っていれば、チームの流れも変わっていたと反

省した試合で、先鋒と大将しか経験のない僕には、中堅というポジションの大切さを知った試合でもありました。

この大会に出場し感じたことは、全国レベルと力の差をあまり感じなかったことです。これからも先生の教えを守り、正しく構え正しい基本打ちを心掛け稽古し、中学生になった時にもう一度代表としてこの大会に出場できるように、今度は優勝を狙いたいと思います。

最後に徳島県代表としてこの全国で戦えるまでにしてくださった道場の先生方、強化訓練で御指導頂いた松村先生をはじめとする諸先生方、又送り迎えや身の回りの世話をしてくれた両親に感謝の気持ちで一杯です。

この機会を得た仲間とは友達としてライバルとしてこれからも付きあっていき、この貴重な経験を今後の生活に役立てていきたいです。

第二回全日本

都道府県対抗少年剣道

優勝大会に出場して

徳島文理中学三年

松本好史



平成十九年九月十六日、大阪府舞洲アリーナにおいて、第二回都道府県対抗少年剣道優勝大会が行われました。この大会はまだ歴史も浅く、出場していない県もありましたが、各都道府県から中学生女子二名・男子三名の代表で構成された非常にレベルの高い大会でした。

私たち徳島県チームは先鋒・次鋒の女子は、那賀川中の全中優勝メンバーが入り注目されているチームでありました。

予選リーグの相手は福岡県と和歌山県で、両県ともに地力があり、簡単には勝てない相手でした。特に初戦の福岡県は昨年の覇

者であり、今年もそのメンバーが残っており、また大将には今年の全中個人優勝者がいて優勝候補の筆頭でした。

私たちは第一試合目で本部席前の試合場だったので少し緊張気味の中、福岡戦が始まりました。先鋒戦で一本負けを喫し、その後三人が引き分けて大将に回ってききました。相手は強いことはわかっていましたが、チームの皆や応援してくれている保護者の人達のためにも「相手に不足なし。絶対に勝つぞ」と強い気持ちで戦いました。

その結果、相手に攻め勝つことができ、一本勝ちができチームは引き分けとなりました。続く和歌山戦では、次鋒・副将が勝って勝利を収めました。福岡県に勝者数で及ばず予選リーグ突破はなりませんでしたが、負けて悔しさは残りますが、こんなすばらしい大会に県代表選手として出場できたことを誇りに思っています。

終わりにになりましたが、バスを運転して頂き、色々のご指導いただいた松村先生、堂々と本部席前に座って応援をしようとし

て緊張を和らげてくれた小学生の選手達に感謝したいと思います。また、二日間を共に生活し一緒に戦った選手の皆さん、監督を努めて下さった中山先生に心からお礼を申し上げます。特に中山先生には、私が剣道を始めてから十年間ずっとお世話になっていたので、大舞台で一勝することができて、ささやかながら恩返しができたと思っています。

来年出場する県内の中学生の皆さんには、私たちが果たせなかった予選リーグ突破、そして優勝を目標に頑張ってもらいたいと思います。ご健闘をお祈りいたします。

監督	中山 繁輝	徳島文理中
選手	先鋒 岡内 拓未	那賀川中
	次鋒 原 麻由香	那賀川中
	中堅 白木恒二郎	石井中
副将	青木 大将	徳島文理中
大将	松本 好史	徳島文理中

全日本女子剣道選手権大会

駒澤大学 吉 岡 穰

女子日本一を決める大会が平成十九年九月二日、静岡県武道館にて開催された。

私が剣道を始めてから今まで味わった事のない緊迫感が会場を包んでいた。右を見ても左を見ても有名選手ばかり。今回初出場となる私は、その開場の雰囲気にもまれぬように必死に「普段通り」を装っていた。審判長の笛の合図で一回戦が開始となる。一回戦とは言え、各地区を勝ち抜いてきた強者。確かな機会を捉え、捨て身で打ち込んでいく姿に釘付けになる。そうこうしている内に付き添いで会場入りしていた大学の同級生が「なか二！」と私の試合までの間を教えてくれた。

面を付け、いざ出陣。一回戦の相手は東京都代表警視庁の永井野選手。永井野選手は激戦区東京から3度目の出場となる。

「胸を借りる」そんな気持ちは毛頭なく、「一回戦でのこのこ帰るわけにはいかな

い！」、頭の中は意地しかなかった。

試合開始。体を動かすがどこかおかしい。自分が試合をしているのに第三者として試合を見ているような感覚に陥る。「今面打ってもいけるんかな？」といった感覚で面を出ると相手の面に出てくる出頭を捉える事が出来、面あり。二本目も相面を制し、初陣は二本勝ちを納める事が出来た。しかし、体は緊張を表面化させていた。今まで剣道をしてきて、緊張する事はなかった。試合を終え、小手を外してみると、大きく手が震えているのに驚いた。確かに試合中、頭の中は真っ白だった。緊迫した空気を肌で感じ、舞台の大きさを身を持って知った一戦だった。

一回戦を終え、昼食を採った。この日剣道では一番になれなかったが、弁当をもらうのと返すのは一番だった。

続く二回戦、もう緊張はなかった。対戦相手は予想通り山形代表鈴木選手。私は現在関東で活動しているので、筑波大学の選手として活躍している鈴木選手はよく知っている。しかし、まさかこんな所で剣を交

えるとは思ってもしなかったもので、どのような剣道をするのかよく思い出せなかった。もちろん一回戦の試合は見た。しかし、見る試合と対戦とはこんなにも違うものかと実感させられるものだった。

鈴木選手は、一つ下のインターハイ個人の覇者。それでもある程度対等に勝負が出来るのではないかと淡い期待を持っていた。しかし、個人戦の戦い方は私より一枚も二枚も上手だった。自分の今ある技、気力、体力、全てをぶつけたが延長戦、引き面を引っかけようとしたところ、引き小手を押さえられ、二回戦敗退。

鈴木選手は3位入賞を果たした。

私の持っているもの全てが通用しなかった。しかし、全てをぶつけても勝てない相手がいたことに不思議と喜びもある。もちろん、負けたことによる悔しさは大きい。試合では完敗だったが、鈴木選手の背中は見えた。鈴木選手との一戦は私に足りないもの、もっと技を工夫する事、試合のより良い運び方などを学ばせてくれるものだった。それを反省・改善することで自分の剣

道が伸びると確信し、悔しさと喜びと、もつと試合をしたかった寂しさの中、私のはじめての大舞台は幕を下ろした。

選手権大会で得られたこの手応えは、国体四国ブロックに向け強化練習と遠征に参加させてもらえたことが何よりも大きい。竹内先生、平野誠司先生、平野悦子先輩、猪尾先輩の熱いご指導のお陰である。非常に感謝している。

最後に、静岡代表として出場された内田さくら先生、準優勝おめでとうございます。数々の素晴らしい試合を目の前で見られたことは非常にいい経験となりました。いつか先生にライブ視してもらえようように頑張ります!!

第五十三回全日本東西対抗 剣道大会に出場して

西軍八将 河田清実

平成十九年九月十六日、茨城県水戸市にある茨城県立武道館で行われた全日本東西対抗剣道大会に、出場させていただきました。この大会は関ヶ原を境にして、東西に分かれ、女子は五人制で、男子は六段三組・七段一五組・教士八段一五組・範士八段二組の三五組が対戦をします。昨年度の大会から試合時間が十分となり、積極的に技を出し合い、二本取って勝負をつけさせようという方針が出されました。今年の全日本選手権大会でも準々決勝から十分となりました。

三年前、愛媛県武道館で行われた五十回大会に初めて出場させていただいた時は、八段戦の第一組目での立ち会いでしたが、八段を取得したばかりで、自分の剣道に十分な自信がありませんでした。そこで、良い試合をすることよりも、勝負に賭けてや

ろうという気持ちで臨みました。今回は八段戦の十組目八将での出場で、対戦相手は強豪の北海道の古川選手です。簡単に二本とられて負けるわけにはいかない、どたばたした試合もしたくない、今までの稽古の成果を出し切り、厳しい攻め合いをし、観客の印象に残る試合をしたいという気持ちで臨みました。

開始直後から古川選手が竹刀を下に回しながら厳しく攻め立ててきます。その攻めに負けて、引いたり居着くと突かれる・打たれると感じました。そこで、下から来る攻め込みに対して、上から乗るように、気持ち崩されないように応じました。二、三合打ち合った後、古川選手の下からの攻めから思い切った面に足が居着き、上体だけで引いてよけてしまい、見事に面を打たれてしまいました。このまま簡単に二本負けするのではという思いが頭をよぎりましたが、まだ時間は十分にある、自分の攻めをして取り返すんだと気持ちを奮い立たせました。

二本目の開始後、積極的な攻防の中で、

古川選手の強い攻めをぐっと我慢した瞬間に面が来ました、そこを間髪入れずに胴に返しました。

勝負となり、お互いに積極的に攻め合い技を出し合い激しい攻防をしましたが、十分の制限時間が来て延長に入りました。思い切って面に二回ほど跳びましたがぎりぎりのとこでかわされました。積極的に攻めて先に技を出せば良かったのですが、古川選手の強引とも思える下からの強烈な攻めに、気を溜めて先を取ることが出来ず、胴をねらってやれと受け身になりました。それを見抜かれて、返し胴を打とうとしたところを、担ぎ小手を見事に打たれてしまいました。

今回、敗れましたでしたが、強豪古川選手相手に精一杯やったという充実感が残りました。「剣窓十一月号」の試合の講評に、表彰された者以外で印象に残った剣士として紹介していただきました。試合の結果は逆転につぐ逆転で大将戦の一本一本の勝負から、東軍の千葉範士が西軍の角範士から見事な小手を奪って東軍が一八対一七で勝

利を収めました。

今回の試合の反省から、強敵を倒すには、積極的に攻めて先を取り、思い切って技を出す稽古に努めなければならないと思います。今後も、一本一本の稽古に課題を持って取り組み、自分の剣道を高めていきたいと思っています。

最後になりましたが、このような素晴らしい大会に推薦していただき、出場できたことに感謝を申し上げます。ありがとうございました。



第五十三回全日本東西対抗 剣道大会に参加して

西軍十六将 近藤 亘

第五十三回全日本東西対抗剣道大会が平成十九年九月十六日（日）水戸市の茨城県武道館で開催されました。

私は、平成十二年に開催された鳥取県大会以来七年ぶり七回目の出場となりました。

以前は、大会前夜に東西両軍の審判、監督、選手等が一堂に顔を合わせ、盛大な前夜祭を行っていましたが、今回は、西軍監督、選手のみで夕食を取るといった簡素な形式に変わっていました。いつから無くなったのか分かりませんが、「監督、選手が明日の試合の健闘を誓い一致団結する」には、こういう形式も良いのではないかと思いましたが。

この大会には、女子の部で東軍次鋒内田さくら選手（現在静岡県在住）、男子の部で西軍八将河田清実選手、そして、十六将に私の徳島県出身者が出場致しました。

（三名が出場したのは、昭和五十六年の徳島県大会以来二度目ではないかと思えます。）

東西両軍に分かれているとはいえ、本県出身者が三名も出場できることに感激した次第です。

私の対戦相手は、東軍十六将大澤規男八段（埼玉県警）です。身長一八〇センチの長身で、年齢も私より五歳年下の若手実力者です。

初めての対戦であり、どのような試合ができるのか、自分の力を試すには有意義な一戦です。

立ち上がり、まず、相手が気合いを掛けたのでこちらも腹の底から気合いを掛け、攻め合いが始まりました。

試合前、相手の攻めがどれくらい強いのか、また、その攻めに自分がどれだけ耐えられるか不安でしたが、意外に相手の攻めを感じませんでした。

試合は、こちらが攻め、相手が打って来るといった展開で進み、相手の打ちはある程度見えていたように思います。

相手の打ちに対し、私も出小手、返し胴、

出頭面と打つのですが、機会をとらえきれないのか有効打突にはさせてくれませんでした。

試合時間一〇分が過ぎ、延長戦となりました。開始後も同じような展開が続く、私の間を詰め攻め入ろうとした刹那、相手が思い切って面を打ってきました。一瞬、虚を突かれたため、私は、思わずのけぞってよめました。

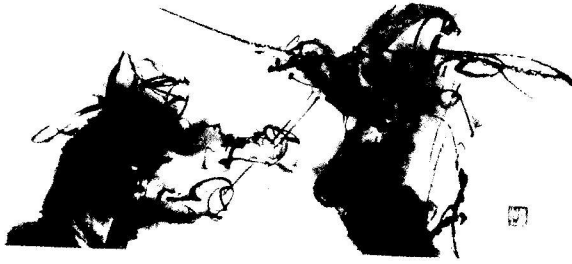
「浅い」と、思いましたが、相手側の旗二本が上がっていました。

隙を見逃さずに打たれたのですから、仕方ありません。

私は、この度の試合で課題ができました。それは、「無形の攻め」ができなかったということでした。攻めには、有形の攻めと無形の攻めがあります。こちらが攻める時に形に現すのと、形に現さずに攻めるのでは違います。前者が今回私が行っていた攻めのように思います。今後は、「無形の攻め」を身につけていきたいと思っています。

結びになりますが、長い歴史と伝統のあ

る本大会に出場させて頂きましたことに感謝申し上げます、簡単ですが報告とさせて頂きます。



第六十二回国民体育大会 剣道大会を終えて

徳島支部 中尾正輝



第六十二回国体

剣道競技(秋田わか杉国体)は、平

成十九年九月三十日(日)から同年十月

三日(水)までの四日間「なまはげ」で有名な、秋田県男鹿市総合体育館を競技会場として開催されました。

私は、この大会に監督として参加させて頂きました。

本県選手は、先鋒・大石洋史選手(大阪体育大学)、次鋒・近藤正章選手(警察機動隊)、中堅・平野誠司選手(警察機動隊)、副将・福多雅英選手(城北高校教員)、大将・西谷肇一選手(新野高校教員)の布陣でベスト8を目標に広島県、岐阜県、京都府等において強化合宿を実施し、充実した状態で試合に備えました。

第一回戦は、島根県と対戦三勝一敗一引き分けて勝利、戦績は次のとおり。

徳島 3(7) - 1(5) 島根 試合時間

○大石 メドーメ 高木 1分39秒

近藤 コーコメ 深石○ 6分29秒

○平野 コーコ 藤田 3分00秒

○福多 コー 境 5分18秒

西谷 メ×メ 小村 5分00秒

先鋒大石選手は、立ち上がりから攻め、攻め、攻めで危なげなく一勝をあげる。

次鋒近藤選手小手を先取されるも、起りの出小手を取り延長戦に入る。相面わずかに相手が早かったか。

平野選手小手先取されるも、落ち着き見事な小手を連取し貫禄勝、二勝目をあげる。

副将福多選手上段から小手、面にと繰り出すも有効打突にしきれず延長戦へ、開始後小手を決め勝利。左足底筋を負傷第二回戦の出場があやぶまれる。

西谷選手引き分けて、久しぶりに第二回戦に駒を進めた。

第二回戦は、群馬県と対戦二勝三敗で敗れる。戦績は次のとおり。

徳島 2 (3) | 3 (3) 群馬 試合時間

○大石 メコ | 小林 4分57秒

近藤 | メ 藤多○5分00秒

平野 | コ 茂木○6分58秒

福多 | メ 谷○9分31秒

○西谷 メ | 小林 5分00秒

福多選手第一回戦で痛めた足底筋をかばいながら、連敗を食い止めようと9分31秒に及ぶ大接戦、勝運なく敗れる。

各試合ともに、制限時間一杯を使って押し気味に試合をすすめるも、相手が粘り強かったか。

今大会、大石選手の活躍はすばらしいものでありました。益々稽古に精進され今後の活躍を祈念する次第である。

目的には届かなかったが、選手諸氏は本当に頑張りました。

来年度の大分国体こそ、本大会を反省し目標に向かって努力、稽古に励んで頂きたいと思えます。

終わりにりましたが、国体出場に当たり多々お世話になりました。県剣道連盟の関係者、応援して頂きました方々に深く御

礼を申し上げたいと思えます。



秋 田 国 体

少年女子監督 飯 田 栄 一

宿敵である内田選手（愛媛・済美高校）を大将の平野（鳴門高）が最終戦で破り、少年女子は薄氷の思いで国体本戦に出場を果たすことができました。二年連続で国体本大会に男女アベックで出場することができました。専門委員長・本田先生をはじめとする高体連の先生方、剣道連盟の先生方の全面的なご支援の賜物であると、この場をお借りしてお礼申し上げます。

今大会のチームは、男女のチーム仲間もよく、保護者のチームワークもよく、とても良い雰囲気です。秋田に向かうことができました。剣道連盟のご尽力により、公共交通機関で秋田までの移動を可能とさせていただき、コンディションは上々であったと思います（行きは長い道でしたが）。四国大会、県外遠征でも男子の調子がよく、女子はベストに近づけられないまま男子に引っ張られるような形で秋田まで最終調整

を行いました。

このチームは、国体への出場経験者が多く、ベストチームとして本大会に出場できました。三年連続大将の平野、二回目の出場となる横山・中野（ともに富岡東高）。また、富岡東高でレギュラーを務め、試合経験豊富な河井・細川といった布陣は、上



位進出も可能なメンバーでした。

一回戦の長野県。先鋒・横山のしぶとい試合ぶりからの勝利で先制し、細川・中野と見事に勝ちきり一回戦を突破しました。久しぶりの初戦突破です。続く対戦相手は、選手層の厚い大阪府でした。ここを勝ちきれば五位入賞だったので、監督として、





選手を乗せることができず、ズルズルと相手のペースに巻き込まれる形で押し切られてしまいました。監督として、選手の力を出し切らせてあげることができないままに終わってしまった事が無念でした。

次回からは、国体本大会少年の縮小化で、四国からは一県しか本大会には出場できません。厳しい予選を勝ち抜き、大分の地でも本県の選手が活躍できるように、男鹿の地で心新たにチャレンジ精神を芽生えさせました。

第四十二回全日本居合道大会

監督 高橋 憲 司

前日降っていた雨も止んで好天に恵まれた十月二十日、平成十七年に国民体育大会のバスケット会場として新設された岡山県体育館（桃太郎アリーナ）において、四十七都道府県の五・六・七段の代表選手が一堂に会して第四十二回全日本居合道大会が開催されて本県からは七段に吉岡修一・六段に高野康寛・五段に四宮博の各選手が代表として出場しました。私自身は平成十五年埼玉県秩父市で開催された第三十八回大会以来の監督としての参加でありました。

まず本県代表選手の成績ですが、七段の吉岡選手は初戦にこの日ベスト四まで勝ち上った大分県の小坂選手と対戦して敗れ、六段の高野選手は初戦で滋賀県の尾前選手と対戦し善戦しましたが惜敗しました。五段の四宮選手は初戦で山口県と対戦し、よく戦って勝ち上り、二回戦の佐賀県との対戦も勝ち上って三回戦に進みましたが、対

戦した千葉県の川瀬選手に敗れました。都道府県別の得点による順位は全国四十一位でありました。因に優勝は地元岡山県・二位神奈川県・三位千葉県の順でありました。

試合を観戦して近年各都道府県の力量の差が十年程前に比べて接近して殆んどなくなりつつあるとの印象を持ちました。ただ上位に勝ち上っていく選手を見ますと一言で技・体ともこなれが良く稽古量の多さを感しました。

日頃の稽古の中で足・脚・体の配り、正しい手の内、また刀の運びが正確であるという基本の上に、仮想の敵に合わせた間と間合の判った所作に暖急・強弱があり、気力の充実した堂々とした技前であることが大事であると思えました。小手先だけの所作や刀の振りだけに頼った形だけの居合は慎むべきでしょう。

居合が今日広く普及するようになった背景には試合が行われるようになった事の成果ではありますが、競技として結果のみにこだわりますと、本来在るべき処からは離れてしまう恐れがあるように思います。

夢の舞台

警察支部 山名 信行



十一月三日、この日は剣道に携わる者として特別な日である。それは毎年日本武道館で全日本剣道選手権大会が行なわれる日だからである。

そして平成十九年十一月三日、今までの自分の人生にとって忘れることのできない日となった。

なぜならこの日、私は全国の予選を勝ち抜いた六十四名の剣士の一人として日本武道館の中央に立つことができたからである。この舞台に立っているだけで歓喜で涙がこぼれそうになる。

幼い頃、亡き祖父が私の喘息を治すために勧めてくれた剣道。振り返ると辛い事の方が多かったように思えるが、色々な事を教えてくれた

礼節

人に叩かれる事の痛さ

我慢すること

努力すること

挫折したときの悔しさ

諦めないこと

努力が実ったことの嬉しさ

等、思い起こせばきりが無かった。

また私がこの試合に出場することは剣道界においても一つの大きな話題となっていた。

それは私が二刀流の剣士だからである。

二刀流の剣士がこの大会に出場するのは三十八年ぶりの出来事であり、その関心の度合いは私が想像する以上のものだった。

更に一回戦で対戦するのは東京代表の平尾選手。年齢こそ四十歳と参加選手中最高齢ではあるが激戦区と言われる東京都予選を勝ち抜き、過去には警視庁の大将を務め、世界選手権の優勝という実績を持つ選手である。

試合は僅か二コートで行われる。

試合直前、胸の鼓動が早くなる。体が震

える。これが武者震いなのか、緊張から来る震えなのかはわからない。

名前がアナウンスされコートに立つ。

礼をして竹刀を抜く。

するとざわめく会場。

会場中の全ての視線が自分に注がれているのを面を着けたうえからでも感じる。

「始め」

の声と同時に頭の中を空っぽにする。

最初から作戦など何も無い。

ただ前が出るのみ。それが自分の剣道だからだ。

初太刀。

小太刀で相手の懐に攻め入って思いきって太刀を振り下ろす。しかし捌かれる。けれど下がらない。自分の技がそう易々と通用するなど端から思っていない。

妻と二歳の娘が見ている。娘は大きくなっ

たら今日の事は何も覚えていないだろう。

だからこそ、この日の事を聞かれたら胸を張って「父ちゃんは頑張っただけに出たんだよ。」と言いたい。だから下がらない。だから前が出る。

そしてあつという間に時間が経過し、延長戦に入る。

延長に入ってから初太刀、自然と体が反応した。

太刀が相手の小手に吸い込まれるように振り下りた。「パクン」と乾いた音と同時に旗が三本翻る。

「小手有り。」

無心で打った一本だった。場内がどよめき拍手が起る。また体が震えた。今度の震えは歓喜の震えだった。

続く二回戦は山梨県の鹿野選手。

常時先手を取り試合を優勢に進めていたが、延長戦に入り二合目。太刀で小手、突き、小手の三連打を繰り出しそして意を決して面に跳ぶ。

自分の中では最高の攻め、タイミング。

しかし、相手はその瞬間小手に跳ぶ。一斉に三本の旗が翻る。

「小手有り。」

打たれた私自身が感嘆の声が出てしまうような見事な技だった。

試合を終え面を外すと多勢のマスコミに

囲まれた。今までこういう場に慣れていなかったたので目を白黒させてしまった。

また多勢の子供や学生にサインを求められたが、字に自信が無かったことと、本当に私みたいな者が書いて良いのだろうかと思ひ、子供に「見ていてどうだった。」と聞くと「格好良かったし、見ていて面白かったです。」と答えてくれたので迷わずサインができた。

こうして私の全日本選手権は終わり、振り返ってみると私の今までの人生からでは想像できないような貴重な体験ができた。

そしてまた新たな目標ができた。

それは、この舞台に帰ってきたいという目標だ。そのためにも日々の稽古にこれからも精進していきたい。

最後になりましたがこの様な貴重な体験ができましたのもひとえに、日頃からご指導いただいている皆様のお陰だと思ひます。この場をおかりしまして心より御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。



第五十回全日本実業団

剣道大会に出場して

日亜化学工業剣道部

呉 羽 貴 志

平成十九年九月十七日、創立五十周年記念大会となる全日本実業団剣道大会が日本武道館で開催されました。本大会は、その名の通り全国の実業団の猛者達が、自社の名を背負い業務の合間を縫って鍛錬した成果を発揮する最大のイベントである。参加チームは三百を越え、武道館内十六コートで繰り広げられる選手たちの奮闘ぶりは、全員が十代とも思えるほど若々しく、勢いを感じる。

我々日亜化学工業剣道部は、最終的に四回戦敗退（ベスト六十四）という成績で本大会を終えることとなった。過去最高のベスト十六を上回るベスト八進出を目標としていただけに無念さは残るが、私としては今後につながる敗戦であったと思っている。初戦の相手は中央三井信託銀行で、先鋒・

次鋒が勝利し、良い流れのまま副将・大将が連勝し快勝、二回戦は不戦勝の為、三回戦は十試合以上間隔が開いた後となった。

三回戦の相手は立川ブラインド工業、先鋒が引き分け、次鋒が一本負けという厳しい展開の中、中堅・副将が相次いで二本勝ちし、大将戦を待たずして勝利が決まった。

私は大将を務めていたが、ここまで勝負の掛った場面は一度も無く、比較的楽な展開。これが逆に四回戦（対ソニー戦）での敗戦の一因となったと考える訳だが、その試合、先鋒が二本負けし、次鋒・中堅が引き分け、副将は攻勢に出た中、不本意な小手を取られるも二本を奪い、勝負は大将戦に持ち込まれた。一本勝ち以上が求められる状況の中、私の頭は「一本取られると二本が必要

になる、先取される訳にはいかない」という、消極的な考えに支配され、試合序盤は思い切った技も出ず、時間だけを浪費してしまう。まずい！そう思った時は焦りから攻めの無い打突を繰り返し、中途半端な間合いから引き面を決められてしまった。直後、落胆の色を隠せないところに打たれた

引き小手、集中力の切れた私は見切られることも追い込むこともできなかった。結局、二本連取され、勝敗は決した。

敗戦直後に私を感じたのは、冷静になれず「流れ」を読み切れなかった、ということ。必要だったのは、一本を取られないように打つのではなく、前に出て自分の間合いで勝負をすること。

大会全体を通してみれば、上位チームとの間に大きな実力差があるとは思えない。足りないのは勝つことへのこだわりと、気持ちを切らない試合運びだと思う。今後は、そういったところを意識しながら、日頃の稽古を実践していきたいと思う。

日亜化学剣道部では、毎週木曜日午後七時より一時間、阿南市の大潟武道館で稽古を積んでいます。三交代勤務など業務の合間を縫っての参加となるため、部員全員が揃うことはほとんどありませんが、各員が年間目標を持ち活動に取り組んでいる。練習日の参加者がまばらで寂しい時もあるが、四国でも数少ない実業団剣道部としての灯を点し続けたい。

全国警察剣道大会を終えて

警察支部 山室雅幹

最後に、身の上話を少々。私自身、全日本実業団剣道大会への出場は、今回が四回目だったのだが、出場の打診があった当初は非常に迷っていた。なぜなら、平成十九年の一月に左手首の尺骨短縮手術しており、戻りかけた握力でようやく竹刀を握ったのは五月も終わり頃。出場の話があったのは七月であったと記憶している。その時点で微妙な違和感と痛みの残る手で、二ヶ月後の私が左手首を気にせず剣道が出来るかどうかは微妙であった。それでも出場したのには自分の回復力と、執刀して下さった先生を信じたからだった。そして九月、正直これだけ竹刀を振れるようになると思っていたしなかった。手術の為に快く休暇を認めてくれた会社と、納得できる治療をして下さった医療関係者の方、そして家族や周囲の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

あの悪夢の日から一年……。平成十九年九月二十一日、全国警察剣道大会が日本武道館において開催されました。昨年、予選リーグにおいて大分県警、岐阜県警と対戦し三チームともに一勝一敗となり、勝者数において徳島県警は屈辱の三部に降格という結果となりました。私達はこの現実を受け止め、近藤師範、平野監督のもと激しい稽古、そして自分自身を限界に追い込み、来年は必ず平成十三年度のように、三部優勝・二部昇格を目指し、特練員一丸となつてこの大会に臨みました。

予選リーグでは、奈良県警、山梨県警との争いにより幕を開けることになりました。このリーグを勝ち上がることで二部に昇格することができました。

第一試合、奈良県警との試合が始まりました。団体戦において先鋒が一勝するかしないかでチームの流れは大きく左右されま

す。斬込隊長の先鋒・六條は昨年に引き続き、小気味いい足さばき、そして素早い竹刀さばきで相手を翻弄し、チームを勢いづかせる貫禄の二本勝ちを納め、好スタートをきることができました。続く次鋒・山名も二本の竹刀を巧みに操り、六條の勢いをそのまま引き継ぎ二本勝ち。中堅の近藤の試合が始まりました。少々緊張ぎみの立ち上がりでしたが、慎重且つ大胆な攻めで一本を先取しました。このまま勝利かと思つた瞬間、相手のフェイントからの打突が近藤の面をとらえました。しかし近藤は慌てることなく、お返しとばかりに、強烈なメンを叩き込み、怒涛の三連勝となり、予選リーグ一勝を奪い取ることができました。副将・川添も自分の剣道をそのまま發揮し勝利を収め、だめ押しの四連勝となりました。ここで大将の私の試合で完全勝利をと気合充分で望んだのですが、延長戦の末メンを奪われてしまい、四勝一敗で奈良県警に勝利することができました。

第二試合、二部昇格をかけて山梨県警と対戦することになりました。山梨県警も奈

良県警に圧勝したため、勝利した方が二部に昇格、負ければ三部残留ということになります。まさに天王山となるこの戦い、一年間やってきた稽古の成果を発揮し、絶対に勝利しなければならぬ重要な一戦となりました。先鋒・六條は奈良戦と同様、巧みな足さばきで相手を寄せ付けず豪快にメンを取返し、幸先のいいスタートをきることができました。次鋒・山名は二本の竹刀で果敢に攻めた結果、メンを先取しました。その後、相手が一本を取り返しますが、焦ることなく自分のペースを最後まで保ちコテを奪い、先鋒、次鋒と二連勝することができました。この中堅戦を勝利することで、二部昇格が確定します。中堅・近藤の試合が始まりました。近藤の必殺技である逆胴から攻め立てていき、チームは最高潮に盛り上がりました。奈良戦と同様このまま三連勝しそうな勢いでした。しかし、相手もここで負ければ後がないことから、捨て身の技を繰り出し、近藤はメンを取取されてしまいます。二勝一敗で迎えた副将戦・川添の試合が始まりました。川添は、今まで

の稽古の成果を爆発させ、思い切りのある豪快な技で攻めていきました。惜しい打突もありましたが、旗は上がりず引き分けという形で大将の私にバトンを繋げてくれました。この場面で、最低一本勝ちか引き分けで徳島県警の二部昇格が決定します。しかし、相手の二本勝ちで一気に形勢は逆転します。とにかく私は、二部に昇格することだけを考えて試合に望みました。試合は膠着状態が続きお互いに有効打突を取ることもなく延長戦に突入することになりました。延長戦は、三分間の一本勝負です。相手も代表決定戦に持ち込もうと、死にもぐるいで攻めてきました。私はその猛攻をしのぎながら有効打突を狙っているという展開です。チームメイトから「ラスト、ラスト」「あと、少し」という声が聞えてきました。残り時間は僅かだと感じていました。今振り返れば、残りの時間帯、特練員全員の気持ちが私に乗り移り後押しをしてくれたように感じます。しばらくして、終了のブザーが鳴り、主審の「やめ」の合図。次のリーグ戦に上がるのは我々となったのです。そ

れと同時に念願でありました二部昇格も実現しました。さらに二次リーグで勝利すれば決勝進出でしたが、香川県警、静岡県警には惜しくも敗れてしまいましたので、私達の全国大会はここまでとなりました。

昨年、三部に降格してからは、打ち込み・切り返し等基本を中心とした朝稽古を週四回実施し、警視庁、兵庫県警、岡山県警、長崎県警、京都府警、大阪府警、和歌山県警と私が特練員になって最多となる練習試合並びに合同稽古等を経験させて頂いたお陰により、今回の結果が得られたのだと考えております。

また、これらのことがあったからこそ全体の士気や体調等大会直前まで最高のかたちで臨むことができたと感じております。三部にして優勝とまではいきませんでした。が、来年は二部で入賞して、未だ成し得たことのない「夢の舞台」である一部に昇格ができるように、剣道特練員一丸となって日々精進していく所存であります。

最後になりましたが、剣道連盟の先生方には今後一層のご指導と、ご支援を賜りま

すようよろしくお願い申し上げます。



平成十九年度

徳島県高齢剣友会活動状況

事務局長 笠井 勝



徳島県高齢剣友会は、遠藤一美会長のもと、八十九名の会員（平成十九年度四月末現在）

で活動を進めてきた。

平成十九年度は、主な行事として次の活動を実施した。

（九月）

- ・第十三回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（二〇〇七とくしまねりんピック）開催

（十一月）

- ・第二十回全国健康福祉祭いばらき大会（ねんりんピック茨城二〇〇七剣道交流大会）参加

（十二月）

- ・南部地区稽古会 美波町日和佐総合体育館にて開催

（毎月）

- ・原則として、第二土曜日の午後二時から、県立中央武道館他で、定例の稽古会を開催

以上の行事の内で「第二十二回徳島県高

齢者剣道交流大会」、「第十三回徳島県健康

福祉祭剣道交流大会」（二〇〇七とくしま

ねんりんピック）、及び稽古会の活動につ

いて私の方から報告することとし、他の各

大会については、それぞれ直接関係する会

員の先生方からご報告いただくことにした。

◎第二十二回徳島県高齢者剣道交流大会

催

（五月）

- ・第十九回土佐生涯剣友会交流大会参加

（六月）

- ・第二十九回全日本高齢者武道大会参加

（七月）

- ・西部地区稽古会（美馬市 台風のため中

止）

平成十九年四月二十二日(日)午前九時から
県立中央武道館で実施。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀教士

七段出葉成一先生、仕太刀錬士六段三木毅
先生により行われ、続いて、居合の演武が
無双直伝英信流教士七段吉岡修一先生によ
り披露された。

その後、会員選手三十名による交流試合
が団体戦・個人戦の順に展開された。

団体戦は、十チームによりトーナメント
戦が行われた。

○優勝：徳島 B (中尾正輝、高島稔之、西

岡金若)

○二位：阿南 B (北條憲治、有賀秀敏、遠

藤一美)

○三位：徳島 A (美馬勝行、東内勉、南充

美)

個人戦は、三十名の選手が年齢別の四グ
ループに分かれてトーナメント戦を行った。

〔特組〕優勝(遠藤一美)、二位(南充美)、

三位(糸谷文雄)

〔A組〕優勝(滝本博文)、二位(有賀秀

敏)、三位(東内勉)

〔B組〕優勝(三木毅)、二位(高島稔之)、

三位(沢井勝之)、三位(川田武

志)

〔C組〕優勝(中尾正輝)、二位(谷博)、

三位(美馬勝行、北條憲治)

団体戦・個人戦の大会が終了した後、徳
島県高齡剣友会総会が開催され、平成十九

年度の役員改選、行事予定、予算案等が了
承された。

午後からは、全日本高齡剣友会(高崎慶

男、橋本保治、高崎健一)及び、愛媛県高

齡剣友会(藤田守也、向井健司、大久保博

光、織田端)の合同チームと、土佐生涯剣

友会(大石恒詮、三谷義守、横山大道、篠

崎俊雄、吉本貢、戸田七夫、岡本守雄、嶋

村俊彦、中野金夫、松田忠男)との親善交

流試合を実施した。

全日本・愛媛合同 対 徳島県高齡剣友会

2勝(6本)

2勝(5本)

土佐生涯剣友会 対 徳島県高齡剣友会

3勝(4本)

2勝(2本)

全日本・愛媛合同 対 土佐生涯剣友会

2勝(3本)

3勝(5本)

親善試合後、全参加者による合同稽古を
行った。

本県会員による試合だけでなく、全日本、

愛媛、土佐の各選手との親善交流試合・合

同稽古も行うことができ、大変実りの多い

一日となった。

◎第十三回徳島県健康福祉祭剣道交流大会
(二〇〇七とくしまねりんピック)

平成十九年九月三十日(日)、午前九時から
県立中央武道館で実施。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀教士

七段一村喜佐男先生、仕太刀五段笠井勝に

より行われた。

準備運動の後、会員選手二十三名による

交流試合が、団体戦・個人戦の順に展開さ

れた。

団体戦は、九チームによりトーナメント

戦が行われた。

・優勝：阿南 B (北條憲治、福井軍二、遠

藤一美)

・二位：麻植 (日野利之、出葉成一、三

木毅)

・三位：県南 (泊利治、沢井勝之、有賀

秀敏)

・三位：徳島B（河野通宣、高島稔之、中

村稔裕）

個人戦は、二十三名の選手が年齢別の四
グループに別れてトーナメント戦を行った。

〔特組〕優勝（遠藤一美）、二位（中山啓

男）、三位（南充美）

〔A組〕優勝（川田武志）、二位（福井軍

一）、三位（滝本博文）

〔B組〕優勝（高島稔之）、二位（笠井勝）、

三位（沢井勝之、久次米繁

興）

〔C組〕優勝（美馬勝行）、二位（出葉成

一）、三位（日野利之）

◎徳島県高齢剣友会稽古会

本会の稽古会は、先述したように、原則
としては県立中央武道館で実施しているが
年二回だけは、県西部と県南部で実施して
いる。

今年度は、次のとおりである。

○県西部地区稽古会

平成十九年七月十四日(土)十四時から

(会場) 穴吹スポーツセンター

当日は、台風四号が接近していたことか
ら急遽稽古会を中止した。

○県南部地区稽古会

平成十九年十二月八日(土)十四時から

(会場) 日和佐総合体育館

(参加者) 高齢剣友会会員、県剣道連盟

海部支部会員有志、少年剣士

(総計) 約四十名

懇親・祝賀会 (ホテル千羽)

高田豊先生が、全剣連から有功賞受賞



第十九回土佐生涯剣友会 交流大会に参加して

徳島県高齢剣友会

日 野 利 之



平成十九年五月
十二日、五月晴れ
の日、高知県立武
道館において第十
九回土佐生涯剣友

会交流大会が、盛大に開催された。その試
合の午後一時からの交流試合に参加した徳
島県の高齢剣士は、日野利之、笠井勝、中
村稔裕、高島稔之、沢井勝之、端村武、福
井軍二、川田武志、西岡金若、南充美の十
名であった。

迎える土佐生涯剣友会の剣士は、それぞ
れ一世を風靡した名剣士揃いで
一回戦

先鋒・長崎伸輔、次鋒・橋本正規、八将・
田内巖、七将・浜田安雄、六将・細木稔、
五将・常光彰、四将・吉本実、三将・橋田

速生、副将・高石敏夫、大将・西内満夫、
以上十名
二回戦

先鋒・松田忠男、次鋒・嶋村俊彦、八将・
岡本守雄、七将・吉本実、六将・戸田七夫、
五将・友永隆雄、四将・安瀬地福市、三将・
三谷義守、副将・横山大道、大将・大石恒
詮、以上十名

の十九名の先生方であった。

道場控室で、心温まる昼食の接待を受け
少し休憩した後、サブ道場で準備体操をし
体をほぐすなどした後、それぞれ気を集中
するなどして、いざ試合場へと挑んだ。

試合結果は、次表のとおり接戦で、一勝
一敗の引き分けとなり、更に親善を深めた。
我が大将の南先生は負け知らずで、二試
合連続で決めた一刀両断した鮮烈かつ豪快
な面技は、会場をどよめかした見事なもの
で、剣道の本質を知らしめた一撃でありま
した。

試合終了後、それぞれが立会稽古を行い
各先生方の元気を知らされました。

その後、宿舎では土佐生涯剣の先生方

と土佐料理を肴として、美酒を御馳走にな
り剣道談議に花が咲き楽しい一夜を過ごし
せて戴きました。

私は、今春六十歳となり、先輩の勧めで
徳島県高齢剣友会に入会させて戴いた初年
兵です。私の剣道歴は、十八歳で徳島県警
に採用され、警察学校で故堀江範士から竹
刀の握り方を教わった警察剣道です。試合
経験は、毎年一回開催される県下警察柔道
剣道大会に所轄署の剣道選手として、これ
までに十数回出場した程度で、剣道につい
ては負けた悔しさの方が多く良い思い出は
あまりありませんでしたが、土佐生涯剣友
会の交流試合に参加させていただき剣道に
目覚めました。それは、それぞれの大先生
方が、真剣に勝負する姿、その意気込み、
凄いきどを伴う剣先での攻め、元気な姿を
拝見し、剣道のすばらしさを改めて知りま
した。それで、私もその直後から真剣に剣
道稽古に励み、積極的に多くの先生方に稽
古をつけていただくようになりました。そ
のようなことで、定年退職を迎える年の秋
に、鳴門武道館で開催された県下警察柔剣

1回戦

	先鋒	次鋒	8将	7将	6将	5将	4将	3将	副将	大将	得点
徳島	日野	笠井	中村	高島	沢井	端村	福井	川田	西岡	南	5
高齡剣	コ	コ	×	メ	×	×		×	メ	メ	3
土佐	コ		×	コ	×	×	コ	×			3
生涯剣	長崎	橋本	田内	浜田安	細木	常光	吉本	橋田	高石	西内	1

2回戦

	先鋒	次鋒	8将	7将	6将	5将	4将	3将	副将	大将	得点
徳島	日野	笠井	中村	高島	沢井	端村	福井	川田	西岡	南	2
		×	×	×	×	×	×	×		コメ	1
土佐	メ	×	×	×	×	×	×	×	メ		2
生涯剣	松田	嶋村	岡本	吉本	戸田	友永	安瀬地	三谷	横山	大石	2

道大会における県警察本部剣道チームの大将として出場することが出来ました。結果はともかく還暦となってもまだ若衆には、まだまだ負けんぞという気迫で勝負が出来て楽しい思い出となりました。

初年兵の初陣は、一分一敗で勝ちはまだありません。

今後とも剣道稽古に励みますので、諸先生方御指導宜しくお願いします。



高齢剣友会活動報告

第二十九回全日本高齢者

武道大会に出場して

徳島県高齢剣友会

三木 弘子



平成十九年は、私にとって大きな節目の年でありました。六十に達したのを機会に、高齢剣友会に仲間入りをさせていただきました。そして、全国大会出場という還暦のプレゼントを戴いたのです。

ある日の稽古会で、高島先生より「三木さん、今年の全国大会はご夫婦揃って出て下さいね」と思いがけないお誘いを受けました。主人も、高齢剣友会には私より一足早く入会しておりますが、全国大会は未経験のことでした。そこで、いい機会だと思いついて出ることを決心しました。徳島県からの女性出場は私が初めてのことだと

伺いました。

平成十九年六月四日、日本武道館に於いて全日本高齢者武道大会が盛大に開催されました。本県からは十五名が参加しました。八角形の大会場に集まった選手の皆さんは、武道が何よりも好きな人達ばかりで、健康的で自信に満ちた笑顔が素敵でした。場内のあちこちで、再会を喜ぶ光景が見られ、お国なまりの言葉のやりとりを聞くのも楽しいものでした。

剣道の部では団体戦、個人戦そして女性総合トーナメントが行われました。個人戦は男女混合で年齢別に六つの組に分かれていました。私は一番若いC組で、二試合のブロック予選を行いました。私は二試合とも元気な男性と当たり、何が何だか分からないうちに終わってしまったという感じでした。相手の気迫に押されてしまっていました。続いて、二十一名による女性総合トーナメントが昼食時間に行われました。観覧席に目をやりますと、皆さんお弁当を食べながら見てくれていましたので、空腹状態ではありましたが、大きな声を出すことを

頭において試合に臨みました。そして一回戦、二回戦と粘り勝つことができ、三回戦で東京の選手に判定負けをしました。

本県からの出場の先生方は善戦され、中でも、遠藤先生が寿B組（八十歳～八十四歳）で三位に入賞されました。私達夫婦揃っての初出場も珍しかったのでしようか、剣道雑誌の方から取材を受けました。

私は、今大会に出場して色んな経験ができました。年齢を重ねてこそできる素晴らしい大会です。どの試合も、熟年パワーをいやという程見せつけられました。私の今後は、自分との戦いです。コツコツと努力を続けていけば、その先に何かいいことがあるような気がするのです。その先は、いつ来るかわかりませんがそれを楽しみに体力、気力の続く限り頑張ろうと思っております。私達を東京に連れて行ってくださった先生方、大変お世話になり有り難うございました。最後に日頃、私達をご指導くださっている先生方、そして仲間の皆様にご心よりお礼を申し上げ大会の報告とさせていただきます。



ねんりんピック茨城大会 に参加して

高齢剣友会 松浦政昭

「さわやかな長寿の風を茨城に」のスローガンのもと、平成十九年度の第二十回全国健康福祉祭の剣道交流大会は、戦中の海軍

兵学校予科練で名高い、茨城県土浦市の霞ヶ浦湖畔にある、霞ヶ浦文化体育館で開催されました。

剣道の徳島県選手団は、先鋒・松浦政昭、次鋒・笠井勝、中堅・沢井勝之、副将・泊利治、大将・南充美の五名で本大会に臨みました。

本県チームの成績は、残念ながら決勝トーナメントには勝ち残れませんでした。全員力を尽して戦い、全国各地の剣士の皆様と貴重な交流を図ることができました。

以下、大会日程の模様等を思いつくまま綴ってみたいと思います。

初日は、徳島県庁での県選手団の結団式の後、宿泊先である太平洋の黒潮洗う大洗海岸に面した大洗ホテルに、県選手団全員が投宿しました。

当ホテルでは、珍しい「あんこうの解体ショー」が見られるという好運にも恵まれ、県選手団全員とお世話下さる県職員の皆さんとの楽しい懇親のひとつきを過ごすことができました。

翌日の総合開会式は、うらめしいかな、

風まじりの冷たい雨の中の開催となりました。

会場は、ひたちなか市の笠松運動公園内陸上競技場でありましたが、雨の為、選手団の入場行進は中止となりました。

全員直ちにズブ濡れのアルプススタンドに着席しての開会式となりました。

常陸宮殿下をはじめ、多数の御来賓の祝辞に始まり、茨城県会旗あげての、マスゲーム等華やかなアトラクションで、歓迎ムードいっぱいの中、会場大いに盛り上がり：とはいかなくて、私達は冷たい風まじりの雨の中、楽しいはずのアトラクションを満喫する余裕もなく、ひたすら寒さを耐え忍ぶ二時間余りでありました。

開催地の方々の御苦労を思えば、まことにお気の毒としか言いようのない状況で、徳島県選手団との交流の為に、わざわざ出向いて下さった地元小学生達との交流も果たせないまま、なりゆき解散的に開会式は終了しておりました。

いよいよ試合当日、剣道交流大会は、曇り空の中、霞ヶ浦体育館にて行われました。

試合結果は、冒頭に記したとおりの残念な結果（内容は別図参照）に終わりましたが、本県チームの二回戦は、はからずもその日の最終試合となり、全会場注視のさながら決勝戦のような雰囲気の中、群馬県との間で戦われました。

負けた試合ではありませんが、最後の大将戦で南先生が、大技の豪快な面につづき、ねらいすましたような見事な小手と二本勝ちを収められ、徳島県勢の面目を施していただきました。

私個人の戦いはいえ、二試合とも、お相手は七段の先生で、やはり格の違いは如何んともしがたく、どの試合も全く剣道をさせてもらえず、地力不足を痛切に思い知らされた、貴重な経験でありました。

その夜の宿舎では、試合の反省会を兼ねての剣道談議に花が咲き、またホテルのロビーでは、たまたま御一緒になった清水市選手団の先鋒を勤められる佐藤先生とも、四国愛媛にゆかりがある方との事で、剣道談議はもとより、古里よもやま話に花が咲き、楽しいひとときを過ごすことができました。

した。

試合の翌日は、敗れた試合をも吹き飛ばすような、雲ひとつない青空のもと、レンタカーを借りての県内観光となりました。

コースは、水戸の偕楽園、護国神社、大洗水族館等を巡回し、最後に宿泊先である霞ヶ浦観光ホテルのすぐそばから出航する、霞ヶ浦周遊観光船に乗船することになりました。

しかし、観光船の船着き場に私達が到着した時は、すでにその日の最終便の船は出航したばかりで、船は岸壁を離れて遠ざかっていくところでありました。

ところが、切符売場の係員が、遠ざかる船に連絡をとり、その船を呼び戻してくれただけではありませんか。ただ私達五人の為に、いやもう一人うら若き女性がおられましたか……

私達五人とかの女性一人は、ただただ関係者の方々の暖かい配慮に感激しつつ、あわただしく周遊船に乗り込みました。

遊覧船では、たちまち集ってきたかわいいカモメの群れに、パンクズの投餌を試み

て大いに楽しみましたが、このカモメ達のパンクズを一粒たりとも落さない百発百中の妙技に、思わずこの動体視力が我に備わっておれば、私の剣道も……と大変うらやましく思いながら、霞ヶ浦に真っ赤に燃える見事な夕焼けを目に焼きつけて、その日の観光を終えました。

翌日の行程最終日は、お登りさんよろしく靖国神社、新宿御苑等の東京見物をのんびりと楽しんだ後、徳島行ジェット機の機上の人となりました。

最後になりましたが、今回の貴重な経験の場を与えて下さった、高齢剣友会の皆様感謝申し上げますとともに、来年九州鹿児島で開催予定のねりんピック剣道交流大会に出場される先生方の御健闘をお祈り申し上げます。

予選リーグ 第1試合

団体名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	総本数	勝敗
徳島県	松浦	笠井	沢井	泊	南	1	1	×
		⊕一本勝						
滋賀県	⊗コ西田				一本勝⊗矢島	2	3	○
		河村	山元	谷口				

予選リーグ 第2試合

団体名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	総本数	勝敗
群馬県	清水	増田	新井	丸山	小杉	3	5	○
	⊕コ	⊗一本勝		⊕コ				
徳島県					⊗コ南	1	2	×
	松浦	笠井	沢井	泊				

お通杯、宮本武蔵顕彰

女子剣道大会

竹内 佳代子

第六回「お通杯、宮本武蔵顕彰女子剣道大会」個人四十歳以上の部において、参加選手数一四六名の中で優勝することができました。優勝が決まった瞬間、自分でもびっくりしました。試合結果は次の通りです。

一回戦	竹内メ	板鼻(岡山)
二回戦	竹内Ⓞ	飯田(東京)
三回戦	竹内コ	成栗(岐阜)
四回戦	竹内Ⓞ	山崎(愛知)
五回戦	竹内コ	松下(兵庫)
準決勝	竹内メ	井上(三重)
決勝	竹内メ	瀧澤(東京)

毎年、仲間を集い本大会に参加しています。岡山県といっても、武蔵武道館までは片道三時間以上はかかってしまい、移動はけっこう大変です。でも、私は毎年この大会を楽しみにしています。私だけでなく、

一緒に参加された方たちも、同じ気持ちのようです。だから一度参加された方は、都合がつく限りは毎年参加しています。今年は一十一人が参加しました。二十代四人、三十代三人、四十代三人です。親子ほどの開きがある人もいるけれど、行き帰りの車の中や、夕食時のアルコールをちょっと(?)交えた雑談で、世代をこえて話はずみです。これも大会の楽しみの一つです。

他にもこの大会の魅力はたくさんあります。まず一つに、団体戦と個人戦の両方に参加できることです。参加者も、もと全日本チャンピオンもいれば、国体で活躍している選手もたくさんいるし、本場に剣道が好きで勝ち負けなど関係なく、剣道ができることを心から楽しんでる方もたくさんいます。だから、試合を拝見するだけでも勉強になるし、たくさんさんの元氣や刺激をいただけます。また大学時代のなつかしい先輩や同級生、後輩たちにも会えます。さらに審判の先生方がすべて男性八段、女性七段ということも魅力です。大会前日には、その先生方に稽古をお願いすることもでき

るので、これも大会参加の楽しみです。

今回の大会前は、仕事が忙しく自分の思うような練習が十分できていませんでした。だから試合出発前、主人に「お米期待してゐるぞ」と言われても、「今年は楽しんでくるだけ」と返答していました。この大会のもう一つの魅力に、賞品がお米と言うこともあります。一昨年三位に入った時は十キログラムのお米をいただきました。昨年は、「絶対お米持って帰るから」と気合いを入れた大会に臨んだ結果、準々決勝で平野さんに判定負けをしました。でも今年は本当に何の気負いもなく、参加できることだけを楽しんでいました。無欲で臨めたことが結果につながったのかもしれませんが、でも、まったく竹刀を握っていなければ体は動きません。体がよく動いたのは、毎日鳴門一中の生徒たちに、防具をつけて指導をしているからだと思います。生徒の基立ちだけでも、自分の稽古にもなっていることを改めて感じました。中学生が相手といっても、攻めや打ちの工夫をすることで、十分稽古になることがよくわかりました。求める気

持ちがあればどこでも、誰とでも自分の稽古ができます。求める気持ちがあれば稽古をする機会はつくっていけるのです。これからも、生徒との稽古を通して、自分自身の技能も高めていきたいと思っています。それと共に今大会を通して、「無欲・無心」の大切さも改めて感じたので、そのことはこれからの生徒指導の中で生かしていきたいと思えます。

追伸：賞品のお米（二十キログラム）おしかったです。家族が何より喜んでくれました。（笑）



随想

シベリア抑留記

会長 遠藤 一美



私は大正十四年五月二日生まれ、今年（平成二十年）で満八十三歳になります。おかげ様

で健康に恵まれ、剣道の稽古を楽しみ、充実した生活を送れています。このことは、私が人生で一番つらい思いをしたシベリア抑留を乗り越え、何とか日本に帰って来れたことに起因しているように思えるのです。今回、『徳島の剣道』に随想執筆依頼を得たので、以下に満州・シベリア時代の想い出を書いてみたいと思います。

昭和十五年四月二十五日、私は南満州鉄道株式会社の内地採用員として、小松島港から中国大連港へ出港しました。その頃の

客船は速度も遅く、玄界灘では海が荒れ、船酔いで食事もとることができませんでしたが、何とか、翌日、大連に上陸することができました。

昭和十六年頃より、戦況が悪化し、私は志願兵として錦西八〇四部隊に入隊して、軍事訓練や鉄道警備に当たり、中支・北支と各地を回っていました。昭和二十年八月終戦となり、ソ連軍により武装解除が行われ、その翌日より、捕虜・使役者となりました。それから、毎日毎日がつらい作業でした。黒竜河で満州各地から送られてきた牛・豚・羊等の家畜の屠殺作業でした。黒竜河が凍るのを待って、ソ連に渡るのですが、その際、肉類はすべてソ連へ送り込まれました。

ソ連に渡った私たちは、貨物列車に乗せられ、一週間程かけて捕虜収容所へ送り込まれました。その間、貨物列車内にはドラム缶を切ったものを中央に置き、石炭を焚いて寒さをしのぐのですが、シベリアの厳しい寒さはやりきれず、防寒着を着ていても寒さと飢えがつのるばかりでした。収容

所についた私たちは、三日間は水も食料も何も事が待っていました。その三日間は、食料はスコップ・ツルハシですべて力仕事、作業はノルマ制で、ノルマが達成できなかったと食事が減らされます。重労働で食事が減らされ、腹が減っては命に関わります。

捕虜仲間の何人かは、作業中にボーフラの浮いている水槽の水を隠れて飲んでいました。何回か飲むと下痢となり、栄養失調で病院へ送られますが、収容所へ帰ってくることはありませんでした。体調の悪い者は許されて、日本に帰れたのかどうか、生死はわかりませんでした。

春が来て、草木の芽が出てくるとその芽を摘んで、ハンゴウの中に入れ、煮てこれを食べました。これでも腹の足しにすることができました。長い長い三年の月日でした。必ず、生きのびて日本に帰りたい。東の空を見ると母の姿が浮かぶのです。その母が「必ず、生きて日本に帰って来なさい！」と何度も言ってくれました。私は思わず「お母さん！」と叫びました。

昭和二十三年十二月六日、ナホットカ港

から舞鶴港へやっど日本の国土を生きて踏むことができました。この時の喜びは何ともたとえようありません。

帰国してから、一ヶ月ほど休養し、戦後の混乱期を何とか生活しつつ、今日に至っています。シベリア抑留のような体験はもう絶対あってはならないと思います。しかし、生死の境をさまよう体験の中で私自身の精神が鍛えられ、その後の人生を元気に生き抜くことができたと考えています。



ある一枚のスクラップから

麻植支部 出葉成 一



私は、二年前から新しい職場の事務機のデスクマツトの下に、ある一枚のスクラップを

置いて大切にしております。そして私は、毎日、それを何度となく見ては、自分の生活態度や剣道に対する取組姿勢等について自己反省をしたり、そのスクラップの主人公から教わった数々の尊い教えを懐かしく思い出している、「こんなことでもいいのか。もっとしっかり頑張れ。」と自分を叱咤激励しております。

私が大切にしているこのスクラップは二〇〇三年（平成十五年）九月十五日付の朝日新聞徳島版に掲載されていた敬老の日の特集記事で、当時、八十三歳のご高齢でありながらも矍鑠かくしやくとして現役剣道家として徳島県の剣道界をリードされていた剣道範

士八段の堀江幸夫先生を取材したものであります。

その記事を見ると、「県内でただ二人剣道最高の八段」というサブタイトルと『生涯続く心の修行』というメインタイトル付きで、県警察学校体育館で稽古される前に、正座されて手際よく剣道具を着装されている凛とした姿の先生の大きな写真入りのもので、文面には、「剣道には体の技と心の技の二つがあり、終点はない。この道七〇年。心の修行は生涯続く」。若い時は、スピードと瞬発力に任せた技を出すのが、速さが衰えても相手の動きが読める「心の技」を磨いているのだという。今心配なのは、「試合に勝つための剣道」の風潮があることだ。日頃から「心の修行を怠ってはいけない」と技の指導と併せて心の技を説く。「若い者はなかなか聴いてはくれんのだが」とこぼしつつも、「五〇代で目が覚めたように稽古に戻ってくれる教え子がいるのがうれしい。」と顔をほころばせたと書かれたものであります。

私はこのスクラップを見る度に、常に自

分に厳しく、他人には優しい心で接し、人と争うことを一番嫌った堀江先生の温厚誠実なお人柄と強くて美しかった剣風を思い出します。

また、堀江先生が剣道八段位を受審される数年前には「あっし(自分)には、時間がない、時間がない。」と毎日、口癖のように言われて、我々、若い県警剣道特練員以上に真剣に何倍も各種トレーニングや稽古に取組まれ、一日に四回も稽古されたうえに、間をみつけては、書道の稽古や読書に努められていたことを思い出します。そして、当時の若い私には、あれ程剣道もすばらしいし、強かったうえに、剣道のことば勿論、剣道以外のことについて何をお尋ねしても、即座にいろいろな事例をまじえて分り易く答えてくれた博学の先生が、どうしてああまで毎日まいにち、精進努力されるのかと、不思議でなりませんでした。

現在、私自身が六〇歳になって剣道八段位受審にチャレンジするように、はじめて当時の堀江先生は、八段受審の何年も前から、非常に次元の高い剣道を求めておられ、ご自分がいろいろな課題を自身に課せられ、非常な努力と精進によって、それらを一つひとつ克服し、自得されていたのではないかと、当時の堀江先生の心境を少しは理解することができるような気がします。しかしながら、現在の私自身の生活態度や剣道に対する取組姿勢、稽古の仕方を見てみると、当然のことながら、当時の堀江先生の修行態度や求道心ぐどうしんには、到底足元にも及ばず、お恥しい次第であると深く反省しております。

また、私はこのスクラップを見る度に、これ迄に堀江先生から数えきれない程、数々の貴重な教えを頂いたことを思い出しておりますが、ここで全てを紹介することは無理と思われまますので、主なものを二、三書かせて頂きます。

まずその一つは「剣道及び剣道人の真の価値」ということについてであります。この教えは、私にとって一番耳の痛いことです。「私は剣道何段でございませつか、剣道教士・範士でございませつか」と言ってみたとところで、世の中の剣道に全く興味や関心のない人達にとっては、そんなものは、只の道端に転がっている石ころみたいなものである。真の剣道の良さとか、剣道を行ずる者の本当の価値は、日常生活の中で、ふとした事や行いの中に、キラッと光るものや他の人と違うところがあって、それを見た人が、「あの人は、何かをされているのですか。」と聞かれた時に、他の人から「実は、あの人は剣道をされています。」と言ってくれ、それを聞いた人が、「ああ、なる程そうですか。やっぱり、他の人とは一味違うと思いました。」と言って貰えることが、剣道をやっている人の真の値うちであるとの教えです。この教えを私なりに「剣道が強いとか弱いということではなく、本当に剣道を通じて人間ができてきているか、どうかということではないか。そして、日常生活の中で、剣道で学んだことが自然にいかされ、役立っているか。」ということではないかと平易に理解し、早く本間物の剣道人になることを常に心掛けています。

二つ目は、「剣道(修行)は、全人格のぶつかり合いである。」ということですが、

剣道ではよく切磋琢磨ということが言われるが、究極は自分がどれだけ修行したかということにつきる。柳生流に「三磨の位」ということがあり、習、工、練、つまり正師について正しいことを習い、それを自分で工夫し、修練していくという教えである。芸事は何事においても同じで、行ずるといふことが最も大事であると言われるが、特に剣道においては、兎にも角にも、行ずること、つまり稽古、修練しなければダメである。いくら頭で理解しても、体現できなければいけないのである。その為には「只管稽古」、つまり、只ひたすら稽古するのみで、一生懸命、稽古をすれば、おのずと道は開けるものである。しかし、ほんまものの剣道は、技のみをいくら磨いてもダメで、心の技も必要である。その心を磨く為には、剣道以外の芸事とか、座禅とか、いろいろなることを行ずることによって自分の心の修練をして自己の人間性を高めたり、心をしっかりと磨き、自分の持てる幅広い豊かな全人格をもって相手と対峙し、更に一層自分を磨いていく処に本当の剣道の価

値があるのではないかと教わりました。

今は三月、時あたかも卒業シーズンであり、あちらこちらの学び舎から「仰げば尊し我が師の恩」のメロディーが聞えてきます。

私は今、四苦八苦しながらこの原稿を書いています。私の空耳でしょうか。遥か天国から、あの優しかった堀江先生が、私

のこの様子を見て、ニコニコと微笑みながら例の穏やかな口調で、「成やん、他人様に頼まれたことは、自分のことはさて置いてでも、さっさとしてあげなはれよ。木原先生や皆が困つとるでよ。」と、そつと叱ってくれる声が聞えてきます。師の恩とは、本当に有難いものです。



剣道を楽しむ

徳島文理大学 野 間 義 明

私は五十年近く、剣道を続けているが、剣道を楽しむことが出来るようになったのは四十五歳を過ぎた頃からである。それには大きく二つの理由があると考えている。一つはキリスト者として、信仰による永遠の命をいただいていることの喜びと平安を体験していることであり、二つ目は、良き師の助言や聖書のことばにより剣道においても一つの悟りを得ることが出来たことである。昭和六十三年徳島文理大学に奉職してから二十年になるが、縁あって剣道部顧問兼監督、徳島大学医学部剣道部コーチならびに中四国学生剣道連盟顧問として、学生剣道にたずさわる機会が与えられている。大学では幼稚園、小学校、中学校、高校の教師、管理栄養士や栄養士、医師、歯科医師、看護師、薬剤師、養護教諭を目指している学生たちと剣道を介して交流させていただく幸いを感じている。

さて、今回『徳島の剣道』の原稿の依頼に対して、ヨーロッパにおいて剣道を楽しんだことを紹介したい。お互い言葉はわからなくても剣道は共通の言葉であり、楽しく交流が出来る。私は平成七年から毎年ヨーロッパで開催される国際精油シンポジウムに参加するが、その度毎に防具を持って出かけ、剣道を通して国際交流を楽しんでいる。今まで訪問し、剣道交流をした国と町はドイツ（ハンブルグ、ベルリン、ミュンヘン、ケルン）、オーストリア（ウィーン）、イギリス（ロンドン）、デンマーク（コペンハーゲン）、スウェーデン（マルメ）、イタリア（シシリア島）、フランス（ニース）、ハンガリー（ブタペスト）、ポーランド（ワルシャワ、ウッジ、ブロッツラフ、グダンスク、チェストホーバ、ルブリン）である。

ヨーロッパで初めて剣道を行ったのはドイツの北に位置する大都市ハンブルグのアルスター道場である。ルフトハンザ空港会社勤めるナショナルチームメンバーであったシュミット（剣道三段）の家に泊めても

らい、一週間のうち金曜日は五時から一時間日本剣道形のみ稽古（大小十本）と六時から八時の二時間は剣道の稽古にドイツ人をはじめ、日本人、韓国人、スイス人の男性や女性が集っていた。竹刀を道場の中央に放射状においてランニング、ストレッチ、竹刀の素振りの後、面と小手を持ちサークルを作り、互いに礼を交わし、基本稽古と地稽古をした。稽古の後はシャワーを浴び、炭酸入りの水を飲み、サウナに入り、終わった後はサロンでゆっくりと話や紅茶を飲んで楽しむといった雰囲気があり、剣道を通して生活を楽しんでいることが印象に残った。土曜日は試合稽古の日で、二時から六時頃までの四時間の稽古があり、最初の一時間ほどは基本練習をし、その後、三十分ほど休憩してお茶や紅茶をつまみながら団欒の時を持ち、ついで総当りで試合をした。幸いにも私は全勝したが、何本か打ち込まれた。剣道の練習に十分に時間をかけ、剣道をする心を心から楽しんでいるのが肌で感じられた。彼らの剣道を見ると「素朴」「純朴」「粗い」「一刀必殺

の気迫を持った打ち」などの言葉が浮かんでくるような昔の日本の剣の修行者を見る思いがした。

ドイツの首都ベルリンでは岡山大学の先輩小倉肇氏（剣道七段）の友人でドイツ剣道連盟元会長デムスキーさん（剣道七段）

宅にホームステイさせていただいた。小倉の友人は私の友人だと歓待してください。毎晩、ベートーベンの第九とともに、香り高いドイツワインを傾けながら、剣道談義に花を咲かせた。ベルリンではドイツナショナルチームのメンバー選抜のための予選会が行われていたので見学した。男性と女性が繰り返し総当り戦を繰り返し、二日間試合をしていた。男性も女性も全般的には構えが良くないように思えたが、試合慣れをしているのか駆け引きは上手であった。日本人のように、いや、それ以上に動きがいい人も何人かいたのには驚いた。上段からの面打ちや小手打ちや出会い頭の技のキレがとてもよかった。結構、突き技も多く鋭い。攻めて突いて相手の攻撃をとめる高度な剣道もしていた。日本の大学生のハイレ

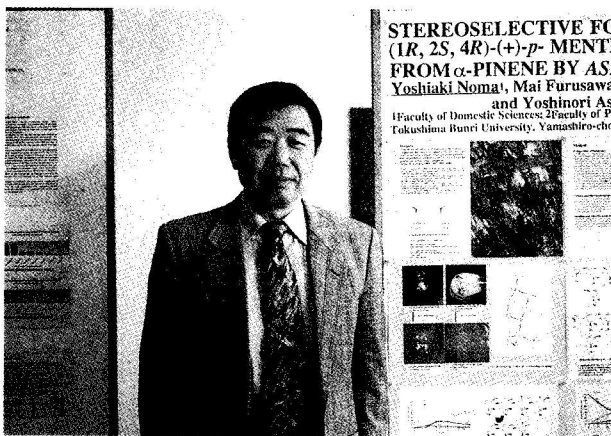
ベルな剣道をしているように感じた。最後の日の一時間だけ、合同稽古の時を設けてください、ライプツヒから来ていた若い剣士との激しい稽古と品格ある剣道をされるデムスキーさんとの稽古はベルリンでの忘れられない思い出である。

ドイツの南部の大都市ミュンヘンでは三度ほど稽古をした。二刀流を始めた人、日本に剣道留学をした人、女性剣士も二名、熱心に剣道に打ち込んでおられた。剣道をスポーツというより武道という精神面に重きをおいて稽古をされておられるのが印象に残った。

ケルンでは大聖堂の前でドイツの剣道家と落ち合い、町を見学しながら、剣道交流をしたこともある。チェコへ行った時は、プラハからバス旅行しながらワインセラードワインを楽しみながら、オーストリアのウィーンに入った。ウィーン大学で開催された学会ではポスター部門でベストプレゼンテーション部門で二位になり、ヨハン・シュトラウスII世の美しき青きドナウのCDとハーブティと賞金をいただいた記念す

べき学会であった。ウィーンの夜の一晚、剣道の稽古に出かけた。日本大使館に勤務されていた日本人も稽古にいられており、各地で剣道をされていた日本人が関与されていることが外国に剣道を広めている一つの力だなと感じながら、その夜は二刀流で稽古をして、記念に小竹刀をプレゼントした。

イギリスの首都ロンドンに行った時には三度ほど稽古をしたが、一回は日本人学校



ベストプレゼンテーション部門で二位となる

の生徒と一緒に剣道をした。外国にきている日本人に日本の文化の一つとして剣道をする日本人がいることを知った。また、別の日にはイギリスのナショナルチームの監督をしていたフスさんと対戦した。丸太棒のような太い腕でバイキングの勇者のような人であったが、本当に強い相手であったが、楽しかった。九州の久留米大学から留学されている方とも剣道や食事を楽しんだ。

デンマークの首都コペンハーゲンでは二メートル近くもある背の高い警察官であるマルチンさん(三十二歳)と一メートル六十センチと背の低い私が凄まじい稽古を行った。終わった時、見学をしていた人が皆二人の検討をたたえて拍手をしていたのが印象的であった。ここでも日系人の大学院生上田君がいて、世界剣道選手権に出場したことを報告してくれた。コペンハーゲンから大橋を渡ってすぐのスウェーデンのマルメでは二回の稽古を行ったが、彼らは二メートル近く背の高い人が多いが、みな素直な正統派剣道をしていることが印象に残った。マフィアの出身地であるイタリアのシシリ

ア島に出かけた時には世界で有数の美しいタオルミナの海を通ってMAKOTO道場に行き、五名ほどの仲間と二晩稽古した。最初に指導者のアイエイロさんが日本剣道形をしたいと申し出られて、大小十本の剣道形をした。稽古の後は、イタリアの海鮮料理や家庭に招待していただき、家庭料理をいただいた。初めてお会いするにもかかわらず、ご一家の方々との交流も与えられ楽しいひと時を過ごした。

バカンス地として有名なフランスのニースではニース大学の剣道部の方々との夕食や大学での初心者との剣道交流をした。ハンガリーの首都ブダペストでは、圧倒される美しい城や町並みを楽しみながら、夜のひと時、それぞれ違った場所での三回の稽古に参加した。ナショナルチームのヨーロッパ選手権者チボー(五段)との稽古も楽しかった。ハンガリーでは小学校の木の床での稽古が出来る環境があり、恵まれていた。一番多く訪問したポーランドはドイツのデムスキーさんの紹介で二〇〇〇年から毎年訪れている。首都ワルシャワでは毎回稽

古しており、ワルシャワ剣道連盟の特別会員となっている。第二の町、ウッジで二回合宿に参加した。チェストホーバー一回、ブロッツラフ二回、グダイニア、ビアウイストック一回、ルブリン一回で剣道交流をしている。二〇〇〇年、学会でブロッツラフの農業大学の学会会場に居た九月十一日にニューヨークでテロが起こった。その前日に、ポーランドの剣道連盟会長のモレットキーさんやコーチのクストスさん(六段)と剣道の指導をし、模範稽古をしたのであるが、その九月十日の私の誕生日がブロッツラフ剣道連盟が創立された日となった。

グダイニアでは第五回バルチックカップ国際剣道大会に招待され二日間参加し、試合前日と試合後の二回ポーランド、スエーデン、イギリスやスコットランドなどから集まった百名ほどの選手や審判員と合同交流稽古を行った。また、試合が一段落して昼の小一時間ほどを利用して、一般の人たちに日本の武道の紹介を兼ねた居合道、棒術、真剣による日本剣道形、剣道の模範試合などの演武が行われた。私も友人のリペッツ

キーさんとともに上段と中段の対戦の模範演武に参加した。彼らの日本の武道に対する研究熱心さには日本人のそれとはまた異なったものを感じる。また、ポーランドでは、海外青年協力隊員として剣道を教えることで勤務されていた高知大学出身の笹田浩史さんとはウッジで、東北学院大学出身の高橋静さんとはワルシャワとブロッツラフで、大阪教育大学大学院生であった鎌倉さんとはワルシャワで、福岡大学出身の川元健嗣さんとはビアウイストックで知り合い、一緒に剣道の指導とともに、日本人同士の楽しく激しい剣道が出来たこともなつかしい思い出となっている。この川元君は一九九五年の春に徳島大学医学部と、鹿児島大学医学部の鹿児島県の枕崎における剣道合宿に出かけた時、合宿に来ていた鹿児島の和田中学校の一人であることが、ポーランドから帰国してわかった。彼は合宿での感想文に「合宿での練習はきつかったけど、一生懸命がんばりました。よい先生方や大学生に出会ったことを一生忘れません。」と書いていましたが、その後も、剣道を続

け、剣道を通して海外青年協力隊員として貢献されていることは剣道を愛する者にとって大変うれしいことです。また、ポーランドでは剣道人口が増加しており、剣道具が足りない現状の中、徳島文理大学剣道部や徳島大学医歯薬学剣道部の皆様、徳島文理中高の玉田晋作氏の御厚意によって、中古の剣道具が提供され、ポーランド剣道連盟に寄付され、利用され、喜ばれていることはうれしい限りであります。

外国の剣道家に関して大いに感心することは日本の文化や剣道に対してはよく勉強をされており、熱い求道心が感じられることである。

剣道は言葉はわからなくても楽しく交流ができる共通の言葉です。日本に限らず、外国にも防具を持って気軽に出かけ、剣道を楽しむことが出来るのは何と剣道愛好家を冥利に尽きるのではないのでしょうか。



ワルシャワにて
ポーランド剣道連盟の
主だった人々との
稽古後の記念撮影



← ポーランド女子剣道家たち

ポーランド剣道連盟の方々 →



まだまだ駆け出し

美馬支部 中川 正

この度、本誌に投稿させて頂くことになりました、県剣連美馬支部の中川と申します。

私は、現在、美馬支部内の脇町少年剣道教室におきまして、初心者の方を指導を担当しております。毎年、年度が替わる度に、子ども達を次のクラスに送り出しますが、今までを振り返ってみても、一度として満足に送り出した記憶がありません。子ども達に対しては、自信を持って指導したつもりではありますが、子ども達の所作をみますと、指導の方法に疑問を感じ、子ども達に対しては申し訳ない気持ちでいっぱいです。(次のクラスで指導する先生方の負担増になります。合掌。)

初心者の子も達は、剣道に対する興味が旺盛です。その興味を良い方向に導き、剣道が好きになるよう素直に転換できれば、初心者指導は半ば成功したようなものです。

しかし、そうは簡単にはいきません。稽古日は、毎回子ども達との真剣勝負です。背筋を伸ばし確信を持って指導にあたっても、跳ね返されるほど子ども達の指導は難しく、いつまでたっても出口が見えてきません。そんな子ども達に対しても、毎回、繰り返し繰り返し、根気よく子ども達に向かい合います。剣道人生の始めとして最も大事な時間を「正しい剣道の礎を」と、少々独りよがりなところもありますが、一年間、子ども達に向かい合っております。

子ども達にはひとり一人にそれぞれの個性があり、一緒に始めた者が、全員そろって技の習得を出来るものではないと思えます。日々の稽古の充実、日々の稽古こそ最も大事であるということに気づき、大人も子ども達も稽古そのものに価値があることを認識し、日々精進出来れば、おのずと技量は身に付くと思っております。

私自身の剣道生活を振り返ってみても、生活の中心に稽古があり、その両側に試合とか昇級昇段や人としての生き方の追求とか、稽古に追従するのではないかと思

うのです。どのような生き方や思想を、どのような技や、技術によってそれが可能なのかは、其々、個人の違いにあり、明確ではないにしろ、日々の稽古によりそれを見いだして行っていると思えます。

初心者の方の指導には、日々稽古の半分の時間を費やしますが、私にとっては大事な稽古の一部分であり、健康維持は基より剣道技術の向上に役立たせて貰っています。もちろん、室長の細川昭典先生、教室の先生方、美馬支部内各剣道教室指導者の先生方や支部員の皆様、共に稽古に取り組んでいる中学や高校の生徒達を含め、剣道連盟の各先生方との稽古があつてこそであります。私が剣道初心者を指導していく上で次の事に重点を置いた指導を行っていくような心がけています。

他のスポーツでよく見受けられます、楽しく遊びながらやる気を引き出し、一つのことを続けていく方法も良い取り組みだと思います、楽しい剣道を教えながらも、勝負では、決着をつけなければならぬ試合という厳しい経験を積み、強い剣道を目指していく



なかでも、あくまでも剣道理念に乗っ取った人間形成（健全育成）、修養を目的として正しい剣道に導いて行かなくてはなりません。「楽しい剣道」「強い剣道」「正しい剣道」といった異なる目的目標で在りながら正しい剣道という^{ゆるが}忽せにしない目標を持って指導していくことが大事だと思います。後になりましたが、県剣道連盟の先生方や各剣道教室の先生方に今後共、ご指導賜りますようお願い申し上げます。

剣道の魅力

阿南市 外国語講師
フィリップ トウリニイ



「何故」という質問が飛び出してくる。日本人は、私が剣道をしているという話になれば、必ず聞きます。その時、いつも返答に困ります。答えは、単純で、一言で簡単に言えるものではないからです。

剣道に辿り着いた道のりは、子供時代に遡ります。偶然にも本で出会った日本に惹かれ、日本史・日本の文化、特に武道についてよく読んでいました。それで、高校と大学時代に空手をしていました。諸事情によって続けられなくなりました。しかし、日本と武道に関する興味は薄れませんでした。そして、大学卒業後しばらくして、転機が訪れてきました。運動不足になっていたため、何かを始めようと考えていたとこ

ろ、剣道を思いつきました。幸いにも地元でできる所を見つけることができました。当初、剣道を選んだ理由は、運動不足解消として、それまでと違ったことをしてみたいのと、剣道には、国際化した空手や柔道より、もっと日本の武道の文化と伝統が純粹に残っていると考えていました。また、同じ時期に、日本語の勉強を始めました。その後、先生からAET (Assistant English Teacher) になることを進めてくれました。そのお陰で、長年の日本に行く夢が叶うことができました。こうして、何気なく歩み出した剣の道は、一生の宝物になりました。

日本に来た時は、日本語も殆どできず、剣道も適当に竹刀を振る程度に過ぎませんでした。そんな私を回りの日本人、特に剣道界の人たちは、優しく受け入れてくれ、色々教えていただきました。そのお陰で、未だに日本に住んで、剣道を頑張り続けています。AETとして、阿南で素晴らしい指導者がいる学校で中学生と一緒に基本練習から始め、また支部の一般稽古でも、多

くの先生方から指導を受けました。非常に恵まれた環境で本格的な稽古ができたので、すればするほど剣道にはまりました。さらに、上達していくにつれ、中学生の指導を手伝ったり、大会で審判をしたりするようにもなりました。修行の幅が広がって、益々面白さを感じるようになりました。また、中学校の遠征にも参加することで、多くの人との出会いができ、様々な人から多くを学び、剣道を通して日本の良さを直接触れることができました。剣道があったからこそ、長く日本に住み続けることができました。それで、最初、頭の中だけの知識に過ぎなかった日本の伝統と文化を、剣道を通じて肌で感じるものとなりました。

剣道を始めてもう十年、日本に来てはもう九年経ちました。何故それほど剣道に没頭するようになったのでしょうか。もちろん、運動としてのストレス解消や健康維持の効果があるけれども、それだけなら、どのスポーツでも得られます。それ以上に、精神面での剣道の効果に惹かれたと思います。普段の生活で、自分の欠点などを認め

たくなくなりがちで、言い訳等をしながらその欠点を隠そうとしたり、逃げようとしてしまってしまうことがよくあります。しかし、剣道は正直で、稽古の中で隠しようも、逃げようもなく、必ず欠点に直面していきます。すると、修行を積んでいくうちに、欠点を直す力を得て、人間として成長して行きます。簡単に言っても、それは実は非常に難しいです。だからこそ頑張らなければなりません。簡単に結果を得られないからこそ、やりがいがあって、一つできた時の達成感が何ともいえないものです。そし

て、次の挑戦へと進んでいきます。一つの欠点を直したら、剣道が次の欠点を教えてくれ、再び直す力を与えてくれます。繰り返し真の自分を映す鏡になり、自分の醜さに気づかされ、それを克服する力を与えてくれるという永遠の成長が、私にとって、剣道の最大の魅力なのです。

私はまだまだ未熟です。これからも、剣の道を歩んで、一生の修行を積んでいきます。人間として、死ぬまで成長し続ける為に。



恩師恵土幸吉先生、

そして今

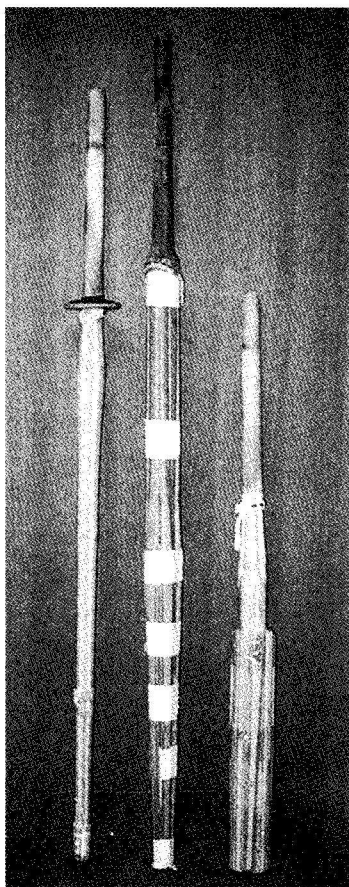
鳴門支部 櫻 井 一 志



小学校四年生のときに母の勧めから町のスポーツ少年団で剣道を始めて以来、多くの先生方にご指導頂いてまいりましたが、恩師をひとり上げるとすれば金沢大学時代の恵土幸吉先生です。身長一五七センチメートルと小兵ながら滅法強い、中京大学在学中は四年連続で全日本学生剣道選手権大会決勝に進出し、そのうち優勝二回、全日本剣道選手権大会にも六回出場して二位二回、三位三回、道理で強いわけです。その恵土先生から学生時代に言われたことは、『国立の総合大学である金沢大学が練習量では強豪大学にかなうはずはない。それでも勝つためには短い時間でも効率的な稽古をしなければならぬ。』実際に防具をつけ

ての稽古は、火、木、金の週三回だけでした。その一方で、俊敏な竹刀の振りを培うために月、水は重い竹刀を用いる素振りが中心の朝トレを行っていました。使えなくなった竹を竹刀に巻き、長さを切り揃えてビニールテープで止めて自作した、通称“重素振り用竹刀（オモスブリヨウシナイ、写真参照）”は、約一・二キログラムと約二キログラムの二種類を用意し、それぞれをスピードアップ用と筋力アップ用と使い分けていました。入部当時は朝トレの度に腕が筋肉痛になっていましたが、徐々に

慣れてくると普通の竹刀を握ったときに軽く感じ以前よりも早く振れるようになりました。もう一つ印象に残っていることは、剣道の上達の秘訣は『自分よりも少し弱い相手と繰り返し試合すること』とおっしゃっていたことです。そうすることにより精神的な余裕を持って試合に臨むことができ、基本打ちで練習している返し技や抜き技などの応用動作が身につくようになる、これを繰り返し行うことで技が自分のものになる、というのが理論です。当時はそう言われてもあまり意識することもなかったので



中央が自作の“重素振り用竹刀”約一・二キログラム、右が自宅室内での素振り用に自作した短い素振り用竹刀

すが、いま振り返れば理にかなっているように思われます。恵土先生は剣道に関して多くの論文や著書を残されており、競技剣道を理論的に解析することにおいて傑出した剣道家の一人ではないでしょうか。平成十六年に金沢大学を退官され、現在は金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科の専任教員を勤められるとともに、NPO法人日本武道修学院 (http://www.geocities.jp/japan_budo/index.htm) を設立し、代表理事として剣道の国際的な発展に貢献されています。

このように素晴らしい剣道の師に恵まれたわけではありませんが、正直なところ学生時代は剣道があまり好きではありませんでした（恵土先生ゴメンナサイ）。理由は自身が試合の勝ち負けにこだわり過ぎていたためだと思います。部内の練習試合で勝たないと対外試合に使ってもらえない、対外試合でも勝たないと次の試合に使ってもらえない、試合に出られないと日常の稽古にも身が入らない、こんな状況でした。さらに大学四年生のときに出場した全日本学生

剣道選手権大会団体戦では日本武道館の床を踏んだにもかかわらず、補欠で試合に出ることができず悔しい思いをしました。しかし、社会人として徳島で剣道を続けて二十年が経過した今は、試合での勝ち負けを競う剣道から間をおいて、大塚製菓剣道部、鳴門少年剣道教室、松茂武道館などで気持ち良い汗を流させて頂いております。素晴らしい先生方とともに日々稽古ができることで心から剣道を楽しめるようになりました。これも故佐藤勇先生、鳴門支部元木武先生、鳴門教育大学木原資裕先生をはじめとして、多くの恩師にめぐり合えたためであり、この紙面をお借りして深く感謝申し上げます。剣道を楽しめるようになった今、もう一度恵土幸吉先生の剣道理論を顧みて剣の理法の修練に役立てるとともに少年剣道育成に貢献していきたいと思えます。



称号・段位合格者

剣道七段に合格して

警察支部 佐賀博史



「やった、あつたあつた。」

合格発表の直後、

京都市立体育館二階の観客席にいた

息子達に両手で大きな丸を作りながら、そう叫んだことを思い出すと今でも嬉しくなっています。

平成十九年四月三十日の京都での審査会において、七段審査に合格させていただきましたことを、この紙面を借りてご報告させていただきますとともに、ご指導を賜りました先生方、稽古をつけていただいた剣友の皆様には、改めましてお礼を申し上げます。

私が剣道を始めたのは、鳴門第一中学校

に入学した昭和五十一年四月からであり、その時には将来自分が七段に昇段できるとは夢にも思っていませんでした。

剣道の防具をつけたら格好いいかな、といったような興味本位だけで剣道を始め、それ以来三十一年間、何とか剣道を続けてきて正直嬉しいことや楽しいことよりも苦しいことの方が多かったように思いますが、今回の審査合格は本当に嬉しい出来事でした。

これまでの私は、中学、高校の六年間、そして警察官になり特練員に指名されていた約十年間、剣道をするのが当たり前の毎日を送っていました。

そして平成五年の全国警察大会終了後に特練員を退きましたが、その大会直後の名古屋の審査会で、何とか六段に合格することができました。

丁度三十歳の時であり、その後、剣道とは遠く離れた環境での勤務が内定してしましたので、その時、私自身「もう稽古する時間もなくなるし、昇段もここまでだな」と考えており、七段審査のことなど頭の隅

にもありませんでした。

そして、剣道を離れて何の稽古もしないまま約十年が過ぎたころに、私の息子が「剣道を始めたい」と言いだし、徳島少年剣道教室でお世話になることになりました。

私もどこかで「また剣道を始めたい」という気持ちもあり、息子が剣道を始めるようになってから、仕事の合間をみては中央武道館へ行き、道場に立つようになりました。

そして、子供達と稽古をする内に自分の息子と剣を交えることに喜びを感じ、また、それまでの勝負にこだわってきた選手時代とは違った剣道を知ったような気がし、以降週に何回か子供達の稽古のお手伝いをさせていただくようになりました。

そんな中で周りの先生方や剣友からは「七段行ったらわ」と声をかけていただくようになりましたし、自分と同年代の方が何人も七段に昇段されていたこともあり、その時点で審査に合格する自信など全くありませんでしたが、お調子者の私は「自分ががんばったらいけるのではないか」とい

う気になり、また、「稽古をやる以上は何か目標を持ってやろう」という思いから、その目標を「七段審査合格」に決めて稽古に励むことにしました。

とは言っても学生時代や特練員当時のように、いつでも稽古のできる環境ではなく、仕事の調子を見ながら稽古に行くという感じでした。

私は徳島少年剣道教室での稽古、警察学校での連盟の稽古会、中央武道館での徳島支部の稽古会など時間がある時は、それらの稽古に参加させてもらい、また、審査会の一ヶ月位前からは、機動隊の朝稽古にも行くようにし週に二回か三回程度は稽古の時間を作り、稽古ができない日は、狭い庭で息子とぶつかりながら素振りをするなど一日に一回は竹刀を握るように心がけました。

それらの稽古では、先生方や剣友らから数々の教えやアドバイスをいただき、迎えた平成十八年十一月、名古屋での審査会に初挑戦しました。

六段審査に合格してから十三年振りの審

査であり、緊張しないはずがありません。相手に集中もできず、中途半端な技を出すだけで、結果を見るまでもなく、不合格となりました。

こうして、私の七段初挑戦は見事に失敗に終わり、審査を振り返ってみて、確かに緊張というのもありましたが、十分に相手をせめていないのに、気持ちだけが焦り不十分な中途半端な技が多かったと、自分なりに反省をし次の審査に向けた稽古を始めました。

そして、ある稽古の際にある先生から

①構えが悪い。

足幅が広く、早く打ちたいという気持ちから、体重が右足にかかり過ぎで、前屈みの姿勢になっている。

②打突時に体勢が崩れ、技を打ち切れ
ていない。

③仕掛け技ばかりではなく、相手を引き出してから打つ技も必要だ。

という指導をいただきました。

まず、構えについては、その先生の指導をいただきながら、前屈みにならないよう

に胸を張ったような、堂々とした構えになるように心がけました。

技を打ち切ることにについては、基本打ちを多くして、体勢を崩さずに技を打ち切るような稽古を続けました。

そして、先生方にかかるだけでなく、特練員ら若手との稽古を増やしました。どうしても先生にかかるときには仕掛けていく技が多くなりますので、特練員らとの稽古では、相手を引き出して技を出すように心がけた稽古をしてみました。

最初の内は、なかなかうまくいきませんでした。稽古を重ねていく内にツビードのある特練員を相手にしても引き出させて技を出せるような機会が段々と増えていきました。

このような稽古を重ね、「今度こそ」という気持ちで四月三十日、二度目の七段挑戦の日を迎えました。この日の受験番号は「310A」であり、午前中の前半の組で審査を受けました。とにかく「堂々とした構えをし、姿勢を崩さずに技を打ち切る」ということを自分に言い聞かせ、あとは相

手に集中するように心がけました。

初挑戦の時に比べてこの日は相手に集中することができ、一人目の相手との立会いでは、中心をせめながら間合いをつめていき相手が仕掛けてきた面に対して私の返し胴が決まったのと、二人目の相手には面を誘いながらせめ入って小手を打つと相手が面に出てきて、この技がうまく出ばなの小手のような形で決まりました。

私の技は、この返し胴と出ばな小手のわずか二本が有効打突かそれに近い技でしたが、相手には打たれることもなく立会いを終了しました。

それと、私の方から仕掛けた面技などは有効打突になるような技はありませんでしたが、立会い中の構えや打突時の姿勢も崩さずにできたという思いもありましたので、不合格に終わった一回目の審査よりは内容のある立会いができたように自分なりに思いました。

ただ、最近の審査では合格率が下がってきていたので、立会いを終えた時点で合格の自信はなく、五分五分という不安

な気持ちで発表を待っていました。

そして張り出された合格者の中に私の受験番号があり合格を確認しましたが、この時は何とも言えない喜びがこみ上げてきましたし、見学に来ていた息子には最初で最後かも知れませんが、父親として良いところを見せられたような気がしました。

この度、私は運良く七段審査に合格しましたが、到底私ひとりだけでは合格することはできませんでした。数々のご指導を賜りました先生方や剣友の皆さんのお陰であると、心より感謝しているところです。

私が特練員を退いてからは、勤務の都合で「稽古はできない、する時間がない」と勝手に決めつけて、自分から剣道を遠ざけていたように思います。今回、息子が剣道を始めたことをきっかけに、私も稽古を再開し昇段審査に合格できたように、いくら忙しくてもその気になれば自分で時間を作り出して稽古はできるもので、私が剣道から離れていた約十年間は単に自分でさぼっていただけだと思ひ知らされたのです。私が剣道を始めてから三十年余りが経ち、こ

れまでに色んな方と剣を交えて学ばせてもらい、また良い仲間にも恵まれてきました。今後も精進していくことはもちろんですが、剣道を通じてすばらしい仲間と出会い、人間として成長していきたいと思ひます。これからもご指導をよろしくお願ひ致します。



七段に合格して

鳴門支部 竹内 佳代子



京都での審査会
において、七段を
いただくことがで
きました。私にとっ
ては四回目のチャ

レンジでした。週二回の警察学校での稽古会を中心に、審査を意識した稽古を続けていましたが、審査まで一ヶ月を切った頃から気持ちが集中できなくなり、スランプが続いていました。また、新学期が始まったばかりで仕事も忙しく、思い通りに練習もできなかったので、今回もやっぱりだめだなと半ばあきらめていました。ところが、審査の一週間前になって不思議と気持ちが落ち着き、心の迷いがなくなりました。そのきっかけとなったのが、河田先生との稽古です。以前から先生には、「打ち出しが早いもつとがまんしなさい。」と指導していただいていたのですが、なかなか自分なりに

に理解することができませんでした。がまんすれば出遅れる、居ついてしまう。他の先生方からも、打つのと待つのが分かれていいる、もっと攻めの中で相手を引き出しなさいと教えていただいていた。意識はしていたものの、納得のいく攻めができないまま一週間前を迎えました。しかし、その時の河田先生との稽古で先生の言われているがまんが初めてできたのです。先生にも、「すごくまとまっていた。」と褒めていただきました。それから初太刀の機会を大切にしたい稽古を続けました。心の中で「がまん、がまん」と念じながら。

審査の一日前は、松村先生、白木先生、本村先生に稽古をお願いしました。これから審査に行くことを知ってくださっており、私の気持ちがまとまるように稽古をつけてくださったので、本当に気持ちよく稽古ができ京都に出発することができました。審査当日もなぜか緊張することもなく、落ち着いて臨むことができました。心の中で「がまん」とだけ念じ臨んだ審査の一人目の方には、返し胴、一人目の方には小手返

し面が決まりました。初太刀がまとまると、最後まで気持ちがまとまり、あわてることもなく機会を大切にできました。終わった後、自分の中ですごく充実感があったので、これで不合格ならもう一生受からないのではと思ったぐらいです。それだけに掲示板で自分の番号を見つけた時はうれしかったです。

特に私の七段昇段は、亡き父の願いでした。私を剣の道に導いてくれ、厳しく指導してくれた父。退職後に病気になるてしまい、自分自身が竹刀をもって剣道をするのができなくなっていました。そんな父の楽しみが、私の七段昇段でした。七段への受験資格ができるのを今か今かと待ちかまえ、光武館道場で私の稽古ぶりを見ては、「足幅が広いぞ。剣先を下げて。」とアドバイスをしてくれていました。父の生存中には、二回審査に臨みましたが、不合格の知らせにも「大丈夫、必ず次は合格だ。」と励ましてくれました。それだけに今回の合格は、父への一番の供養になったのではと思います。ただ、やっぱり生きている

うちに報告したかった、それだけが残念です。

ふりかえってみると審査前、稽古をお願いした先生方みなさんが、審査に向けてのアドバイスを丁寧にしてくださいました。京都に出発の時には、平野さんがバス停まで見送りに来てくれました。審査に合格した時には、たくさんの方がお祝いの電話やメールをくださいました。改めて、たくさんの方々に支えてもらっていたことを感じます。たくさんの人の支え、そして家族の理解と応援があったから、こうして剣道を続けてこれ、七段をいただくことができたと感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。でも、これからが本当の意味での七段の修練のはじまりだと思っています。感謝の気持ちを忘れずに、これからも剣道の修練に努めていきますので、今後ともご指導よろしくお願いいたします。

二刀での挑戦

警察支部 山名 信行



今回八月の福岡の昇段審査で三回目の挑戦にして念願の六段を取得することができました。

これも日頃ご指導いただいている皆様のお陰だと思えます。この場を借りて心より御礼申し上げます。

この六段を取得するにあっては非常に悩みました。それは皆様もご存じの通り私は二刀流の剣士だからです。

審査資格ができた年の一回目の受験をするに当たって周囲の方々に相談しましたが「二刀では無理だよ。上段でも毛嫌いされるのに。」「相手が可哀相だよ。」と言われる。悩んだ末、二ヶ月間中段での稽古を主体に行い中段で受験しましたが、結果は所詮は付け焼刃。不合格でした。

二回目も同じ理由で中段で挑んだのですが心の中に何か引っ掛かりを感じていました。そこで、審査直前に二人目は二刀で挑もうと腹を決め挑みました。一人目を終えた時点でやはりその引っ掛かりは消えませんでした。二人目を二刀で対峙した瞬間その引っかかりが消えました。結果は不合格でしたが「審査」に囚われるあまり自分を見失っていたことに気付きました。

審査の前の説明で言われる「この日のために修練してきた稽古の成果を十分に発揮してください。」という言葉の意味をもう一度自分の中で考えてみました。

三回目の審査は迷うことなく「二刀」で挑みました。これが偽らざる今の自分の稽古してきた姿（剣道）だと思ったからです。

一回目・二回目の時とは違いの心の中はすっきりとした気持ちで臨むことができました。結果は合格。

今考えると自分の剣道を見直すいい機会だったと思います。私自身このとき悩んだこと、この時の中段で審査に挑んだこと、そのためにした稽古は決して無駄ではなかつ

たと思っています。それは中段の稽古で中段の攻め口や気を持ち方、自分の剣道って何だろうと考えることができたからです。また、それが今年の全日本出場につながった一つの要因だと思っています。

この六段取得がまぐれだと言われないう稽古に精進し、これで満足すること無く六段としての実力を付けていきたいと思えます。

六段に合格して

阿南支部 林 洋行



礼の瞬間、まわりの喧騒が一瞬にして遠のく。蹲踞から立ち上がり、渾身の気合を込め

る。気迫が身体中に充満し、緊張から開放されるのを感じる。前に出る。竹刀が交わる。相手の攻めが強い。負けじと攻め返す。暫くの膠着状態。こちらの剣先が中心を獲ったと感じた瞬間、相手が面に来る。考えるより先に身体が反応し胴に返す。充分な手応えを感じつつ残心。

これが昨年八月の福岡審査の初太刀でした。この一本でその後余裕を持った立会ができ、六段に合格することができました。心身ともにご指導いただきました皆様に、この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。誠にありがとうございます。

今回の昇段までに二度の不合格を経験し、

私なりにいろいろと考えることがありましたが、特に以下の三点が合否の分岐になったように思います。

まずは「攻め」。

これまでの私の剣道は、スピードとバネにまかせどんどん打ち込むものでしたが、加齢とともに体力が低下し、思うようにならなくなっていました。自分でも剣風を替えなければと思っていましたが、初回の審査ではこのような立会いとなってしまいました。

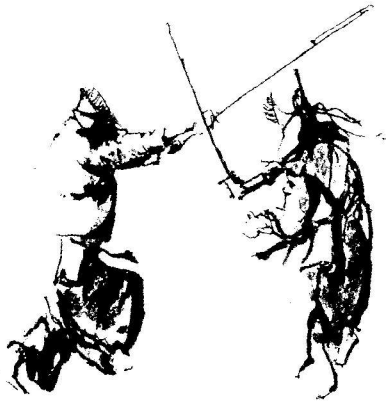
改めて先生方に注意され、攻め勝って打つという気持ちで稽古に取り組みました。

しかし、二回目の審査では、打ち数こそ少なくなつたものの、充分な攻めができておらず、結果的に相手に引き出されたかたちになりました。

合格の際には、攻め勝つことができたのだと思います。

次に「構え」。

稽古のなかで先生方から「竹刀が横持ちになり懐に余裕がない」「足幅が広く左足のひかがみが曲っている」などのご指導を



受けました。これについては、ある先生からお借りした本に、「構えは、左拳が臍下丹田で気を納め、左足の腓骨をのぼすことにより、ひかがみが伸びる。踵はつま先立ちにならず、呼吸は踵から抜けるような気で無理なく自然体に構える。」とあったのを参考にさせていただきました。

最後に「品位」。

初回の審査の際、直前の説明で「品位を審査する」という言葉がありました。果たして剣道における「品位」とは……。実は六段に合格した今でもその答えは解っていません。ただ、それは一朝一夕で備わるものでなく、意識せず滲み出るものであり、それゆえ剣を持つときのみでなく、日常生活の場から鍛錬を要するものであると考えています。

無論、今の自分の剣道では「攻め」「構え」がまだまだ充分とはいえず、ましてや「品位」が備わっているとは思えません。

この会得が今後の修行の目標であり、納得のいくものに達したとき次の昇段につながるでしょう。

今は、阿南支部そして阿南少年剣道教室に身を置き、関係者の方々にお世話になっています。そして、小学生の息子とも剣を交え、同じ場面を共有することに父親として心底喜びを感じています。こうして、心身ともに健康で、充実した環境で剣道ができることに感謝しながら、さらに精進していきたいと思います。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。



六段に合格して

美馬支部 松田 久司



「足かけ九年丸八年梅はすいして十三年」という諺がありますか？本当に長いトンネルでした。出口のないトンネルを走ってるなあーと感じていました。

しかし、長いトンネルはなにも六段の受験に限ったことではなく、五段審査のときも他の人よりは随分余計に受験料を納めました。恐らく最長不倒距離の記録保持者ではなかったかと思っています。

そんな不器用な自分だけにもういいかげんリタイアを考えんといかんなあとも思っていました。それだけに夏の福岡での受験は生涯忘れることのないうれしい記憶となりました。

過去からの自分の剣道を振り返れば、変なクセの抜けない剣道でした。手を直せば

足が、足を直せば手がといった具合で好きでやっているわりには上達が遅くそこらあたりをただなんとなく堂々巡りをするばかりであったように想えます。

そんな自分でしたが脇町少年剣道教室の細川先生をはじめ柴田先生、中川・後藤の両先生方にはいろいろと親身な指導とアドバイスを折りにふれて頂きました。少しずつではありますが、徐々に自分の中に溶け込んで行ったように思います。また、穴吹少年剣道教室の大石先生には剣道形を含めてあれこれと本当に細部に渡って注意や欠点などを指摘してくれました。また受験の際の気構等も助言してくれたことがどれだけ参考になったか計り知れないものがありました。

諸先生方に対し心より厚く御礼申し上げます。次第です。

さて審査当日は過去の反省に立って「どんなことがあってもクセや欠点は出さぬ！アドバイスを受けたことはやり抜くぞ！！」と心に誓って臨みました。そのせいかどうか、立合ではわりあい集中出来て良いとこ

ろで良い打ちが（自分なりに）出たように思います。ひよっとするとひよっとするぞ！と期待して発表を待ちました。

「あつた〜」と思ってひよっとして見間違いは？と何度も見直して確認しました。

各会場の合格者十二、三名が一ヶ所に集められた際その内の一人のむせび泣く声が聞えた時はさすがに目頭がジーンと熱くなりその人を正視する事が出来ませんでした。まさに人生のドラマであり、人それぞれ熱い思いが籠もっているんだなあと感じました。

今まで続けて来たからこそその感激であるとともに「継続は力なり」を改めて痛感させてもらった次第です。

さて、これからの剣道については、無理をせず楽しみたいなと思う反面楽しむにはもう一寸？まだ大分？強くなりたいたいなあとも思っています。

いずれにせよ、此の道の普及と子供さん方の健全育成に少しでもお役に立てればと願っているところです。

平成十九年度

称号・段位合格者一覧

― 剣道 ―

【七段】

【教士】

四月三十日

森 直行

十一月三十日

佐賀 博史

山田 耕司

竹内 佳代子

【錬士】

【六段】

十一月三十日

五月二十日

前田 秀一

仁木 香

佐野 伸治

飯田 栄一

西山 伸二

八月二十六日

平 正明

松田 久司

林 洋行

山名 信行

【五段】

【四段】

【三段】

五月二十日

隅田 憲男

敦賀 晋平

佐藤 浩

佐々木 克哉

九月十六日

横手 慶人

原 知永

美馬 敦子

五月二十日

湯村 義喬

北川 成仁

松田 正稔

森 明日香

福田 美知子

九月十六日

梶 浩人

竹原 千鶴

五月二十日

峯田 博生

金岡 洋平

奥村 将行

鈴木 紀博

抽友 勝也

溝淵 貴俊

大塚 康弘

九月十六日

大垣 俊喜

高島 健

佐藤 裕

土山 康平

西山 拓志

平井 悠基

三木 亮二

影山 智也

福永 啓人

谷澤 勇

中山 大地

滝本 耕造

野田 祥希

美馬 憲太

山崎 真司

田内 照男

村田 奈津季

高岡 晶美

永浦 瞳

十一月二十五日

深田 良平

福井 一馬

鈴木 健太郎

正村 良太

松本 凜太郎

大森 駿斗

大塚 亮太郎

柳谷 俊樹

森出 大介

福川 敬太

延清 正博

難波 建多郎

高田 厚史

大西 由起

西田 奈央

細川 美波

壺内 美沙希

井上 奈津実

黒川 ひとみ

高橋 理恵

賀上 由里奈

新居 春菜

鴻野 賀穂里

【二段】

五月二十日

安部 晃太郎 大西 将文 渡辺 真也 岸田 一希 石井 稜祐 福居 壮太 西村 光司 木下 裕貴 山本 次郎 松本 裕佑 柚木 宏毅 白石 騎士 田中 宏明 松田 直樹 高瀬 悟志 田中 湧大 近藤 祐希 篠原 寛弥 土井 翔吾 福田 純大

宮越 健太 上田 勇輝 入江 健太 福島 優也 小栗 明彦 板東 武志 青江 匡剛 田村 周平 高石 大暉 山下 知也 東道 裕人 久保 俊樹 富原 裕貴 小倉 尚文 原 裕 横川 光 大西 佐季 松寄 智佳 井上 彩 品川 里穂 中川 笑美 藤井 瑛万 福崎 友菜

九月十六日 谷澤 茜 森崎 祐香 森崎 祐希 石川 晴菜 喜多 桃子 福井 美咲 岩原 里紗 香川 千夏 古川 圭 秀島 千晴 九月十六日 遊亀 聖悟 吉田 昂平 中村 光希 鎌田 空志 上田 義弘 河野 将大 山上 達也 福多 貴大 大久保 有真 小濱 紘通 金久 貴幸

上野 恭生 浜田 拓弥 東川 宏樹 中西 生堯 村島 智也 民善 善樹 岸野 賢太 前津 貴大 武田 正樹 岩川 洋志 向原 紳悟 清川 星治 戎 伸二郎 東條 和也 岡本 直樹 真鍋 良人 大森 和夫 竹内 晃久 佐々木 梨絵 松原 加奈 木村 奈々美 市瀬 薫子 東内 綾菜

栗野 文那 井内 希那 熊沢 奈美 高橋 麻美 井上 愛理 井本 葉子 井本 葉子 谷脇 湧水 谷脇 湧水 大田 紗耶加 大田 紗耶加 谷澤 真紀 佐藤 美優 吉岡 真衣 鈴江 友香 十二月二十五日 青木 大将 藤崎 利樹 白木 恒二郎 工藤 魁 佐古 哲宏 皆谷 翔太 柴田 大輔 尾花 佳彦 松本 好史

岩谷 恒治 河村 俊平 清水 賢太 小倉 奈歩 酒卷 奈暉 元木 涼 桑原 大樹 安原 大樹 山下 周摩 板東 佑樹 福本 竜也 有川 翔 小蔭 紗耶未 酒卷 志穂 岩原 紗也香 原 麻由香 中山 美紀 山本 瑞穂 坂東 沙樹 近藤 くるみ 吉本 真代 廣井 大晃

【初段】

四月二十九日

山口 喜生 生島 大空 志磨 康太 神元 真樹 重田 正輝 大澤 裕大 出口 智貴 片山 聖也 大久保 理樹 古川 隆太 川邊 賢也 平尾 将孝 永野 辰樹 米倉 武志 近藤 友弘 岡田 宣孝 天羽 悠 檜森 史也 福井 愉葵充 廣井 大晃

谷口奨真	小野竜弥	坂口剛史	福永龍祐	山川優大	山西浩平	西岡大輝	向原啓悟	篠原拓也	森本翔次	原郷修一	高橋稔也	坂本健太	篠原誠志	斎田悟志	岡田紘樹	関口真生	矢野一輝	福田稜輝	住友勇輝	谷篤彦	小谷直也	中田雄斗
吉村祐一	井澤卓志	梶章一	大津広貴	篠原侑希	山本優太	小藪京蔵	一樂陽司	山本直矢	岩川陽介	井上幹大	井上稔大	藤田大地	賀上陽介	宮田祐至	川野賢太	久米純矢	青木達朗	藤坂拓道	宮本雄太郎	岡佳聡	藤本哲太	五藤雄輝
鳥澤明日香	大塚朱莉	徳田結香	佐藤綾佳	西野柚衣	河野結花	松浦名穂	藤本あみ	青木万里子	播田茜	工藤麻美	安藤真琴	岡本哲也	藤原康裕	金澤俊樹	佐藤大介	中川一平	富川聡	鎌谷武司	井若敦	甚上和広	四橋和樹	谷原知典
武田和也	谷優佑	南谷和希	生田真大	井川拓士	六月二十四日		加納美保子	鎌田真紀代	岡本万葉	澤田菜摘	米本祥子	長谷川愛実	佐方千尋	増田恭子	丸岡悦子	杉谷雪萌	那佐萌	藤本千晴	福田有香梨	山本千尋	岡内拓未	重田菜摘
岡田慎司	榎原裕也	岡貴大	板東洋太	北岡聡	吉川隼市	高尾柊	竹山眞平	森康二	牧野谷晃司	朝井智奏	宮浦慎治	松浦新一	中西一樹	岡田裕也	森啓憲	濱陸斗	新居田誠人	貝塚一仁	新居大翼	秋田卓哉	北岡雅	香川一成
都築弘充	桑原和也	武澤光太郎	折部雄太	工藤洋平	鶴江輩彦	黒川光平	久保潤一郎	吉田竜如	米田紘夢	住友俊介	小柏尚己	下川智新	岡本雄太	藤井一有	延清実	村岡誠一郎	八月二十六日		吉川礼華	小川瑞季	三島菜摘	井上亜美
田中涉	十月二十八日		新居麻衣子	岡田宏美	大館希望	坂野あゆみ	盛嘉恵	多田侑江	鎌田早希	宮本郁美	山脇千慧	鶴羽彩	滝口真弓	小笠原沙瑛	中西綾華	馬見敦子	中川弥生	竹原英介	坂東正章	井上悟	多田祐哉	黒上裕矢

がんばろう徳島

部活だより

城ノ内中学校剣道部報告

城ノ内中学校 剣道部顧問

福田 美知子

城ノ内中学校は城ノ内高等学校との間をつなぐ県立の中高一貫校として、平成十六年四月に開校しました。生徒数は各学年百二十名で各三クラス、県下各地から通学してきています。中学・高校と六年間の計画的・継続的教育を展開し、子どもの個性や創造性を伸ばすことを目的としています。私が本校に赴任したのは開校して三年目、初めて全学年がそろった年のことでした。

本校剣道部は現在中学生男子七名、女子六名の計十三名、高校生男子五名、女子四名の計十九名、総勢二十二名で活動しています。道場が狭いなか、中学生・高校生が共

に練習しています。中学生の通学地域としては徳島市内九名、板野郡二名、鳴門市一名、小松島市一名となっています。通学地域の関係もあって、練習時間が短いのが現状ですが、集中し、自分の課題を意識して練習ができるよう心がけています。練習内容は基礎・基本を中心していますが、先輩や保護者の方々が練習に参加してくださることもあり、とてもよい刺激をいただいています。城ノ内高等学校剣道部は過去にインターハイに出場するなど、現在もたくさん先輩方が各方面で剣道を続けられ、活躍されています。先輩方から学ぶことはとても多いです。

また、本校の生徒はそのほとんどが国立大への進学を希望しており、それは中学生においてもいえることです。文武両道を実現することが課題となります。だからこそ剣道を通して身に付けてほしいことは、「自分に打ち勝つ」ということです。剣道において学んでいることは、勉強でも生活でも同じことです。剣道をすることで、精神的に強くなり、努力を惜しまない人になっ

てほしいと思います。中高一貫校ということで、六年間剣道を続けることができる環境にあります。現高校一年生八名の内五名が城ノ内中学校剣道部から継続して、剣道



を続けています。一つのことをやり遂げていく中で、多くのことを学び、成長していったほしいと願っています。

まだまだこれからの本校剣道部ですが、中学生・高校生が共に刺激し合い、鍛錬していくこうと思います。いつも温かくご支援くださる先生方先輩方、保護者の方々に感謝して、努力していきたいと思えます。

部活だより

穴吹中学校剣道部 顧問

柴田宗忠

本校は美馬市の南東部に位置し、吉野川と穴吹川が出会う小さい町で、穴吹高校、穴吹小学校が隣り合わせにあり、幼・小・

中・高とまとまった学園環境を有している。

剣道場はなく、体育館で半面をバレーボール部、四分の一を卓球部と剣道部で使用している。現在、部員は、三年生男子一名、女子四名、二年生男子一名、女子三名、一年生女子一名、計十名である。

今年の活動を振り返ってみると、脇町高校への出稽古、警察学校での稽古、県外遠征（香川、神戸）他校との練習試合、各講習会の参加等、比較的活発に活動できたように思う。

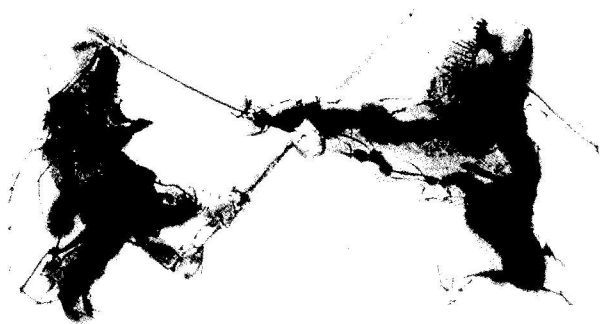
主な大会での戦績であるが、徳島眉山ライオンズクラブ・県選手権大会女子団体・県新人戦女子団体と共に三位入賞し、県総体に向け稽古を積んできたが、残念ながら

力及ばずよい結果を残すことはできなかった。しかし、部員は明るく楽しんで剣道に接することができたように思う。これも、保護者の暖かい協力や理解、生徒の送迎、さらに物心における援助、また、美馬支部会員の方々の力添えのおかげであると心から感謝の気持ちでいっぱいである。

さて、私自身、剣道において、「正しい剣道を身につける。」ことをいつも目標にしている。本校の部活動においてこれを実践するためにはどうすればよいかと考えた結果、具体的な方法として、

- ・ 声を出す。
- ・ 基本を大切に作る。
- ・ 正しい稽古。

この三点に絞って指導している。これは、生涯剣道にはなくてはならない要素であると考えたからである。特に留意したのは、三番目の「正しい稽古」の中に、楽しさと爽快感を織り交ぜ、生徒たちが大人になっても剣道が続けられるよう配慮してみた。また、生徒自身の稽古や試合の反省、これからの意識付けを促す上で剣道日誌を作り、



ローテーションを組んで書かせているが、なかなか期待するような感想や反省は書いてはくれない。

また、以下のことも、いつも考えている項目でありどうすればできるようになるか、これからの課題である。

- ・決められた時間に始まり、短時間で集中し効果の上がる稽古
- ・けがや事故のない練習計画
- ・いつも稽古内容を工夫し、目的を持った稽古
- ・自主的な稽古

これは、部活動だけでなく、私自身のことであるように思われるが、どの項目も十分に実践できていない。特に最後に挙げた自主的な稽古は非常に難しいことであり、これができれば、「心配はない」と思う。生徒には偉そうなことを言うが、自分がやるとなると目標を下げてみたり、妥協の連続であり、まさに「言うは易く行は難し」である

以下各部長からの感想や豊富を自由に書いてもらった。

写真：左下段から

篠原 翔太 三年生 「僕は、剣道部に入って最後の市総体個人戦で優勝できたことが一番の思い出です。」



中山 美紀 三年 「今まで剣道を続けて

きて良かったです。礼儀止しくなりました。高校でも剣道を一生懸命がんばります。

剣道が大好きです。」

村上 遥香 三年 「私は小学校の時から剣道を始め、中学生になって色々な大会に出場することができました。高校でも剣道をしたと思うっているので、これからもがんばりたいです。」

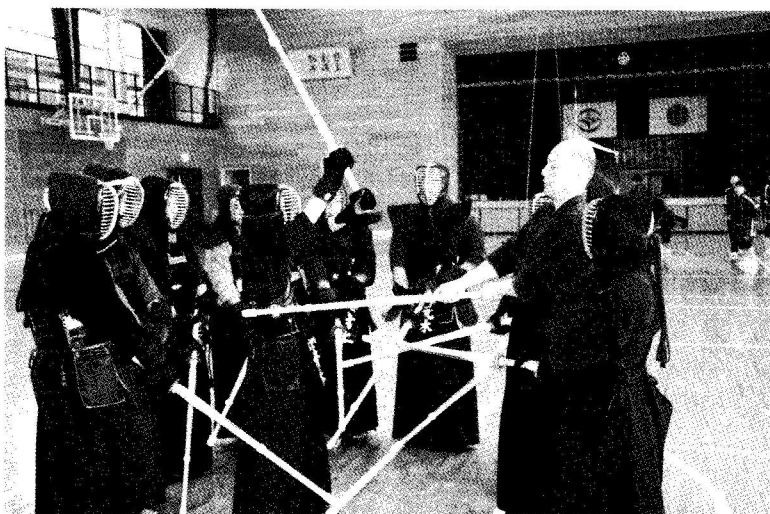
岡崎 楓 三年生 「剣道を通して、先生や仲間とがんばることの大切さを学びました。たくさん試合にも出ることができ、楽しい時を過ごすことができました。これからも、この経験を生かして生活したいです。」

新居 志保 三年 「私は、この三年間剣道を通してたくさんのことを学びました。毎日の厳しい練習の中で、精神面も体力面も鍛えられました。部活動ができて良かったです。」

写真：左上段から、

元木 拓矢 二年生「いままで自分が練習しても直せなかったところを重点的にしっかり直して今年個人戦でよい成績を残したいです。」

藤見 有里絵 二年生 「市の総体は二



回戦で負けたので、今年は優勝をねらってがんばりたいです。また、県の総体では三位以内を目標にし、全力で練習していきたいです。

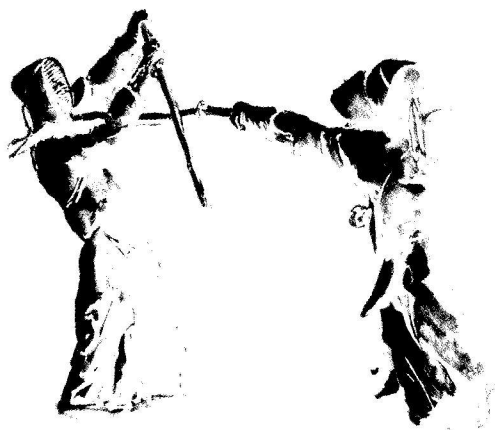
幸平 裕貴実 二年生「主将としてチームを引っ張っていきけるようになっていきたいです。そして市の総体で団体戦・個人戦と

も優勝し、夏の県総体では自分の力を精一杯だし、悔いの残らないような試合をしたいです。」

青木 利香子 二年生「今年の市総体団体戦は優勝、個人戦は三位入賞を目指していきます。そのため日頃の練習にも力を入れ、声を出して練習したいです。」

榎本 まどか 一年生「今年の目標は、一試合でも多く試合に勝てるように、悪いところはしっかり直し、いろいろな大会でメダルを取れるように自分の力を出してがんばることです。」

以上、まとまりのない文章ですが、自由に書いてみました。



正しい剣道を目指して

石井中学校剣道部顧問

白木洋一

剣道部は、学校内にある武道館で、日々基本に忠実に正しい剣道を目指して稽古を行っています。現在の部員は男子八名・女子二名であります。石井中学校も他の中学校と同じように部員不足に悩まされています。七月までは三年生が男子十一名、女子四名いたので武道館がせまく感じましたが、現在はゆとりを持って稽古できる状態です。部の指導方針は、「剣道を学ぶ」と言うことよりも、「剣道で学ぶ」ことを目標に行っています。剣道で学んだことを、日々の学校生活や家庭生活に生かし、より良い人間を目指す「人間形成」にすこしでも貢献できたかと考えるからです。

私の高校時代の恩師福井重二先生は、いつも「正しい剣道・基本をしっかりとし身につけて十年後にもびる剣道を教えている」と言われていました。当時は稽古の苦しさ

のあまり「十年後に剣道なんかしていない。」と思ったのですが、指導者になった今、全く同じ思いで指導している自分自身がいることに気がつき、改めて恩師の指導に感謝するものです。また、故人となった美馬政雄先生も、生前は石井中学校剣道講師として週に二・三回稽古の中で身をもって指導していただき、正しい剣道の大切さを指導されました。現在も日々の指導の中で、基本を正しく行うことに重点を置いて指導しています。それこそが無理なく将来に伸びていく剣道につながるものであると信じるからです。そのおかげか、卒業しても剣道を続けている子供が多く、成長していく姿を高校や大学、また社会人になっても見せてくれており、指導者としてうれしい限りです。

今年の正月も恒例の石井中学校剣道部鏡開きを行ったところ、たくさん卒業生が参加してくれ、大変盛大なものとなりました。剣道を続けている者もそうでない者も、久しぶりの再会に会話が弾んでいました。もちろん卒業生だけでなく、保護者のOB



石井中学校剣道部鏡開きにて

も多数参加していただき、子ども達以上に
会話が盛り上がり上がっていたのは言うまでもあ
りません。

石井中学校の剣道部を語るときに、保護
者会の存在を忘れてはなりません。剣道部
の活動に本当に物心両面に支えていただき、
保護者会なくして現在の剣道部はないと思
うくらいです。今までの指導の中で、不十
分な点や失礼なことが多くあったと思いま
すが、温かくご協力いただいた、現役を含
め歴代の保護者会のOBの方に感謝の気持
ちでいっぱいです。

多くの人に支えられ、これからも子ども
達と共に汗を流し、石井中学校剣道部の伝
統の中で、正しい剣道を目指し精進してい
きたいと思っています。

最後になりましたが、元顧問「立岩先生」・
前顧問「西山先生」石井中学校の剣道部の
活動に関わっていただいた全ての方に、変
わらぬご理解とご協力をお願い致しまして、
石井中学校の剣道部の活動報告とさせてい
たきます。



伝統に恥じぬように

富岡西高校 剣道部顧問

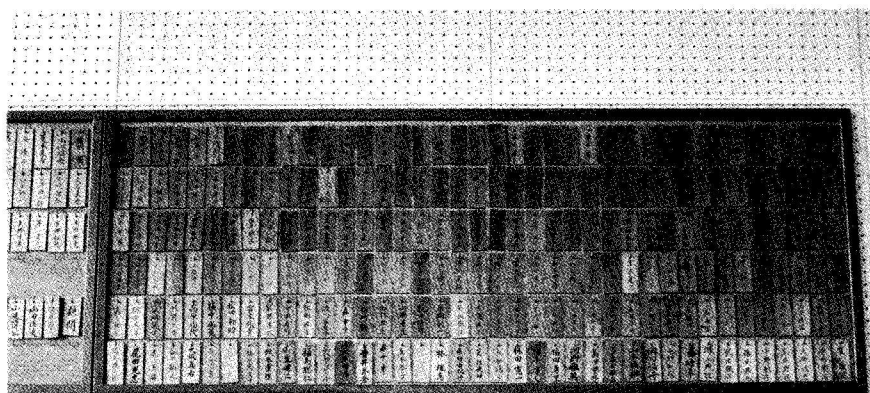
小 延 偉 公

富岡西高校は阿南市富岡町の桑野川沿いに位置している。本校の歴史は古く、明治二十九年徳島県尋常中学校第二分校として設置され、その後富岡中学校を経て昭和二十四年から県立富岡西高等学校に改称。今年で創立百十二年目となる全日制普通科高校である。

学校同様富西剣道部の歴史も古く、三百六十名を超えるOB・OG（牛岐剣友会会員）や保護者会に支えられ、その伝統や実績は常に県下の高校剣道界で上位に位置し、これまで脈々と息づいてきた。平成十九年度からは剣道部OBでもある大石正志先生が着任し新体制をつくっている。現在部員は男子十一名、女子八名、マネージャー二名の計二十一名で、県南中心に広範囲にわたる地域の中学生が進学後剣道部の門をたたいている。

富西剣道部は「質実剛健・文武両道」の精神のもと、大学進学をめざして勉強と剣道の両立を高校三年間の最大の目標とし、放課後二時間程度の稽古で自らを磨いている。近年七時間授業の導入により活動環境が厳しくなる中、練習量を落とさず内容を充実したものにするよう工夫を凝らしている。基本練習では、集中した取り組みを常に意識し、基本打ちの反復練習を中心にこない、地稽古等では自分を追い込み勝負の厳しさを学んでいる。また、選手の自主性を重視し、選手と指導者で状況にあわせた練習内容を作り上げたりもしている。毎週木曜日の午後七時からは一般の方々も交えて稽古会を行っている。牛岐剣友会員や地域の剣道愛好家の方、中学生や小学生の参加もあり、一時間ほどの稽古会は生徒たちにとって充実したものとなっている。先輩方のアドバイスを自らの課題にすえることで日頃の練習に課題意識をもって取り組めるようになってきた。また、稽古会前の一時間半は各自で自習をしたり職員室まで質問に行くなど文武両道の実践も忘れては

いない。活動を通じて学ぶことは練習だけにとどまらず、集団行動における各自の責任感や他者への思いやりを培う事、約束事を守る、礼儀作法の徹底など、道場以外で一生徒としての心構えや言動を通して将来



誰からも認められる人間に成長することができるように語り続けている。

これからも伝統ある富西剣道部の名に恥じめよう、歴代の先輩方の活躍に追いつき追い越せるように生徒・指導者・保護者が一体となって努力精進し、夢の実現をめざし、これからも頑張っていきたい。



脇町高校剣道部の歩み

脇町高等学校 剣道部顧問

藤川正樹



脇町高校は県西屈指の進学校ですが、同時に「文武両道」の精神のもと、部活動もたい

へん盛んに行われています。徳島県尋常中学校第一分校、旧制脇町中学校を前身とする本校での剣道部の歴史は古く、明治三十三年に撃剣部として創部されました。その後、敗戦により一時廃止されていたものの、昭和三十一年に復活して以来、現在に至るそうです。OB会は「芳越剣友会」として、会員数は約三百名にもなります。毎年十二月三十日には多くの熱心な先輩方が本校に集い、在校生達に稽古をつけていただいています。過去においては県新人大会をはじめとする各種大会での優勝や、全国大会団体三位（女子）など輝かしい実績を持つも

の、近年は専門指導者の不在ということもあって、目立った実績は残せていません。

部員数は一時、学年でわずかに一人という状況もありましたが、現在は二年生四名、一年生六名（女子一名含む）の十名です。

練習は主将の大垣君を中心に、生徒達だけで主体的に計画・運営しています。活動の中心である二年生には三段をもつ者が三名おり、核となって頑張っています。そのうち二名は六月の高校総体個人戦でベスト十六まで進出することができました。これ以後、部全体の意識も高まり、練習も活気が出ています。

また、今年には初心者も二名入部しました。上級生はまったくの基礎から指導をしなればならないのでたいへんです。しかし、この経験は、指導する側の生徒にも非常に有意義なものとなっています。

さらに、本年度は久しぶりの県外遠征も二度実施することができました。県外の試合では、技術や運動能力の高さもさることながら、強い精神力・勝利への執念など剣道への取り組みの深さを感じさせられました。



た。
剣道は指導者や保護者など多くの人たちに支えられている素晴らしい武道です。私のような素人にも、ほとんどの学校の生徒がきちんと挨拶をしています。始めて顧問を任せられてから数年が経過しましたが、高校の剣道人口もかなり減ったように感じ

ます。心身共に鍛えられ、成長することができます。剣道がもっと盛んであればと思います。この剣道が本校においても確実に引き継がれ、さらに発展していくことができますよう、微力ですが努めていきたいと感じています。



道場・教室だより

感謝の心を忘れずに

阿南少年剣道教室

須藤 恭 宏



当教室は昭和四十八年、今は亡き剣道範士清原栄先生と現阿南少年剣道教室師範、教士

六段有賀秀敏先生によって開設されました。剣道の基礎である礼儀作法から始まり、基本を大切に試合に偏らない剣道、将来延びる剣道、姿勢正しい剣道を目標に指導されてきました。

現在の稽古場所は、阿南市武道館に落ち着いておりますが、開設当初は阿南警察署の道場をお借りし、その後富岡セニヤ会館、富岡小学校体育館へと移り、稽古場所の確保に大変ご苦労をされたと聞いております。

一時は八十名を越す練習生が稽古に通っていた時期もありましたが、現在は小学校一年生一名、二年生六名、三年生二名、四年生五名、五年生七名、六年生八名の計二十九名が元気に竹刀を握って稽古に励んでいます。

指導者の先生も有賀先生を中心に、県連阿南支部長の北條憲治先生、大津裕哉先生、中西実先生、榊山紹生先生、林洋行先生、西岡洋幸先生、福井勝先生とたくさんの方々が子供たちと剣を交えながら指導に汗を流しています。中でも中西、榊山両先生は、阿南少年剣道教室の卒業生であり、清原先生ご存命であれば、さぞ喜んでいただけたであろうと、とても残念に思います。

「継続は力なり」清原先生がいつも言っておられたお言葉です。自分が剣道をし続けることも大切ではありますが、剣道ができることに感謝しながら、学んできた教えを、次の世代に繋げてゆくことも大切なことだと思います。中西、榊山両先生のような卒業生が一人でも多く自分の古巣に帰って剣道を続けてくれたら、指導者としてこんな

にうれしいことはありません。今後もしっかりと続けていくことを大いに期待したいものです。

当教室も、平成二十年三月に卒業する子供達を含めると三百十名余りの少年、少女剣士が卒業し、数多くの卒業生が今も教員、警察、また一般の社会人として第一線で活躍されています。

少子化の波の中で剣道人口も年々少なくなっています。各少年剣道教室も生徒数の減少により休部、統合等を余儀なくされています。当教室は保護者の皆様のご尽力のおかげにより、何とか維持できております。また、阿南少年剣道教室では、稽古の始まりに「誓い」と「道場訓」、稽古の終わりに「感謝のことば」を全員で唱和しています。

感謝のことば

「私たちは太陽と空気と水の恵みにより生きております ありがとうございます」
「私たちは父母と先生の恩により生きております ありがとうございます」
「私たちは社会の人々の恩により

生きております ありがとうございます」
このことばの通り私たちは、常にすべての人、物に感謝する心を忘れずこれからも保護者、指導者が一丸となって剣道人口の増加を目指し、剣道の持つすばらしさを一人でも多くの子供たちに伝えて行きたいと考えています。そして子供達からも大きなパワーをもらいながら、ますます元気で頑張っていかなければと強く思っています。
子供達をはじめ剣道を愛する皆さん、これからよろしく願います。



堀金旗争奪少年剣道大会
団体第三位 (H19・5・27)



阿南少年剣道教室 (H19・2・23撮影)

道場だより

鴨島少年剣道教室道場長

三木 毅



一 はじめに

鴨島少年剣道教室は昭和四十九年に創設され、本年度三十三年目になる。

この度の投稿を機会に剣道教室創設の経緯をしかと振り返っておく必要を感じ、ここに歴史的経緯を紹介する。

そもそも、鴨島町における剣道というよりも剣道連盟麻植支部がいかに活気をもっていたかということになる。その歴史のなかで大きく力を尽くされた先生は、「居合道範士八段・剣道教士七段 平尾勝美 先生」である。

二、石井町 高橋静雄先生

高橋静雄先生は戦中の青年学校の先生として知恵島青年学校に赴任され、本務の傍ら学生に剣道の指導をされた。このとき平

尾勝美・笠井恵之・鎌田秀夫・谷木良一・三木虎雄などの剣士がおり、一部青年が参加して庭での稽古に励んでいた。終戦とともに剣道の修練が禁じられ、剣道は沈黙の時代を迎えることになった。

三、剣道修練の再開

昭和二十四年に剣道修練の禁止が解かれ、昭和二十五年三月十二日に徳島県剣道連盟が発足した。ついで昭和二十八年には、「鴨島剣道クラブ」が結成され、平尾勝美先生を核として剣道修練が緒に就いた。

この時の同好者は、先に記した剣士に加え、山川町在住の剣道愛好家加わることになった。山川町はかつて銅鉾山の町として栄え人口も多く、平尾勝美先生が昭和十七年ころに川田青年学校教員として勤めたことから剣道愛好家との人脈が豊かであったため、鴨島剣道クラブ結成の動きに敏感に呼応し、井上健二・三木薫・明諦賢などの先生方十人ほどが稽古に精励しはじめた。

そのころ復員され、川島町に居を構えておられた、宮本仁平先生の尽力で、昭和二

十八年二月十九日に麻植支部がたち上った。宮本仁平先生が支部長・平尾勝美先生が副支部長に就任され支部活動の根幹ができ、麻植支部活性化へと進展を見ることになった。

「鴨島剣道クラブ」が結成され、剣道家のまとまりが目に見えはじめ、そのことが町村当局を動かす原動力となり、鴨島町では稽古場として公民館を開放し、柿島村（現阿波市吉野町）からは、剣道防具の購入補助をいただけるようになった。

それでも剣道防具の不足は稽古に不自由をきたし、稽古が終わった者が、いち早く次の稽古する者に防具を引き渡すという、やり繰りをしながら稽古に励んだものであった。

四、少年剣道の芽生え

昭和三十一年四月、平尾先生の元で剣道を習う少年達がいた。当時中学一、二年生の三木・吉岡・瀬尾・佐野・山田・七條である。修練の場所は知恵島小学校の木造二階建本館の二階に設けられている講堂であった。稽古の激しさから、床板を傷めてしま

い使用禁止となってしまった。その後二年

間くらいは剣道をする場所を転々かえることになった。先ず知恵を絞ったことは、剣道の修練風景を家族に見せようという苦肉の策であった。指導の先生宅や少年剣士宅の各家庭を訪問して、電球をくくり付けた竹竿を庭先に掲げ、その明かりで稽古に励んだのである。その後は地元若宮神社の境内の板の間でも稽古をはじめたが、ここでも床板を踏み破り使用禁止となった。

そのような中、鴨島町当局は新開地に所在する公民館を柔道と剣道に開放するということになり、近郊の剣道家を交えて稽古が盛んとなった。

しかしながら年月の経過とともに少年剣士の入門は少なくなり、成人剣道家が少数ながら細々の稽古会を続けるという状態であった。

おりしも、昭和四十年代後半になって、県下の各地区で少年の剣道熱の高まりが見え始め、少年剣道教室の名称で立ち上がりをするようになり、指導者・保護者・少年剣士が一体となった組織が確立し、活気を

帯びはじめた。

五、鴨島少年剣道教室の発足

昭和四十九年になって、鴨島町の住民の間で「鴨島町内に少年剣道教室があればよい」との声が上がりはじめ、これを聞いた川島警察署員は、その住民の方々に「知恵島に平尾先生が居る」ということを紹介した。住民の方々は早々に、平尾勝美先生に相談を持ち掛けた。ほどなく少年剣道教室を創設することとなった。

新開地にあった公民館を稽古場として四十三名の少年が集い「鴨島少年剣道教室」をたちあげた。一期生として、大島・木村・森などが居た。

その後、剣道練磨を希望する少年達は増え、昭和五十年代には入部少年が一〇〇名を数えることがあり、主たる修練の場を鴨島小学校体育館に移した。その後総員一四三名という大所帯となり活況の時期があった。

剣道指導陣の差し迫ったの願いは専用の道場をもつことであり、各方面に働き掛けをしているうちに、鴨島第一中学校の東寄

りの町有地に公民館建設の動きが具体化され、この機を逃さないという熱い情熱をもって、公民館の階上に剣道（武道）場建設を

という陳情を活発化させた。相当の苦勞の結果ではあるが、町当局は公民館に隣接した場所に別棟の武道場建設を決断することになった。その願いは昭和五十五年に現武道館の完成という形で表れた。

昭和六十年代当初は常に一〇〇余名の剣士による修練が続いたが、平成時代になると入部少年が暫時減少の傾向となった。

そこで少年剣道人口の減少をくい止めなければという一念で、入部者募集のため、新聞の折込広告や電話勧誘、ポスター掲示など広報を活発化させたがその結果は

平成元年	十三名	平成二年	十八名
三年	二十三名	四年	十五名
五年	八名	六年	十二名
七年	十六名	八年	十六名
九年	十三名	十年	十三名
十一年	十一名	十二年	九名
十三年	八名	十四年	三名

であり、それ以降は二、三名ということに

なっていました。

剣道教室発足から平成十九年の本年で三十三年目を経た。過去の大会記録を見てみると

全国大会優勝二回

県外大会優勝三十四回

県内大会優勝八十回
という立派な戦績を残している。

鴨島少年剣道教室の創設から三十三年の歩みを顧みる時、創設当初から、今日まで、平尾勝美先生、笠井恵之先生、川真田高太郎先生は、三十三年の歴史そのものであり、多くの少年剣士の個々人に対し、満遍なく、しかも絶え間なく、揺るぎない情熱を傾注されてきた。また、片山尊史先生、松浦武信先生、森本武夫先生も平尾先生、笠井先生、川真田先生の意を体して、永きに亘り情熱を込めて指導に当たられ、確立された指導体制と理念が結実して、前記した戦績となって輝いているのである。

鴨島少年剣道教室の姿は、希有で、とてもない大きな山の如きものなのに、ここ数年來の悩ましい事柄は、少子化社会の中

の少年剣士の少なさである。

平成十九年十二月現在の少年剣士の総数は二十一名という小さな所帯になっているが、それでも強固な指導体制と強い指導理念を堅持して指導にあたっている。現在の指導陣は

平尾勝美 笠井恵之 川真田高太郎

三木 毅 片山尊史 森本武夫

三木 弘子 上田裕則 松浦武信

松浦政昭 新居一子 住友邦昭

松浦史芳

という体制である。

鴨島少年剣道教室では、基本動作、基本技を習得させ生涯剣道を実現しようと、師弟が一丸となって錬磨に励んでいる。

六、居合道「徹心道場」の創設

鴨島少年剣道教室の創設と発展は平尾勝美先生の熱意とご尽力によるところ甚大であることはこれまでに述べてきたが、また一方では、徳島県の居合道発展にも同等の力を傾注されたのである。

鴨島武道館では少年を含む居合道の修練として「徹心道場」がある。命名の経緯は

「心の修業に徹する」ということから導かれている。

徳島県の居合道で名声があったのは石井町の須見善富先生や石井先生である。平尾勝美先生は須見先生から「剣道三段になったら居合を教えてやろう」という言葉かけられていた。昭和十五年十月に剣道三段に昇段し、須見先生の居合道に入門された。同時入門者は松島隆・中村武次・遠藤英雄先生であり修練を重ね居合道四段を取得したが、須見先生が病に倒れ他界され、また、石井先生も他界されたことで徳島県の居合道は十五年間ほど沈滞してしまった。

平尾先生は、何とか打開策はないかと模索する中、居合道「京都大会」の場で多くの先生を尋ね歩き、高知県の澤田先生との出会が叶い、澤田先生のもとに通って修練し六段に昇段した。そのうち佐賀県日浦先生・鹿児島県富岡先生・大阪府福田先生・香川県香西先生など多くの先生の支えを得て徳島県の居合道を形作ることとなった。昭和四十三年四月になり、居合道「徹心道場」を創設することにより、県内外の広範

な地から入門者があいつぎ居合道は隆盛と
なった。平成十九年第四十二回全日本居合
道大会の県代表選手は全員が徹心道場から
選ばれている。

平成十九年十二月現在の在席者は、成人
の部十八名・少年の部二十四名を擁してお
り、少年の部の活気は高い評価を受けてい
る。高段者として七段二名・六段三名であ
り五段位の修練者は上位の昇段に意欲を燃
やしている。

徹心道場では、技量の向上はもとより心
身共に健全な人材育成に力点をおき師弟が
心を一にして切磋琢磨の日々を刻んでいる。



少年強化

京都竹友大会

徳島清風館道場

岡田 宣孝



僕は小学三年生の時から竹友大会にださせてもらっています。小学三年生の時に三位に

入りました。でもそれ以降中一までは敢闘賞まではいけただけで金メダルをとることができませんでした。いつも大事なところで負けていたので何がたりないだろうなというも思っていました。

そして、今年の竹友大会に望みました。僕は今年がラストチャンスなので絶対優勝してやると心の中でずっと思っていました。試合が始まると無心で戦っていました。やっぱり戦う相手も勝ちたいと思っ

ていたので、なかなか苦戦しましたが、勝つことができました。準決勝までいくと、やっぱり勝ち上がってきている相手なので、戦う前はすごく緊張しました。そして始めると先に僕がでばな面をいれました。でも一本入れたという安心して一瞬気を抜いてしまったところをメンをとられてしまいました。ここでいつも僕は焦ってしまい迂かつに打って

を打ってきたので手元が空いたのでコテを打ちました。すると「バクン」とあたり、コテが入りました。うれしかったです。すぐに終了の音がなりました。

今、僕が思うことは「負けると思った負けて、勝つと思ったら、勝てる」と思っています。やっぱり勝つには気持ちが大切だと思います。竹友大会最後の試合を有終の美で終わってよかったと思います。この結果に満足せず更にもっと上を目指したいです。

処でできたので勝つことができました。ついに決勝戦までできました。相手は昨年中的一の時の優勝者だったのでとても緊張しました。そして試合が始まると無我夢中で戦っていました。相手がよく打ってくるので剣先を下げてメンを誘いました。そしたら運よくメン



京都竹友大会に出場して

山本 千尋

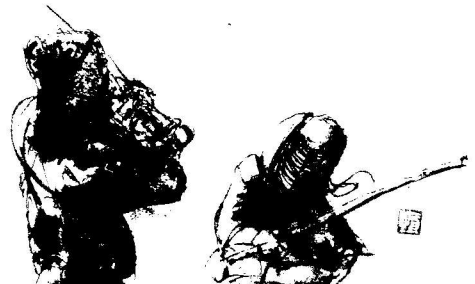
一月二十七日、徳島清風館道場の一員として京都竹友会剣道大会に出場しました。今日は自分にとって、二度目の挑戦でした。

会場に着くと、三年前と同じ様子がそこにありました。だんだんと試合が近づいてくると緊張してきました。けど、試合が始まって先生にアドバイスをもらいながら戦っていくうちに緊張がなくなりました。そして気がつくとも決勝まで勝ち上がっていました。五年生の時には決勝で負けてしまったので、今回は自分のペースで戦おうと思いましたが、勝敗は三分間でまらず延長戦になりました。でもあせらず戦うことができました。相手の手元が上がったところでコテをきめることができました。

この大会は自分にとっていやな思い出があったので優勝することができて本当に嬉しかったです。

こんなチャンスをあたえて下さった久保

先生や日頃からご指導下さった先生方に感謝し、これからも一生懸命練習してもっと剣道が強くなれるように努力していきたいです。



京都竹友会剣道大会に 参加して

北島中学校一年

田中 理 称

平成二十年一月二十七日、向日市民体育館で行われた今大会に、中学生女子の部で出場させていただきました。中学生女子の部は、四つのブロックに分かれ、八十一名の女剣士が出場しました。

私は小学校五、六年と強化訓練に参加させてもらい、色々な道場、教室の人達と練習をさせていただき大変勉強になりました。小学校時代は京都遠征には残念ながら行けませんでしたが、このたび清風館道場の久保先生に声をかけていただき出場することが出来ました。

私は第一リーグの三試合目なのですが私達の試合の前に小学三、四年生女子の部が試合をしています。私もこんな時があったんだなと思って見ていると、これがかなり迫力がある試合をしているのです。やはり



遠い所まで来ると小学生のレベルも高いなとびっくりしてしまいました。中学生は一体どんなすごい人が出てくるのだろうと、内心ひやひやしていました。

そしていよいよ午後一時頃中学生女子の部が始まりました。試合が始まりだと、私はいつもの様子に戻り一回戦、二回戦と進んでいきました。そしていよいよコート決勝の五回戦目、延長戦で面を決めて勝ちました。次は準決勝、第二ブロックの勝者は、加茂名中の山本さんです。一緒にバス

に乗って行った山本さんとは戦いたくなかったのですが仕方ありません。私は、二本取られて負けました。結果は三位。後は、山本さんの決勝戦を応援しました。そして思った通りに山本さんは優勝しました。

この遠征に参加させていただき本当に勉強になりました。そして清風館道場の久保先生をはじめ、保護者会のみなさん、門下生のみなさん本当にありがとうございました。

京都竹友会少年剣道大会

に参加して

藤本 結衣

一月二十七日京都竹友会少年剣道大会が開かれました。私はあんなに大きな大会に参加するのは初めてで、一回戦目はとてもさんちょうしたけれど、面をとり、一本勝ちをしました。試合がおわると兵頭先生が、「二回戦目もこの調子でがんばれ。」といってくださいとおかげで、二回戦目からはさんちょうせず、リラックスして試合ができました。しかし、五回戦目に出小手をとられて負けてしまい、ベストエイトという結果でおわってしまいました。この試合は、もっと自分から積極的にせめて、打っていったらいいと思いました。

この大会で学んだことは、自分一人だけで剣道をしているんじゃないということですね。家族やまわりにいる人たちの支えや助けがあったからこそ今も剣道を続け、剣道が好きなんだと思います。

もう一つは、剣道はいろいろなことを教えてくれるということです。人としての生き方や礼儀も教えてくれます。剣道で教えてもらったことをこれからの生活に役立てていきたいです。

そして、家族やまわりにいる人たちにいつも感謝の気持ちを忘れず、これからも剣道を続けていきたいと思っています。



京都・竹友会へ行って

錬武館少年剣道教室

松本 美紗樹

一月二十七日に私は京都へ行きました。朝起きたのは約三時。今までの大会で初めてはやく起きたと思います。バスの中で私はずっと思っていたことは、

「京都とかの剣道は強いだろうな、一回戦でまけたらはずかしいな。」

そういう気持ちでした。

そして京都につきました。試合場を見るとまわりには強そうな人がたくさんいました。練習はあまりできませんでした。でもまわりの練習を見るだけで練習になったと思えました。

試合本番、一番順番がはやかったのは美馬さんでした。美馬さんは三回戦で敗退、次は下達さん、下達さんも三回戦で敗退、藤本さんはベストエイト、永野さんもベストエイト、岡田さんはトーナメントブロックの頂点へたちました。私は、一回戦はど

こか忘れたけどなんとか勝つて、二回戦は不戦勝、三回戦は橋づめさんという人として、メン、コテをとりました。次は、「春風館」の辻田さんでした。この人はスーパースタリオンと言われている人で、小学生と比べてテレビにでていた人でした。延長でメンを一本とられました。しかし、負けたけど、私はいい経験をしたと思います。

最後の淡路のサーブスエリアのみんな（女子）でのった観覧者はともキレイでした。この大会はいい経験をした、大会でした。



県外での「初」試合

美馬 汐里

私は、四年生から剣道を始めました。六年生になって強化練習メンバーに選ばれました。親からのススメで剣道を始めて二年がたち、強化に選ばれ、県外への大会にも選ばれました。まさか、私が選ばれるとは思わなかったのです、すごくびっくりしました。

県外への試合は「初」だったので、基本通りにしました。週に二回の練習なので、行ける日は、剣連のけいこ会にも何度か行きました。普段のあまい剣道ではいけないと思いました。それは、県外への試合でも、普段のけいここと変わらない、剣道をしようと思ったからです。試合当日は、雪の降る寒い日でしたが、私の勝負に對しての気持ちがあつくて、雪をとかすいきおいでした。初めての県外での試合で私は、

「勝つてやろう。」
と思っていたからです。

一回戦の試合は、審判の合図で一せいに試合が始まり第一試合でした。一回戦、二回戦は勝つことができました。試合時間は二分ですが、試合中は無我夢中であつという間の二分間でした。家に帰ってお父さんにそのことを言うと、
「それが剣道で言う捨て身だよ。」
と言われました。

お父さんから捨て身とは、色々考えずに自分の身体を相手にどうにでもしてという気持ちでぶつかることだと教えてもらいました。この京都での試合を経験して、思い切って技を出す練習をしていくことが大切であることが分かりました。

京都の大会に出場して

岡 田 春 希

私は、京都の大会に出れることになった時、すごくうれしかったし、この大会で、自分を試せるチャンスと思うとやる気が出たし、個人戦ですまがらもっと気持ちが高まりました。

会場に着くと、人が多くて練習するのも大変で、周りを見ると強そうな人が沢山いて負けれないと思いました。

試合順は、男女別れていて何組にも分かれていて、待ち時間が長いだろうと思いましたが、でも、私は一組目でまだまだでした。

試合が始まってちょっとしたら、すぐ私の番が回ってきました。

一試合目は相手はどんなのか分からなかったし、あんまり体が動く状態ではなかったから、相手を見てやると、体が動きにくくて、やりにくかったけど、一応勝つことはできました。納得はできない試合でした。

次の試合は、二本入って少し良くなった

けどまだだめだなと思いました。次の相手が誰か見てみると結構強い子で、背が低くて私ほでかいのでやりにくい相手だと思いました。

試合が始まるとかえし技がうまくて、私もしようとしたら、打った後につくのがはやくて、延長までかかって、こと思ってたたら、やっと決まって、勝つことができ、うれしかったです。この試合でだいぶ自信がつき、そのまま次の試合も勝てました。

すごく試合がどんどん終わって、準々決勝でこれに勝てば決勝トーナメントだと思いと負けれないと思いました。

始まって、相手は、すごくやりづらかったけど、ねばってねばって、相手がかれて、気持ちが切れているとこをあて勝てました。すごくほっとしたし、次の試合まで休めるので、気が楽でした。自分の番までほかの子を見ていて、女子も見えて、男子を見てるとだいぶ女子より強いなあと思いました。徳島県の人も負けずにがんばっていました。

みんなの試合をずっと見ていたら、早くてもう私の番になってすごく早かったです。試合をしてみると強くて、動いていなかったの体がかたくなっていったけど、延長までかかって勝て、うれしかったです。次は決勝相手をちゃんと見ておこうと思いました。

私はだいぶ待つことになって、やってない人や勝ち残っている人を見にいきました。一人かんと賞を取れた人がいたのでよかったです。男子も女子もまだいて、応援していました。男子にすごく強い子がいて私も、男女一緒だったらできていたのにと、男子ともやりたいと思いました。でも、私はもう決勝で、自然に手に力が入りました。

それで、相手になる準決勝を見ていたら、みんなが予想していた人たちがう人でした。私はそれを見ていけるかと思いました。けどしてみると結構早くに私は、ちょっと気がぬけたところを打たれて、負けてしまいました。すごく悔しかったです。私の道場の先生は試合の時いつも「自分のここ

と、思って打って打たれたらしょうがないけど、ぼーっとして打たれるのは一番あかん。」でもそれが私はできなくて、打たれたから次打ちに行くこともなく負けたのはすごく悔しかったです。結果準優勝でいい結果もたけど、少しくいが残りました。

でも、この試合で県外の人ともできたし、自分が気をつけないといけないところも分かったので、すごくいい経験になったし、自分自身これからにつなげていけたらいいなと思いました。



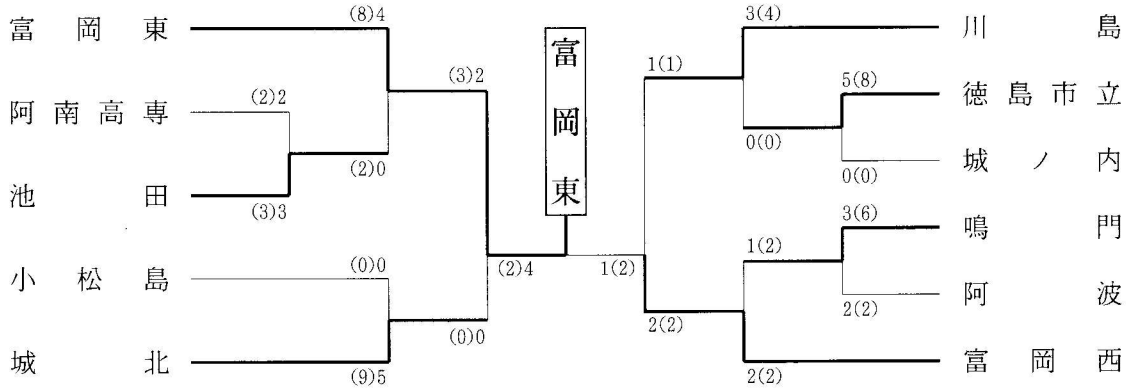
平成19年度 大会 記 録

平成19年度 徳島県高等学校総合体育大会 剣道競技

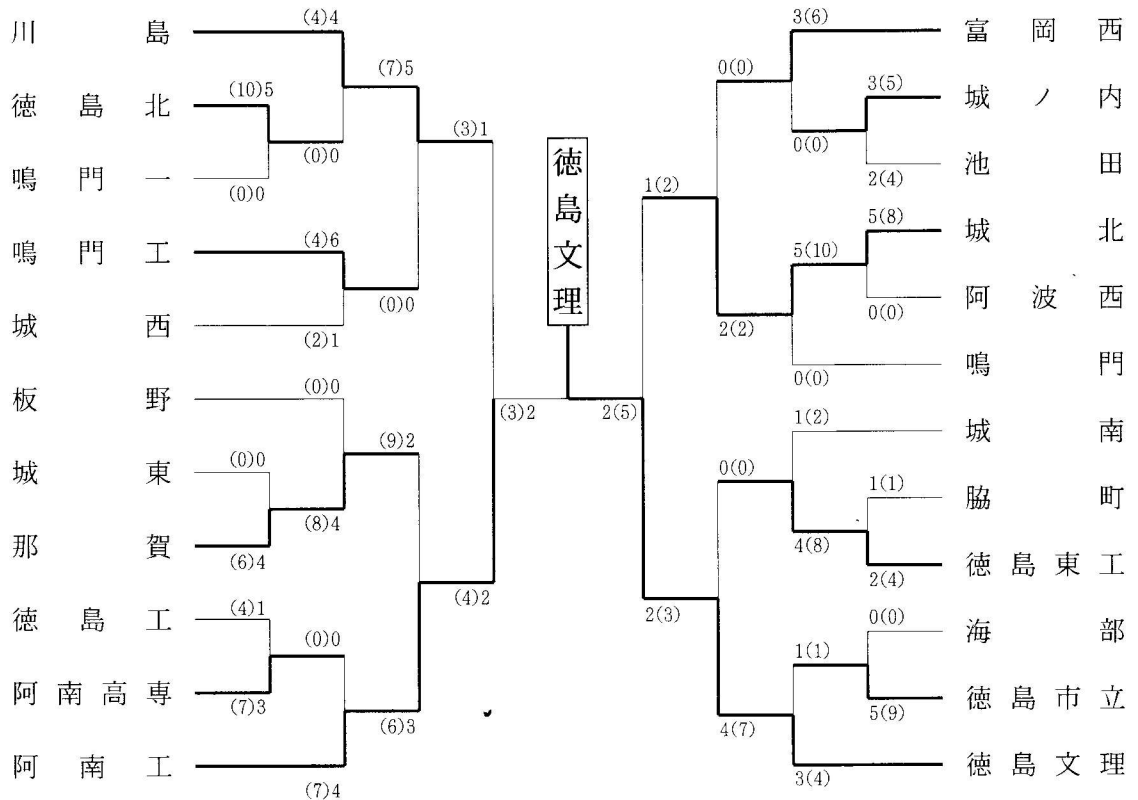
日 時 平成19年 6月2日(土)～6月4日(月)

会 場 徳島県立城西高等学校体育館

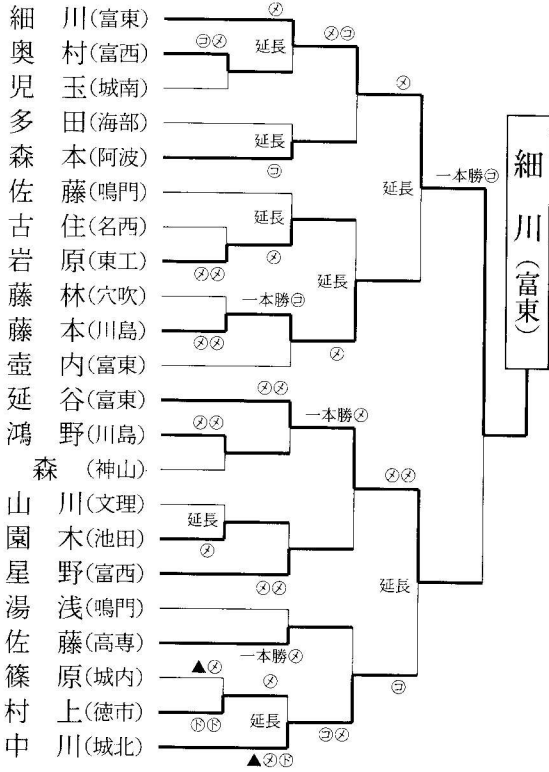
〈女子団体戦〉



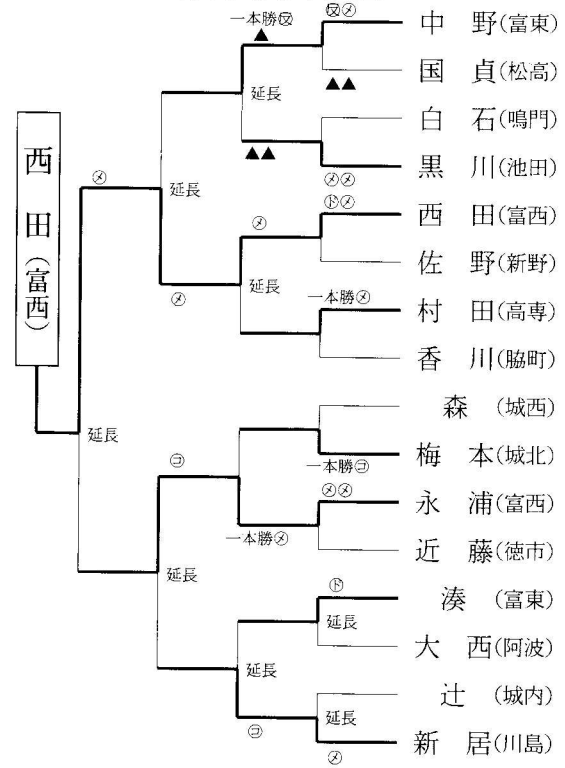
〈男子団体戦〉



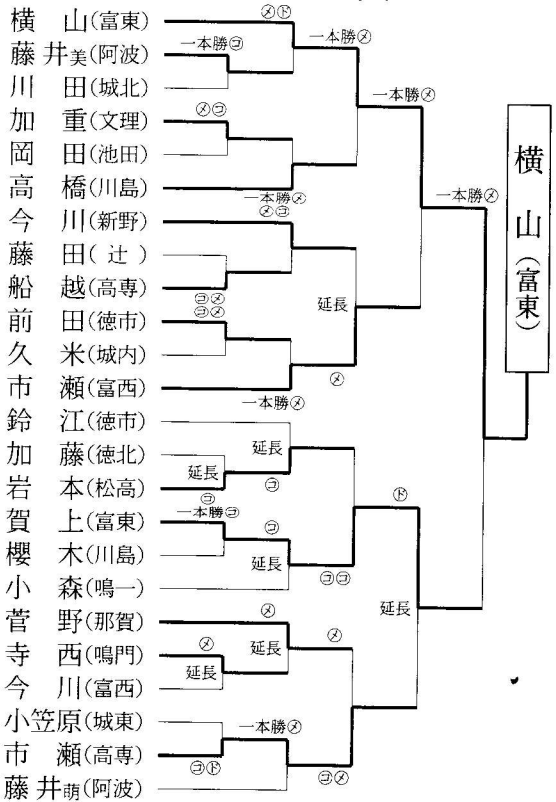
〈女子個人1組〉



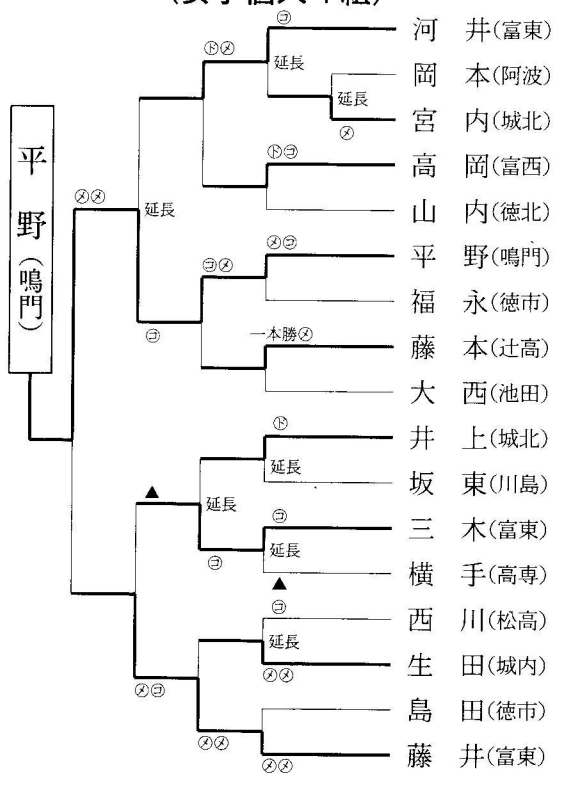
〈女子個人2組〉



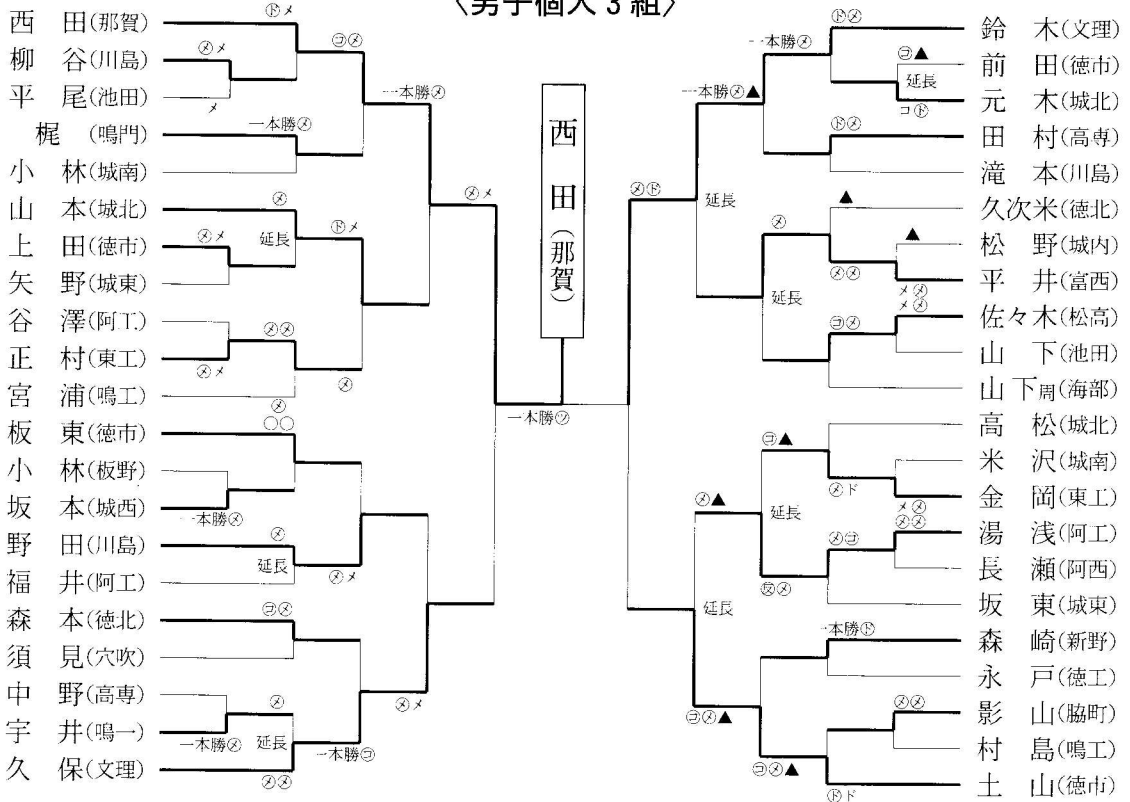
〈女子個人3組〉



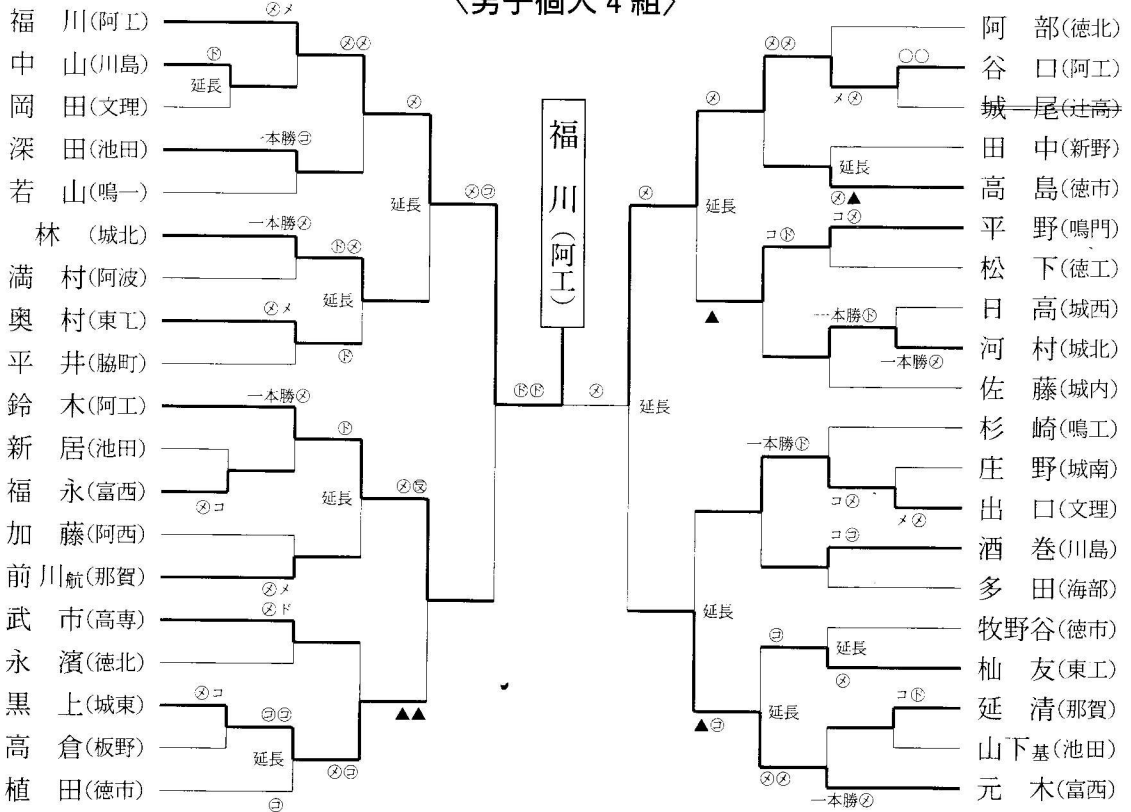
〈女子個人4組〉



〈男子個人3組〉



〈男子個人4組〉



〈女子団体戦〉

準 決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
富岡東	横山	藤井	細川	河井	中野	2	3	
	⊗ ⊗	延長	⊗一本勝	延長	⊗			
城北								
	中川	川田	井上	梅本	宮内	0	0	

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
川島	櫻木	高橋	藤本	新居	鴻野	1	1	
		延長	延長	⊗	延長			
富岡西	⊗一本勝 西田	⊗ 奥村	⊗ 永浦	⊗ 市瀬	⊗ 星野	2	2	

3 位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
城北	中川	川田	井上	梅本	宮内	0	0	
	延長		延長	延長				
川島	⊗ 櫻木	⊗ 高橋	⊗ 藤本	⊗ 新居	⊗ 鴻野	3	5	

決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
富岡東	横山	藤井	細川	河井	中野	2	4	
	⊗一本勝		延長	⊗	⊗			
富岡西		⊗一本勝 奥村	⊗ 永浦	⊗ 市瀬	⊗ 星野	1	2	

〈男子団体戦〉

準 決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
川島	鈴木	野田	中山	岩雲	峰本	1	3	
	⊗一本勝	延長	延長	⊗	⊗			
阿南工								
	櫻木	湯浅	谷口	岡田	福川	2	4	

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
城北	濱	河村	中山本	大塚	林	1	2	
	延長	⊗	延長	⊗一本勝	延長			
徳島文理								
	⊗ 出口	⊗ 鈴木	⊗ 鎌田	⊗ 藤本	⊗ 松本	2	3	

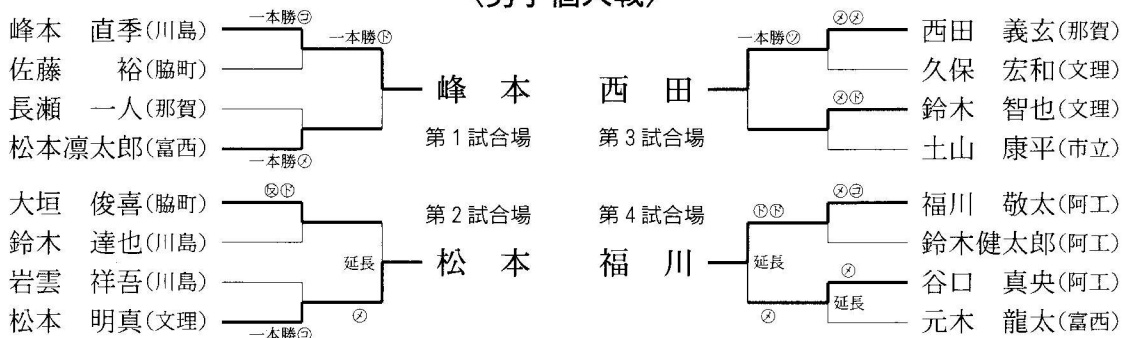
3 位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
川島	鈴木	野田	中山	岩雲	大森	1	1	
		⊗一本勝						
城北	⊗ 濱	⊗ 山口	⊗ 山本	⊗一本勝 大塚	⊗一本勝 林	4	6	

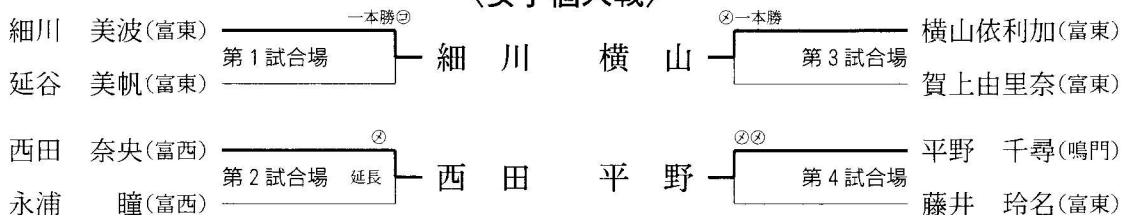
決 勝

校名	先	次	中	副	大	勝数	本	代
阿南工	櫻木	湯浅	谷口	岡田	福川	2	3	
	⊗一本勝	⊗		延長				
徳島文理								
	⊗ 出口	⊗ 鈴木	⊗ 鎌田	⊗ 藤本	⊗ 松本	2	5	

〈男子個人戦〉



〈女子個人戦〉



決勝リーグ

〈男子個人戦〉

	峰本	福川	西田	松本	勝数	勝本数	得失差	順位
峰本		△延長	○コ	△	1	1	-1	3
福川	○⊗延長		○× ×	○× ×	3	5	4	1
西田	△	△×		○×	1	2	-1	2
松本	○×	△	△		1	1	-2	4

〈女子個人戦〉

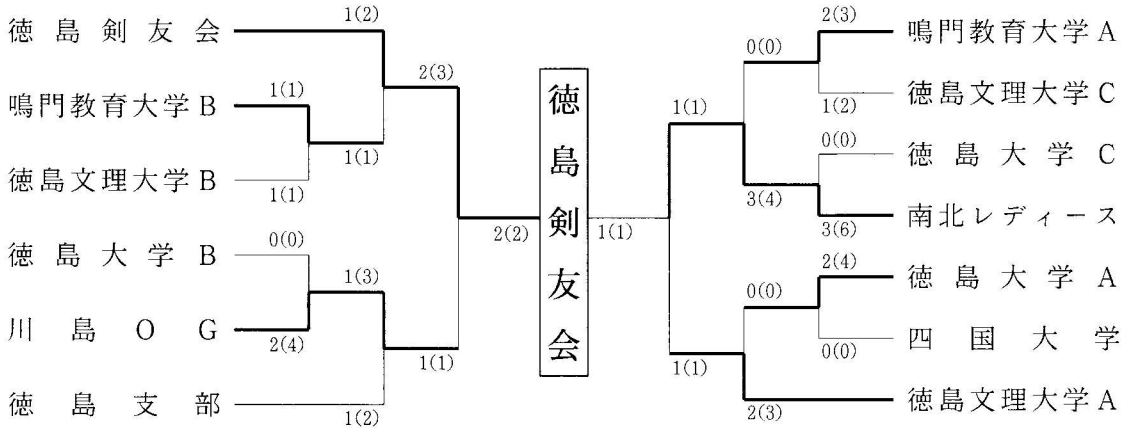
	細川	平野	横山	西田	勝数	勝本数	得失差	順位
細川		○⊗延長	○⊗延長	○⊖延長 ▲	3	3	3	1
平野	△延長		△延長	○⊖延長 ×	1	2	0	3
横山	△延長	○⊖延長		○⊗延長	2	2	1	2
西田	▲延長	△	△延長		0	0	-4	4

第28回 徳島県女子剣道大会 第24回 全国家庭婦人剣道大会県予選会

団体戦

日時 平成19年5月13日(日) 午前9時30分
場所 徳島県立中央武道館

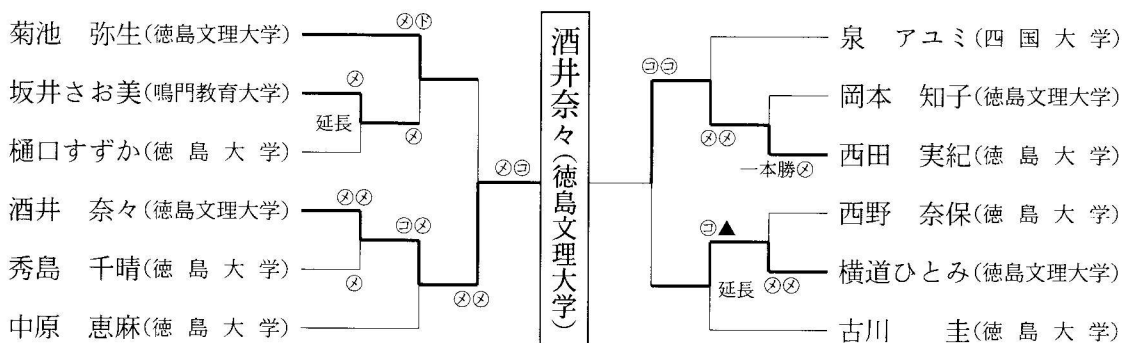
優勝 徳島剣友会
準優勝 南北レディース
第3位 川島O G
第3位 徳島文理大学 A



決勝戦

	先鋒	中堅	大将	
徳島剣友会	美馬	猪尾	平野	2
	⊗一本勝		⊗一本勝	
南北 レディース		一本勝 ⊗		1
	橋本	塚原	河田	

個人戦 <二段以下の部>



個人戦 <三段以上の部>



第61回 徳島県中学校夏季総合体育大会 剣道競技

日 時 平成19年 7月23日(月) 午前 8 時40分

場 所 鳴 門 武 道 館

	男 子	女 子
優 勝	徳 島 文 理 中 学 校	那 賀 川 中 学 校
準 優 勝	阿 南 第 一 中 学 校	阿 南 第 一 中 学 校
第 3 位	羽 ノ 浦 中 学 校	鴨 島 第 一 中 学 校
第 3 位	石 井 中 学 校	北 井 上 中 学 校

[男子決勝リーグ]

学 校 名	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
徳 島 文 理	青 木	久 保孝	久 保公	田 中	松 本	4
	ⓧメ	延 ②	ⓧ一本勝	X		
阿 南 第 一		長		X		0
	土 井	住 友	賀 上	西 岡	安 部	

[女子決勝リーグ]

学 校 名	先 鋒	次 鋒	中 堅	副 将	大 将	勝 敗
那 賀 川	栗 野	西	原	岡 内	岩 原	4
	ⓧ一本勝	ⓧ一本勝	ⓧコ	ⓧ一本勝	X	
阿 南 第 一				X		0
	佐 藤	松 浦	藤 本	工 藤	品 川	

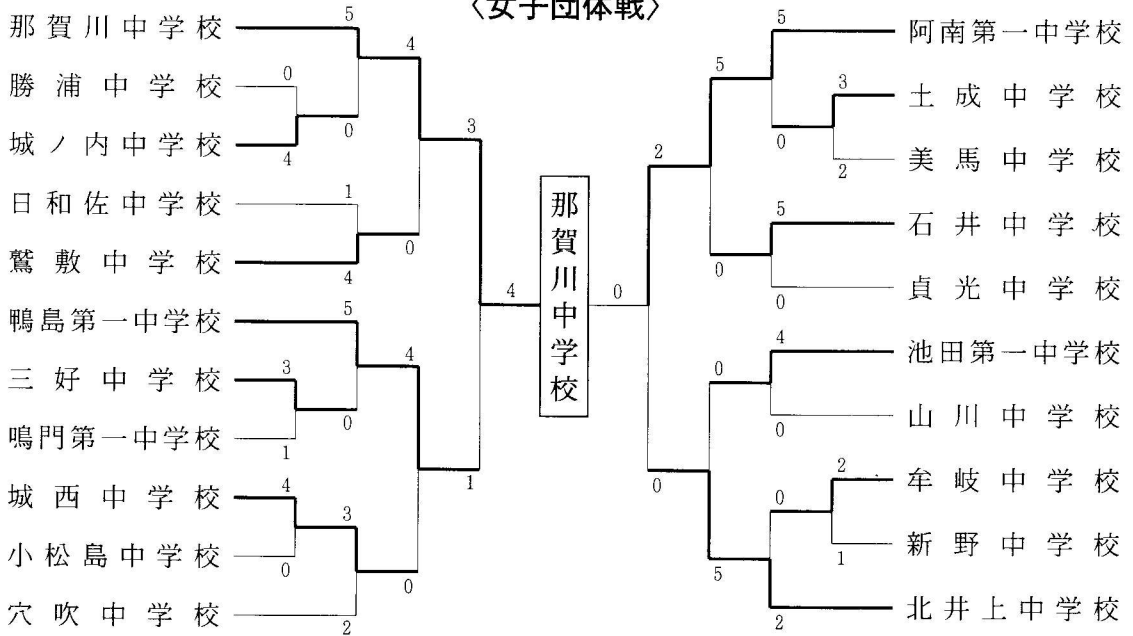
[個人戦]

順 位	男 子	学 校 名	順 位	女 子	学 校 名
優 勝	白 木 恒二郎	石 井	優 勝	原 麻由香	那 賀 川
準優勝	青 木 大 将	徳 島 文 理	準優勝	岡 内 拓 未	那 賀 川
第 3 位	松 本 好 史	徳 島 文 理	第 3 位	岩 原 紗也香	那 賀 川
第 3 位	土 井 翔 吾	阿 南 第 一	第 3 位	長谷川 愛 実	那 賀 川

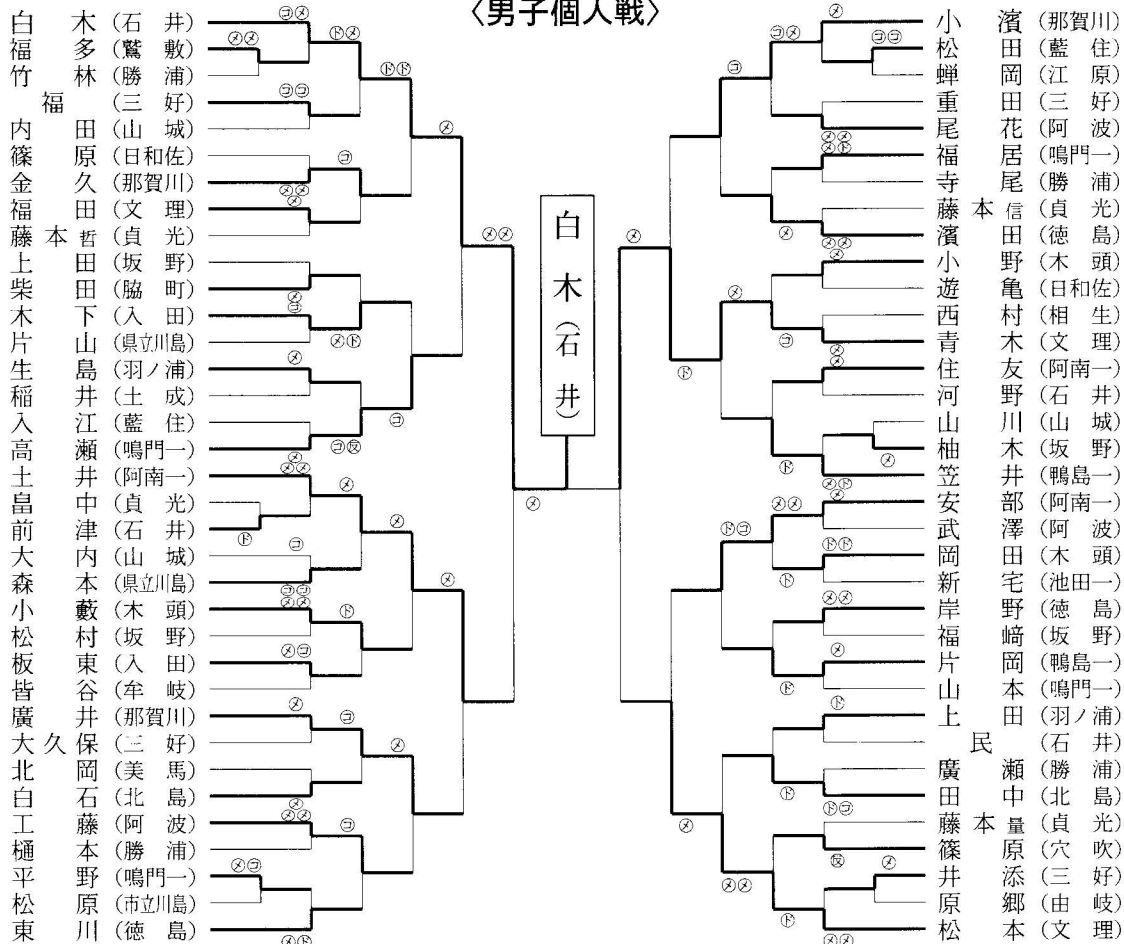
〈男子団体戦〉



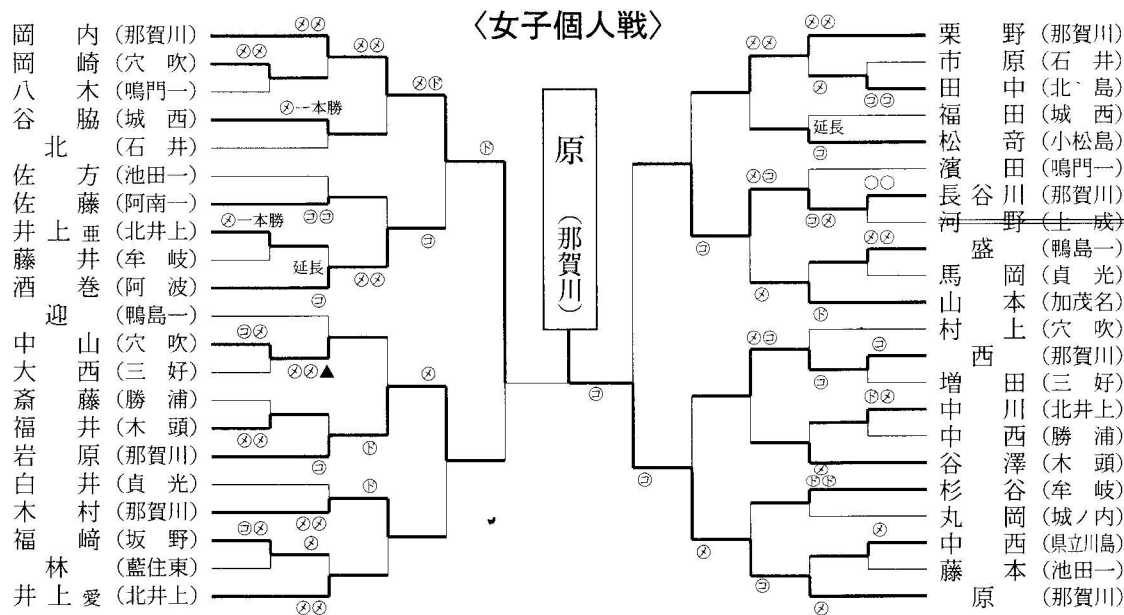
〈女子団体戦〉



〈男子個人戦〉

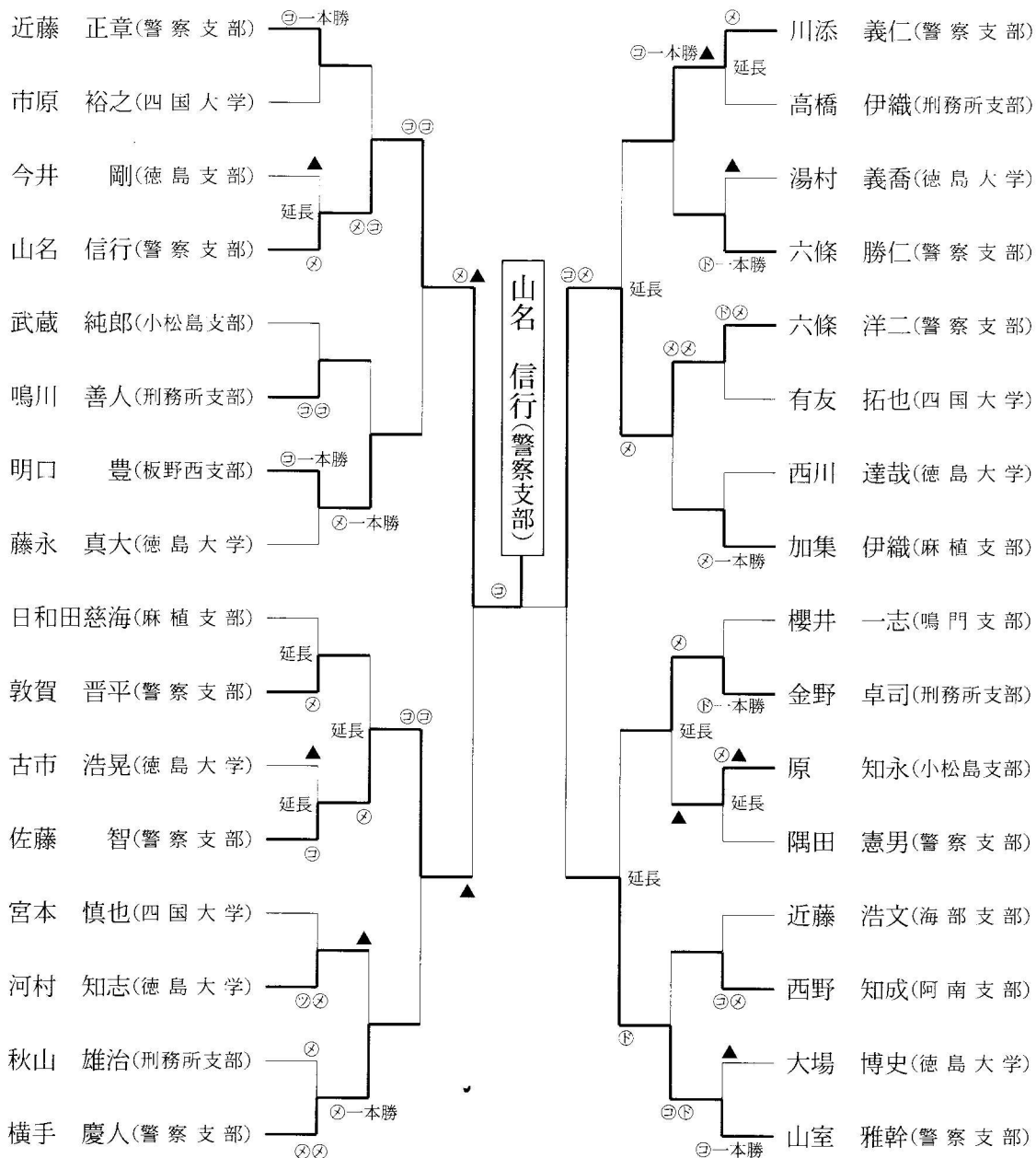


〈女子個人戦〉



第19回 徳島県剣道選手権大会並びに 第55回 全日本剣道選手権大会県予選会

優勝 山名 信行 (警察支部) 日時 平成19年7月8日(日) 午前9時30分
 準優勝 六條 洋二 (警察支部) 場所 鳴門 武道館
 第三位 佐藤 智 (警察支部)
 第三位 山室 雅幹 (警察支部)



第36回 徳島県社会人剣道大会

予選リーグ

日 時 平成19年10月14日(日) 午前9時30分
場 所 鳴門ソイジョイ武道館

A	刑務所支部 B	徳島支部 A	美馬支部 B	勝者数	勝者数	勝本数	順位
刑務所支部 B		$\frac{5}{3}$	$\frac{6}{3}$	2	6	11	1
徳島支部 A	$\frac{0}{0}$		$\frac{5}{3}$	1	3	5	2
美馬支部 B	$\frac{1}{0}$	$\frac{1}{0}$		0	0	1	3

B	阿南支部(大野)	阿波支部(火)	鳴門支部 B	勝者数	勝者数	勝本数	順位
阿南支部(大野)		$\frac{2}{1}$	$\frac{6}{3}$	1	4	8	2
阿波支部(火)	$\frac{5}{3}$		$\frac{3}{2}$	2	5	8	1
鳴門支部 B	$\frac{2}{1}$	$\frac{2}{1}$		0	2	4	3

C	板野西支部 B	蔵本剣道クラブ	海部支部	勝者数	勝者数	勝本数	順位
板野西支部 B		$\frac{6}{3}$	$\frac{6}{3}$	2	6	12	1
蔵本剣道クラブ	$\frac{2}{1}$		$\frac{3}{2}$	0	3	5	3
海部支部	$\frac{3}{1}$	$\frac{4}{3}$		1	4	7	2

D	阿波支部(山)	三好支部(林)	徳島右武館	木頭錬心館 A	勝者数	勝者数	勝本数	順位
阿波支部(山)		$\frac{9}{5}$	$\frac{3}{2}$	$\frac{4}{2}$	3	9	16	1
三好支部(林)	$\frac{0}{0}$		$\frac{1}{0}$	$\frac{2}{1}$	0	1	3	4
徳島右武館	$\frac{2}{2}$	$\frac{2}{1}$		$\frac{2}{1}$	1	4	6	3
木頭錬心館 A	$\frac{1}{0}$	$\frac{7}{4}$	$\frac{6}{3}$		1	7	14	2

E	阿南支部(那賀川)	麻植支部 C	板野東支部	勝者数	勝者数	勝本数	順位
阿南支部(那賀川)		$\frac{9}{5}$	$\frac{3}{2}$	1	7	12	2
麻植支部 C	$\frac{1}{0}$		$\frac{2}{1}$	0	1	3	3
板野東支部	$\frac{6}{3}$	$\frac{7}{3}$		2	6	13	1

F	小松島支部 B	上板剣道教室	振武館 A	勝者数	勝者数	勝本数	順位
小松島支部 B		$\frac{5}{2}$	$\frac{1}{0}$	0	2	6	2
上板剣道教室	$\frac{5}{2}$		$\frac{1}{0}$	0	2	6	2
振武館 A	$\frac{6}{3}$	$\frac{4}{2}$		2	5	10	1

予選リーグ

G	刑務所支部 A	振武館 B	美馬支部 A	木頭錬心館 B	勝者数	勝本数	順位	
	刑務所支部 A		$\frac{7}{4}$	$\frac{6}{4}$	$\frac{3}{2}$	2	10	16
振武館 B	$\frac{1}{0}$		$\frac{3}{2}$	$\frac{3}{2}$	1	4	7	3
美馬支部 A	$\frac{2}{1}$	$\frac{1}{0}$		$\frac{1}{0}$	0	1	4	4
木頭錬心館 B	$\frac{3}{2}$	$\frac{3}{2}$	$\frac{8}{4}$		1	4	14	2

H	阿南支部 A	麻植支部 B	鳴門支部 A	勝者数	勝本数	順位	
	阿南支部 A		$\frac{5}{3}$	$\frac{5}{2}$	2	5	10
麻植支部 B	$\frac{1}{1}$		$\frac{4}{2}$	0	3	5	3
鳴門支部 A	$\frac{4}{2}$	$\frac{5}{3}$		1	5	9	2

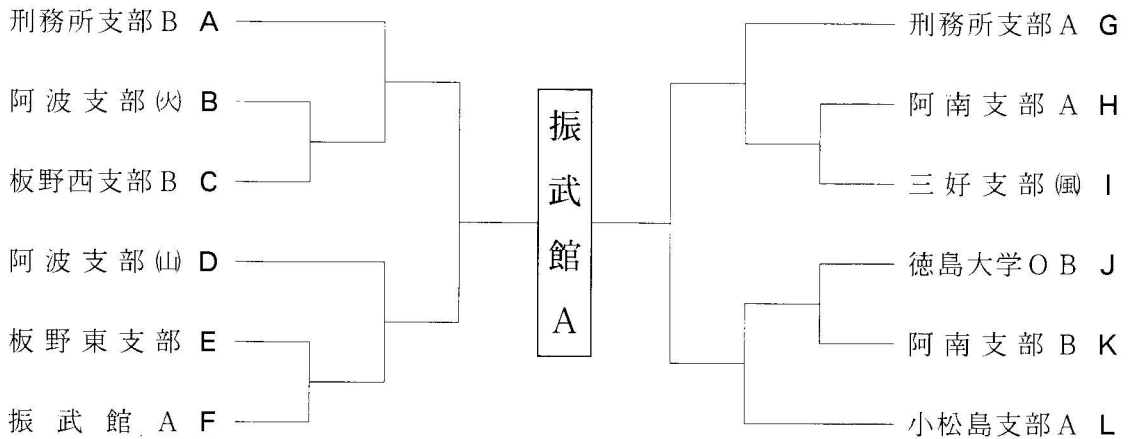
I	阿波支部(林)	板野西支部 A	三好支部(風)	勝者数	勝本数	順位	
	阿波支部(林)		$\frac{5}{3}$	$\frac{4}{1}$	1	4	9
板野西支部 A	$\frac{3}{1}$		$\frac{4}{2}$	0	3	7	3
三好支部(風)	$\frac{4}{1}$	$\frac{6}{3}$		1	4	10	1

J	麻植支部 A	徳島大学 O B	上八万剣道倶楽部	勝者数	勝本数	順位	
	麻植支部 A		$\frac{0}{0}$	$\frac{7}{4}$	1	4	7
徳島大学 O B	$\frac{6}{4}$		$\frac{8}{5}$	2	9	14	1
上八万剣道倶楽部	$\frac{1}{1}$	$\frac{0}{0}$		0	1	1	3

K	阿南支部 B	名西支部	徳島錬心館	勝者数	勝本数	順位	
	阿南支部 B		$\frac{2}{2}$	$\frac{6}{3}$	1	5	8
名西支部	$\frac{2}{2}$		$\frac{4}{3}$	1	5	6	2
徳島錬心館	$\frac{0}{0}$	$\frac{0}{0}$		0	0	0	3

L	阿波支部(風)	徳島支部 B	誠武館道場	小松島支部 A	勝者数	勝本数	順位	
	阿波支部(風)		$\frac{4}{1}$	$\frac{5}{3}$	$\frac{0}{0}$	1	4	9
徳島支部 B	$\frac{5}{2}$		$\frac{4}{2}$	$\frac{1}{0}$	1	4	10	2
誠武館道場	$\frac{3}{2}$	$\frac{4}{2}$		$\frac{4}{0}$	0	4	11	4
小松島支部 A	$\frac{7}{4}$	$\frac{7}{3}$	$\frac{9}{4}$		3	11	23	1

決勝トーナメント



準決勝戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
刑務所 A	高橋	金野	鳴川	片山	藤本	3
	⊗	⊙	⊙	⊗一本勝	引き分け	
小松島 A	⊙	⊗				1
	原	有松	切中	西山	澤井	

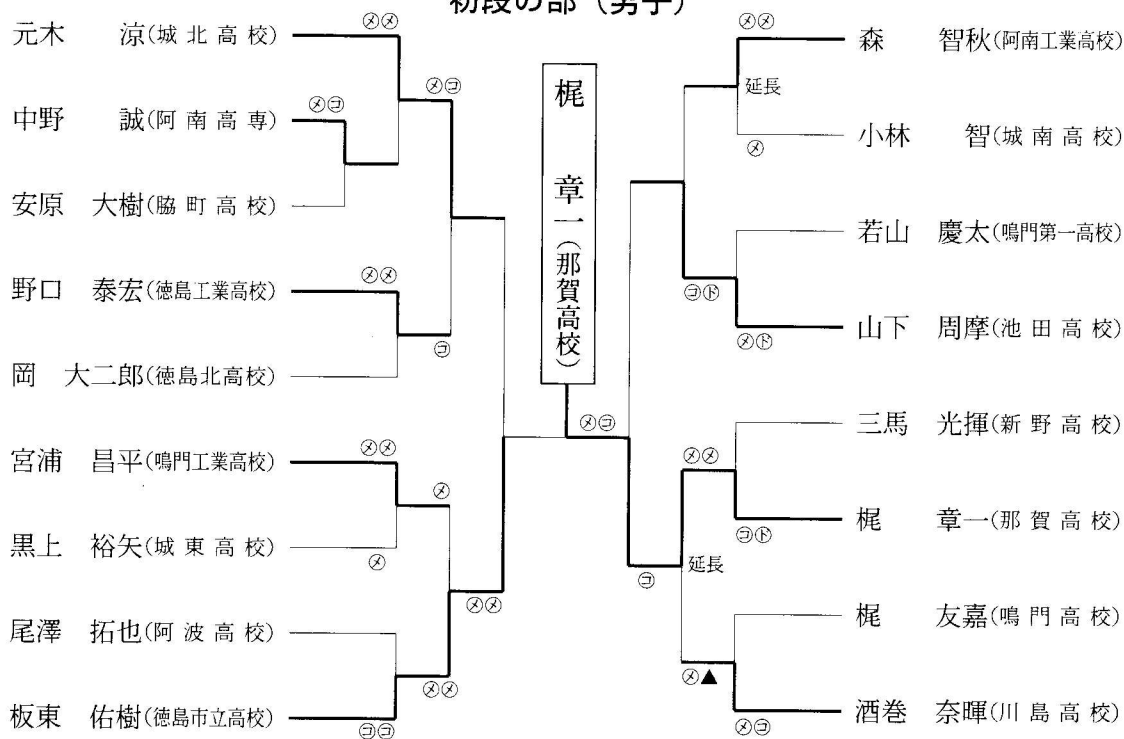
チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
刑務所 B	秋山	前田	林	猪野	鈴木	0
	引き分け	引き分け				
振武館 A	元木	松本	福多博	井村	富田	2
	⊗	⊙	⊙一本勝	⊙一本勝		

決勝戦

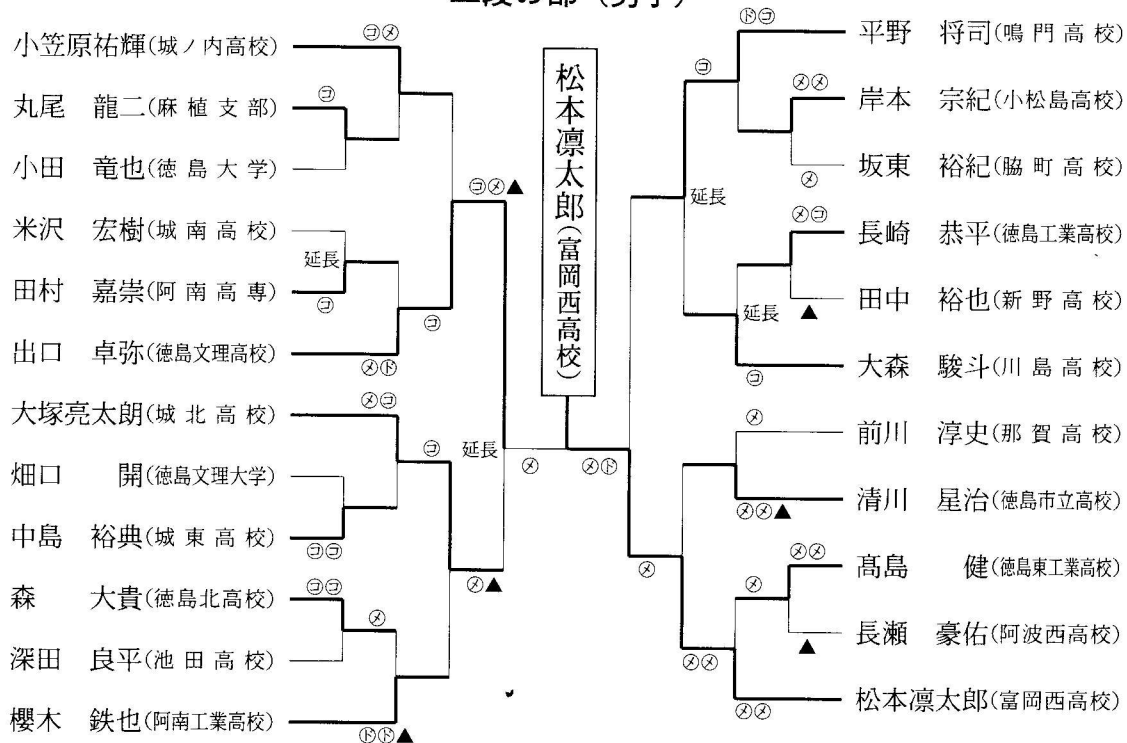
- 優勝 振武館 A
- 準優勝 刑務所支部 A
- 第3位 刑務所支部 B
- 第3位 小松島支部 A

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表	得点
振武館 A	元木	松本	福多博	井村	富田	富田	2
	引き分け	⊗	⊙			⊗	
刑務所 A	高橋	金野	鳴川	片山	藤本	藤本	1
		⊙	⊙	⊙一本勝	引き分け		

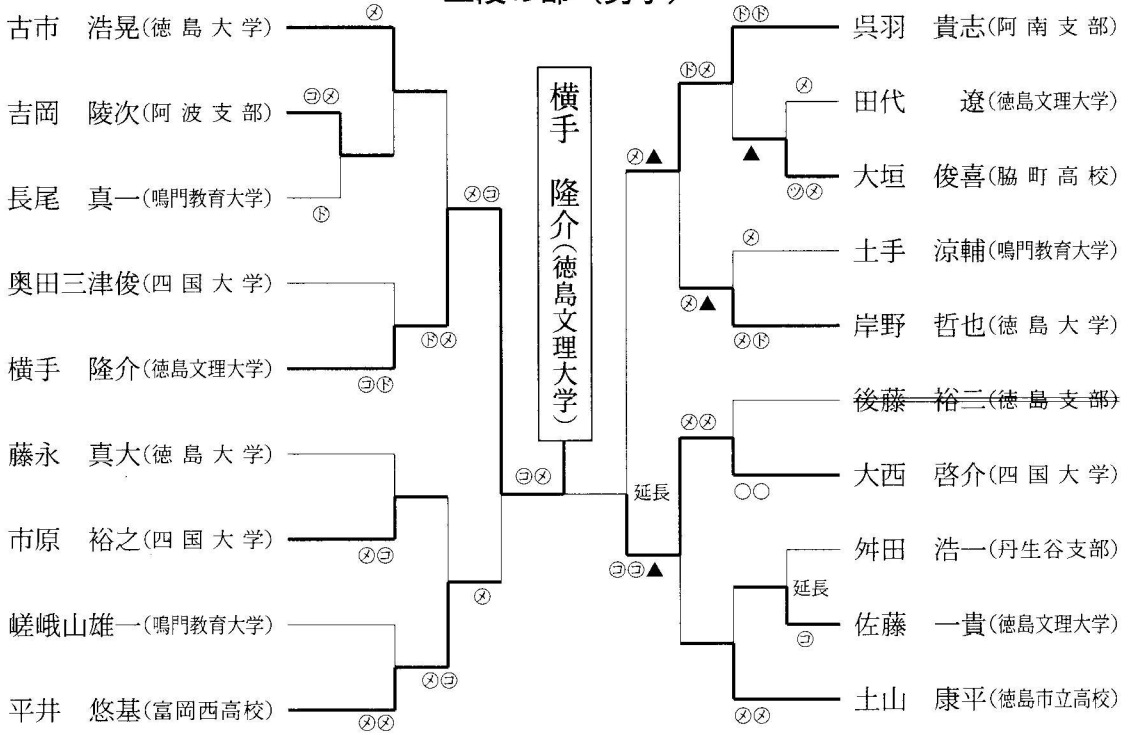
初段の部 (男子)



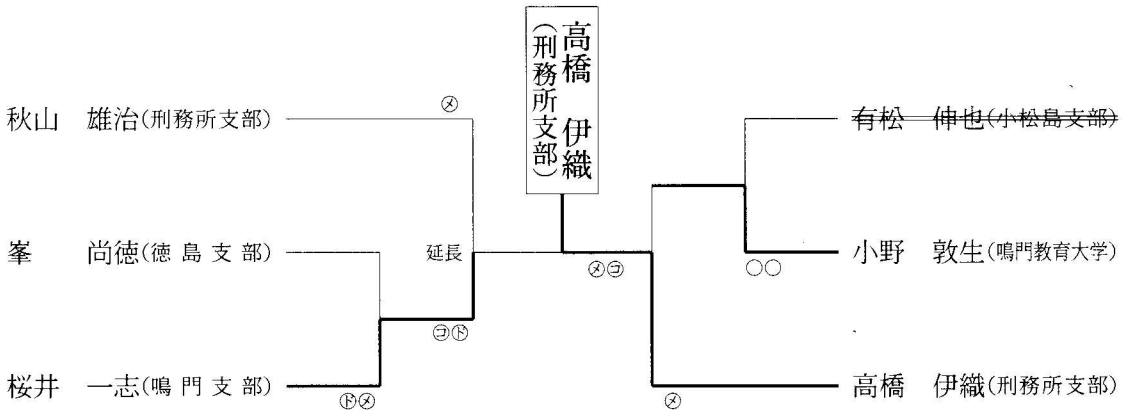
二段の部 (男子)



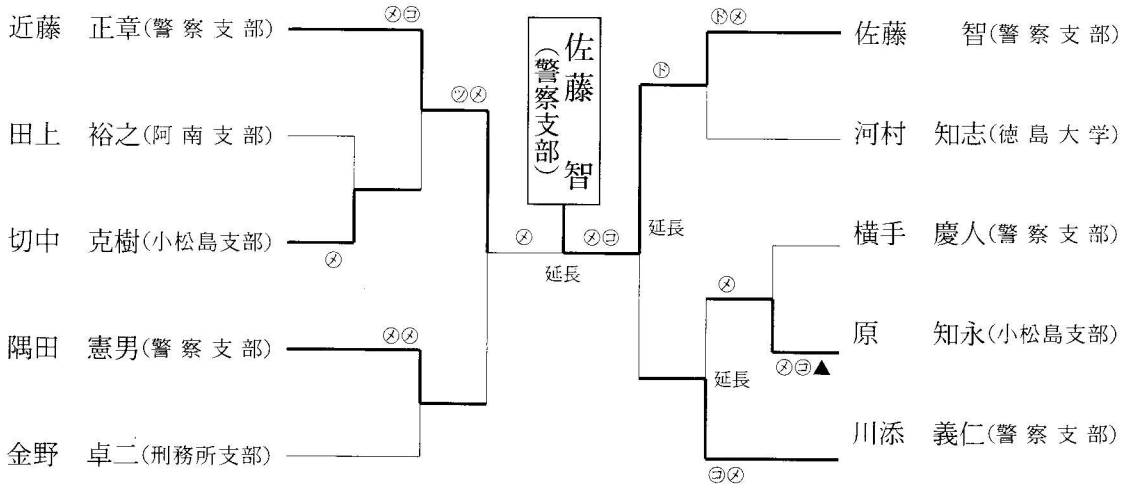
三段の部（男子）



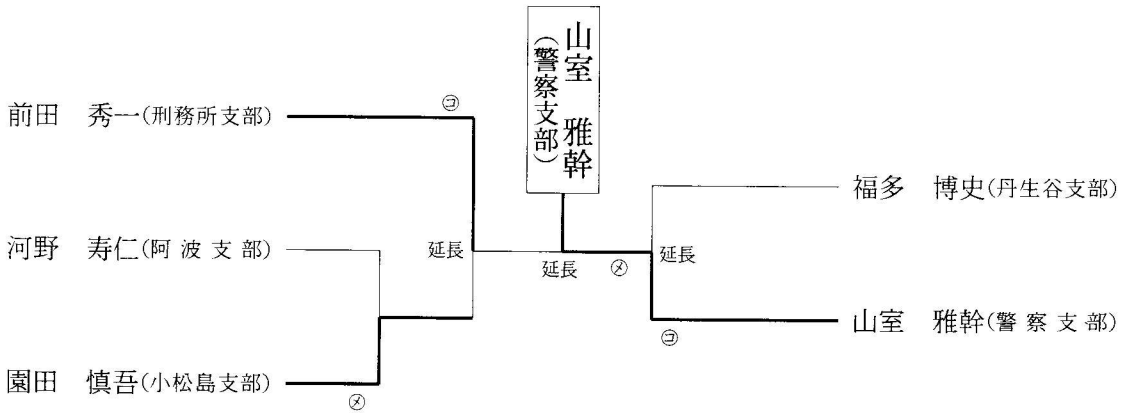
四段の部（男子）



五段の部（男子）



六段の部（男子）

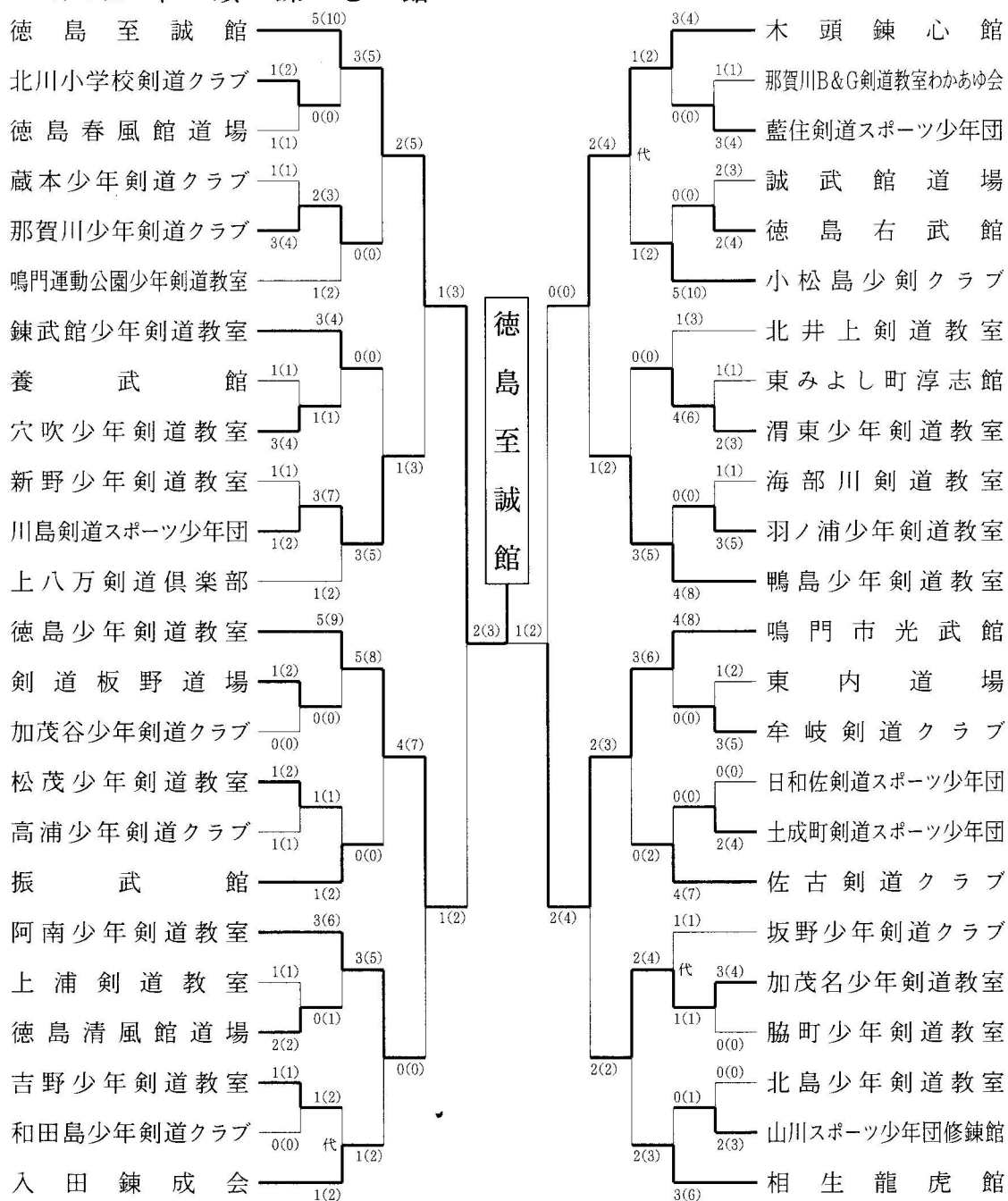


第18回 徳島県小・中学校剣道強化錬成大会

少年の部 (48チーム)

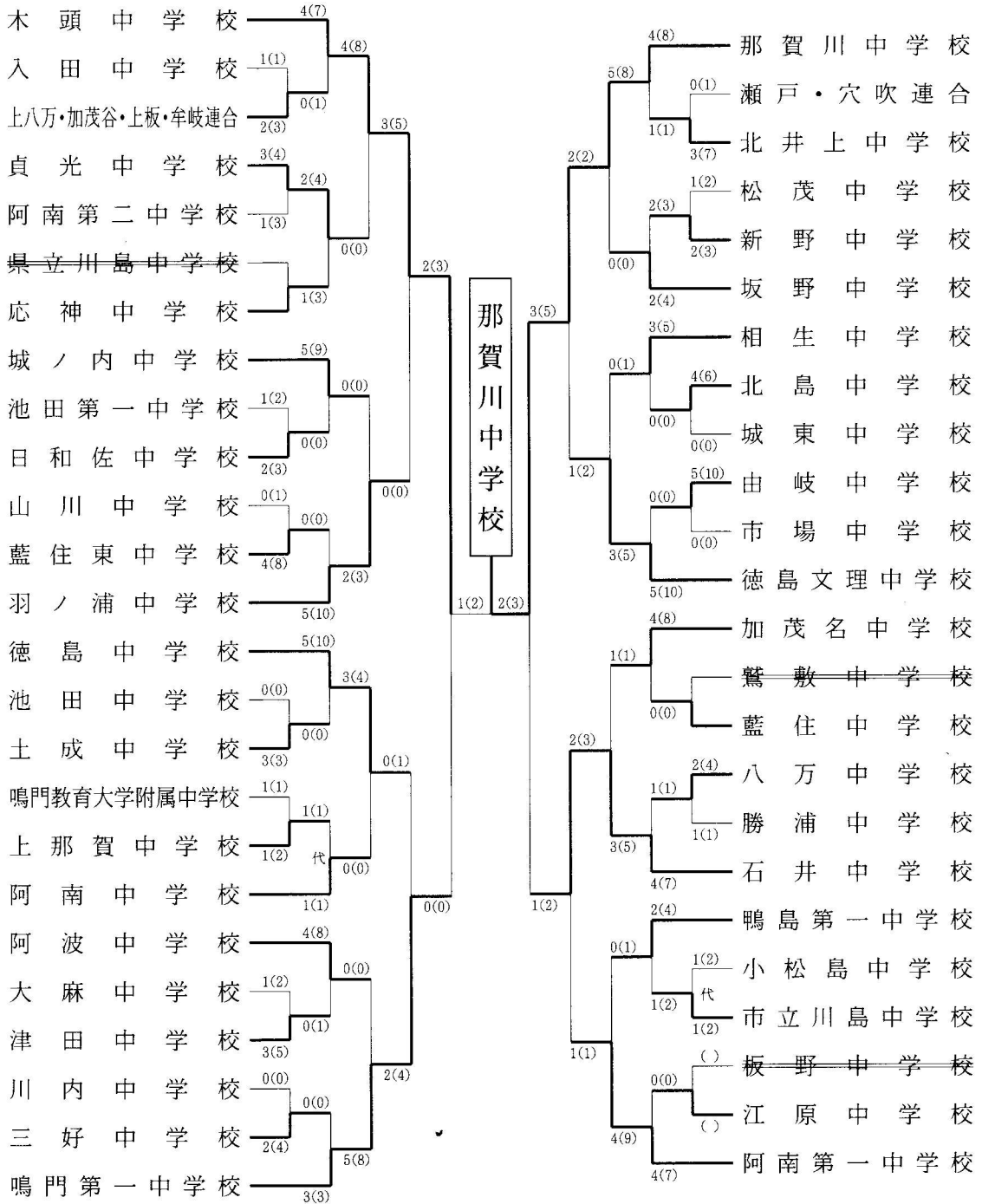
日時 平成20年1月20日(日) 午前9時30分
場所 鳴門アミノバリューホール

優勝 徳島至誠館
準優勝 鳴門市光武館
第3位 徳島少年剣道教室
第3位 木頭錬心館



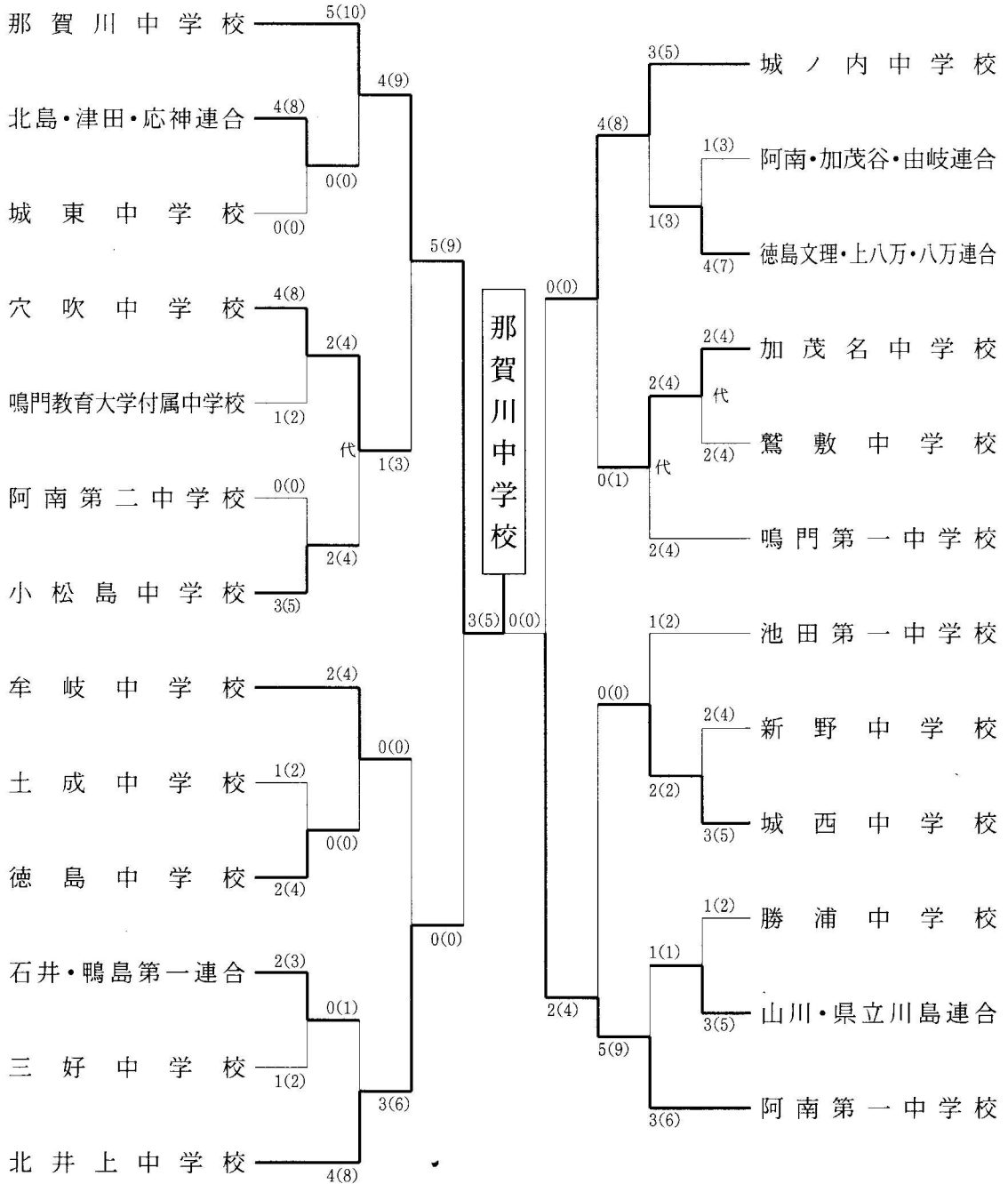
中学生男子 (49チーム)

優勝 那賀川中学校
 準優勝 木頭中学校
 第3位 鳴門第一中学校
 第3位 石井中学校



中学生校女子 (25チーム)

優勝 那賀川中学校
 準優勝 阿南第一中学校
 第3位 北井上中学校
 第3位 城ノ内中学校



準決勝戦 (少年の部)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	田村	玉田	上田	高木	岩原	1
		⊖ ⊖			⊖	(3)
徳島少年 剣道教室					⊖ ⊗	1
	佐賀	工藤	西田	山田	山中	(2)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
木頭 錬心館	岡田	岩佐	武岡	小川桐	小川虎	0
						(0)
鳴門市 光武館		⊗ ⊗			⊖ ⊗	2
	福居	太田	新居	中井	山本	(4)

準決勝戦 (中学男子)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
木頭 中学校	久保	中田	小藪	関口	小野	2
	⊖ ⊗		⊗一本勝			(3)
鳴門第一 中学校						0
	竹内	宇井	富浦	黒木	斎田	(0)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川 中学校	蘆田	井上稔	廣井	井上幹	谷口	2
	⊖ ⊗		⊖ ⊗		⊖一本勝	(5)
石井 中学校	⊖	▲		一本勝		1
	新居	小川	岡田	坂東	谷	(2)

準決勝戦 (中学女子)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川 中学校	長谷川	那佐	西	青木	岡内	5
	⊗ ⊗	⊖ ⊗	⊖ ⊖	⊖ ⊗	⊗一本勝	(9)
北井上 中学校	▲					0
	吉川	矢部	中村	斎藤	三島	(0)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
城ノ内 中学校	倭	佐藤	美馬	川人	丸岡	0
						(0)
阿南第一 中学校	⊗ ⊗			⊖ ⊗		2
	佐藤	小川	松浦	藤本	工藤	(4)

決勝戦 (少年の部)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	田村	玉田	上田	高木	岩原	2
	⊖ ⊗			Ⓣ一本勝		(3)
鳴門市 光武館					⊖ ⊖	1
	福居	太田	新居	中井	山木	(2)

決勝戦 (中学男子)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
木頭 中学校	久保	中田	小藪	関口	小野	1
			⊗ ⊗			(2)
那賀川 中学校	⊗本勝				⊖ Ⓣ	2
	蘆田	井上稔	廣井	井上幹	谷口	(3)

決勝戦 (中学女子)

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川 中学校	長谷川	那佐	西	青木	岡内	3
	⊗一本勝	⊗ ⊗			⊖ ⊗	(5)
阿南第一 中学校						0
	佐藤	小川	松浦	藤本	工藤	(0)

2月18日

私の指導者！ 県内監督らの極意紹介

▶25

阿南一中剣道部の監督に就いて10年目。女子を全国中学校体育大会の常連校に育て上げ、昨年はベスト8に導いた。

剣の道を究めることで人を磨く「活人剣」の教えを部員たちに説く。「厳しい練習を行うのは勝つことが目的ではない。厳しい練習に耐える精神力を養うことが目標だ」と強調する。

その言葉通り普段の練習は結構ハードだ。平日の練習は休養日の木曜日を除いて1日平均約2時間半。年間約30日は県外遠征に出掛け、強豪を阿南市に集めて練成会を開くこともある。

「厳しい練習を重ねていると、知らず知らずのうちに礼儀作法を重んじる剣道の精神が宿る。そうすれば日常生活が規則正しく、きちんと送れるようになる」と話す。

剣道・阿南一中監督 村井 正志(48)

指導信念は「最後まで責任を持ち、粘り強く根気強く指導する。高い目標を持って絶対にあきらめない」だ。

数年前、剣道経験のない1年生が入部したいと申し込んできたことがあった。村井は言った。「練習は厳しい。途中でやめるような中途半端なことではしてほしくない。入るからには覚悟してほしい」。生徒と話し合った末、入部を許可。この生徒は厳しい練習に耐え、2年後にはチームの先鋒として活躍するまで成長し、指導者として大きな喜びに包まれた。

部員に掛け続けている言葉がある。それは「できることはすくにする」。

厳しい練習に耐える精神力養う

剣の道・人の道を究明



真剣な表情で部員と向き合う村井監督（阿南一中武道館）

できないことは時間をかけてできるようにする」というものだ。「例えば練習中に大きな声を出すこと。できることを素早く、一生懸命にしない選手は伸びていかない。簡単にできることでも、全力で取り組む習慣を身に付けることが大切だ」練習では1年生よりも上級生をしかるケースが多い。剣道の基本動作ができていない1年生を見つけても、しかるのは必ず上級生。理由は先輩と指導が行き届いていないからだという。一期一会という言葉を大切に。「間違った動作を見つけた瞬間が大チャンス。その一瞬に二度と出合えないかもしれない。竹刀を交えている先輩の役割が重大だ。この先輩、後輩のつながりが伝統を築く」。部員とともに剣の道、人の道を究明する姿勢こそが、村井の指導スタイルだろう。（この連載は運動部取材班が担当しました）
＝おわり

3月28日

剣道

【女子】1次リーグ組
阿南工 3-2 星学館
徳島 3-2 三馬
阿南工 1-1 高輪
引分け (東京)
阿南工 1-0 谷沢、谷口
阿南工 1-0 福川

2勝の阿南工は決勝トーナメントへ。

強豪との接戦制す

○：初出場ながら強豪校を相手に、1勝1分けの負け知らずで1次リーグを勝ち上がり、16強入りを果たした男子・阿南工。阿南工主将は涙声を振り絞って「ここにかく、う

川は積極的に前に出てドウを、残り1分半では相手のすきをみてコテを決め、接戦をものにした。

決勝トーナメント1回戦の相手は名門・和歌山東(和歌山)。阿南工主将は「みんななつなげて、一進一退の末、2-2で大将戦へ。下がらず取っていい」と力強く

富岡東ベスト8

剣道 女子団体

レスリング 県勢3人が16強入り



2006年度全国高校選抜大会第12日は28日、徳島開催のハンドボールのほか、各地で6競技が行われた。徳島県勢はレスリング、アーチェリー、剣道の3競技に出場し、剣道女子団体で富岡東が5年ぶ

りに8強入りを果たした。富岡東の横山依利加は優秀選手に選ばれた。レスリング個人では66kg級の江本壮志(穴吹)、74kg級の福原将太(池田)、96kg級の亀井秀一(穴吹)の3人が16強入りを決めた。

剣道

【男子】決勝トーナメント1回戦

和歌山東 4-1 阿南工
(和歌山) (徳島)
(阿南工) 榎本、谷沢、谷口、阿南、福川
1 明徳塾 (高知)
九州学院は年連続4度目の優勝
【女子】決勝トーナメント1回戦
高崎健康福祉大高崎 3-1 阿南東 (群馬)

【学園(穴吹)】左沢は3年ぶりの富岡の優勝。左沢は3年ぶりの富岡の優勝。

アーチェリー

【静岡津川市東谷目的広場】(男子)最終成績①坂野太一(愛知) 愛知華大(河) 1189点 ②大新、50kg321、30kg349(川大空) 徳島縣立(徳島東) 908点(90kg) 5、70kg255、50kg225、30

個々の役割を果たす

同校5年ぶりのベスト8入りが懸かった決勝トーナメント1回戦の高崎健康福祉大高崎(群馬)と阿南東(群馬)の戦い。阿南東は先鋒の横山勢いづけば、優秀選手10人が得意のメンで一本勝

富岡東

「夏の全国総体では優勝、最低でもメダルを取る」と大きな目標を掲げた。

3月29日

4月30日

徳島 2回戦敗退		秋田 1本数勝ち	
都道府県対抗剣道		徳島	
剣道の第55回全日本都道府県対抗優勝大会は29日、大阪市中央体育館で行われ、2回戦が初戦となった徳島は秋田に1-1の末、3-4で本数負けした。徳島は1-1で迎えた大将戦で、平野がメンを決めて優位に立ったが、残り3秒でメンを取られた。優勝は大阪で4年ぶり14度目。			
大	千	寺	中
阪	葉	田	村
2-2	4-1	メ	メ
本数勝	茨	メ	平
ち	岡	平	野
千	山	山	本
葉	城	本	野
大	千	寺	中
阪	葉	田	村
2-2	4-1	メ	メ
本数勝	茨	メ	平
ち	岡	平	野
千	山	山	本
葉	城	本	野

◆剣道 第55回全日本都道府県対抗優勝大会
 (29日・大阪市中央体育館)
 ▼2回戦
 秋田 1-1 徳島
 (本数勝ち)

徳島県警教養課の剣道師範近藤巨さん(五二)徳島市西須賀町葛島IIが、最高段位の八段に合格した。県警では近藤さんの恩師で故・堀江幸夫さん以来、三十三年ぶり二人目で、県内では六人目の快挙。

八段の審査は全日本剣道連盟が年二回実施していて、実技試験と形の審査で合格者を決める。近藤さんは二日に京都であった審査で合格した。受験者千三百四十人のうち合格者はわずか十六人。十一回目の挑戦で超難関を突破した。

県警職員・近藤さん(徳島市)

剣道最高の8段合格

5月9日



剣道の最高段位の8段に合格した近藤さん＝徳島市内の県警察学校

驚歎中一年から剣道を好成績を挙げた。現在は「堀江さんをはじめ、始め、一九七三年に県警警察職員として、後輩の指導に当たっている。おかげ。今後も剣道の奥深さを追求しながら、後継者の育成に力を注ぎたい」と話している。



部の徳島文理と 中学那賀川優勝

◆第32回山家旗争奪県下大会(4月22日・鷲敷B & G海洋センター体育館)
 中学の部は43チーム(男28、女15)、高校は33チーム(男22、女11)が参加。中学は男子が徳島文理、女子是那賀川が栄冠を手にした。高校は男子が城北A、女子は川島が頂点に立った。
 【男子】中学①徳島文理(青木大将、久保孝緒、久保公緒、田中宏明、松本好史)②阿南第一③那賀川
 ▼高校①城北A(山本敬太、森出大介、林明史、大塚亮太郎、濱航

介、元木涼、中川貴文)
 ②徳島文理A③阿南工A
 【女子】中学①那賀川(市瀬薫子、津田菜摘、木村奈々美、宮本真理、岩原紗也香)②阿南第一③新野
 ▼高校①川島(新居春菜、鴻野賀穂里、高橋理恵、櫻木舞、藤本雅代)
 ②富岡東B③富岡東A
 【個人賞】5人以上勝ち抜き①勝ち抜き数9元木龍太(富岡西) 鴻野賀穂里(川島) 藤井玲名(富岡東) ▼8 峰本直季(川島) 鈴木健太郎(阿南工) ▼7 岩雲祥吾(川島) 松本明真(徳島文理) ▼6 西田義玄(那賀) 谷口真央(阿南工) 鎌田憲資(徳島文理) ▼5 金岡洋平(徳島東工) 山口拓也(城北) 土山康平(徳島市立) 河井優里(富岡東)

5月17日



小中学生120人熱戦

阿波市 八幡神社で剣道野試合

阿波市市場町八幡の八幡神社境内で、少年剣士が試合を奉納する演武大会があり、地元住民が珍しい野試合に声援を送った。

境内に設けた二面の特設道場で阿波、吉野川両市の小中学生百二十人が熱戦を展開。土ほこりを上げながら運動靴に道着姿の少年剣士が汗びっしりよりで「メン」「ド」と鮮やかな剣さばきを見せた。

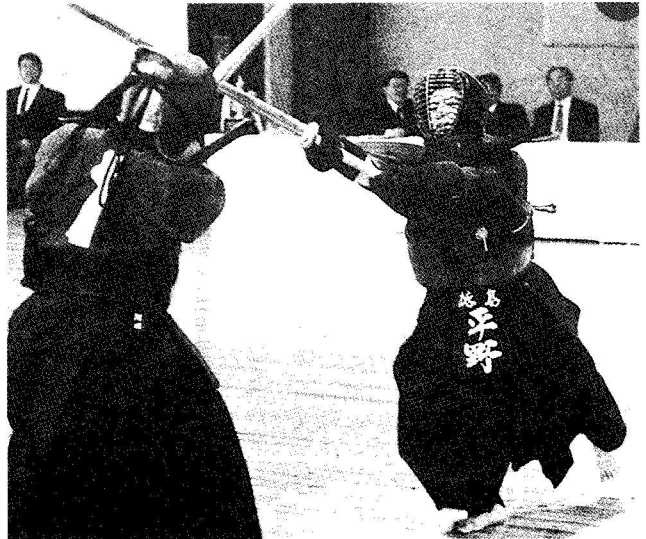
初出場の土成小学校四年の原涼太君(九)は「外地元少年剣士たちが野外で熱戦を繰り広げた演武大会!!阿波市市場町の八幡神社

の試合は、風がとても気持ちよかった」と喜んでいた。

百年以上の伝統を誇る演武大会は戦後廃れていたが、同神社剣道同志会(木村秀正会長)が中心となって二〇〇三年に復活。競技振興と少年の健全育成のため毎年開かれている。

徳島剣友会 V3

個人三段 美馬(海部)が頂点
以上の部



団体決勝・徳島剣友会对南北レディース 大将戦
で攻め込む徳島剣友会の平野(左)＝中央武道館

県女子剣道

剣道の徳島県女子大会が13日、中央武道館であり、団体の部は徳島剣友会が3年連続3度目の優勝を飾った。個人三段以上の部は、美馬真奈美(海部支部)が連覇を果

たした。美馬は団体で徳島剣友会の先鋒(せんぼ)を務めており、2年連続で団体、個人2冠を獲得。個人二段以下の部は酒井奈々(徳島文理大)が制した。

1(代表勝) 1徳受理理大
1(団体) 1回戦 鳴門教育大
1(代表勝) 1徳受理理大

川島OG2 〇徳島大日、鳴門教育大A2 1徳島文理大C、南北レディーズ3 〇徳島大C、徳島大A2 〇四国〇鳴門決勝 徳島剣友会1(本数勝) 1鳴門教育大日、川島OG1(本数勝) 〇徳島支部、南北レディーズ3 〇鳴門教育大、徳島文理大A2 〇徳島大C 準決勝 徳島剣友

山島OG、南北レディーズ1(代表勝) 1徳島文理大A

▽決勝

徳島剣友会 2-1 南北レディーズ

〇美馬 〇猪尾 〇塚原

〇平野 〇河田

個人三段以上の部準決勝

5月14日

美馬(海部支部)メー公文(鳴門教育大)、前田(阿波支部)メー森(鳴門教育大)

▽決勝

美馬 〇前田

▽二段以下の部準決勝 酒井(徳島文理大)メー菊池(徳島文理大、西田(徳島大)ニコノ 〇徳島支部)

▽決勝

酒井 〇西田

勢いを団体予選に

〇…団体3連覇を達成した徳島剣友会は、1対1で迎えた大将戦で平野力強く語った。

(主婦)が終盤に鮮やかなメンを決め、接戦を制した。

「優勝へのプレッシャーはあったが、普段していることをやろうと心掛けた」と言う平野は、先鋒の美馬(中学臨時教員)、中堅の猪尾(福祉施設職員)と同じ大阪体育大出身。「年代は異なるがチームワークがよく、助け合っただけでこられた。この勢いを団体予選につなげたい」と

第47回 県高校総体

剣道

【男子】団体1回戦
徳島3-0鳴門 那賀4-0城東
【城西高】

高専3-1徳島 城内3-2池田
城北5-0阿西 東2-1脇町
市立5-0海部

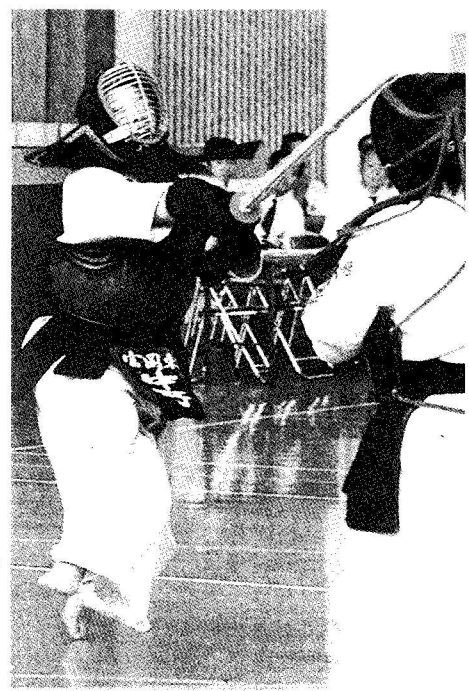
【女子】団体1回戦
川島4-0徳北 鳴4-1城西
那賀4-0板野 阿4-0高専
【城西高】

剣道

【男子】個人準々決勝 峰本
川島3-0市立 高専2-1鳴門
高専4-0池田 城北5-0松高
【城西高】

富岡東 16年連続

男子 徳島文理4年ぶりV



重圧の中、強気の攻め

県総体史上、例のない女子団体16連覇をかけた富岡東の戦いは、大将の中野に託された。1勝1敗2分けの苦戦が続いた。この試合は、中野の活躍が鍵となった。中野は、試合開始から竹刀を構え、強気の攻めを仕掛けた。相手の守りに入った瞬間、鋭いツセージを得意に感じた。さらに強気に攻め込み、相手が下がった瞬間を見逃さず、一閃を放った。仲間は感極まって泣き、中野は涙を流した。この勝利は、富岡東の歴史に新たなページを刻んだ。

大将戦で2本勝負を決めた富岡東・中野。富岡東は16年連続で女子団体16連覇を達成した。



次鋒を取られ、後がなくなった徳島文理。中堅の鎌田は引分け。大将の中野は、試合開始から竹刀を構え、強気の攻めを仕掛けた。相手の守りに入った瞬間、鋭いツセージを得意に感じた。さらに強気に攻め込み、相手が下がった瞬間を見逃さず、一閃を放った。仲間は感極まって泣き、中野は涙を流した。この勝利は、富岡東の歴史に新たなページを刻んだ。

◆交流戦◆
松本18-00札幌
函館18-00帯広
旭川18-00旭川
釧路18-00釧路
帯広18-00帯広
旭川18-00旭川
函館18-00函館
札幌18-00札幌

◆プロ野球◆
ソフトバンク対楽天
西武ライオンズ対横浜
中日ドラゴンズ対巨人
読売ジャイアンツ対広島
阪神タイガース対福岡
オリックス対千葉
楽天対ソフトバンク

【男子】団体準決勝
徳島3-0鳴門 那賀4-0城東
【城西高】

【男子】個人準決勝
徳島3-0鳴門 那賀4-0城東
【城西高】

【男子】個人準決勝
徳島3-0鳴門 那賀4-0城東
【城西高】

女子

（南部）
（支）

岡吉

初

V

（警察）
（支）

山名

男子

全日本剣道選手選

剣道の第55回全日本・第46回全日本女子両選手権の予選を兼ねた徳島県選手権大会は8日、鳴門ソイジョイ武道館で男子32人、女子9人が参加して行われ、男子は山名信行（警察支部、県警機動隊）、女子は吉岡穂（阿南支部、富岡東一駒大3年）がともに初優勝を果たした。

県内はもちろん、全国的にも少ない二刀流を駆使し、山名（警察支部）が初の栄冠をつかんだ。右手に太刀、左手には小太刀。小太刀で相手の攻撃を食い止める一方、太刀で思い切り攻め込む姿は、宮本武蔵さながら剣豪の風格を漂わせる。

二刀流11年、実った



山名信行

剣道5段。2回戦で前年覇者の近藤（警察支部）を下して波に乗った。決勝の相手、六條洋（警察支部）も普段一

男子決勝 二刀流で積極的に攻め込む山名④—鳴門ソイジョイ武道館

選手権（9月2日・静岡長戦を制した。相手の美馬（海部支部）とは昨年の準決勝で対戦し敗れていた。「悔しさを晴らしたい」と臨んだものの、序盤にドウを取られ「終わったと思つた」。しかしすぐに気持ちを切り替え、メンを決めた。延長に入つて約5分間、膠着（こうちやく）状態が続いたが、鮮やかなメンで勝負をつけた。「ずっと無心だった。少し息が上がつたがスタミナは問題なかった」とあつげらんと語る。全国大会に向けては「挑戦者の気持ちで、いける」とまでいきついた。笑顔で抱負を語った。

（木村）



6月21日

7月25日

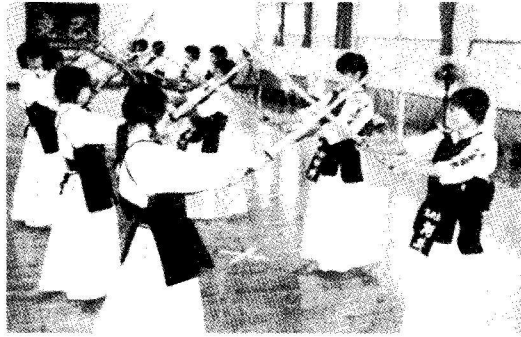
16年連続23度目の出場3位入賞を3度果たし、全国的にも名をはせた。今春の全国選抜大会ではベスト8入りしており、夏も上位進出に期待がかかる。

四国選手権（6月17日）では優勝候補に挙げられながら、先鋒（せんぼう）・横山と中堅・細川がポイントだ。

予選リーグで対戦する

剣道女子

富岡東



上位進出を目指しけいこに励む富岡東の選手ら。阿南市内の同校

京を予選で破った麗澤瑞浪（岐阜）と地元・佐賀の龍谷。飯田監督は「近年では一番厳しい組み合わせ。しかし、力を出し切れればいい勝負ができる」と話す。

四国選手権後には県外に遠征し、強豪校と練習試合を重ねるなど実戦経験も豊富だ。横山主将は「目標は優勝だが、1試合目から気持ちを引き締めて戦う。受け身にならず攻め続けたい」と力を込めた。

羽ばたけ 県勢

07 佐賀インターハイ

<2>

先の四国選手権では、的な強さで初優勝した。出場した5人（1人4日ごろの練習でも、一定射）が1射も外さず、20中すべての中させる庄倒

基本的な強さで初優勝した。日ごろの練習でも、一定して8割程度は的中させており、安定感がある。

強さの秘訣（ひけつ）は基本の反復練習。「真っすぐ引いて素直に放す」を念頭に、矢を放ち続ける。1人が射る数は1日に40〜50本。筋力アップのため、毎日50回の腕立に臨む。

弓道男子

徳島東工



最終調整に余念がない徳島東工の選手ら。徳島市内の同校

て伏せを欠かささない。全国総体では、まず予選で出場47校が20射をひき、的中数の多い順から上位32チームが決勝トーナメントに進む。谷川主将は「四国選手権の優勝で自信がついた。予選通過はもちろんだが、優勝を目指す」と話す。

数あるスポーツの中でも、精神力が特に鍵を握る競技。「練習中も常に試合の流れをイメージしている」と織野監督。団体戦ゆえの団結力も求められるが、「練習後も一緒に遊ぶなど、兄弟のようにつながりたい」と5人は口をそろえる。抜群のチームワークを武器に、全員が心を一つにして本番に臨む。

先鋒と中堅回復し万全

四国選手権優勝で自信

8月20日

剣道団体

那賀川が8強進出

男子の文理は予選敗退

全国中学校 体育大会

第3日

全国中学校体育大会
(全中) 第3日は19日、
東北各地で3競技を行
い、徳島県勢は剣道女子

団体で那賀川がベスト8
入りし、準々決勝に進
出。同校は女子個人でも
岡内拓未が8強入りして
おり、団体、個人両種目
の準々決勝から決勝まで
が行われる同競技最終日
(20日)に期待が集まる。
ソフトボールの女子は

神村学園(鹿児島)が2
連覇し、男子は住吉一
(大阪)が3年ぶりの2度
目の頂点に立った。相撲

団体は大道(東京)が初
優勝した。
酒田市団体
記念体育館
【男子】団体予選C組 笠懸
(群馬)2-1吉(大阪)
笠懸 1-0 (徳島)
徳島文理
【女子】団体予選G組 戸頭
(茨城)2-1島原(長崎)
那賀川 4-0 戸頭
(徳島) 栗野 4-0 相良
(徳島) 西 1-0 左川

那賀川 2-0 (和歌山)
○栗野 1-0 米田
○西 1-0 松下
○原 1-0 吉田
○岩内 1-0 吉田
○岩原 1-0 吉田

相撲

十和田市
相撲場
【団体】予選2回戦
徳島 3-0 那賀川
○河村 1-0 美馬

○原 1-0 中久米
○岡内 1-0 竹久
○岩原 1-0 島山
○那賀川 2-0 山本
○栗野 1-0 山崎
○西 1-0 山下
○原 1-0 渡辺
○岡内 1-0 増田
○岩原 1-0 増田
○那賀川は決勝トナントへ。
▽決勝トナント1回戦

全員の力で“前回超え”

那賀川

那賀川が成長した姿
を披露した。前年に鳴
門市であった全中で16
強入りしたものの準々
決勝に進め
ず、悔し涙
を流した4
選手が残
る。予選リ

1グは、出場5選手が
1本の糸でつながれた
ような一体感を持って
白星を積み重ね、島原
一(長崎)、戸頭(茨

城)を破った。
16強で争う決勝ト
ナメント回戦は、前
年8強入りし、那賀川

とと同じく4選手が残る
東和(和歌山)が相
手。まず先鋒(せんぼ
う)の栗野が延長の末
に面を奪って1勝。次

は粘って引き分け。こ
の結果2-10で準々決
勝に駒を進め、「全員
の力を出し切るだけ」
と言い切った。



栗野文那



西柚衣



原麻由香



岡内拓未



岩原紗也香

北村 90超級 村田 4強

第42回 全国高専体育大会
 会は)のほど、四国各地で6競技が行われ、徳島

県関係は柔道男子個人90超級で北村(阿南高専)、剣道女子個人で村田(阿南高専)が4強入りを果たした。

◆柔道 (愛媛県武道館)
 (男子)団体Bブロック③阿南
 2敗
 △個人73超級1回戦 本間(鶴)

◆剣道 (愛媛県武道館)
 (女子)個人1回戦 村田(阿南) 5ノ升(函館)
 △準決勝

村田 メー
 △準決勝
 松岡 メー
 鹿 村田
 (大島商)

剣道 阿南がベスト4

第42回 全国高専体育大会

第42回全国高専体育大会の女子剣道大会が愛媛県武道館で行われ、阿南

高専は予選リーグを突破して準決勝に進出。準決勝は、鈴鹿(三重県)に1-2で競り負けたが4強入りを果たした。

◆決勝と徳島関係の成績
 △予選リーグB組①阿南2勝②
 ○右井 メー
 鹿 3 〇 徳山

阿南が決勝トナメントに進出
 鹿 3 〇 徳山

肉田(阿南市出身)が準優勝

全日本女子剣道

剣道の第46回全日本女子選手権大会は2日、静岡県武道館で都道府県予選を勝ち抜いた64人を集めて行われ、阿南市那賀川町出身の内田(旧姓坪井) さくら(二五)静岡、



内田 さくら

横須賀高教、富岡東高(駒大3年、富岡東高出)は2回戦で敗れた。優勝は村山千夏(埼玉・埼玉東高)で3連覇。徳島県代表の吉岡穂加(秋田・吉岡④)駒田コメ(東京・東京)

準優勝した内田は3位と充実の笑顔をみせた。に入った昨年に続く快進撃だった。決勝で力尽きたものの、出場10度目の(岡山県警)からこを節目を自身最高成績で飾り「精いっぱいやれた」のは数年ぶり」と喜んだ。

昨年12月に台湾で行われた世界選手権(女子団体)で次鋒(じほ)を務め、チームの優勝に貢献するなど、日本を代表する女子剣士。身長154cmの小柄な体だが、動き回って常に攻め続ける剣道を持ち味に、那賀川台で活躍を続けている。2005年、大学時代の先輩だった勝之さん(磐田東高教)との結婚で若い選手を引っ張りながら剣の道を歩む。(水野)

好敵手破り最高成績 内田

を機に徳島県から静岡県 体育教諭として勤務し、活を送っている。また29歳。「子どもたちと一緒に頑張りたい」と、背中

△準決勝
 内田 メー
 △準決勝
 坪田 ⑥
 山田 ⑥
 古室 ⑤
 千葉・流 ⑤

9月3日



女子決勝・那賀川対阿南一 大将戦で積極的に攻め込む那賀川の岡内(右)＝嶋門ソイジョイ武道館

那賀川 10度目

男子・木頭は16年ぶり

県中学新人剣道 剣道の第32回徳島県中学校新人大会は10日、嶋門ソイジョイ武道館に男子49校、女子20校が参加して団体戦を行い、男子は木頭が16年ぶり7度連続10度目の優勝を飾った。

「練習通りできた」

○：16年ぶりの栄冠をつかんだ木頭。決勝では、先鋒(せんほう)の



久保が試合終了直前にコテを決め、一本勝ちしてチームを勢いづけた。「最後まであきらめなかったのが良かった」とにこり。 主将の小敷(写真)と大将の小野もメンで一本勝ちし、勝利を収めた。2人は「『つなげる剣道』を目標に練習に励んできた。練習通りの試合ができてうれし」と

振り返った。木頭を率いて通算十年余になる岡内監督は「久々の優勝で自信を深めてくれたと思う。さらには個々が持つ課題を克服して一層力をつけてほしい」と期待を寄せた。

○：今夏の全国中学校体育大会で優勝した女子の那賀川が、新チームでも圧倒的な強さを見せつけた。旧チームでもレギュラ

メンで一本勝ちを収めると、2-0で迎えた大将戦では、岡内が先に一本奪われた後、メンを立て続けに決めた。「焦らず、逆に積極的の攻めるよう心掛けた」と岡内。 那佐主将は「先輩たちと比べると技術的にはまだまだだが、自分たちの力を出し切るようすれば、おのずと結果はついてくると思う」と力を込めた。

男子 1回戦 北井上4-1 勝形2新野、嶋門3-1貞光	成、徳島2-0阿南1、三好2
土成、相生3-0川内、坂野4-1▽3回戦 木頭3-1相生、加茂	1付属、新野2-0坂本2回戦
0板野、江原2-1藤敷、北島5-0	那賀川4-0城西、湍田2-1
0津田、阿南3-0山城、阿	穴吹、城之内4-0藤敷、徳島3
波4-1白根、上那賀5-0大	2鳴門、北井上3-0三好
麻付属3-1池田、豊住東1	牟岐3-1加茂、小松島3-1
0八万、城之内2-1三好、志	勝浦、阿南1-0新野、徳島決
神2-0勝浦、阿南4-1山出、	勝 那賀川5-0湍田、城之内
市立川島2-1城東、羽ノ浦0-1	2(本数勝ち)2徳島、北井上1
0美馬、新野3-1由岐、貞光2	0牟岐、阿南1-1小松島
1徳島▽2回戦 木頭4-0	準決勝 那賀川4-0城之内阿
北井上、相生1-1松茂、坂野1	南2-10鳴門
(代表勝ち)1江原、加茂各1	▽決勝
0北島、徳島5-0阿南2、阿波	木頭3-1阿南1
3-12小松島、上那賀4-1藤	0久保、コ1土井
住、那賀川4-0付属、阿南4-4	中田、メ1神元
0藤住東、城之内0池田、	小敷、メ1賀上
0徳島5-0市場、徳島文理3-0	大澤、メ1西岡0
阿南、石井4-0市立川島、羽	小野、メ1住友
浦4-0市立川島2(代表	女子 1回戦 城西3-2主
成、徳島2-0阿南1、三好2	那賀川3-0阿南1
1付属、新野2-0坂本2回戦	0西、メ1佐藤
那賀川4-0城西、湍田2-1	0青木、メ1小川
穴吹、城之内4-0藤敷、徳島3	長谷川、メ1松浦
2鳴門、北井上3-0三好	那佐、メ1藤本
牟岐3-1加茂、小松島3-1	岡内、メ1工藤
勝浦、阿南1-0新野、徳島決	
勝 那賀川5-0湍田、城之内	
2(本数勝ち)2徳島、北井上1	
0牟岐、阿南1-1小松島	
準決勝 那賀川4-0城之内阿	
南2-10鳴門	
▽決勝	

11月11日

富岡東16年連続V

男子は阿南工が制す

県高校新人剣道 富岡東が16年連続9度、男女の上位4校は阿南工が2年連続9度、国大会(2月10日・松山)に出場する。女子は富岡東が16年連続22度目の優勝を果たした。両校は全国大会(3月27、28日・愛知西、富岡西4・0徳東工、鳴門工4・0城東、準々決勝 徳島文

子10チームが参加して、県の出場権を得た。また、小松島、城東3・0池田、徳島文理4・0城、徳島文理4・0阿南工、徳島市立2・1山陽、徳島北4・0鳴門、海城3・0板野、阿南高専1・0徳島、阿南工4・0城東、準々決勝 徳島文

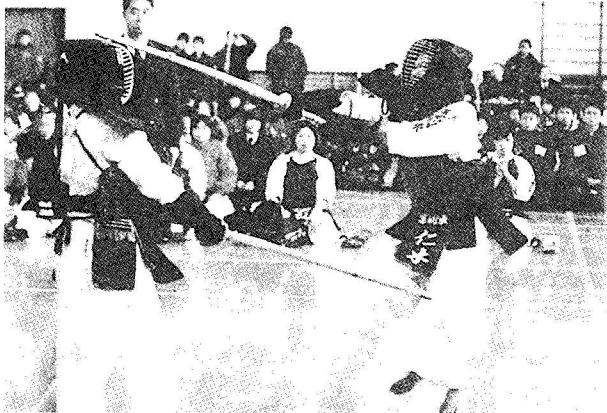
理3・0徳島市立、富岡西3・0那賀、城東5・0海城、阿南5・0阿南高専、準決勝 富岡西2・1徳島理、阿南2・1城北、3位決定戦 徳島理3・0城北

阿南工3・1富岡西、徳島市立、藤本、小西、福永、平井、松本、池田4・0徳島市立、阿南

富岡東4・0鳴門、城北4・0城、内川島3・0阿南高専、富岡西2・1池田、準決勝 富岡東4・1城北、富岡西2・1山陽、3位決定戦 川島2・1城北

富岡東3・0富岡西、仁木、柳瀬、今川、永浦、佐藤、西田、細川

富岡東3・0富岡西、仁木、柳瀬、今川、永浦、佐藤、西田、細川



女子決勝・富岡東対富岡西 先鋒戦で富岡東の仁木◎がメンを決める一城西高体育館

富岡東女子が圧倒的な強さを見せ、16連覇を達成した。3試合を戦って取られたのは、準決勝での1本だけ。2年連続となつたライバル富岡西との決勝も付け入るすきを与えなかった。

富岡東女子が圧倒的な強さを見せ、16連覇を達成した。3試合を戦って取られたのは、準決勝での1本だけ。2年連続となつたライバル富岡西との決勝も付け入るすきを与えなかった。先鋒(せんぼつ)の仁木がメンと引きメンを決めてチームを勢いづける。次鋒・賀上も一本勝ち。さらに副将・湯浅も「とにかく攻め続けた」と言うように、ドウを奪った後、間髪入れずにメンを決めた。「控えの5選手を含めた部員10人全員に力がある。厳しい競争の中でもなかつた優勝を狙う。高志、さらに鍛錬に励む。」

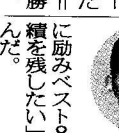
(木村)

H20年1月14日



「逆境、力に変えた」

富岡東3・0富岡西、仁木、柳瀬、今川、永浦、佐藤、西田、細川



「逆境を力に変えた」

富岡東3・0富岡西、仁木、柳瀬、今川、永浦、佐藤、西田、細川

編集後記

この数年、三友夫・三友文の徳島の徳島県剣道連盟に編集委員に追加され、その活動の中心として、編集の仕事をしてまいりました。この間に、『徳島の剣道』という雑誌が創刊され、その活動の中心として、編集の仕事をしてまいりました。

自動車の運転免許を、今年、今日に取得した会長である遠山三郎氏はその成功の要因を「掃除を徹底して続けてきたおかげ」「掃除を通して、誰にでもできることを、誰にもできないくらい、続けてきた」としている。また、仕事の能率と質を向上させるポイントを以下の言葉で表現している。

「整理」・・・分別すること。

「整頓」・・・明示すること。

「清掃」・・・行動すること。清掃即行動。

「清潔」・・・前記三つを維持すること。

「躰（しつけ）」・・・習慣にすること。

恥ずかしいことではあるが、私の部屋や机は整理・整頓・清掃・清潔とは無縁の状態にある。これでは、いい仕事ができるわけがない。『徳島の剣道』の編集内容の向上と早期発刊に向けて、鍵山氏の指摘を天の声として愚直に実践してみたいと考えている。しかし、意志薄弱な筆者にその実践の継続が可能か、どうか不安ではあるが、来年の今頃はその結果が『徳島の剣道』に現れてくるものと思う。余り期待しないで見てほしい。

『徳島の剣道』第二十四号

編集委員会

松	近	柴	本	岡	影	出	美	中	手	藤	三	木
永	藤	田	田	崎	山	葉	馬	村	塚	本	木	原
貴	敏	宗	敦		美	成	和	稔	十三子	雅		資
史	晴	忠	彦	明	雄	一	義	裕		史	毅	裕

『徳島の剣道』第24号

平成20年5月20日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 遠藤一美

☎770-0861 徳島市住吉三丁目9-6
栗本マンション106号室

TEL 088-652-2337

FAX 088-652-2360